
真・恋姫†無双～黒き霆～

葵桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜黒き霆〜

【Nコード】

N7432P

【作者名】

葵桜

【あらすじ】

トラックに轢かれそうな女の子を助けて代わりに轢かれるというベタなオチで死んだ少年。

輪廻の輪に戻る事の出来なかった少年の前に神と名乗る女性が表れる。

果たして少年の運命はどうなるのか。

挨拶文

初めまして。葵桜と申します。

この作品が処女作になります。

この小説を読むにあたって幾つかの注意点を書かせて頂きます。

1 .

真・恋姫＋無双の二次創作小説です。

2 .

PC用18禁ゲームソフトの『恋姫＋無双〜ドキッ 乙女だらけの三国志演義〜』『真・恋姫＋無双〜乙女繚乱 三国志演義〜』『真・恋姫＋無双〜萌将伝〜』はプレイ済みです。
恋姫の漫画やアニメは見た事ありません。

3 .

恋姫の原作の三国志は十年程前に横山光輝先生の『三国志』という漫画を読んだきりで、正直覚えていません。
という事で三国志に関しての知識はネットから拾ってきます。
ついでに、三国志関連以外の専門的な知識もネットから拾ってきます。

4 .

作者に文才はありません。
作者は厨二病に掛かっています。
作者は妄想を文章に変える才を持っています。

5 .

主人公はオリ主で最強でチートです。

北郷一刀は出ません。

道士も多分出ません。

オリキャラは何名が出す予定です。

6 .

キャラによって出番の差があると思います。

7 .

主人公の名前が恋姫に登場する、ある熟じ…おや、誰か来たよ…うわ、何をすくあwse d r f t g y ふじこ1 p . @ ……………。

失礼しました。

どうやら猪と間違えられて矢を射られたようです。

決して、ある御方の逆鱗に触れたわけではありません（ガクガクブルブル）

主人公の名前が、恋姫に登場する綺麗な御姉様の真名と被っていますが気にしないで下さい。

某週刊少年誌で某作品の絵を担当した事で神と呼ばれるようになった、可愛い女の子を描く事に定評のある先生の初作品？の主人公と同じ名前で、もし自分で小説を書くなら、この名前を主人公に使いたいと思っていたので。

8 .

行き当たりばったりです。

（√は涼√（馬騰さんの所）を予定）

9 .

漫画・ゲーム・アニメなど（の作品やキャラ）を（あくまで暗にですが）例に出したり、漫画・ゲーム・アニメなどからのパロディネタや名言も時々出ます。

まあ、この挨拶文の注意点の7の“主人公の名前”の件みたいな感じの事です。

苦手な人は御注意を。

10 .

更新は不定期で、更新速度が遅いです。
活動報告は最低一週間に一度は更新します。

以上です。

拙い文章ですが、皆様の暇な時間を潰せるぐらいには頑張りたいと思います。

シリアスでもなくギャグでもなくグダグタになりそうで不安ですが
…。

誤字・脱字・キャラの喋り方の違和感・アドバースなどがありましたら御指摘願います。

では、どうぞ御覧下さい。

オリキャラ設定（前書き）

キャラが増えたりした場合に更新します。

キャラの外見は、あくまで作者の適当なイメージなので、読者様の脳内で適当に変換してもらって構いません。

最新話を読む前に此方を読むとネタバレになる可能性がありますので御注意下さい。

最終更新日：2011年7月24日

オリキャラ設定

【黒霆院紫苑】

姓：黒霆院

名：紫苑

性別：男性

身長：175cm

肌の色：肌色

髪の色：黒

髪型：ツンツン

服装：何処ぞの死神さんが着ている黒い着物

武器：黒霆（読み：コクテイ）

緋炎（読み：ヒエン）

蒼氷（読み：ソウヒ）

翠樹（読み：スイジュ）

黒霆：刃渡2尺3寸5分〃約71.2cm、柄6寸5分〃約21cm、総重量1.5kgの打刀。刀身の色は漆黒

緋炎：刃渡1尺8寸〃約54.5cm、柄6寸〃約18cm、総重量1.0kgの小太刀。刀身の色は朱み掛かっている

蒼氷：

刃渡1尺8寸〃約54.5cm、柄6寸〃約18cm、総重量1.0kgの小太刀。刀身は蒼み掛かっている

翠樹：刃渡4尺3寸〃約130cm、柄1尺6寸5分〃約50cm
の鰐無しの大太刀。刀身の色は緑掛かつてる

漆黒の指輪：異空間に物を収納する事が出来る。広さは所持している刀四振り分。どれだけ離れていても収納出来る

白銀の指輪：何やら文字が刻み込まれている指輪。効果は不明

備考：

主人公。

刀の重さに関しては「軽すぎじゃない?」とか「重すぎじゃない?」
とか思いかもしれませんが、「オリハルコンだから」という理由で
無理矢理納得して頂けると助かります

【桜】

名：桜

性別：女性

身長：175cm

肌の色：肌色

髪の色：黒

髪型：ロングストレート

服装：白いワンピース

武器：特に無し

備考：
アルバイト
神様

【秋絃】

姓：太史

名：慈

字：子義

真名：秋絃（読み：シヅル）

性別：女性

身長：184cm

肌の色：褐色

髪の色：漆黒

髪型：ロングボサボサ

服装：黒のゴスロリ

武器：朱墮（読み：シュダ）

朱墮：種類：チェインソー+大剣？

・hack//G.U.の主人公が装備している様な感じの武器です。

まあチェインソーって認識でも問題ありません

【瑠里】

姓：徐

名：庶

字：元直

真名：瑠里（読み：ルリ）

性別：女性

身長：142cm

肌の色：肌色

髪の色：橙

髪型：長い髪を後ろで三つ編みにしていて先端には蝶の形をした黒いリボンが付いている。

前髪は真ん中分けでもパツンでも無い

服装：丈の短い黒のワンピース＋黒いオーバーニーソックス＋黒い帽子

武器：黒鷹（読み：コクヨウ）

黒鷹：弓

備考：軍師……だけど、作者の頭が悪いので軍師らしい活躍は出来ないかも……

【楓】

姓：馬

名：騰

字：寿成

真名：楓（読み：カエデ）

性別：女性

身長：145cm

肌の色：肌色

髪の色：茶

髪型：セミロングストレート＋ロングストレートツインテール

服装：翠＋霞の羽織みたいな感じ

武器：虚閃（読み：コセン）

虚閃：片刃直刀槍

【水仙】

姓：馬

名：休

字：仲仁（読み：チュウジン）

真名：水仙（読み：スイセン）

性別：女性

身長：160cm

肌の色：肌色

髪の色：茶

髪型：ポニーテール

服装：蒲公英が着ている服の色違い（青っぽい感じ）

武器：蒼閃（読み：ソウセン）

蒼閃：片鎌槍

【芙蓉】

姓：馬

名：鉄

字：叔鍊（読み：シュクレン）

真名：芙蓉（読み：フヨウ）

性別：女性

身長：160cm

肌の色：肌色

髪の色：茶

髪型：ポニーテール

服装：蒲公英が着ている服の色違い（赤っぽい感じ）

武器：朱閃（読み：シュセン）

朱閃：片鎌槍

【十六夜】

姓：鳳

名：徳

字：令明

真名：十六夜（読み：イザヨイ）

性別：女性

身長：170cm

肌の色：肌色

髪の色：銀

髪型：ロングストレート

服装：くの一っぽい黒い格好

武器：虚空（読み：コクウ）、

無名の小太刀×2

虚空：巨大風車手裏剣。魔法先生ネギま！に登場する長瀬楓が使っている武器です。

+
↑こんな感じのデカイ手裏剣

第1話　神と出会った少年

「……きろ」

「……」

「……きろ！」

「……ん？」

「起きろって言うてんだ！」

「んー………誰だ？」

目の前には白いワンピースを着たナイスバディーだけど柄の悪そうな御姉様が仁王立ちしている。

「神」

「は？」

「だから神だ」

かみ……紙？……神？

「……ああ、神様ね。そうか神様が……神様……夢か。寝よ」

「寝るな！」

《ゲシッ!》

「いってーな……」

爪先で脇腹蹴られた……。

お陰で目が覚めたけど。

……… 此処何処だ？

辺り一面真っ暗だな……。

何も見えん。

いや、目の前の女性は何故かハッキリと見えるが。

「お前の名前は黒霊院紫苑で合ってるな？」

腕を組んで俺を見下ろしながら訪ねてくる女性。

「ああ。で、もう一回聞くがアンタは誰だ？つーか此処何処だ？」

「だから神だつて言ってるんだろ。此処は現世と幽世の狭間だ。分かりやすく言えば三途の川だ」

「川なんて無いけど……」

「細かい事は気にすんな。お前死んでんだし」

「そうか。死んでんのか」

「ああ」

意味が分からん。

「おやすみ」

「……寝たら鳩尾に蹴り入れるぞ？」

ドスを利かせた声でそう言う女性。

「随分と乱暴な神様だな」

「それが売りだ」

「嫌な売りだな……」

自慢気な顔で言うな。

「話を戻すが、お前は死んだ。原因は覚えているか？」

「いや、覚えてない。つかマジで死んだの？」

「ああ。お前が覚えている最後の記憶は何だ？」

「えーと、ちょっと待て」

取り敢えず覚えてんのは、朝起きて、鍛練して、風呂入って、朝飯作って食って、音楽聞きながら且つ漫画読みながら学校行って……。

……学校に着いた記憶がねえ。

……あゝ、待てよ？思い出して来た。

学校まで後少しの所にある交差点を渡ろうとして、先に交差点を渡っていた同じクラスの女子に向かって何故かトラックが猛スピードで突っ込みそうになって（運転席をチラッと見た限りでは居眠り運転だったみたいだが）、その子は恐怖からか動けないみたいで、その子の元まで急いで走って行って突き飛ばして………それから先は覚えてないな。

まさか……。

「女の子を庇ってトラックに轢かれて死んだとか言うベタなオチ？」

「ベタなオチ」

「そうか……。あの子は怎么样了？」

「助かったよ。お前のお陰でな。擦り傷ぐらいしかしていない」

「そりゃ良かった。あの子まで死んでたら無駄死にだしな。で、何で俺は現世と幽世の狭間だか三途の川だけに居るんだ？」

「正確には此処は三途の川じゃねえ。幽世って言うのは輪廻の輪……まあ天国だと思え。と三途の川で構成されている。人は死んだ後、魂だけが三途の川の流れに乗って輪廻の輪へ戻る。此処までは分かったか？」

「ああ」

「輪廻の輪へと戻った魂は幾ばくかの時を経て再び生を得る。所謂転生だな。転生と言っても記憶があるわけではないがな。お前の場合、魂が輪廻の輪へと戻る事が出来なかった」

「何でだ？」

「知らん。何でかは知らないがそういう事が極稀にあるんだ」

「適当だな……」

「別に神だからって何でもかんでも知ってるわけじゃないさ。で、だ。輪廻の輪に戻れないと、どうなると思う？」

「さあ？」

俺が知るわけがない。

「幾ばくかの時をこの漆黒の闇で過ごす事になり、いずれ魂が消滅する」

「マジで？」

「マジで」

「かなりショックな事実だな……」

「まあ安心しな。そうさせない為に私が此処に来たんだし。輪廻の輪から外れた魂を元に戻すのも神の仕事さ」

「成る程ね。で、俺をどうするんだ？ていつか俺に話し掛ける必要性ってあったのか？」

「その事なんだがな、此処から輪廻の輪なり三途の川なりに戻す事は出来ないんだ」

「何でだ？」

「そういう仕組みだからだ」

「融通効かねえな……」

「で、だ」

「スルーかよ」

「お前には別の世界に飛んでもらう」

「は？」

「平行世界とか異世界って分かるか？」

「まあ何となくは」

ゲームやらラノベやら漫画やらで、よくある設定だしな。

「まあその平行世界なり異世界なりの一つに飛んでもらって、その世界で生きてもらう。で、その世界で死ねば輪廻の輪に戻る事が出来る。平行世界も異世界も似たようなもんだから、以後、異世界って事で話進めるからな」

「了解。……成る程ね。異世界で死んで三途の川に行くって事か」

「そういう事だ。別に異世界に飛ばした瞬間に殺したりはしないから安心しろ。飛ばした後は基本的には干渉しない。好きな様に生きる。余程運が悪くなければ、死んだら今度こそは輪廻の輪に戻る筈だ」

「好きな様に生きろって言われても……。具体的には異世界ってどんな感じなんだ？俺が居た世界と変わらないのか？」

まさかゲームや漫画みたいな世界は無いよな？

「あまり変わらない世界もあるし、かなり変わっている世界もある。変わっている世界で例えを出せば、魔法が使える世界だったり、電脳世界だかオンラインネットワークだかに自分の意識を飛ばしリアルと変わらない感覚を得て行動出来る世界だったり、人型巨大戦闘兵器が存在したり、宇宙人と戦闘してたり、人間の代わりに知性を持った蛸が支配している世界だったりとかがある」

まんま、ゲームや漫画の世界じゃねえか……。ていうか蛸って……。人によつては狂喜乱舞する事実だな……。

「まあ普通に生きてる人間には関係無いけどな。どんなに科学技術が進歩したって、時間移動したり異世界に移動なんて出来ないしな」

「そうか……。幾つか質問があるんだがいいか？」

「答えられる範囲内ならな」

「一つ目。今更だけど現状の俺の存在ってどうなってるんだ？肉体は無いんだよね？けど、肉体の感覚はあるし……」

「勿論、今のお前に肉体は無い。魂がそう感じているだけだ」

「肉体が無いのに、どうやって異世界に飛ばすんだ？」

「簡単だ。肉体を再構成すればいい」

「肉体を再構成って……何処ぞの錬金術師じゃあるまいし……っ！
か簡単なのかよ？リスクとか無いのか？」

「リスクと呼べる様なものはない。強いて言えば滅茶苦茶疲れる事だ。まあアレだ。私に出来ない事は殆ど無い。何故なら私は神だからな」

フフンツと言った表情の女性。

「妙に説得力があるな」

「まあ、だからと言って、やりたい放題やってると大神様に怒られるがな」

「大神様？」

「直属の上司だ」

「会社かよ」

「私はアルバイトだ」

「アルバイトって……神様ってアルバイトでなれんのかよ……まあいいや。二つ目の質問。俺はどんな世界に飛ばされるんだ？」

「まだ決めてない。まあ、ある程度希望は聞いてやる。どんな世界がいい？」

「今、決めんのかよ」

「まあ、あまり焦らなくても良いが……。お前の感覚で言えば、お前の魂が消滅するまで一年ぐらいはあるからな」

「結構あるな」

「普通感覚で言えばそうかもしれんが、もし私が現れなかったら、お前は どうして た？」

「どうして た っ て……頭おかしくな っ て た か、考える事を放棄して寝て た だ ろ う な。まあ、それ以前に目が覚めたかどうかも微妙だが……」

「だ ろ う ？ そんな状態じゃ時間なんかあ っ という間に過ぎるさ」

「まあ、そう言われればそうだな」

「取り敢えずコレをやろう」

「何だコレ？」

女性から四角い黒い箱を渡される。

この箱も何故か周りが真っ暗なのに、黒いと認識出来る。

箱の中央には“ 3 6 3 : 0 0 : 1 5 : 3 6 ”と白い数字で表示されている。

と思ったら右端の数字が減っていく。

「そこに表示されてるのは、お前が消滅するまでの大体の時間だ。左から順に、日・時・分・秒を表し、それが零になったら消滅する。多少の誤差はあるだろうが、最大で一週間程度だ。まあ、ゆっくり考える。此処じゃ腹も空かないしな。眠たくもならないだろうが、まあ寝ようと思えば寝れる。ただし寝過ぎして消滅しても責任はとれないからな？まあ頼まれれば起こしてやらない事も無い。暇だし」

「分かった。少し考えさせてもらう。三つ目の質問だ。アンタ何て名前だ？」

「桜だ」

「喋り方や雰囲気と違って随分と可愛らしい……」

「余計な御世話だ」

《ゴスッ!》

「つぁー……! 頭が……」

頭に踵落としされた。

この女、足癖悪過ぎ……。

……足を振り上げた時に見えた下着の色は黒色だった。

下着が見えたのがバレたら今度は膝蹴りが来そうだな。

「……お前今、私の下着を見ただろう？」

「見てねえよ。下着の色が黒だったなんて事も知らな……」

《ゴチンツ》

「見てんじゃねえか」

「……すいません」

予想に反してヘットバットされた……これ以上頭部を攻撃されたらマジで頭割れる……。

「ったく。他に何か質問はあるか？」

「あー……取り敢えず無い」

「分かった。三日経ったら様子を見に来る。じゃあな」
踵を返す桜。

「ああ。じゃあな」

「……………」

「何だよ？」

どっか行くのかと思ったら、立ち止まる振り返る桜。

何故か俺の顔を凝視してくる。

「……いや、お前本当に今の自分の状況分かってるか？」

「分かってるよ」

「そうか？やけに冷静だと思ってな。普通自分が死んだとか聞いたらパニクリそうなもんだがな。自分が死んだと聞かされて素直に受け入れてるし。何て言うか達観し過ぎ」

不思議そうに聞いてくる桜。

「あー、良く言われる。まあ別に現世？に未練とかあんな無いしな。両親は小さい時に死んでるし、俺を育ててくれた爺ちゃんも去年死にしまったし、彼女居る訳では無いし。まあ仲良いダチと会えないってのは寂しいけどアイツらなら俺が居なくても元気に過ごしてるさ。つー訳で特別未練と呼ぶようなもんは無し。他の世界で生きられるみたいだし悲観的になってもしょうがないだろ？」

「……まあそういう事しておくか。じゃあな」

「ああ」

納得していない様子の桜だが、そこを疑われてもな……本当の事を言っただけだし。

《シュンッ!》

消えた……。

……何か面倒な事になったな。

……まあいいか。

ゆっくり考えよう。

特にやる事も無いし、時間はあるみたいだから……。

・ ・ ・

あれから三日経った。

俺が消滅するまで “ 3 5 9 : 2 3 : 4 7 : 2 3 ” 。

そろそろ桜が来る筈だが……。

《シュンッ!》

来たか。

「よう。元気か?」

「まあな」

手をヒラヒラと振りながら此方へ来る桜。

格好はこの前と同じだな。

「どんな世界に行きたいか決まったか？」

「ああ」

「聞かせろ」

「一つ目の条件。俺が居た世界の人間と同じ様な人間が居る事」

「まあ当然と言えば当然だな」

「二つ目の条件。の前にアンタ……」

「名前教えたんだから名前で呼べよ。呼び捨てで良いから」

「神様を呼び捨てって……。まあ本人が良いなら呼ぶけど。桜は俺の事をどれくらい知ってる？」

「大体全部。魂に触れれば現世に居た時の記憶は読み取れるし、死んだ時の肉体の情報も読み取れる。お前が覚えていない様な事も読み取れるぞ？例えば人生で何回蹴躓いたとかの些細な事から人には知られたくない様なディーブな事もな？（ニヤニヤ）」

「ひでえ……プライバシーの侵害だ……」

「男なら細かい事は気にすんな。二つ目の条件は？」

「強い奴が存在する事」

「まあコレも想定範囲内だな。お前は生前祖父から武術を習っていたようだし、強者と戦かっていて楽しかったという記憶もあるしな」

「ああ。強い奴と戦うのは俺の趣味みたいなもんだ。で、三つ目の条件は魔法とか巨大ロボとかが無い事。まあ平たく言えば生前と同じ様な世界が良いって事」

「男の癖にロマンがねえな」

「魔法とか巨大ロボじゃ戦ってるって感じがしないと思うんだよ。まあやった事ないし実際の所は分からんが。最後の条件は可愛い女の子が多い事。現世じゃ武術ばかりで、あんまり女の子と付き合わなかったしな。折角だし恋愛もしたい」

「じゃあ、その四つの条件で探すぞ？」

「ああ。頼む」

「うーん、そうだな……この世界は荒ぶる神と言つ名のモンスターを狩る世界だし……此方の世界は死人が歩き回る世界だし……」

桜がぶつくさと何かを言っている。

「何か怪しげなワードが聞こえてくるんだが……」

「気にすんな。おっ、この世界なんか良いかな……。お前三國志っ

「て知ってるか？」

「一般常識程度なら」

まあゲームやった事あるし漫画も読んだことあるからな。

「なら、この世界で良いか……。決定」

「三國志の世界って事は俺の世界の過去って事か？」

「いや違うよ。あくまで平行世界。お前が居た世界とは違う。大きな違いは氣が存在しているぐらいだな。そのお陰でこの世界の人間はお前の世界の人間より全体的にスペックが高いようだ。まあ意識して扱える人間は少ないようだ」

「成る程。その世界での俺の強さはどれぐらいだ？」

「技術だけなら一般兵よりは格段に強く精兵よりも強い。三流の武将とは互角。二流の武将よりは弱い。一流の武将だと一撃で殺される。こんな感じだな。ただし、あくまでも技術のみの話だ。身体能力や経験を含めれば二段ぐらいは下がる。全部込みで一般兵と互角ってとこだな」

「一般兵と互角か……。もう少し全体的に弱い世界は無いか？」

「探すの面倒。つーか大神様に申請書出して受理されちゃったから変更は無理」

「いつの間に申請書なんて出したんだよ！？ つーか受理されるの速くね！？」

「さつき決定って言った後。受理されんのが速いのは大神様が暇だからだ。……お前が大声を出すの始めて聞いた気がするな」

「大声出してツツコミたくもなるわ……。大神様って暇なのかよ……」

「お偉いさんと下っ端は暇だな。あと三途の川を管理している奴らも見ていただけだから暇。忙しいのは輪廻の輪を管理している中間管理職の奴らぐらいさ」

「本当に暇人ばっかじゃねーか……。桜の仕事は何なんだ？」

「一定数の世界の管理。基本的に見ているだけだから暇だよ」

「はあ……。決まっちゃったもんは仕方無い。覚悟決めて行くか……」

「ふむ……。 (異世界に飛ばして直ぐに死なれるのも後味悪いな……それに……。また暇になるしな……。) 良し！ 決めた！ 修行を着けてやる。ついでに武器もやる。更についでに氣も使えるようにしてやる」

「……は？」

いきなり何を……。

「修行を着けてやるって言ったんだ。感謝しろ」

「上から目線がムカつく……。何でいきなり……」

「気にすんな。異世界に飛ばしてすぐに死なれたら後味悪いだろ。」

まあ異世界に飛ばされて直ぐ死にたいんなら別に良いけど、どうする？」

「……まあ俺だつて長生きしたいし強い奴めと沢山戦いたいしな。分かった。修行受けるよ」

「よろしい。良い暇潰しが出来たな」

「そっちが本音か……」

「さっきのも本音だ。さてと、取り敢えず肉体を再構成しますか」

「肉体を再構成？ 此处でか？」

「ああ。肉体が存在出来る様に結界張るから問題無い。目閉じる」

言われた通りに目を閉じる。

「閉じたぞ」

「……………結界を張って、……………肉体を再構成してつと。
……よし、終わったぞ」

「速っ！ 空間が白くなった……。身体の方は、さっきと変わった気がしないけど……。て、全裸じゃねーか！？ さっきまで着てた服は何処行った！？」

「？ 何言つてんだ？ 服なんか着て無かつただろ。三日前にも言つただろ？ お前が肉体があると感じていても、それは魂が感じているだけで実際には無い。服も同じ。魂が着ている様に感じていただけ。お前は声を出して会話してると思ってるだろうが、実際にはテレパ

シーみたいなもんで会話してたし。私から見ただお前は白銀色にぼんやりと輝いた球体だったしな。今は人間の形をしているぞ？素っ裸だな」

「説明はいいから、取り敢えず何か着る物くれ！」

「分かってるって。コレ着ろ。ほら」

桜が何処からともなく黒い布を取り出し投げってくる。

「つと、サンキュー。……コレ家の道場の胴着じゃねえか」

「お前の記憶から構成した」

「ああ、成る程。……本当だ、着なれた感じがする」

「言つとくが肉体を再構成したからって消滅までの時間が変わるわけじゃないからな。次は氣を扱えるようにしてやる。………はい、終わり」

「……………」

「もう使えるようになったぞ？」

「いや、何が変わったのか全然分らないんだけど？」

「その内、分かるさ。扱い方も教えてやる。次は武器だな。何が良
い？」

「やっぱり日本刀かな」

日本人の魂だ。

「日本刀だな。長さは？」

「そうだな……太刀……太太刀……小太刀二刀……うーん……」

迷うな……。

「面倒くせーな。四振り作ってやる。……ほらっ」

桜が両手を合わせ光ったと思ったら空中に刀が四振り出現した。

と思ったら投げてきた！？

「ちよっ……！まっ……！よっ……！ほっ……て重っ！……ったく、危ねえなー。投げるなよ……。……へえー、四振りとも黒い鞘に黒い柄に黒い鍔に黒い刀身か。……真っ黒だな」

「ああ。幽世の物質で作ったからな。切れ味・強度共に抜群だぞ？」

「幽世の物質？」

「オリハルコンだ」

「ホントに存在してたのかよ……」

漫画やゲームの中だけだと思ってた……。

「これらの刀に名前って付いてるのか？」

「無い。適当に付けろ」

「名前か……うゝん……。浮かばない……。桜が付けてくれないか？桜が作ったんだし」

「しょうがねーな……。大太刀が翠樹、小太刀二刀が緋炎と蒼氷、太刀はお前の名字から取って黒霆。こんなんで良いか？漢字だとう書く」

太刀…黒霆

大太刀…翠樹

小太刀二刀…緋炎、蒼氷

と、空中に文字が浮かんた。

「中二つぽい……」

「うっさい。文句あんなら自分で付ける。つーかそれ言ったら、お前の名字が中二つぽいって事だぞ？」

「冗談だつて。ありがたく、その名を付けさせて貰うよ。後、俺の名字が中二つぽいのは自覚してる」

「最初っからそう言えはいんだよ。さて、付けた名前に応じて少し装飾してやるか。……よし。もう一回鞘から抜いてみな。黒霆は特に変更してないから」

「分かった。……緋炎は刀身が朱み掛かっている。……蒼氷は刀身が蒼み掛かっている。……翠樹はって抜くの大変だな。……翠樹は刀身が緑掛かっている」

綺麗だな。

「どうだ？」

「良い感じた。……なあ？」

「何だ？」

「これ全部持ち歩くのか？」

「勿論」

「重い。特に翠樹が」

「黒霆が1・5kg、緋炎と蒼氷がそれぞれ1・0kg、翠樹が6・5kg、計10kgある。男ならそれくらい我慢しろ」

「え……。移動中はともかく戦闘中はツラいだろ……」

「“え”じゃない、この情弱が。仕方無えな……。ほらっ」

また桜が何かを投げてくる。

「投げるなって！……何だコレ？指輪？」

「指輪だ。それを使えば刀を異空間に収納出来る」

「おおっ……！なんかチートっぽい」

「何なら刀の方もチートっぽくしてやろうか？名前通り、黒霆は漆黒の雷が出る様に、緋炎は緋色の炎が出る様に、蒼氷は蒼い氷が出る様に、翠樹は地面に突き立てたら翠の樹が生える様に、という感じで」

「勘弁して下さい」

何処の死神だよ……。

「ちっ……つまらん奴だな」

「はいはい。どーせ俺はつまらない奴ですよ。それより、どうやって刀を収納するんだ？」

「念じる。そうすりゃ出来る。収納出来る物体は、その四本の刀のみだからな」

言われた通りに念じてみる。

「おっ……！ 本当に出し入れ自由だ」

「だろ？さてと、じゃあ早速修行始めるぞ。覚悟は良いな？」

「応！」

こうして桜との修行の日々が始まった。

第1話〜神と出会った少年〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

さて、第6話までは出来てるけど、次はいつ投稿しよう…？

取り敢えず一週間に一話のペースで投稿しようと思います。

なので、次回は2011年1月8日に投稿する予定です。

第2話　神との修行開始（前書き）

< 前話の簡単な粗筋 >

死ぬ

←

神様（女性）と出会う

←

神様（女性）に異世界に飛ばしてもらった事になった

←

でも今のままじゃ異世界ですぐに死んじゃう

←

神様（女性）に修行を着けてもらった事になった

第2話　神との修行開始

只今、桜から氣についての説明を受けている真つ最中。

これから俺が行く世界には“氣”というものが存在している。

氣が存在しているお陰で、その世界の人間は俺が居た世界の人間より身体能力が高いのだそうだ。

氣の量が多いほど身体能力が高くなる。

氣は本人の努力次第で量を増やせる。

最も、増やすとしても天賦の才が無ければ尋常ならざる努力が必要になるが。

中には意識せずとも通常の鍛練をしている内に氣の量を増やせる人もいる。

また、増やせたとしてもそれを体外に放出出来るかどうかは別の話になり、此方は更に難しいそうだ。

氣と言うのは生命エネルギーらしい。

氣を使い果たしたからと言って死ぬ様な事は無いが、氣が充実している時と比べると格段に身体能力が下がるそうだ。

身体能力の強化や自己回復力の強化といった内氣功では消費しないが、氣弾を撃ったり氣で武器を創造したりする外氣功では消費する

そうだ。

「師匠、氣弾を撃つ所や氣で武器を創る所を見せてほしいんだけど」
修行中は桜の事を師匠と呼ぶ事になった。

桜からの“命令”である。

そういう気分らしい。

「わかった。まずは氣弾だ。あの岩に向かって撃つ。行くぞ……！
ハアアアア！」

桜の手が光り氣弾が放たれた、と思つたら岩が爆散した。

「すげー威力……」

ちなみに今現在、俺と桜が居る空間はジャングルみたいになつていて、ジャングル内にポカーンと出来た広間みたいな場所にいる。

魚が泳いでいる川やランニング用のコースみたいなものもある。

桜曰く「真っ白い空間だと距離感が掴みにくいだろ？」との事で、あつという間に真っ白な空間をジャングルみたいな空間に作り替えた。

「お前も修行すればコレぐらいは出来るさ」

「一対一の戦いでは使いたくない技だな……」

「まあ、お前の性格から考えればそう言うと思ったが、覚えておいて損は無いだろ。」

お前が行く世界では、野盗などによる罪の無い人々に対する理不尽な虐殺なども起こるだろう。

今、野盗が幼い少女を斬ろうとしている。野盗までの距離は十メートル。普通なら間に合わない。だが、氣弾が使えれば少女を助ける事が出来るかもしれない。

“守りたい者・守るべき者を守れなかった”という後悔をしなくなかったら覚えておけ。使うか使わないかは、お前次第だ」

「分かった」

「まあ氣で身体能力を強化すれば十メートルぐらいなら一足跳びで詰められるがな。んじゃ次は氣で武器を創るとこな。……ほら」

桜の手に白く輝く劍が握られている。

「おおー、凄え。なあ師匠、武器創るのって難易度高いのか？」

「そうだな……。氣を固定化させる事が出来れば、武器の形状を作るだけなら難易度は高くない。ただし、氣を練り込んで頑丈にするのは難しい。氣を練り込まないと割り箸なみの強度だからな」

「脆すぎだろ……」

木刀相手でも折れるな。

「武器を創る際に消費する氣の量は体積と密度に比例する。体積が大きければ大きい程、密度が高ければ高い程、消費する氣の量は多くなる。一度氣で創った武器は再び体内に氣として戻す事は出来な

いが、創った武器の形状を変える事は可能だ。武器を創ると言っても氣を固めたただけだからな」

……ん？

「なあ師匠」

「何だ？」

「氣で武器が創れるなら普通の武器は必要ないんじゃない？」

かさ張るし。

「……はあ」

「何だよ、その溜め息は？」

「氣は武器に纏わせる事も出来る」

「……ああ、成る程な。一から創るのは面倒だけど、土台があれば創るのも楽だし消費する氣の量も抑えられるって事か」

「そういう事だ。そんじゃ早速氣の修行を開始するか。取り敢えず目を閉じてリラックスして立て」

「ああ」

「丹田に意識を集中しろ。ここで言う丹田は臍下三寸の腹と背の間だ。具体的には仙骨の前・膀胱の裏辺りだ。氣を練る時は此处を中心にするんだ。今から私の氣をお前に流して、お前の氣を活性化さ

せてやる。丹田付近が暖くなる筈だ」

「分かった」

桜の手が俺の臍の辺りに触れる。

「…………どうだ？」

「ん、確かに暖かくなった。これが氣か…………」

「そのまま氣を全身に行き渡らせてみる。血液を全身に流すようなイメージをするんだ」

言われた通りにやってみる。

「…………全身が暖かくなってきた」

「いいぞ。今お前の全身を駆け巡っている暖かい流れが氣だ。じゃあ手を離すぞ。集中を切らすなよ？」

「ああ」

「…………どうだ？」

「…………さっきよりは弱くなったけど、ちゃんと感じる」

「よし、その感覚を忘れるな。集中を解いていいぞ」

「…………ふう。何か凄え疲れたんだけど…………」

「まあ最初はそんなもんだ。徐々に慣れて行くさ。さて、これからの修行では先ず氣量を増やす事と氣脈を拡げる事をメインとする。氣量とは言葉通り氣の量だ。氣量が増えれば増えるほど基本的な身体能力が上がるし、氣弾を沢山放てるし、氣を多く練り込んだ武器も作れる様になる。だが氣量を増やすだけでは駄目だ。

氣脈というのは氣が流れる道の様なものだ。氣脈が小さいと丹田で練り上げた氣を体の隅々まで行き渡らせるのに時間が掛かる。

氣量と氣脈の二つをバランス良く鍛える事が大事だ。まあ氣脈の方は鍛えるにしても限界があるがな。だからこそ鍊氣が必要になるんだがな」

「れんき」って何だ？」

「氣量と氣脈の拡張がある程度進んだら教えてやるさ。さてと、そんじゃ今日から暫くは午前は劍術と体術、午後は氣量と氣脈の拡張、夜は勉強だ」

「勉強？」

「そつだ。医学、薬学、農学、土工学、建築学、流体力学、数学、化学、物理学、生物学、地学、天文学、魔術、鍊金術……」

「つておい！ 何だ、その恐ろしく多岐に渡った学問は！？ どんだけ勉強させる気だよ！ 最後の方、何か変だったし！」

「スケジュールはこんな感じだ」

空中に文字が浮かぶ。

05:50	起床
06:00	準備体操
08:00	全力ランニング
08:05	休憩
08:05	筋トレ
09:05	休憩
09:10	剣術修行
10:30	休憩
10:35	体術修行
11:55	休憩
12:00	虎と鬼ごっこ
12:50	休憩
12:55	気量拡張修行
14:55	休憩
15:00	気脈拡張修行
17:00	

〓 休憩
 17:05
 〓 虎と鬼ごっこ
 18:00
 〓 風呂
 18:15
 〓 夕飯
 18:30
 〓 勉強
 22:30
 〓 反省会
 23:30
 〓 自由時間
 23:45
 〓 睡眠時間
 05:45

「どうだ？」

「いやいや、有り得ないだろ……スケジュール過密過ぎだろ……何処の凶化合宿だよ……」

「一体、何が不満なんだ？」

心底不思議そうな顔で聞いてくる。

「色々ありすぎるだろ！ 休憩時間短すぎだし、一日一食しかないし、自由時間短すぎだし、ついが全力ランニングって何だよ……まともなのは睡眠時間だけじゃねーか……」

あのスケジュール通りに動いたら一週間もしない内に死ぬだろ……。

「全力ランニングは文字通り全力でランニングをする。五十メートル走を全力で走るように二時間ぶっ続けで走るんだ」

「いやいや、無理だから。後、虎と鬼ごっこって何だよ？二回もあるし」

「何だ、お前鬼ごっこも知らないのか？いいか、鬼ごっここと言うのはだな……」

「鬼ごっこは知ってるから。そうじゃなくて、何で“虎と”鬼ごっこしなきゃいけないんだよ？」

「そういう気分だからだ」

「この野郎……」

「失礼な、野郎では無い。まあ、さっきのスケジュールは冗談だ。本当はコッチ」

再び空中に文字が浮かぶ。

06:00

「起床、朝食

07:00

「筋トレ

07:30

「休憩

07:45

「	ランニング	08:45
」	休憩	09:00
「	体術修行	10:00
」	休憩	10:30
「	剣術修行	11:30
」	昼飯	12:30
「	氣量拡張修行	14:30
」	休憩	15:00
「	氣脈拡張修行	17:00
」	風呂、夕飯、自由時間	00:00
「	睡眠時間	06:00

「……なんか一気に普通になったな。自由時間も多いし」

「そう思っていられるのも今の内だ。修行が始まればどうしてこんなスケジュールを組んだのか分かるさ。あ、ちなみに私が料理するからな」

「………は？すまん、良く聞こえなかった。もう一回最後の一言

を言ってくれるか？」

「私が料理するからな」

……桜が？

「マジで？」

「マジだ」

……。

「えーと、魚を生きたまま皿に乗せて出すのは料理とは言わな《ドムツ》」

「ごふっ……！み、鳩尾に拳が……」

「お前は本当に失礼な奴だな。心配しなくても大丈夫だ。これでも料理には相当自信がある」

「……なら期待している」

正直不安だけど……。

「それでよろしい。さてと、取り敢えず普通のソーラー充電式時計を渡しておく。……もう少しで切りが良いな。ちょっと待ってる。お前が消えるまでの時間と時計の時間を分かりやすいように時間調整する。その間は好きにしてろ」

「了解」

・
・
・

「ほらよ」

暫くして桜から時計を渡される。

「ありがと。俺が消滅するまでの時間は“359:22:55:23”。時計の方は“07:04:37”。朝の七時だな。てことは……」

「今日は朝飯無しだ。早速修行だ。筋トレから始めるぞ。腕立て百回開始！」

「ですよー」

まあ腕立て百回ぐらい大した事ないけどな……。

さて、頑張って修行しますか。

・
・
・

修行を開始してから一ヶ月が過ぎた。

今は朝六時ちよい過ぎ。

俺が消滅するまでの時間は“ 3 2 9 : 2 3 : 5 6 : 2 7 ”だ。

ランニング、筋トレ、体術修行、剣術修行は比較的楽だった。

まあ現世でもやってた事だからな。

体術修行や剣術修行は、技術を磨くと言うよりも対人戦の経験を積むって感じだった。

桜の技術は達人級で指導力も高かった。

常に俺の実力より一段上の強さで戦ってくれた。

足を滑らせて桜の胸を鷲掴みにした時は、本気を出した桜に殺されかけたが……。

桜も意外と純情と言うか何と言うか……うん、顔を真っ赤にしてて可愛かった。

剣術修行などとは違って、氣に関する修行は辛かった。

最初の内は風呂の中で寝てしまい溺れかけたり、夕飯を食べずに寝てしまう事も結構あった。

自由時間なんか有って無いような物だった。

一日十一時間は寝てたな……。

桜があんなスケジュールにしたのも頷ける。

疲労度が剣術修行なんかとは段違いだった。

だが、それも次第に慣れていき、二週間を過ぎる頃にはスケジュー
ル通りに生活出来る様になっていた。

自由時間も普通に使える様になったしな。

とは言っても、やる事無いから結局ダラダラしてたり氣の修行して
たりしたが。

意外だったのは桜の料理の腕。

桜が自分で言っていた通り本当に美味かった。

容姿・スタイル・強さ・料理の腕、全てが高水準。

桜って凄えハイスペックだな……。

性格には若干難有りだけど……。

いや、桜みたいな姉貴風？の性格も嫌いじゃないけどな……。

色々考えてたら朝飯を持って桜がやって来た。

料理は簡易キッチンみたいなのがあって、そこで作っている。

食材はどっからか調達してきている。

何処かの世界でも買ひ物でもしてるのか？

ちなみに寝る場所は別だ。

同じ空間には居るが結界張って寝てやがる。

「おはよう紫苑。ほれ朝飯だ」

「ありがとう」

変わった事と言えば名前を呼んでくれるようになった。

最初の内は基本“お前”だったからな……。

どついう心境の変化があつたかは知らないが嬉しい変化には違いな
い。

と、考え事してたら冷めちまう。

取り敢えず食うか。

「頂きます。《モグモグモグモグ……ゴクン》うん、相変わらず美味い。なあ桜」

「何だ？」

「昨日、今日からは本格的に氣の扱い方について教えるって言つたが具体的には何をするんだ？」

「取り敢えずスケジュールを変更するから見ろ」

06:00

」	起床、朝食
07:00	
」	自由時間
11:30	
」	昼飯
12:30	
」	氣の基本的な扱い方
14:30	
」	休憩
15:00	
」	氣の応用的な扱い方
17:00	
」	風呂、休憩
18:00	
」	勉強
20:00	
」	夕飯、自由時間
00:00	
」	睡眠時間
06:00	

「自由時間多っ！」

「今までやってきた、筋トレ・ランニング・体術修行・剣術修行・氣量拡張修行・氣脈拡張修行は自由時間に適当にやれ。私は基本暇だから頼まれれば何時でも相手してやる。ダラダラしてても構わないし、これから行う氣の基本的・応用的な扱い方の練習に当てても良い。好きにしろ」

「了解。《モグモグ》」

「紫苑、話は飯を食い終わってからだ。まともに会話が来ん」

「《ゴクン》了解」

・
・
・

という訳で、さっさと朝食を済ませた。

「ごちそうさま。美味かった」

「どう致しまして。そんじゃあ、さっきの続きな。これから行つ氣の修行は次のようになる。」

いつも通り空中に文字が浮かぶ。

【基本的な扱い方】

錬氣…氣を練って圧縮する

胃氣…錬氣で練った氣を身体の一部に集中させ纏わせる

甲氣…錬氣で練った氣を全身に行き渡らせ纏わせる

【応用的な扱い方】

纏氣…物に氣を纏わせる

朧氣…自分の氣を周囲に溶け込ませる

翔氣…錬氣で練った氣を体外に放つ

結氣…氣を結晶化・結合して武器を創る

「何処ぞのW狩人漫画で見たような氣がするんだが……」

「気にしたら負けだ。説明を分かりやすくする為に適当に付けただけだからな。それぞれ、どんな事するかは大体分かったろ？元ネタ知ってんだし」

「結氣つてのが武器の創造か？」

「そうだ。他に分かんない所は？」

「無い」

「よし。じゃあ午後までは適当に過ごせ」

「了解」

取り敢えず氣量の拡張修行でもするか。

・
・
・

あつという間に午後になった。

「よし。まずは鍊氣からだな。以前も言ったが氣脈を広げるにも限界がある。なので、一度に多くの氣を使いたい時は鍊氣を行う。要は氣の圧縮だな。

こう言つと“氣脈広げる意味無くな？”とか言ってくる奴もいるだろうが、これまた以前言つた通り氣を圧縮すればするほどコントロールが難しくなる。氣量百を十に圧縮して氣脈幅十に流すより、氣量百を二十に圧縮して氣脈幅二十に流す方が楽って事だ。

錬氣のやり方は簡単だ。丹田の辺りに球を思い描いて、その球に氣を圧縮して練り込んでいく感じだ。以上」

「師匠、錬氣のやり方についての説明が短いんですけど」

「やれ」

「……了解」

有無を言わずかよ……。

えーと、丹田に球を思い描いて、それに氣を圧縮して練り込むと……。

あれ？

「何か結構簡単に出来た……」

「だろ？基礎がちゃんと出来てりゃ錬氣なんて簡単だ。体外で圧縮する場合と違って、圧縮に失敗したとしても練り上げた氣が霧散するだけしな。慣れれば丹田以外の場所で錬氣する事も出来る。ただ、大量の氣を錬氣するなら、やはり丹田が一番楽だな。幾ら全身に氣が流れているといっても、あくまで氣が溜まる中心は丹田付近だからな。」

次は胃氣だ。練り上げた氣を腕の移動させてみる。移動させたら腕に纏わせてみる。移動させた氣を腕の中から外に拡げる感じだ」

「分かった。……おっ！腕が白く輝いている」

何か不思議な感じだな。

「そのまま岩を思いつきり殴ってみろ。集中は解くなよ」

「了解。ハアアア！」

言われた通りに岩を殴ってみる。

すると岩が見事に砕け散った。

「おおー」

「上出来だ。腕に纏わすだけなら大量に錬氣する必要も低いし、慣れれば意識しなくても腕の辺りで錬氣し纏わす事も出来る。甲氣も似たようなものだ」

「師匠、質問」

「何だ？」

「結氣で手甲を作るのと胃氣で腕に氣を纏わせるのは、どう違うんだ？」

「うーん……それぐらいなら違いはあまり無いな。胃氣も甲氣も文字通り氣の甲胃を身に付けるようなものだから、基本は防御用だな。ただ、両方共あくまで体の表面に纏わせるだけだから過信は禁物だしつこいようだが氣は圧縮すればするほどコントロールが難しくなる。薄い膜に圧縮するよりは厚みのある手甲に圧縮する方が楽だ」

「成る程ね。岩を素手で破壊出来るようになるのは、あくまで副産物という事か」

「そういう事だ。今日はこのまま応用の方も教えるぞ。まず纏氣。黒霆を抜け」

「了解」

「そしたら鍊氣だ。……そうだな。折角だから掌の辺りで鍊氣してみろ」

「了解。……出来たけど、たしかに丹田でやるよりは難しいな。量的にも多く練れないし……」

「それも慣れだ。で、刀に纏わす訳だが、まあ胃氣と同じようにやってみろ。氣を腕に纏わすのではなく刀に纏わすんだ。刀を自分の体の一部と考えるんだ。自分の体と違って感覚が掴みにくいだろうがな」

「了解」

黒霆を異空間から取り出し鞘から抜く。

目を瞑り意識を集中させる。

刀を自分の体の一部だと考える……。

「……………出来た……のか？」

少しの間を置いて目を開いてみると微かではあるが刀が白く輝いていた。

「まあ若干ではあるが白く輝いているから出来てはいるだろうが、

こんなんじや纏氣とは呼べないな。要修行。
そんじや次。翔氣だ。鍊氣したら腕に移動させる」

「……移動させた」

「放て」

「師匠、説明が短いというか説明になってないです」

いくらなんでもそれじゃ無理だ。

「えーと、そうだな……。腕を銃身に、氣を銃弾に見立てて、銃弾の底を爆発させて撃つ”みたいなイメージをするとやり易いかもしんない」

「銃身……銃弾……爆発……！」

「おつ、出来たな。ビー玉ぐらいの大きさで速さも亀みたいな鈍さだが」

「落ち込むんで言わないで下さい」

「最初はそんなもんだから気にすんな。今日から暫くは、基本的な氣の扱い方に関しては鍊氣・胃氣・甲氣を……って言ってもまあこの三つしかないが……と、応用的な氣の扱い方に関してはを纏氣・翔氣の修行をする。それらをマスターしてから朧氣・結氣の修行を開始する。分かったな」

「応！」

気合い入れて頑張りますか。

第2話〜神との修行開始〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

オリキャラ設定を更新しました。

氣についてですが、あくまでオリジナル（っていうわけでもないけど…）な設定です。

詰めきれしていない部分もありますが、大目に見てくれると助かります。

原作キャラは第4話から登場します。

現在の執筆状況：

第3話〜第6話↓投稿可能

第7話↓五割程度

第8話↓五割程度

第X話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

中々、進まない… or z

何が難しいってキャラの口調が…。

いや、別にストーリーや会話の内容だって大層な物ではないですけど…。

次の更新は2011年1月15日の予定です。

第3話〜異世界への旅立ち〜（前書き）

<前話の簡単な粗筋>

神様（女性）と修行をする。

第3話　異世界への旅立ち

錬氣・冑氣・甲氣・纏氣・翔氣の修行を開始してから、あっという間に一ヶ月が過ぎました。

月日が経つのは早いですね。

錬氣・冑氣・甲氣・纏氣・翔氣は一応マスターしました。

成長が分かりやすい翔氣で言えば、直径一メートルぐらいの氣弾をチーターの走る速さぐらいで放つ事も出来るようになりました。

また球状にして一発放つだけでは無く、機関銃や散弾銃みたいに放つたり槍状にして放つ事も出来るようになりました。

以上、普段使わない“ました”口調での回想終了。

ちなみに、俺が消滅するまでの残り時間は“299：17：31：11”だ。

今日からは臈氣と結氣の修行に入るそうだ。

基本的には前回のスケジュールと同じような感じで、前回同様、錬氣・冑氣・甲氣・纏氣・翔氣は自由時間にやる事になった。

前回のスケジュールの“氣の基本的な扱い方”の時間の半分を臈氣の修行に、残りの半分と“氣の応用的な扱い方”の時間は結氣の修行に当てるとの事。

で、今現在の時刻は十二時半。

つまり朧氣の修行の時間だ。

「さて、そんじや朧氣の説明をするぞ。簡単に言えば自分の氣を周圍に溶け込ませ存在感を限りなく薄くする。ストーキングに便利な技だ。嬉しいだろ？」

「嬉しくねえしストーキングもしねえよ」

「まあそれは置いといて、実際には情報収集とか暗殺とか、人知れず潜入する際に便利だな」

「まあ確かに」

「修行方法だが、取り敢えず其処の樹の前で座れ。で甲氣を使って氣を体全体に纏わせたら無意識になれ。何も考えず自然と一体になるんだ」

「了解」

樹の前で胡座をかいて瞑想する。

まあ、こういう修行も現世でやったしな。

そこまで難しい事じゃない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

《ニャーフミャー》

「ん？」

《ニャー！》

「猫？」

鳴き声がしたので目を開けてみると、近くにいた猫十数匹が一目散に逃げていった。

…猫、可愛いな。

俺、犬より猫の方が好きなんだよね。

あの自由気ままな感じが良い。

「おいこら。誰が集中解いていって言った？」

「いや、猫が…」

「猫も一切気にするな。実は猫が好きな匂いを紫苑が背にしている樹に付けてあってな。猫達は樹に近づきたいだろう。だが、コイツらは人に慣れていない警戒心の高い猫達だからな。人間がその樹の傍に居る限り近づこうとしないだろう。紫苑はこういう修行にも慣

れてるみたいで無心状態だったから傍まで近づいていったが、意識すれば今みたいに一目散に逃げていくだろう。例えば猫が頭に乗ろうが、猫に引つ掛かれようが全く意識しないぐらい無心に自然と一体になるんだ。それが出来るようになれば臍氣はマスターしたも同然だ」

「えーと、猫に俺の事を無機物だと思わせろって事か？」

「そうだ」

「了解……………」

・ ・ ・

「一時間後」

無理でした。

近づかれるだけなら問題無いが、体に触れられると意識してしまう。

というか猫、可愛い。

臍氣の修行をしている内に、なついてくれないかな…。

いや、それじゃ修行になんないか。

「臍氣も要修行だな。さてと。じゃあ最後の結氣の修行だな。取り敢えずボールを創ってみるか」

「了解」

「まずは氣弾と同じような感じ球体を創ってみろ。で、それを掴んでみろ」

「了解。…おつ、何か変な感触だな。柔らかくないけど、固くもない。これ爆発しないのか？」

「衝撃を与えなきゃ大丈夫だ。氣弾が爆発するのは、圧縮された氣が衝撃によつて破裂するからだ。翔氣と結氣は性質が違う事も覚えておけ。氣は圧縮していくと、ある時点から固まり、無数の結晶になる。この時の結晶同士は流している氣で繋がっている。氣を流すのを止めるとバラバラになるから注意しろ。更に圧縮していくと結晶同士が結合する。結晶同士が結合すれば氣を流さなくてもバラバラにはなったりしない。この状態が結氣だ。この状態から更に氣を流して圧縮していく事でより頑丈にする事が出来る。結晶同士の結合を解き、結晶の配列を変えれば武器の形も変えられる。翔氣もそうだが氣は身体から離れると霧散する性質を持つ。だから武器の形を維持する為には氣を流し続ける必要がある。まあ武器の形を維持する為に必要な氣の量は微々たるものだがな」

「成る程。で、こつからどうするんだ？」

「とにかく氣を練り込んで圧縮していけ。暴発しないように注意しろよ」

「了解……………」

「……………」

「…………おっ。固くなってきた」

「少しずつ結晶化してきたな。そのまま氣を練り込んでいけ」

「ああ……………」

「結晶同士が結合したな。もうその辺でいいぞ」

「…ふう。…おおっ！何か普通にボールが出来てる。感触は…カチコチだな」

「かなりの氣を消費しただろう？」

「そうだな。同じ大きさの氣弾五十個分の氣は練り込んだと思う。…でも、これ作った意味あんまり無いよな？」

「まあボールだしな。愛用の武器があるなら、結氣を使うのはドラゴンとかの自分より馬鹿デカイ敵と戦う時ぐらいか？デカイ武器創っても重さはそんなにないし。まあ氣の消費量が半端無く多いが…。後はそうだな…。集団戦とかか。状況に応じて武器の形を変えられるからな」

「師匠、質問」

「何だ？」

「結氣で創った武器ってどれぐらいで消えるんだ？」

「身体に触れていて氣を流し続けているなら自分の意思で結合を崩壊さない限りは消えはしない。身体に触れていても氣を流さなかったり、身体から離れた場合は圧縮した量次第で変わる」

「成る程」

「そんじゃ、まずはオーソドックスな剣からだな」

「了解」

「取り敢えず、剣を作ってみろ」

「了解……………」

「……………」

「……………出来た」

「出来たな。時間掛かりすぎだし不恰好だが。紫苑、黒霆を貸せ」

「分かった。ほらよ」

黒霆を桜に渡す。

「剣術修行の時の様に打ち合っぞ」

「分かった。行くぞ。ハアアアア！」

「……………」

《ガキイン！パキッ》

「……真っ二つだな」

「そうだな。氣の圧縮量が足りなかったという事だ。合格点は私が振るう黒霆と打ち合って折れないぐらいだ」

「分かった」

さて、どれぐらいの期間で合格出来るかね。

・
・
・

朧氣・結氣の修行を開始してから二週間が過ぎた。

朧氣は一応マスター。

この二週間でなつてくれた猫は三桁に上る。

何せ俺になつてくれた猫は片っ端から朧氣の修行から外されたかな。

その度に桜が新しい猫を連れてきた。

なつてくれた猫達は、休憩時間に俺を癒す係として大活躍。

寝る時はモフモフで暖かいし、動作一つ一つに癒されるし、やはり

猫は至高の癒しキャラだ。

猫、可愛い。

……話がずれたな。

結氣での剣創造に関しても合格点を貰った。

という事で今日から本格的な結氣の修行に入る。

これからは午後の氣の修行の時間は全て結氣に当てられる事になった。

ちなみに今現在の時間は午後十二時半。

俺が消滅するまでの残り時間は“ 2 8 3 : 1 7 : 3 0 : 0 0 ”。

「さてと。今日から本格的に結氣での武器創造をやるわけだが、どうする?」

「そうだな……。一通り色々な武器を創ってみるか」

「そうか。なら取り敢えず、大剣、大鎌、大斧、大弓、大扇、大盾、直刀槍、青龍偃月刀、方天画戟、手甲、戦輪、鞭、糸、この辺を作るか」

「多っ!？」

「文句言わず創る」

「了解、師匠」

・
・
・

更に二週間が過ぎた。

創るのが難しかったのは鞭や糸など柔軟性が必要な武器だったが、それらも含めて、桜が提示した武器は全て創った。

ちなみに今現在の時間は午後十二時半。

俺が消滅するまでの残り時間は“269:17:30:00”。

「……………」

「どうした師匠？」

「…やる事無くなった」

「マジで？」

「既に氣に関しては一通り教えたから、後はお前の努力次第だ。どうしたもんかな。やる事無くなったけど時間はまだ沢山残ってるし。……氣で人型二足歩行巨大戦闘人形でも創……」

「却下」

「…………氣で虫型八足歩行巨……」

「却下」

「……じゃあ魔法でも」

「却下」

「何だよノリ悪いな」

「うつさい。まともな案はないのか？」

「んゝゝ。あ、氣を使った治癒について教えるか」

「治癒？そっぴゃあ氣で自己回復力の強化が出来るって最初に言ってたな」

「ああ。そんじゃあ《ザクッ》」

「桜！？お前何して……」

「何って……腕を切り付けたんだけど？手っ取り早く実践だ。此方へ来い。怪我した部分に氣を流し込んで治癒する。以上」

「どうやって治癒するんだよ？」

「流し込んでいれば治るさ。臍氣を使った方が楽だな。患部に集中的に氣を流し込める」

「分かった。桜、腕を此方に」

「ん」

桜の腕に臍氣を使いながら氣を流し込んでいく。

「……見てみる。傷が塞がっていくだろ？」

「ホントだ」

「……もう大丈夫だろう。成功だ」

「そうか良かった。なら取り敢えず……」

《ゴチツ》

「痛っ！紫苑、お前神様の頭に拳骨を落とすとは罰当たりな……」

「うつさい。俺の修行なんかの為に自分を傷付けた罰だ」

「今更、傷ぐらい……散々修行で乙女の身体を弄び傷付けたのに……」

「なんかエロい言い方すんな！それはそれ、これはこれだ」

「ふむ。まあ私の事を心配して怒ってくれたのなら許してやろう。
……私に惚れたか？」

「惚れてねえよ。そんな事より質問」

「何だ？」

「治癒出来る限界って何処らへんだ？」

「そうだな。まず怪我の他に病氣も治せる。怪我に関しては、無くなった腕や臓器を丸々再生するのは無理だ。斬られた腕を繋げるぐらいなら出来る。臓器は一部を失ったぐらいであれば再生出来るが、再生速度次第では死んでしまうかもしれないし、長時間に渡って多量の氣を使う必要がある。心臓を挟まれたりして即死した場合も無理だ。病氣に関しては基本的には治せないものは無い。ただ体が弱っている場合、治す前に死んでしまう可能性もある。こんな所だな」

「氣って凄いな…」

「ただし怪我や病氣を治す場合の氣の消費量は多い。時間を置かずに治し続ければ、あつという間に氣がスッカラカンになるなら注意しろよ。氣量が多ければ多いほど、氣量が多い時と少ない時との身体感覚の違いが大きくなるからな。氣量が少なくなると、簡単に言えば身体が重くなったように感じるだろう。当然の事ながら、氣がスッカラカンの場合は、氣を扱う事は出来ないからな」

「了解」

「さて、氣による治癒についての説明もしたしどうすっかな。もう異世界行くか？」

「うん……。時間ギリギリまでは此处で修行するよ」

「なら紫苑が満足するまで付き合おう」

「悪いな、桜」

「氣にすんな。私にとっても良い暇潰しになる。それに……」

「それに？」

「いや、何でも無い」

「そっか。なら早速剣術修行でもするか。桜、相手頼めるか？」

「勿論」

「なら行くぜ？ハアアア！」

「来いひよっこが！」

こうして期限ギリギリまで修行する事になった。

・
・
・

あれから、かなりの月日が経った。

俺が消滅するまでの残り時間は“15:00:00:00:00”。

後、半月程だ。

誤差の事も考えて、そろそろ異世界へと旅立つ事になった。

「感慨深いものだな」

「そうだな。一年近く一緒に居たんだもんな」

「ああ。まさか紫苑がロリコンだとは露にも思わなかった」

「おいっ！誰がロリコンだ！」

「違うのか？」

「違えよ！」

「だって、お前一年間も一緒に居たのに一回も襲って来なかったじゃないか。最初の内は結界張ってたが、途中からは結界張らなくなつたし、半年過ぎた辺りからは一緒に寝るようになったのに、頭撫でたりしてくるだけなんだもんな」

「桜が頭撫でるだけでいいって言うから頭撫でたんだろうが。そもそも、何故恋人でもない女性と一緒に寝て頭撫でなきゃいけないのかも分からねえし」

「そりゃあ勿論、私が紫苑に惚れたからだ」

「……マジ？」

「マジだ」

「今、明かされる衝撃の真実。……え？ていうかガチで本気で惚れたの？」

「ガチで本気で惚れたんだよ。何せ、今まで恋っていうものをした事がないからなあ。…ふむ。つまり、これが私の初恋という事だな」

「えーと、女性に聞くのは大変失礼かもしれないけど、桜って何歳？」

「私か？…千歳ぐらいだ」

「千歳！？」

「ああ。……そうだな。良い機会だ。私が神様になった経緯を話そう。そもそも私は紫苑と同じ状況だった」

「俺と同じ状況？」

「私は生まれつき神様というわけではない。普通に人間だった。千年ぐらい前に死んだ後、輪廻の輪に戻れなかったんだ。ちなみに死ぬ前の世界は、紫苑の世界の紫苑の国で言う戦国時代みたいなものだった。その世界も紫苑がこれから行く世界と同じく気が存在していて、私はある国の筆頭將軍をしていて、まあ戦で死んだわけだ。で、以前話した大神様が輪廻の輪に戻れなかった私を、今の紫苑と同じ様に異世界に飛ばしてくれたんだ。で、その異世界で死んだ後に再び大神様に出会ったんだ」

「また輪廻の輪に戻れなかったって事か？」

「いや、違う。大神様が私を呼んだんだ。何故だが知らんが大神様は私を氣に入ったらいいんだ。で、神様にならないか？って言われて、面白そうだったから神様になるって言ったんだ」

「そんな理由でかよ」

「ああ。で、神様になるために六百年ぐらいの間に十回ぐらい記憶有りて転生して、三百五十年ぐらい前に神になったんだ。神になっ

てから三百五十年ぐらい、神になるための修行期間？みたいので六百年ぐらい、一番最初に死ぬ前で二十五年ぐらい、まあ合わせりや大体千歳ってとこだ」

「結局の所、神様になって面白かったのか？」

「いや、以前も言ったと思うが暇で面白くも何とも無かった。」

「そうか」

「何で私の年齢の話になってんだっけ」

「えーと、アレだ。桜が“紫苑に惚れた。私は今まで恋をした事が無い”って言い出して、で、俺が桜って何歳なんだ？って聞いたから」

「そうだったな。さっき言った通り私は最初の世界で所謂軍人だった。自慢じゃないが誰にも負けないぐらい強かった。まあ最期は卑怯な罠に嵌められ死んでしまうんだがな。で、ありがちだが私より弱い男には興味が無かった。最初の世界でも転生した十個ほどの世界でも私より強い男とは出逢えなかった。まあそういうわけで私は今まで恋をした事が無かったんだ」

「じゃあ何で俺に惚れたんだ？未だ桜の方が全然強いだろ？」

「うーん……。一緒に過ごす内に母性本能を刺激されたというか何と云うか、気付いたら好きになっていた。そもそもプレイベートで男と長い間一緒に過ごす事なんて無かったからな。私より弱い男に惚れるなんて思いもなかった」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんだ。で、紫苑は私の事をどう思ってた？」

「え？」

「私は紫苑の事が好きだと伝えた。紫苑が私の事をどう思っているかも聞かせてくれ」

「俺は……いや、俺も桜の事が好きだ。初めは姉貴が出来たみたいで楽しかった。でも次第に異性として意識するようになっていった。表面上はクールを装っていたけど、一緒に寝てる時なんか結構ドキドキしてたんだぜ？……もう一回言う。俺は桜の事が好きだ」

「紫苑……！」

「んっ」

桜がキスをしてきた。

「本当に私の事が好きなんだな？」

「ああ。俺は桜の事が好きだ」

「そつか。紫苑……」

「桜……」

お互いに強く抱き締め会った。

・ ・ ・

俺が消滅するまで残り時間は“ 11:18:37:45”。

あれから約三日間、俺は桜とストロベリってた。

まあ具体的には各自適当に想像して頂きたい。

で、いよいよ本当の旅立ち。

「荷造りは終わったか？」

「ああ」

桜から貰った黒いドラムバッグ。

サイズは600mm(長さ)×300mm(直径)。

防水加工・防炎加工がされているらしい。

値段は1980円。

値札のタグぐらい剥がしとけよと思った…。

つーか何処で買ってきたんだよ…。

後、防炎加工って何だよ？

意外と凄いバッグなのか？

まあ、そんな事は置いておいてバッグに色んな物を詰め込んだ。

食糧 / 水 / 救急医療道具 / 歯ブラシ / 歯磨き粉 / 爪切り / 耳掻き、
折り畳み傘 / 替えの胴着 / 替えの下着など。

細々とした物が多いが、あれば便利だろう。

「後は金になりそうなものか。金貨でいいか。1000枚あれば十分だろ。1枚1トロイオンスで純度100%だ」

たしか1トロイオンスが約31gで、現世にいたところは金が1g辺り4000円ぐらいだったから31×4000=124000円で、それが×1000枚だから約12400000円、つまり1億円以上…。

「いやいや、枚数的にも金額的にも多すぎだろ…」

「いいんだよ。師匠から弟子への手向けだ。大人しく受け取って置け」

「はあ…。分かったよ。有り難く受け取る」

「よろしい。つーわけで以前渡した漆黒の指輪に金貨収納機能も追加した。刀と違って手に持っていないと収納出来ないようにしたから」

「まあ念じただけで収納出来るなら代価として払った金貨を回収するという詐欺も可能だしな」

「そういう事だ」

「バッグは貰った。食糧や水や金になるものも貰った。他に必要な物は無いな。腰には黒霆だけ差していけばいいか」

「準備は終わったか？」

「ああ。いつでも行ける」

「そうか」

「桜？」

桜が俺を抱き締める。

「紫苑と一緒にいた一年弱は楽しかったぞ。初恋の人と結ばれる事も出来たしな」

「俺もだ。桜には世話になってばかりだな」

「気にすんな。猫達は私が責任をもって面倒を見る。まあ紫苑の形見だと思って可愛がるさ」

「縁起でもねえな。まあ、ありがとうな」

「ああ。…元気でな馬鹿弟子。そして最愛の人…」

「ああ…」

桜が俺から離れる。

「異世界へのゲートを開くぞ」

言っや否や地面に黒い穴が空いた。

「その穴に飛び降りれば、異世界へ行ける」

「分かった。じゃあ行くぜ？」

「ああ。……紫苑！」

「何だ？」

「コレをやる」

桜が何か投げてくる。

「もう一個指輪？」

白銀の指輪だ。

「餞別だ。効果は秘密。必要な時になれば分かる。取り敢えず嵌めとけ」

「了解。じゃあな桜！いつか、また会おう」

「ああ」

俺は桜に別れを告げ異世界へと旅立った。

第3話〜異世界への旅立ち〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想なんかも気軽に書いて下さい。

未だに感想数が零で落ち込み気味です… orz

いや、感想のしょうが無いだけかもしれませんが…。

基本的には、感想やアドバイスなどを書いて下さった方全員に返答します。

ただし、誹謗中傷に関してはスルーさせて頂きます。

勿論、批判的であっても、ちゃんとした感想やアドバイスなら真摯に受け止めさせて頂きます。

- - - - -

挨拶文を少し修正しました。

詳しくは挨拶文の方を見て貰いたいのですが、簡単に言えば漫画などからのパロディネタがありますよ〜と言う事です。

今更感がありますが一応。

それと関連してですが、ネタ帳の作成を検討中です。

需要があれば作成したいと思います。

後、前書きを書くようにしました。

まあ前話の粗筋を簡単に書いてただけですが…。

- - - - -

今話ですが軽く恋愛要素を入れてみました。

が、下手ですね…。

前話の後書き通り、次話から原作キャラが登場します。

- - - - -

現在の執筆状況：

第4話～第6話↓投稿可能

第7話↓投稿用に修正中

第8話↓五割程度

第X話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

前話の後書きの執筆状況から殆ど進んでないですね。

頑張らないと。

次回の更新は2011年1月22日の予定です。

第4話　趙雲達との出会い（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

神様（女性）との修行を終える

←

異世界へと旅立つ

第4話　趙雲達との出会い

「…きろ」

「……………」

「…きろ！」

「……………ん？」

「起きろって言ってたんだ！」

「んー…。…誰だ？」

目の前にはナイスバディーだけど柄の悪そうな御姉様。

「っーか桜。」

なんだこのデジャヴ。

「アレ？桜？俺、異世界に飛ばされた筈じゃ…」

「取り敢えず後ろ見な？」

「後ろ？」

「よー兄ちゃん！いい服着てんな！」

「コフー…！頭あ！こいつ良い女連れてますぜ！コフー！」

「ヒーハー！久しぶりの女だぜ！しかも上玉とくらー！」

小汚い格好をしたオッサン3人が現れた。

ゴリラみたいなオッサンと、呼吸が苦しそうなデブのオッサンと、ザビエルみたいにハゲてるオッサンの三人。

別に黄色い布は巻いていない。

「何だ、こいつら？」

「きゃー、助けてー、襲われるー、怖いわー」

「見事な棒読みだな？」

「いゃん、桜、照・れ・る♪」

両頬に手を添え首を左右に振る桜。

「誉めてないし、キャラに合っていないから」

「ちえっ……」

「ヒーハー！俺ら無視して女とイチャついてんじゃ……」

《ゴスンッ！》

「ヒーハー！？」

取り敢えず近寄ってきたヒーハーヒーハー煩い奴のハゲた脳天に桜直伝の踵落としを喰らわしてやった。

気絶したみたいだな…。

つかヒーハーって名前かよ。

いや、たぶん渾名だろう。

「デメエ！よくも…！」

《チャキツ》

「なっ…！」

リーダーらしきゴリラみたいな男の首筋に刀を当てる。

「黙れ、動くな。そっちの太った奴も動くなよ？動いたらコイツの首を切り落とす」

「動くなよコフー！？」

「コフー…！分かった。コフー…！」

首を激しく前後させるデブの男。

…予想通りの名前だな。

「さてと。取り敢えず幾つか質問に答えてもらおうか。一つ目、此処は何処だ？」

「あ！？何言ってやが…」

《チャキツ》

「質問に答える」

「け、荊州だ」

「荊州ね…。二つ目。この近くにいる有名な奴は誰だ？」

「孫策だ！南陽に居る孫策って奴が有名だ！」

「孫策か…。三つ目。黄巾党って知ってるか？黄色い布を身に付けている集団だ」

「そんなの聞いた事もねえよ！質…」

「四つ目。此処から一番近い村もしくは街はどっちだ？」

「あつちだ！あつちに村がある！もう良いだろ！？いい加減、剣を首筋から離してくれよ！質問にも答えただろ！？悪かったって！なあ！？反省してる！二度と悪い事はしねえから！」

男が指差す方向には特に何も見えないが、この様子だと嘘を吐いているわけじゃなさそうだな。

「……………いいだろう。見逃してやる。ただし変な素振りを見せたら斬り殺す。……………分かったな？」

「（コクッコクッ！）」

無言で首を縦に振るゴリラ。

《スッ…》

首筋から刀を離すとゴリラが物凄い勢いで距離を取った。

……あつ、俺さっきから普通にゴリラって脳内で呼んでたな。

温和で繊細なゴリラに失礼だ。

「コフー！ずらかるぞ！ヒーハー連れてこい！覚えてろよ糞野郎！」

「コフー…！分かった！コフー！」

見た目だけゴリラに似た男と、ヒーハーを担いだコフーが逃げた。

「見事な負け犬の遠吠えだな」

「そうだな」

「桜は見事な空気っぷりだったな。で？何で桜が此处に居るんだ？」

「空気言っつな！だって、紫苑起きねえんだもん。あのまま寝てたら殺されてたぜ？あれだけ手間暇掛けて鍛えてやったのに、異世界に飛ばしたは良いが寝てて殺されましたじゃ、あんまりだろ。だからこうして起こしてやったんだ。感謝しろよ？」

「成る程。危うく異世界を一目見る事も無く死ぬところだったと。…
洒落にならねえな。ありがとな桜」

「どう致しまして」

「感動的な別れ方をした割にはあつさりと再会したな」

「そうだな。まあ気にすんな。私は幽世に戻るぞ。今後は（たぶん）
手出ししないからな。じゃあな」

「応、じゃあな」

《シュンッ!》

幽世に戻ったか…。

さてと、俺も行くか。

取り敢えず現状確認。

…今更だが荒野のと真ん中だな。

何にもねえ。

いや正確には岩があるが、何も無いのと変わらねえか。

…ふむ。空気が美味しい気がするな。

空も綺麗だし。

そして何処までも続く荒野…。

見渡す限り三百六十度…。

山賊みたいなのが去って行った方向には森らしきものが小さく見えるが、村があると言った方向にはやっぱり何も見えない。
はあ……まあ此処でうだうだしてても始まらない。

歩くか。

・
・
・

あれから半刻程過ぎた。

ようやく視界の先に村みたいのが小さく見えてきた。

さて、もう少し頑張るか。

「ん？」

後方から馬の嘶きと駆けてくるような音が…。

「ようやく見つけたぜ糞野郎！さっきはよくもやってくれたな！野郎共！囲め！」

『へい！頭！』

周りを小汚ない野郎共に囲まれた。

「さっきの奴か。また随分大人数で来やがったな…。で？何の用だ？」

「ああ！？決まってるだろ！今度こそテメーの身ぐるみ剥がす為だ！」

「懲りない奴だな。何で野盗なんかやってんだ？」

「は！？楽だからに決まってるだろ！働かなくなつて奪えば何でも手に入る！金も！食い物も！女も！命もだ！」

「自分の私利私欲の為に他人から命まで奪うのか？」

「当たり前だろ！生かしておいて復讐されたら堪ったもんじゃねえからな！なあ野郎共！」

『へい！頭！』

「お前は一体何人の命を自分の欲望の為に奪い取った？」

「テメーは今までに食った餃子の数を覚えてんのか？」

「屑が…」

「あつ！？」

「来いよ…！テメーらを生かしておいても陸な事が無え。今この場で人生終わらせてやる…！」

「ほざけ！この人数に勝てると思ってんのか！？野郎共！やっちまえ！」

『へい！頭！』

六十人ぐらいか…。

まあ何とかなるだろう…。

「黒霆院紫苑、推して参る…！」

・
・
・

「おらーっ！」

「遅え…！」

《ザシュッ！》

「がああっ…！」

右側から攻撃してきた奴を一閃。

「この野郎！」

「太刀筋が甘いんだよ…！」

《ヒュッ！ザンッ！》

「がはっ…！」

更に左側から攻撃してきた奴も一閃。

「クソ！てめえら！たった一人に何いいようにやられてやがる！」

自分だけ安全な所にいてヤジ飛ばしているだけなのに偉そうな奴だな。

よくこんなんで頭になれるな。

「ハアッ…ハアッ…！」

しかし修行と実戦じゃ、やっぱり違うな。

敵の攻撃は避けられるし、此方の攻撃は当てられる。

技術的には圧倒的に勝ってる。

体力的にも問題無い。

が、吐きそう…。

肉を斬る感覚や血の匂いが思いの外、気持ち悪い。

後、四十人つて所か…。

「四方から同時に掛かれ！そうすりゃ避けられねえだろ！」

「チツ……」

翠樹……いや、緋炎と蒼氷を出すか？

面倒だな……。

氣でも使つて……。

「待てい！」

「誰だ！？」

「たった一人の人間相手に数十人掛かりで包囲し襲い掛かるような外道に名乗る名など無い！参る！ハア……！」

《ザシュ！》

「がっ……！」

《ザクッ！》

「ゴフッ……」

強いな、あの蒼い髪の槍使いの女の子………っと、見惚れてる場合じゃねえ。

「ハアアアッ！」

《ザシュッ！》

「ぐあっ…！」

《ザンツ！》

「ヒー…ハー…」

近場にいた乱入者に意識を取られている二人を斬る。

さて、もう少しだけ吐くのを我慢してくれよ、俺。

・
・
・

「クソツ！クソツ！（四十人はいた手下共があつという間に減つてく。何なんだよコイツら！？何で四十人もいて擦り傷一人付けられねえんだ！）」

「余所見すんなよ…！」

「しまっ…！」

《ヒュンツ！ブシュー…！》

頭の腕を斬り落とす。

「ギャー…！？腕が！？俺の右腕が！？いてえ！いてえよー！」

「ふむ。後は貴様一人だな」

「ヒイツ…！」

槍使いの女の子も頭の傍に来ていた。

《チャキツ》

「何か言い残す事はあるか？」

「た、頼む助けてくれ！命だけは…！」

今更命乞いかよ…。

「そう言った人達にテメーは何をした？」

「そ、それは…！」

「もういい、喋るな。死ね…！」

《ザンツ！》

「畜…生…！」

頭の首を刎ねる。

「ふう…！」

ひとまず落ち着けるな。

「大丈夫か？」

槍使いの女の子が話し掛けくる。

…美人だな。

「ああ、助かった。ありがとうな。俺の名前は黒霆院紫苑。アンタの名前は？」

「聞き慣れない名前だな…。私の名は…」

「星ちゃん。終わりましたか？」

「風か。終わったぞ」

いつの間にか女の子がもう一人。

「そうですかー。見たところ怪我も無いようですし何よりです。そちらの、お兄さんも大丈夫ですかー？」

「ああ。大丈夫だ。ありがとう」

…何だ、この子？

綺麗な金色の髪をしているんだが、問題は頭の上。

変な人形を乗せてる…。

「風、待って下さい！」

「稟ちゃん。此方ですよー」

声がする方向を見ると、更にもう一人女の子が走って近付いてくる。

「ハアハア…置いてきぼりにしないでよ…」

「機を見て敏なりですー」

「……まあいいでしょう。そちらの方、傷は……無いみたいですネ」

「ああ。擦り傷一つ無い」

「それは何よりです」

此方の女の子は茶髪で眼鏡を掛けている。

女の子三人で旅でもしてるのか？

女の子だけだと危険だと思うけど、蒼髪の槍使いの子がいるから大丈夫なのかな？

かなりの凄腕だと思うけど…。

「えーと、星って言ったっけ？」

「へ？」

「なっ…！」

「貴様…っ！」

名前を呼んだ瞬間、金髪の女の子も、茶髪の女の子も、蒼髪の女の

子も信じられないものを見たような顔をして声を上げた。

そして蒼髪の女の子に槍を突き付けられた。

あれ？

何か不味い事言ったか？

「お主…何処の世間知らずかは知らんが、いきなり人の真名を呼ぶとは、どういっ了見だ！」

「真名？」

「訂正しろっ！さもなくば…！」

「分かった。訂正する。すまなかった」

「……………」

「……………」

「良かるう…。今回は見逃してやる…」

「ありがとう（…真名、ねえ）俺の名前は黒霆院紫苑。君達の事は何て呼んだら良い？」

「趙雲だ」

「程立と呼んで下さいー」

「今は戯志才と名乗っております」

「趙雲に程立に戯志才…。君達が？」

「我等を知っておるのか？」

「…いや、聞いた事がある名前だな」と思ったただけだけど。趙雲って冀州常山郡の出身？」

「うむ。そうだ」

「やっぱりそうなんだ」

え…。

趙雲って、あの趙雲？

常山の昇り竜って呼ばれてる？

何で女の子？

桜からは一言も聞いてないんだけど…。

いや、平行世界とは聞いていたけど…。

まさか、この世界の有名な武将は全員女性とか無いよな？

「それなんてギャルゲー？」

「“ぎやるげー”？何ですかそれは？」

しまった、口に出てた。

「いや、気にしないでくれ」

「（じー）」

程立にめっちゃ見られてる…。

「ふむ。我らも山賊退治などで名が上がったかな？」

「退治しているのは、あなただけですけれどね」

「まあそれは置いとくとして、お兄さんは変わった御名前をしますね」

「うむ。姓が黒霆、名が院、字が紫苑か？」

「いや、姓が黒霆院で、名が紫苑、字は無い」

「字が無い？珍しいですね？」

「まあな。それより聞きたい事があるんだが良いか？」

「何ですかー？」

「真名って何だ？」

『は？』

「お主、真名を知らないのか？」

「ああ。悪いが教えてくれないか？さっき何で槍を突き付けられたのかも分からなくて…」

「真名を知らない…。本当に何処の人間だ？」

「いや、まあ取り敢えずそれは置いて…」

「…まあ良からう。真なる名と書いて真名と読む。その名を持つ者の本質や誇り、生き様などが詰まっている神聖なる名。自分が認めた相手や家族、そういった者だけに呼ぶ事を許す大切なものだ。例え他者の真名を知っていても、その者が許されなければ呼んではいけない。もし許されてもいないのに呼んでしまったら殺される可能性すらある。それが真名だ」

「…成る程。それは趙雲が激怒する訳だ。本当にすまなかった。」

頭を下げる。

「良いと言っただろう？今後気を付ければ良い。それより、お主は何処へ行くつもりだ？」

「取り敢えずは向こうに小さく見える村へ。その後は孫策という人物がいる南陽へ行こうと思う」

「孫策殿に会いに行かれるのですか？」

「ああ。中々の人物らしいからな。それに…」

「それに？」

「いや、何でもない。…なあ、孫策って女性？」

「うむ。桃色の髪で褐色の肌を持つ胸が大きい大人の女性だ。性格は天真爛漫で無邪気な子供みたいだったが。それでいて武人としては一流。王としての威厳も十分。ただ書類仕事は嫌いらしく、いつも政務を放り出して執務室から抜け出し、周瑜殿に怒られていたな」

「そうなのか（孫策も女性か…）とにかく助かったよ。真名という大事な事についても教えてもらったし、感謝している。俺はそろそろ行くけど君達は？」

「私達はエン（大の下に兄）州の陳留に向かい曹操殿に御会いしたいと思います」

「そうか。なら此处でお別れだな。縁が有ったらまた会おう」

こうして、趙雲・程立・戲志才の三人に別れを告げた俺は、取り敢えず視界の先に小さく写る村へ向かって歩きだした。

第4話〈趙雲達との出会い〉（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

キーワード見て気付いた人もいます（いたらいいなあ…）
が、√は涼√にしました。

そう、馬騰さんの領地です。

取り敢えず、蜀・魏・呉の3√は止めようと思ひまして。

ただ、作者は創造力が乏しいので、涼√にした意味が殆ど無くなる
かもしれません。

精々、あの御馬鹿と、あの御方との戦があるくらいで、その後のシ
ナリオは真っ白。

真恋姫の各√の戦を六個ぐらい（長坂橋・雪蓮暗殺・南蛮・定軍山・
赤壁・五胡辺り）繋げるだけの可能性も高いです。

オリジナルも一応考え中ですが、纏まらなかったら上記の様になり
ますので御了承を。

仮に繋げるだけになったとしても作者なりのオリジナルティーを出
したいと思います。

まあ、それすらも悪戦苦闘しそうですが…。

- - - - -

今話ですが、1〜3話と比べると短いですね。

テンプレな流れ…。

原作キャラが登場しましたが会話が短い…。

次話も今話と同じぐらいの長さです。

次々話は今迄で最長です。

一話辺りの話の長さがバラバラ…。

- - - - -

現在の執筆状況：

第5話〜第7話↓投稿可能

第8話↓投稿用に修正中

第X話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

進まぬ…。

次回の更新は2011年1月29日の予定です。

第5話　旅は道連れ世は情け（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

異世界へと到着

←

野盗に絡まれる

←

助けに入った趙雲と協力して野盗殲滅

←

郭嘉と程立が合流

←

趙雲の真名を呼んで槍を突き付けられる

←

謝罪して和解

←

自己紹介後、ちょっとした会話

←

趙雲・程立・郭嘉の三人と別れ近くの村へ

第5話　旅は道連れ世は情け

「ハアッ…ハアッ…なあ趙雲」

「ハアッ…ハアッ…何だ紫苑？」

「…そろそろ…終わりにしないか？」

「

「ハア…ハア…良かろう」

…ハアハア言ってるが別にエロい事をしている訳では無い。

俺と趙雲は互いに武器を構え向かい合っている。

何故こんな事になっているかと言うと…。

～回想～

「そうか。なら此处でお別れだな。縁が有ったらまた会おう」

こうして、趙雲・程立・戯志才の三人に別れを告げた俺は、取り敢えず視界の先に小さく写る村へ向かって歩きだした。

のだが…。

「あいや待たれい！」

「ん？どうした？」

「お主、真名を知らないと言ったな？この辺りの地理は分かっているのか？」

「いいや、全然分からん。取り敢えず村まで行つて、南陽の場所を聞こうと思つてるけど…」

「なら我等と一緒にいかぬか？我等は既に南陽で孫策殿と会つてきた。地理が分からぬまま進むよりは、分かる者と進んだ方が良いのではないか？それに南陽に着いたとしても孫策殿と会えるとは限らないだろう？門前払いだつて有り得る。だが我等が居れば恐らく会う事が出来るだろう。どうだ？」

「は？ちよつと、星。あなた何を言つて…」

「そうですねー。風も賛成です」

「ちよつ…！風まで！」

「別に良いでは無いか稟。急いでいる訳では無いし」

「それはそうだけど…」

「えーと、俺としては有難い申し出だけど何で？」

「なに、少しお主に興味が沸いただけの事。真名が無ければ字も無い。この国の人間では無いのだろう？一体何処から何の目的で此処に來たのか。後は、少し手合わせをしたいと思つてな。先程の野盜との戦鬪を見て中々の手練れだと感じた。是非とも一戦お願いしたい。理由としては以上だ。どうかな？」

「そういう事ですー。風もお兄さんに興味があるのです」

「俺としては、そうしてくれるなら大助かりだし断る理由は無いけど…（チラッ）」

「はあっ…分かりました。星と風がそう言うのなら私も一緒に着いて行きましょう」

「悪いな戯志才」

「構いません。私自身、貴殿に興味が無いかと言われれば否です」

「うむ。決まりだな。それでは行くでしょう」

「おおー」

「はい」

「ちょっと待った」

「どうした？」

「…すまん、限界。…オウエエエ」

「ちょっ…!」

「あらまー」

「大丈夫か？」

・ ・ ・

取り敢えず、胃の中の物を全てぶちまけた。

「大丈夫ですか？どうぞ。水です」

「ありがとう」

戯志才が竹筒入りの水をくれた。

《ゴクツゴクツ》

「ふむ。乙女達の前で吐くなど些か配慮が足りない気がするのだが…」

「すまん。実は戦っている最中から気持ち悪くなっているな。なにせ、人を斬るのは先の戦いが初めてだからな」

「初めて？」

「ああ」

「その割りには躊躇無く斬り捨てていた気がするのだが…それに今まで人を斬った事が無いのなら、あの剣術は…」

「躊躇無く斬り捨てたのは、あいつらと問答した結果、生かしておいたら犠牲が増えると思ったからだ。近くに村もあるしな。剣術は

別に実戦をしなければ身に付かないってものでもない。一応、武術歴は十年以上になる」

「ふむ。まあ確かに幾ら実戦経験を積み重ねようとも弱い者は弱い。逆もまた然りか。実戦経験は無いと言ったが、その剣術は誰に習ったのだ？」

「祖父だ。両親は赤ん坊の頃に死んじまってな。その後は母方の祖父が引き取って育ててくれた。他に親類がいなかったからな。武術に関しては一切妥協しなかったけど、それ以外では厳しくも優しい祖父だったよ。最も、その祖父も二年前に病で死んじまったがな」

「そうか……すまなかったな。嫌な記憶を思い出させる様な事を聞いて」

「気にすんな。両親なんて顔も覚えてないし、爺ちゃんも死ぬ間際に“退屈しない良い人生だった”って言うてくれたしな。爺ちゃんの子供は母さんしかいなかったから武術は教えてなかったみたいだし、自分が継いできた武術を孫に伝承する事が出来て嬉しかったみたいだから」

「良き御祖父だったのだな」

「ああ。自慢の爺ちゃんだ。さてと、湿っぽい話は止めにして、そろそろ行くか。っと、その前に。三人共、俺の事は紫苑と呼んでくれ。姓で呼ばれるのは慣れてないんでな。後、敬語とかも要らないから」

「うむ」

「はいですー」

「分かりました」

「ふむ。なあ、稟」

「…あなたの言いたい事は分かってますよ、星。紫苑殿」

「何だ？」

「“戯志才”と言うのは偽名です。私達は見聞を広げる為に旅をしているのですが、女三人の旅は危険が付き物の為、初対面の相手には用心して偽名を名乗っております。ですが、あなたは短い間かもしれませんが共に旅をする仲間です。なので、私の本当の名をあなたに授けます。私の本当の名は郭嘉と言います。改めてよろしくお願いします」

「ああ。よろしく」

「ちなみに風と星ちゃんは偽名じゃないですからねー」

「ああ」

「ふむ。それでは気を取り直して行くでしょう」

「おおー」

「はい」

「ああ」

こうして、趙雲・程立・郭嘉の三人と共に村へ向かって歩きだした。

・
・
・

四半刻程歩くと村に着いた。

「まずは宿を取りましょう。今から次の村を目指しては野宿になりますから」

「そうですねー」

「先程の宿で良からう」

「そうですね。まさか宿を出て直ぐ蜻蛉返りになるとは思いませんでしたが。紫苑殿は、この国の貨幣はお持ちですか？」

「いや。悪いけど、この国の貨幣は持ってないんだ。この金貨をこの国の貨幣に変えられないかな？」

「どれ、見せてみる。……ほう。見事な彫刻だな。これは御主が彫ったのか？」

「いや、残念ながら俺じゃない」

というか、金貨に彫刻が施されているなんて、俺も今知った所だ。

桜が一つ一つ彫ったのか？

それとも、金貨を創る時に彫っておいたのかな？

まあ枚数が枚数だし後者だろう。

星が今手にしている金貨には虎と龍が彫られている。

後で他の金貨も確認してみるか。

「風にも見せて下さいー。おおっ。綺麗な模様ですね。」

「これは……金ですか？」

「ああ。純金だ」

「それならば、この彫刻の分も含め、かなりの額になると思います。こつこつ芸術品を集めている収集家もいますので。幸い、この村にも御一人いらっしゃった筈です」

「私が交渉してこよう。風、稟、紫苑を宿まで案内してくれ」

「分かりました」

「はいはいー」

「うむ。それではな」

趙雲は進んでいた方向とは反対へ歩いていった。

「私達も行きましょう」

「ああ」

程立、郭嘉と共に宿を目指した。

・
・
・

「戻ったぞ」

宿に着いてから少しの間、休みついでに金貨の確認をしていると、趙雲が戻ってきた。

まだ十数枚しか調べていないが、金貨に彫られていたのは、魔方陣みたいなだったり鳥だったり花だったりと普通なのが多かったが、中には某電気ネズミだったり某夢の国のネズミだったりと著作権的に大丈夫なのか？と言いたくなるのも幾つかあった。

あの辺の会社は、その辺りに関しては厳しいからな…。

「おかえり」

「おかえりなさいですー」

「おかえりなさい。どうでした？」

ちなみに今現在は程立、郭嘉と一緒に部屋にいるが、ちゃんと二部屋取った。

流石に男女が一緒の部屋で寝るわけにもいかないしな。

「うむ。かなりの額になったぞ。千三百銭になった」

「それってどれぐらいの価値になるんだ？」

「米十三石分ですね。幾つか例を挙げれば、米一石が百銭、牛一頭が二千銭、馬一頭が四千〜五千銭、酒一石が千銭程になります。成人男性が一月暮らすのに必要なのが二〜三石ほど、つまり二百銭〜三百銭です」

「純粹に金貨の価値で言えば十二石分、彫刻としての価値を含めて十三石分といった所だな」

「成る程」

純金な金貨の価値は米十二石分。

成人男性が一ヶ月暮らすのに必要なのが米三石分。

米十二石を現世での金額に直すと、純金の金貨一枚と同じだから十二万四千円。

その四分の一だと三万一千円。

現世で考えれば暮らしていくのは難しいけど、この時代なら家賃や電気代、水道代、ガス代なんかは掛からないんだから、出費としては食費、雑費、娯楽費ぐらいだから十分暮らしていけるか。

「さてと。紫苑、考え事している所を悪いが出掛けるぞ？」

「何処にだ？」

「村のすぐ近くにある森だ。そこで手合わせするぞ」

「ああ、そっぴやそんな事言つてたな。分かつた」

「うむ。では行つてくるぞ、稟風」

「はいはいー。いつてらつしゃーい」

「怪我には気を付けて下さいね」

「ああ」

「承知」

というわけで、趙雲と二人で森へ向かう事にした。

・
・
・

森へ入ってから少し進んだ、川がある場所で趙雲が立ち止まつた。

「ふむ。この辺りで良からう。さて、手合わせするぞ」

「ちよつと待つた」

「どうした？」

「手合わせの前に体を解そうぜ」

「むっ。忘れておった。たしかに必要なだな」

というわけで準備体操中。

さつきは、趙雲には準備体操と言っても分からないだろうから“体を解す”って言ったけど。

「なあ趙雲」

「何だ？」

「趙雲の武器って槍だよな？」

「ああ。直刀槍“龍牙”。我が相棒だ。紫苑の武器は細身の刀だったな。少し見せて貰って良いか？」

「ああ。ほらよ」

「…………ふむ。このような武器では頼り無くないか？」

「まあ本来は軽装の相手用だしな。重装備相手には槍を使うのが普通だ。まあこの刀は素材が特別だから折れる事はまず無いし、氣で強化も出来るしな」

「ほう。紫苑は氣が扱えるのか」

「ああ。趙雲は？」

「残念ながら扱えん」

「そうか（まあ、あの趙雲子龍だから氣量は相当多いんだろうが…）そろそろ始めるか？」

「うむ。刀を返すぞ」

「ああ」

趙雲から刀を受け取り、距離を取る。

「準備は良いな？」

「応！」

「いざ、尋常に勝負！趙子龍、参る！」

「黒霆院紫苑、推して参る！」

「はいっ！はいっ！はいっ！はいっ！はいっ！」

趙雲が連続で突きを放ってくる。

「…っと！速いな！」

それを紙一重で全て避ける。

「ほう。全て避けきるか……ならば、これならどうだ！」

「……！」

趙雲の雰囲気が変わった。

手加減は不必要と考えたのかな？

「我が槍武の舞い！その身でしかと受け止めよ！龍撃の舞い！」

「……！ハアアアアア！」

《ガキイイイイン》

「ほう。これを止めるか！どうやら本気で手加減は要らないみたいだな！行くぞ、紫苑！」

「来い、趙雲！」

『ハアアア！』

・
・
・

というような感じで四半刻ほどで二百合以上打ち合った。

く回想終了く

「流石だな、趙雲。見事な槍捌きだ。身体中裂傷だらけだよ」

「あれだけ避けておいて良く言う」

「いやいや、避けきれないから傷だらけになってるわけで。趙雲
なんか傷一つ負ってないじゃん」

「それは御主が私に攻撃を当てぬよう寸土めしていたからであろう
？」

「女性を傷付けるのはどうもな……」

「ふむ。女としては嬉しいが、武人としては嬉しくないな」

「すまん」

「まあ良い。今日はあくまで手合わせだからな。また相手を頼む」

「ああ。こちらこそ、よろしく頼むよ趙雲」

「星」

「え？」

「星でよろしい」

「いいのか？」

「ああ。私は御主と手合わせして真名を預けるに値する男だと認め
た。だから構わん」

「そっか。じゃあ改めてよろしくな星」

「……ふむ。殿方に真名を呼ばれるのも悪くないな」

「今まで男に真名を許した事は無いのか？」

「うむ。貴殿が私の初めての男だ」

「何か言い方がアレなんだけど……」

「おやおや？お気に召さなかったかな？」

口角を上げてニヤリと笑みを浮かべる星。

コイツ……人をからかうのが好きみたいだな……。

「そういう問題じゃないから」

「ははっ。すまんすまん。私は村に戻るが紫苑はどうする？」

「そっだな。汗掻いたし水浴びして傷を手当てしてから帰るよ」

「承知した。……何なら水浴びを手伝ってやるつか？」

「さっさと帰れ」

「ふふっ。嫌われるのは嫌だしそうするか。では私は一足先に戻るぞ」

「ああ」

こうして、少し水浴びをしてから宿に戻る事にした。

第5話〈旅は道連れ世は情け〉（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

またしてもテンプレな流れ。

で、趙雲と手合わせ。

氣チート無しだと現段階では趙雲の方が強いです。

まあ、だから何？って話ですが。

チートと言いつつチートっぽい描写が無い…。

まあいいか。

前話の後書きで、次話（6話）が今迄で最長と書きましたが勘違いしてました。

次々話（7話）が今迄で最長です。

まあ阿呆みたいに長いわけではないですが。

- - - - -

現在の執筆状況：

第6話〜第8話↓投稿可能

第9話↓四割

第10話↓四割

第X話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

俺に足りないものは、それは妄想力語彙力表現力構成力集中力時間恋人！そして何よりもー！速さが足りない！

……いや、実際は速さよりも時間が足りないんですが…。

仕事／炊事／洗濯／掃除／買物／ペットの世話／リアルでの友人との交流／ランニング／筋トレ／ゲーム／漫画etc……一日が三十分ぐらいあったら良いのに……。

次回の更新は2011年2月5日の予定です。

第6話　風・稟との勉強会（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

趙雲・程立・郭嘉の三人と別れ近くの村へ……行く筈だったが、な
んやかんやで趙雲達三人に孫策の所まで案内してもらった事になった

←

四人で近くの村へ

←

趙雲と手合わせ

第6話　風・稟との勉強会

《コンコン》

「入っていいか？」

「どうぞ」

「お邪魔します」

宿に戻り、趙雲達の部屋に行ってみると郭嘉一人しか居なかった。

「あれ？郭嘉一人か？」

「ええ。星と風は出掛けました。風が本屋に用があるみたいで、星が付き添いで一緒に」

「そつか。……なあ郭嘉」

「何ですか？」

「何読んでんだ？」

「これですか？六韜りくたうと言う兵法書です」

「ちょっと見せてもらって良いか？」

「ええ。構いませんよ。どうぞ」

「ありがとう。……………」

「変な顔をして、どうかしましたか？」

「変な顔って……いや、何が書いてあんのか全く分からなくてな」

「……はあ。字が読めないなら何故見せてくれなどと仰ったのですか？」

「いや、言葉が通じてたから文字も読めるかと思ってな」

「……あなた本当に何処から来たんですか？」

「いやー、あははは…」

「（じー……）」

また、じーつと見られてる…。

どうしたもんかな…。

「只今戻りました」

「戻ったぞ。おや、紫苑も帰ってきてたか」

「お帰りなさい二人共」

「おかえり」

「うむ。して、紫苑が見ておるのは何だ？」

「郭嘉から借りた六韜って兵法書だよ。借りたは良いが読めなくてな」

「お兄さんは読み書きが出来ないのですか？」

「そうみたいだな」

「そうみたいとは、まるで人事だな？」

「あはは……」

「ふむー。風が教えて差し上げましょうか？」

「良いのか？」

「…………ぐー」

「寝るのかよ！？《ビシッ！》」

思わずスナップの効いたツツコミを入れてしまった。

「おおっ。急に睡魔が……」

「本当かよ……」

「気にしないで下さい。いつもの事です」

「うむ。いつもの事だな」

「日常茶飯事かよ…」

「良いツツコミでしたね、お兄さん。で？」

「で？」

「でででーでーでででー」

「最終幻想の勝利のファンファーレかよ！」

「ふあんふあれ？」

「いや、何でもない」

何で程立が知ってんだよ…。

「えーと、じゃあ御言葉に甘えて教えてもらおうかな」

「はいはいー。よいしょと」

「……何してるんだ程立」

何故か程立が膝の上に乗ってきた。

「……………ぐう」

「程立、起きろー」

「おおっ！座り心地が良かったので、ついごとごとと…」

「風が紫苑殿の膝の上に……ぶはっ」

「郭嘉!？」

鼻から赤い液体を勢いよく噴出して、ぶっ倒れてんだけど!？

鼻血!？

「ああー、稟ちゃんの、お鼻から真っ赤な液体が……」

「稟は一を聞いたり見たりすれば十の妄想を考えると性癖があつてな。それが加速するとああやって鼻血を出すのだ。なに、気にする事はない。いつもの事だ」

「いつもなのかよ……」

「ちょっと失礼ー。ほら、稟ちゃん。とんとんしますよ、とんとん」

程立が膝から降りて、郭嘉を介抱しているんだが…。

「……随分と手慣れてるな。えーと、大丈夫なのか郭嘉？」

「ふがふが……」

「……すまん、何言ってるのか分からん」

「稟ちゃんは大丈夫だと言ってますー」

「そうか。まあ大丈夫なら良いんだが……」

「そんな事より、お勉強始めますよ」

そんな事…。

郭嘉の鼻血はそんな事なのか？

「今度は普通に隣に座るんだな」

「はいー。流石に膝の上だと教えづらいもので。……膝の上の方が良いですか？」

「いや、このままでいい」

「別に私達に遠慮しなくても良いのだぞ？何なら少しの間、村の中をぶらぶらして…」

「からかうなよ、星」

「ふふつ。こればかりは承知出来ん。他人をからかうのは趣味の一つだから」

「悪趣味だな…」

「おやおやー？星ちゃんを真名で呼んでも怒られないという事は、真名を呼ぶ事を許されたのですかー？」

「ああ。手合わせの後にな」

「そうですかー。なら風の事も真名で呼んでいいですよ？」

「……は？えつと、すまん。もう一回言ってくれないか？」

「おうおう兄ちゃん。乙女が勇気持って言っただのに、もう一回は無いんじゃないか？この真つ黒黒助め！」

「……えーと」

「これ宝慧。お兄さんに暴言に吐いてはいけませんよ？」

「すまねえな風。この兄ちゃんが聞こえてた癖に聞き直すもんだからつい……」

「それ何？」

「宝慧ですよ？」

「宝慧つて頭の上にある人形の事か？」

「そうですよー」

「腹話術？」

「おうおう兄ちゃん。腹話術とは言ってくれるじゃねえか。俺っちは傷付いたぜ」

「……なあ郭嘉」

「何ですか？」

あつ、普通に喋れるようになった。

「俺はどう反応すりゃいいんだ？」

「普通に対応すればいいかと」

「……了解。話を戻すけど、真名で呼んでもいいって事だったよな？理由を聞いていいか？」

「大した事では無いのですよ。風はお兄さんを気に入り、星ちゃんもお兄さんに真名を許している。この二つだけで風がお兄さんに真名を預ける理由としては十分なのです」

「そうか。なら改めてよろしくな、風」

「はいですー」

「じゃあ早速だけど読み書きを教えてください」

「応！宝船に乗ったつもりで安心しとけ兄ちゃん！」

「宝慧はもういいから」

「はいはい。ではでは、お勉強会を開始しましょう」

「ああ」

・
・

・
風が初歩的な漢字を教えてくれていて、それを書いている。

書くと言っても鉛筆やシャープペンなんかあるわけもなく墨を使用しているし、紙も貴重なので竹簡に書いている。

「ふむ」

「どうかしたか、風？」

「いえー。お兄さんは飲み込みが早いと思ひましてー。読み書きをした事が無い人だと字の形が崩れたり、釣り合いが取れていない事も多々あるのですが、お兄さんにはそういう事が一切無いので」

「まあ俺の国も漢字使ってるからな。この国とは違う所も多いが、似ている部分もあるし。自分の国の言葉なら普通に読み書き出来るし」

「成る程。だからスラスラ書けるんですねー」

「まあそついう事だ」

「風、紫苑。そろそろ夕飯を食に行かぬか？」

「もうそんな時間か」

外を見ると夕焼け。

この時代の灯りっていうと、薪や松明、蠟燭、油皿と燈心か。

とは言っても、和蠟燭は貴重な紙を使い、洋蠟燭は貴重な蜜蝋（ミツバチの巣を構成する蝋で巣を加熱圧搾したり湯で煮溶かしたりして採取する）を使う。

油皿にしても植物油ではなく動物油を使うからそれなりに貴重だ。

陽がある内に食べる人も多いのだろう。

「何を食べに行くんだ？」

「メンマだ」

「…メンマ？」

「メンマ」

「メンマって拉麺の上にちよこつと乗っている奴だよね？」

「うむ」

「紫苑殿、星はメンマが好物なのです。序でに御酒も。食べに行くのは、メンマ以外もちゃんとある御店なので心配しなくても大丈夫です」

「ああそう…。まあとにかく行くか」

「はいー」

「ええ」

「うむ」

・
・
・

「お兄さん、朝ですよ？」

「……うーん……後、五分」

「“ごぶん”？」

「ん？……えーと、風？」

「はいー。おはようございませう」

「おうおう兄ちゃん。いつまで寝てるんだ？さっさと起きやがれ」

何だろ、この状況。

風が俺の身体の上に馬乗りになってる……。

ええと、外は明るいから朝か。

昨日は飯を食いに行つて……星がメンマについて熱く語っているの
聞いて……酒が入った稟の愚痴を聞いて（愚痴を聞いている時に真
名を呼ぶ事を許された。

何か意外と簡単に真名を許されてるのは気のせいかな？……食い終
わったら酔いつぶれた稟を背負つて宿に戻つて……また風と少し勉

強して……自分の部屋に戻って寝て……で今か。

「起こしに来てくれたのか？」

「そうですよー」

「ありがとな、風」

と言って、風の良く伸びそうな頬を両側からグイーと軽く引っ張ってみる。

「うー……これは何ですか？起こした事に対する、お仕置きですか？」

「いや、何か引っ張ってみたくなくて」

「お兄さんは変態ですね」

「いやいや、頬を引っ張る行為が何で変態になるんだよ」

頬から手を離して、頭を撫でてみる。

のだが、宝慧邪魔だな…。

「……………」

（コチヨコチヨ）

「むう。突っ込み無しですか。風のほっぺはくすぐるものではないのですよー」

「いや、突っ込んだら負けかな〜と思って」

「何をですか？」

「おいおい風。そいつを聞くのは野暮ってもんだぜ。何って、そこに聳え立つ立派なおち…ムグッ」

危ねえ…。

言い切る前に手で口を塞いで阻止した。

宝慧（というか風）め…。

「風、女の子がそういう事を言ったら駄目だめだろ…」

「……ご謙遜を？」

「してないから」

「むう」

「風、紫苑殿はまだ起きていないのです…か？…って…風が…紫苑殿の上に…馬乗りに…まさか、この短時間で……ぶはっ」

「うおおおい！？朝っぱらかよ！」

「あらー。この状況は稟ちゃんには刺激が強すぎたようですねー」

「稟。風と紫苑は…って鼻血を出して倒れておるな。……成る程。この状況を見てまた妄想したのか」

「風、いい加減降りてくれるか？」

「分かってますよ。稟ちゃんにトントシなきゃいけませんから」

と言って俺から降り、稟の傍へゆつくりと歩いていく。

急げよ！

「稟ちゃん。とんとんしますよ、とんとん」

「ホントに、風も稟も星も一癖あるよな…」

「おや、私もか？」

「ああ。星が一番変で厄介かも…」

「変とな！？……うつむ。自分では至ってまともだと思っているのだが」

「どの辺が？」

「…何気に酷い事を言っな、紫苑よ」

「そうか？」

昨日の、飯屋での熱の入ったメンマ談義とかマジで勘弁してほしい
…。

「お二人共々。稟ちゃんの鼻血も止まった事ですし、宿を出ますよ
ー？」

「了解」

「承知」

こうして俺達は宿を出て、次の村へと向かった。

・
・
・

この世界に来てから最初に着いた村を出発してから一週間。

五つ目の村へ着いた俺達四人。

今現在、風と星はお出かけ中。

と言う事で稟に字を教わっている。

「ですから、此処はこうなって…」

「ああ。成る程。つまり、此処がこうなって、此方がこうなってっ
て事か？」

「そうです」

「よし。じゃあ次だな」

「はい。……しかし紫苑殿は本当に頭が良いですね」

「何だよ急に」

「いえ、人に教えると言うのは案外難しいもので、此方が分かりやすく教えているつもりでも上手く伝わっていない事も多いのです。ですが紫苑殿は此方が意図している事を正確に読み取って下さるので、教える側としても非常に楽です」

「そうか？まあそういう風に誉めてくれるのは嬉しいけど……っと。この竹簡にはこれ以上書ける場所が無いな。次の竹簡に……アレ？もう余ってる竹簡は無いみたいだな」

「そう……ですね。私が持っていたのも使ってしまったし」

「じゃあ買ってくるよ」

そう言っ立ち上がったのだが…。

「うおっ！？」

「きゃっ！？」

「悪い。大丈夫か、稟？」

「…ええ、大丈夫です。紫苑殿は…あつ…」

床に置いておいた竹簡に足を取られ転んでしまったみたいだ。
まあ、それだけなら良いのだが、転んだ拍子に稟を押し倒す様な格好になってしまった。

稟の顔が凄く近い。

具体的に言うと、唇が触れ合うまで5cmぐらいの距離。

「ええと…。すまん、すぐ退くから」

と言って退こうとしたのだが…

「……ぶはっ！」

「ですよー…」

予想通り、鼻血を顔面に噴射された。

“退くから”とか言ってる暇があったら、退いた方が良かったな…。

・
・
・

ようやく鼻血の後始末が済んだ。

まあ部屋の中に撒き散らしてしまった為、完全に拭き取る事は出来ず、宿の主に幾らか金銭を渡して許してもらった事になったが。

「……本当にすみませんでした」

「いや、悪いのは俺の方だし、稟は気にするな」

「ですが…」

「それよりも鼻血は止まったか？」

「え、ええ。止まりました。凄いですね。まさか、風以外に私の鼻血を止められる方が居るとは思いませんでした」

「まあ風がやってたのを見様見真似でやっただけだな。止まっ
て良かったよ。しかし、何で稟は鼻血が出やすいのかな？」

「さあ…。私としては体質としか言い様が無いのですが……やはり
妄想癖が原因…」

「いや、妄想はあんま関係無いと思うけど…。間接的な原因にはな
ってるけど、妄想が直接的な原因なら、至る所で鼻血を吹き出して
いる人がいる事になるし。稟が自分で言った通り体質の問題だと思
うよ。鼻の血管が弱いのかな？」

「血管が弱い……ですか。でも血管が弱いのはどうしようも無いと
思うのですが？」

「いや、食事に気を付ける事で多少は血管を強くする事も出来るら
しいけど…」

「食事ですか？」

「ああ。食事は健康と密接な関係があるからな。暴飲暴食をすれば体を壊すだろう？逆に、体に良いものを摂取すれば体の調子も良くなるって事だ」

「成る程。血管を強くすれば鼻血が出にくくなるという事ですね？」

「そういう事だ。血管も他の臓器と同じく、蛋白質っていうので出来る。良質の蛋白質を摂取する事で血管を強くする事が出来るんだ。蛋白質が不足すると血管が弱くなるだけじゃなく、筋力も減ってしまい体力もなくなっちまうからね」

「？蛋白質とは何ですか？」

「えーと、人間の身体を構成する物質かな。人間の身体は、約六割が水、残りの一割五分〜二割が蛋白質、脂肪が一割五分〜二割、ミネラルが三分〜四分、残りが炭水化物や核酸って感じで出来ていて、蛋白質・炭水化物・脂質・ミネラル・ビタミンを五大栄養素と言うんだ。」

蛋白質は皮膚・骨・筋肉・毛髪・血液などの構成成分になるもので、炭水化物と脂質は身体を動かす為の燃料だな。ただし、脂質の摂りすぎは太る事になる。ビタミンとミネラルは、蛋白質・炭水化物・脂質の働きを促進するものだ」

「……？」

「すまん、分からないよな。とにかく、蛋白質って言うのが皮膚とか骨とか血管とかを作る材料って事だ」

「分かりました。それで、蛋白質とやらが含まれる食材は何ですか

？」

「魚・肉・大豆・卵・牛乳とかな。後は、蛋白質じゃないけど蓮根や緑茶なんかもオススメだな。蓮根や緑茶に含まれる“タンニン”って言うのに止血作用や粘膜組織の炎症を鎮めてくれる作用があるんだ」

「それらを沢山摂取すれば良いのですね？」

「いや、沢山摂れば良いってわけじゃなくて、日頃から意識して毎日摂取する事が重要なんだ。摂取したからといって、直ぐに効果が表れるわけじゃないし」

「成る程。体を鍛えるのと一緒にですね。一日、朝から晩まで運動し続けたからといって筋肉が付くわけではないですし」

「そういう事だ。じゃあ俺は竹簡買ってくるから」

「分かりました。まあ何も無いと思いますが、気を付けて行ってきて下さい」

「ああ」

さっさと買ってくるか。

・
・
・

宿に戻ってみると、星と風が帰ってきていた。

「ただいま、稟。おかえり、星、風」

「おかえりなさい」

「ただいまおかえりですー」

「うむ。無事に戻ってきてきて何よりだ。何やら出掛ける前に面白い事があったそうだな。もう少し早く帰っておれば…」

「別に面白くは無いから」

「そうか？」

「そうだ。稟、勉強の続きを教えてください」

「分かりました」

・
・
・

稟に暫く勉強を教えてもらった後、飯屋に四人で夕食を食べに来た。

最初の内は、談笑しながら各々が頼んだ料理を食べていたのだが、

「明日だな」

と、いきなり星が真面目な顔で言い出した。

「明日？」

「うむ。明日には孫策殿が居る街に着く」

「…そうか。星達と出会って七日間、本当に助かったよ。星とは手合わせ出来たし、風と稟には字を教えて貰ったし。世話になりっぱなしだな」

「なに、気にすることはない。私も十分楽しめた」

「風も楽しかったですよー」

「私もです」

「それなら良かった。星達は、俺を孫策に紹介した後はどうするんだ？」

「当初の予定通り、曹操に会いに行こうと思っている」

「なら明日で御別れだな」

「そうですねー。でもまあ今生の別れというわけでもないですし、あんまり暗くなるのもアレなんで、お酒でも飲んで楽しい夕食にしましょう」

「ちょっと、風！？」

「そうだな」

「紫苑殿まで…」

「まあ良いではないか、稟。しんみりと過ごすよりはマシだろう」

「…はあ、分かりました。明日の行動に支障がでてでも知りませんか
らね？」

「分かっておる。まあもしそうなたら紫苑と一緒に居られる時間
が増えたと思えば良からう」

「星、稟。二人で喋ってないで一緒に飲もうぜ」

「うむ。ほら稟も」

「分かりましたから引つ張らないで下さい」

こうして夜遅くまで四人で呑み明かした。

ちなみに、

風と稟は結局酔っ払って寝てしまい、風を星が、稟を俺が背負って
帰ったのだが、途中で稟が目覚ましてしまった。

てつきり、また鼻血をぶっかけられるのかな？とか思ったのだが、
そんな事は無かった。

どうやら酔うと妄想力が弱まるか、妄想しても脳がそこまで興奮し
ないみたいだ。

ただし、宿に戻るまで絡まれ続けたが…。

第6話〽風・稟との勉強会〽（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

今さつき（2011年2月5日7時22分）気付きましたが、キーワードの√未定がそのままになってましたね。

前話だか前々話だか投稿時に涼√に直したと思ってたのですが、どうやら直してなかったようです。

というわけで、まあキーワードの√未定を涼√に修正しました。

- - - - -

宝慧の慧の字が原作と違いますが、携帯だと出ないので代用してます。

三国志の時代の中国に蓮根や緑茶ってあるのかな？

- - - - -

小説タイトルを変更しようかどうか悩み中です。

具体的には〽黒き刃〽から〽黒き雷〽or〽黒き霆〽（クロキイカズチ）へ。

実は投稿し始める先日ぐらいいまで、主人公の名字は今現在の名字と違っていたんです。

元々は、某探偵漫画に出てくる多彩な芸術家の名字を改変したものであったんですが、“小説家になろう”で恋姫の二次創作小説を書いている他の作家さんの名前と被っていたんですね。

で、ありふれた名字じゃないし一緒なのはアレかなーと思い、投稿直前まで一週間ぐらい悩んで考え付いた名字が“黒霊院”なんです。

ちなみに黒霊院という名字は、主人公の名前を“紫苑”とした理由で挙げた漫画家さんの別の作品の綺麗な金髪ロングウェーブ御姉様の剣術の技名と、某二人組の主人公が活躍する絵が非常に綺麗な（自分的には今まで見た中では一番）漫画の最終章に登場する系使いの敵キャラの名字とを合体させたものです。

で、“黒き刃”というのは作品中において主人公の通り名的なものになる予定なのです。

主人公が黒い髪で黒い服を纏い黒い刀を持っている事から“黒き刃”にしたんです。

が、最近になって、“名字と掛けて“黒き雷”とか“黒き霊”の方が良いかな？”と思い始めたんです。

「だから何？」って言われたらそれまでなんですが…。

まあ何が言いたいかと言うと、「小説タイトルが変わるかもしれないよー」と言う事です。

はい、それだけの為に長々と要らん事を書いてしまつてすみません。

仕事帰りに外食（週二ぐらいかな？後は自炊）しようとする時に、
仕事場の最寄り駅から自宅の最寄り駅まで三十分ぐらい、携帯で小説を書きつつ何処で何を食べようか思案する優柔不断な作者なので
…。

- - - - -

現在の執筆状況：

第7話〜第8話↓投稿可能

第9話↓六割

第10話↓六割

第11話↓三割

第X話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

……モロキューでアボカドなピーマン野郎な作者ですいません。

2月10日にテイルズのマイソロ3を買ったら更に執筆速度が落ち
そうです。

頑張らんとシルヴァラント。

次回の更新は2011年2月12日の予定です。

第7話　出逢い別れ手合わせし猛獣に襲われる（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

風と勉強会

←

稟と勉強会

←

お別れ会

第7話　出逢い別れ手合わせし猛獣に襲われる

「大きいな」

俺達四人は孫策がいる街へ到着し、孫策が居る館の前まで来た。

時間的には正午ぐらい。

「うむ。今は袁術の客将に甘んじているとはいえ、本来ならあの様な小娘の元に居る様な人物では無い。孫策殿の母君の孫堅殿は、この辺りでは有名で実力もある方だったし、これぐらいの大きさの館を持っているのは当然と言えよう」

「へ」

「孫堅殿亡き後、精強で名高い孫家の軍を己の配下に都合良く組み込めたと袁術は思っているだろうが、いつまでも猿が虎を飼う事など出来ぬ。王朝では宦官が好き勝手やっており、官匪の圧政や盗賊の横行などが多く見受けられるようになった。恐らく、近い将来に戦乱が起こるだろう。時期が来れば袁術から独立すると孫策殿は言っていた」

「成る程ねえ」

「丁度良い事に顔見知りの者が門番をしているな」

星が門番に近づいていく。

「久しいな、門番殿」

「趙雲殿！？久しぶりですな！一体どうされたのですか？エン州へ向かわれたと人伝で聞いたのですが…」

「少し孫策殿に用事が出来てな」

そう言つて、門番の方を向いたまま親指で此方を指差す星。

「郭嘉殿と程立殿も一緒ですか。一人、知らない少年がいますな」

「用事というのは、あの少年の事だ。孫策殿に紹介したくてな。すまぬが、“趙雲・程立・郭嘉の三人が、孫策殿に会わせたい人物がいるので御目通り願えないか訪ねてきた”と孫策殿に伝えてくれぬか？」

「分かりました。少々お待ち下さい」

・
・
・

暫くすると門番が戻ってきた。

門番の後ろから三人の女性が歩いてくる。

一人は桃色の髪を持つ女性。

一人は黒髪で眼鏡を掛けているの女性。

一人は銀髪の女性。

三人共、物凄くスタイルが良い。

「久しぶりね。趙雲に程立に郭嘉。うちに仕官してくれる気になったのかしら？」

「残念ながら、そういうわけではござらん。門番殿にも御伝えしたが紹介したい人物がいてな」

「それだけの為に戻ってきたの？」

「ふむ。まあ、そういう事になるな」

「ふうん……。まあいいわ。で？紹介したい人物っていうのは、趙雲の後ろにいる黒髪・黒服の少年の事かな？」

「うむ」

「初めまして。私の名は黒霆院紫苑です。以後、お見知りおきを」

「……………」

挨拶したのに返事も無く、無言のままジロジロ見られているんだが……。

《ヒュンッ》

「！？」

《ガキイイイン》

「……随分と情熱的な挨拶じゃねえか」

いきなり首筋目掛けて斬りかかってきやがった。

「へえ。今を防ぐんだ。やるじゃない」

「そりやどうも。まっ、アンタが俺の首をはねるつもりで剣を振り抜いていたなら、防げたかどうか分からないがな」

まあ刀が間に合わなくても氣で防御してたけどな。

「！……成る程ねえ。捻くれた趙雲が態々、私に紹介する為だけに戻ってきたのも頷けるわ」

「失礼な。誰が捻くれていると？」

「星ですね」

「星ちゃんですねー」

「星だな」

稟・風・俺の三人が声を揃えて言う。

「連れの三人からも同じ認識みたいだけど？」

「むう」

「それよりも挨拶が遅れたわね。私は孫伯符。この館の主よ。よろしくね」

「儂の名は黄公覆と言う。以後、見知りおけ」

「私は周公謹と言う。よろしくする必要があるかどうかは、この後、決めさせてもらおう」

「も、冥琳は真面目すぎよ。大丈夫。この少年と仲良くする事は私達にとって有益になる事よ。私の勘がそう告げているの」

「あなたの勘の良さは認めるわ。だけど、まだその少年の事は殆ど分かっていない。分かっているのは腕が立つ事ぐらい。警戒するのは当たり前だろう？」

「冥琳の頭デッカチ。ホントに理屈っぽいんだから」

「それこそ軍師の性という奴だな。理と論を思考の中心に据えるのが軍師というものだ」

「まあ、ひとまず冥琳の事は置いておいて、え」と

「紫苑だ。黒霆院紫苑。姓が黒霆院で名が紫苑。字と真名は無い」

周瑜と黄蓋も女性か…。

「字も真名も無い？……変わってるわね。まあ、いいわ。着いてらっしゃい。趙雲達はどうするの？」

「先日伝えた通り、エン州の陳留に居る曹操殿に会いに行く。そういうわけなので、我等はそろそろ行かせてもらう。孫策殿、紫苑の事をよろしく頼みますぞ。それでは」

「いずれ、また何処かで会う事もありましょう。皆様お元気で」

「みなさん、お元気で」

「ああ。またな、星、稟、風」

そうして星達は雑踏の中へと消えていった。

「随分あっさりした別れの挨拶ね。良かったの？」

「ああ。別れの挨拶は昨日の内にちゃんと済ましといたからな」

「そう。此方よ。着いてらっしゃい」

「分かった」

孫策と周瑜の後に着いていく。

黄蓋は俺の後ろに居る。

一挙手一投足、監視しているようだ。

弓と矢筒を持っていたし、不審な動きを見せたら射抜かれそうだな。

まあ別に何かするつもりはないけど。

試しに刀の柄に手を伸ばしてみるか？

…いや、やめておこう。

射抜かれたりしたら洒落にならん。

などと考えていると、

「雪蓮？何処へ行くつもりだ？そっちは客室ではなく中庭へ続く道だぞ？」

「中庭へ行くのよ」

「は？一体何をしに……」

「決まってるでしょ？改めて少年と手合わせするのよ」

「……はあ。雪蓮、あなたって人は……」

「策殿の悪い癖が出おったか……」

「なにより、別に良いじゃないの。冥琳だって祭だって、少年の實力は気になるでしょ？」

「それはそうだが……」

「そう言われれば、そうじゃが……」

「でしょ」

「…仕方ないわね。少年、そういうわけだから伯符と手合わせをしてもらっても構わぬか？」

「ああ。別に問題無い」

「決まりね。じゃあ、さつさと中庭へ行きましょう」

そういつて鼻唄混じりで歩き出す孫策。

「なあ周瑜」

「何だ？」

「孫策は随分と上機嫌だな」

「そうだな（チラッ）」

「……（コクッ）」

「まあ袁術に扱き使われて鬱憤が溜まっていた所に、それを解消出来そうな者が現れたからだろう。趙雲とも良く手合わせしていたしな」

「そうか。……今、黄蓋に目配せしたのは袁術の手の者が近くにいないかどうかの確認か？」

「……ほう。趙雲達三人から我等の事情は聞いているみたいだな」

周瑜の鋭い視線が俺を射抜く。

「ああ。まあ袁術の配下が監視に付いているかどうかまでは聞いてないが、普通なら監視を付けるだろう。自分達より強い相手なら尚更な」

「成る程。剣の腕だけではなく頭の方も回るようだな。お前が言っ

た通り、我等を取り巻く環境は中々厳しい」

「基本的には、常に袁術の手の者の目が光っておるからのう。怪しい言動があれば逐一袁術に報告されるだろう。とは言っても、所詮は強制を張っている我儘な儒子でしかない袁術の手の者じゃ。この通り、監視の目が離れる事もある。主も部下も無能じゃからのう」

小僧？あれ？星は小娘って言ってたような…。

「袁術は男なのか？」

「いや、女じゃよ。お主より一回り幼いぐらいの容姿だ」

何故に女で小僧？

「……俺より一回り幼いぐらいの容姿の我儘で無能な女の子が何で太守になれるんだよ」

「ふむ。まあ、そこは名門の血と言う奴だな。実際に政を行っているのは、袁術腹心の部下である張勳と、名門である袁家という名に群がる有象無象共だ」

「何か大変な時期に訪ねたみたいだな」

「まだ独立する時期ではないし、そこまで大変ではない。もし此処で客将として過ごす事になったとしても、気楽に過ごせば良い。まあ伯符の相手でもしてくれれば助かる」

「分かった」

「ちよつと〜！何、三人で喋ってんのよ〜！早く手合わせするわよ！」

中庭へと先に向かい、俺達から距離が離れている孫策が大声で呼ぶ掛けてくる。

「すまん孫策！今、行く！」

星が言つてた通りの人物だな。

「つーわけだから、取り敢えず話は後でな。まあ孫策の御眼鏡に叶つたらの話だな」

「そうだな。まあ伯符のあの感じだと恐らくは気に入られるだろう」

「そうじゃな」

「は〜や〜く〜！」

はあ、困った姫様だな…。

・
・
・

というわけで、先程から孫策と手合わせをしているのだが…。

「せいっ！」

「ハアッ！」

《ガキイイン!》

「なあ孫策」

「何かしら?」

「今は手合わせの最中だよな?」

「そうよ」

「急所ばかり狙われている気がするんだが、気のせいかな?」

「狙ってんのよ」

「ソウデスカ」

何故、手合わせで急所を狙う必要があるんだ…。

「死合の最中に考え事とは随分と余裕があるのね?」

手合わせじゃないんですか?

しかも“仕合”じゃなくて“死合”って言われた様な気がしたんだが…。

「いやいや、結構ギリギリだぜ?」

「良く言うわよ。此方の攻撃を全て防いでおいて」

「ハハハ…」

防がなきゃ死ぬからな。

此方だって本当にギリギリなんだ。

攻撃の速度は星ほどではないが一撃の重さは孫策の方が上。

しかも、急所に“当てるつもり”で攻撃してきてるからな。

一瞬も油断出来ない。

「……私はね、貴方の本気が見たいの。貴方は未だ力を隠している。だから追い込んで追い込んで本気を出させてあげるの。分かった？」

「買い被りすぎだって…」

「買い被りかどうかは、その内、分かるわ……よっ！」

《ガキーン！》

「つと、危ねえ」

このままだと、「冗談抜きで片腕ぐらい切り落とされそうだな……仕方無い。

孫策に刀を突き付けて、手合わせを終わらせるしかないか。

とは言っても…。

「あはははははっ！このままじゃナマスになっちゃうわよーっ！」

何か危ない薬でもキメているようなハイテンションで、楽しそうに俺を殺そうとしている孫策に刀を突き付けるのは凄く難しそうだが…。

周瑜と黄蓋は頭を抱えて溜め息ついてるし…。

後、いつの間にか現れた、空色の髪で眼鏡を掛けた見知らぬ女性（孫策達三人と同じく非常にスタイルが良い）が周瑜と黄蓋の横でアハハと笑っている。

見世物じゃないんだが…。

「余所見してんじゃないわよ！」

《ガキイイーン！》

付け入る隙は、大振りな攻撃が多いつて事ぐらいだな。

孫策が俺を侮っているのか、孫策の元々の癖なのかは知らないが。

「ほらほらほらーっ！亀みたいに縮こまってんじゃないわよ！さつきから防いでばかりだけど、もう後が無いって分かってるのかしらあ！？」

孫策の言う通り、俺は中庭に面する廊下の壁際まで追い詰められていた。

「つまないわね。何か言いなさいよ」

「……………」

「……はあつ。どうやら貴方が言った通り、買い被り過ぎだったよ
うね。終わりにしてあげる。安心なさい。命までは取らないであ
げるから！」

そう言った孫策が、俺の左肩目掛けて上段から大振りな一撃を振り
下ろす。

ここだ！

「黒霆院流剣術第一手・流水……！」

《キーンツ》

「なっ……！」

孫策の攻撃を受け流し首筋に刀を突き付ける。

黒霆院流剣術第一手・流水。

相手の攻撃を受け流し此方の攻撃を当てるカウンター技だ。

どうやって受け流すかって？

自分で考える！

刀で感じ取れ！

経験を積みめ！
慣れる！

いや、冗談とかじゃなくて爺ちゃんにマジでそう言われた。

「俺の勝ちだな」

そう言って刀を鞘に収める。

孫策は茫然としている。

「予想以上だな。まさか本気ではないと言え伯符が負けるとは思わなかった」

「うむ。儂も驚いたぞ。まさか策殿が負けるとはのう……。お主本当に強いな。是非、儂とも手合わせしてもらいたいもんじゃ」

「本当ですね〜ビックリしましたよ〜。大丈夫ですか孫策様〜」

観戦していた三人が近づいてくる。

「人が生きるか死ぬかの時にアハハ〜と呑気に笑っていた此方の女性は何？」

「伯言、自己紹介せい」

「はい、黄蓋様。姓は陸、名は遜、字は伯言と言います。よろしくお願いしま〜す」

「よろしく。で、俺の扱いは結局どうなるんだ？」

「僕は気に入ったぞ。久しぶりに気骨のある若僧に出会ったわ。伯言と公謹はどうじゃ？」

「私は良いと思いますよ」

「そうですね。伯符の勘の事もありますし、私に異存はありません。後は伯符次第かと」

「ふむ。という事だ小僧」

「さっきも言ったが、俺には黒霆院紫苑と言う名前がある。小僧言うな」

「ははっ、すまんすまん。なら黒霆院で良いかの？」

「出来れば名で呼んでほしいが好きにしてくれ」

「なら紫苑と呼ぶかの」

「はあ……。黄蓋殿、まだ伯符の考えを聞いていません。勝手に話を進めないで下さい」

「そう言えばそうじゃったな。すまぬ」

「いえ。それで伯符。黒霆院の扱いはどうするんだ？」

「……………」

「伯符？」

周瑜が俯いている孫策に話し掛けるが反応が無い。

と思ったら

「来て」

「うおっ」

いきなり孫策に物凄い力で手を掴まれて引っ張られる。

「ちよっ、何処行くだよ孫策。つか爪食い込んで痛いから！」

「……………」

無視かよ！

周瑜達の方を見ると、周瑜は頭を抱えて溜め息をつき、黄蓋と陸遜はニヤニヤと楽しそうに笑っている。

「一体何なんだよ……」

そのまま孫策に引っ張られるようにして中庭を後にした。

・
・
・

「行っちゃいましたね」

「そうじゃな。良いのか冥琳？」

「何がですか？」

「雪蓮様の様子を察するに、いつものアレではないのか？」

「十中八九そうですね」

「これまでは冥琳様が御相手されてたんですよ。良いんですか？」

「ふっ…別に良いも悪いも無いさ。こんな事で雪蓮と私の関係が変わる訳でもあるまい。雪蓮の中の何かが黒霊院に魅かれたのだろう。本気でないとは言え、今まで雪蓮を負かした男など居なかったからな」

「そうか」

「まあ黒霊院が無事に戻って来れるよう祈りましょう。私は仕事に戻ります。穏、手伝いなさい」

「はあゝい」

「祭殿は念の為、腕の立つ女性兵士数人と共に、雪蓮の部屋の隣部屋で待機してして下さい。雪蓮の部屋付近には男を近づけさせないようにもして下さい」

「承った。……二人の睦事を間近で聞く事になるのか」

「念の為です。我慢して下さい」

「分かつておる」

「頼みましたよ、祭殿。行くぞ、穩」

「うむ」

「はい」

・
・
・

孫策に腕を掴まれたまま、ある部屋へと俺は連れ込まれた。

「一体何なんだよ、孫策」

「……………」

《ギュッ》

「ちよっ、孫さ…痛っ！」

ずっと背を向けたままだった孫策が此方に振り返り、近づいてきた。

そして、いきなり抱き締められた。

と思つたら、首に激痛が走る。

あれ？もしかしくなくても孫策に噛み付かれている？

俺ってそんなに美味しそうなのかな？

いや、実は孫策は吸血鬼だったりして。

なんて馬鹿な事を冷静に考えてる場合じゃないな。

深い所を噛んでいる訳じゃないから、殺すつもりでやっているんじゃないと思うけど…。

「あの〜孫策さん？痛いんですけど？」

「……………」

無視ですか。

取り敢えず分かっている事は、孫策に首筋を噛まれている事と、孫策の身体が異常なほど熱を帯びている事。

一種の興奮状態みたいなものかな？

取り敢えず頭でも撫でてみるか。

これで落ち着いてくれたらいいんだけど…。

《ナデナデ》

「っ……………」

腕の中で孫策が小さく震える。

嫌がつてはいないみたいだから、そのまま撫で続ける。

暫くすると、孫策が噛み付いていた首筋を解放してくれた。

「はあ。一体どうし…むぐっ」

首筋を解放してくれたと思ったら、今度は唇を塞がれた。

……で、そのまま押し倒されて襲われた。

・
・
・

《チュンツチュンツ》

「はあ」

今は朝だ。

結局あのは流されるままになってしまった。

隣では孫策が申し訳なさそうな顔をしている。

「あはー…ごめんね紫苑。その、つい、ね？」

「お前は“つい”で人を襲うのか」

「やーねー、襲うだなんて人聞きが悪い」

「襲われただろ、猛獣に」

「あつ、ひつどーい！私だって誰彼構わず襲うわけじゃないんだよ？普段は冥琳しか襲わないんだから。あんな事、大切な人じゃなきゃ出来ないんだからね」

「大切な人とは出来ないのに、何で俺としてんだよ。昨日会ったばかりで会話も陸にしてないだろ。した事と言えば手合わせぐらいだし」

「んぐつ…それを言われると辛いんだけど…とにかく、何でかは知らないけど紫苑としたくなつたの！男の子とは初めてなんだからね！」

「あつそ」

「ぶーぶー。態度が素っ気ない」

「照れ隠しだよ、言わせんな。それより、俺の扱いは結局どうなるんだ？」

「ん？勿論、客将として逗留してもらうわ。なんなら正式に仕官してもらっても良いけど？」

「悪いがそれは断る。会いたい人物が他にもいるんでな」

「会いたい人物？」

「ああ。取り敢えず、曹操・劉備・董卓・馬騰・袁紹・公孫賛って

所か。最初は袁術にも会おうかと思ってたけど、趙雲や黄蓋の評価は低いし別にいいかなって思ってる」

「まあ私も袁術ちゃんに会っても時間の無駄だと思うわよ」

「やっぱり？」

「ええ。序でに袁紹も似たようなものよ」

「そうか。孫策がそう言うなら袁紹に会う必要は無いかな…」

「……ねえ紫苑」

「何だ？」

「雪蓮って呼んで」

「孫策の真名か？」

「ええ」

「良いのか？」

「当たり前よ。既に体を重ねた仲だし、将来の旦那様になるかもしれないんだから」

「旦那様って…」

「あら？紫苑は責任取ってくれないのかしら？」

「…それを言われると何も言い返せん」

「あはは」冗談よ。あんまり深く考えないで。私は紫苑を束縛するつもりはないわ。私の事が好きじゃないなら無理に責任を取ろうとしなくてもいい。だけど、もし紫苑が私の事を少しでも気になってくれているなら、頭の片隅にでも入れといて」

「分かったよ雪蓮」

「ん」好きな男の子に真名を呼ばれるのって嬉しいわね」

「それは良かったな伯符」

「め、冥琳…いつの間に」

「たった今、お前の部屋に着いたばかりだ。取り敢えず黒霆院」

「死刑か？」

「はあ……何故そうなる。雪蓮は大人だ。雪蓮は雪蓮の意思で、お前と体を重ねたんだ。私がとやかく言う事じゃないし、ましてや法で罰則を与える様な事でもない。ただ、御苦労だったと言おうとしただけだ」

「そっか」

「ふむ。どうやら思ったよりも元気そうじゃな」

「そうですね」もっとゲッソリしていると思いました」

「黄蓋に陸遜もか」

「黒霆院。雪蓮が真名を許したようだし、我等も真名を含め改めて自己紹介しよう」

「良いのか？」

「ああ。雪蓮が認めた相手なら構わん」

「儂もじゃ」

「私もです」

「そうか」

「姓は周、名は瑜、字は公瑾、真名は冥琳だ。よろしく頼む」

「よろしく冥琳」

「話が名は黄蓋。字は広覆。真名は祭じゃ。よろしく頼むぞ」

「よろしく祭」

「姓は陸、名は遜、字は伯言、真名は穩って言います。よろしく御願いします」

「よろしく穩」

「それで雪蓮」

「何？」

「黒霆院には客将として逗留してもらったのか？」

「ええ」

「分かった。祭殿、黒霆院を客室まで案内してくれますか？」

「承った」

「私が案内しようか？」

「雪蓮は…」

「きゃんっ！」

冥琳が雪蓮の耳を引っ張る。

「私の部屋で説教よ」

「えー、何でよ？」

「ほほう。何で、とな？今更それを仰るか孫伯符殿よ」

「う……」

冥琳、目が据わっていて恐いぞ…。

「申し開きはあるかな？」

「……うう。冥琳のいけずう……」

「そうか。このまま私の部屋まで連れて行こうか？」

「そんな事されたら耳ちぎれちゃうわよ」

「なら大人しく説教を受けなさい」

「はい……」

冥琳が引つ張っていた雪蓮の耳を離す。

「穏、私が伯符を説教している間、代わりに執務室で仕事をしてくれ」

「はいはい。了解です」

「ではな黒霆院、また後で話をしよう」

「分かった」

「また後でね紫苑」

「ああ」

「ではでは、失礼しますね紫苑さん」

「ああ。頑張れよ」

こうして三人は部屋を出ていった。

「それでは僕らも行こうかの」

「ああ」

「つと、そうじゃ」

「何だ？」

「昨日は随分と激しかったのう」

「ちよっ…！何で」

「勿論、何かあった時の為に隣の部屋で待機しておったからじゃ」

「……………」

それは何て言うか精神的なダメージがデカいんですけど…。

「はっはっはっ。細かい事は気にするな。ほれ、行くぞ」

「……………了解」

退屈しない日々が待ってそうだな…。

第7話↓出逢い別れ手合わせし猛獣に襲われる↓（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

あれ？雪蓮様がツンデレもどきに…。

まあ原作でもそんな感じのシーンあったし、問題無い……よね？

- - - - -

現在の執筆状況：

第8話↓第9話↓投稿可能

第10話↓六割

第11話↓三割

第X A 話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第X B 話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第X C 話↓七割程度

マイソロ3が楽しみです。

執筆速度がスロウリイになりそう…。

だってばよ！な忍者の初期得意忍術が使えるようになりたい…。

次回の更新は2011年2月19日の予定です。

第8話　冥琳の手伝い、穂の暴走（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

孫策達と出会う

←

孫策と手合わせ

←

孫策に襲われる

第8話　冥琳の手伝い、穂の暴走

10:17。

この世界に来る前にバッグに入れ、その後すっかり存在を忘れ去られていたソーラー充電式腕時計に表示されている時刻だ。

今は執務中の冥琳の補佐中。

朝、廊下で冥琳と出会った時に読み書きが出来るか聞かれ、出来ると言った所、「なら手伝え」と言われ執務室まで連れてこられた。

まあ、補佐と言っても客将扱いなので重要なものをやらせて貰っているわけではなく、冥琳の仕事に必要な事柄を資料の中から抜き出して竹簡に書くだけの簡単な仕事なのだが。

「出来たぞ、冥琳」

書き写し終わった竹簡を冥琳に渡す。

「ん、ありがとう」

冥琳は先程俺が渡した竹簡を見ながら仕事をしている。

「なあ冥琳」

「何だ？」

「俺が書いた竹簡、見辛かったり、字が間違ってたりにないか？」

「いや、そんな事はないぞ？字は綺麗だし、誤字・脱字も殆ど無い。知りたい事は分かりやすく纏められているし、十分及第点を付けられる出来だ」

「そりゃ良かった。何せ読み書きを習い始めたのが、え〜と、十日前からだからな」

と、俺の言葉を聞くと同時に冥琳の動きが止まり、顔を上げ眉間に皺を寄せながら俺の顔を見てくる。

「今、何と言った？“そりゃ良かった”と言った後だ」

「何せ読み書きを習い始めたのが十日前からだからな」

「読み書きを習い始めてから十日簡しか経っていないだ？」

「ああ。十日前に星…じゃなくて趙雲達三人と出会って、まあ、その日の内に風…じゃなくて程立から読み書きを教えてもらう事になつて、それから此処に着くまでの七日間、風と稟…じゃなくて程立と郭嘉に交代で教えてもらってた」

真名と姓名を相手によって使い分けるの面倒だな…。

「……そうか」

「……何だよ冥琳、此方をじつと見て」

「いや、驚くべき速さだと思ってな思ってたな」

「……えーと、感心している所を悪いんだが、別に一から習ったっていうわけじゃないぞ？俺の住んでいた国の字とそれなりに似ていたから、比較的早く覚える事が出来ただけだから」

「お前の国の字？そういえば、お前は字も真名も無いと言っていたが別の国の出身なのか？」

「ああ」

「ならば聞くが、お前の国は何処にあるのだ？」

「冥琳は海って分かるか？」

「ああ、勿論だ」

「この国の東にある海を渡った先にある倭という国が俺の生まれた国だ」

まあ、時代は違っけどな…。

「ふむ。東方…と言えば、遙か昔に徐福が向かったとされる蓬莱の事か？」

「徐福？あー…そっぴやそんな奴が来たって逸話があったような気がする」

「お前はどっやって、この国に来たんだ？」

「えーと、船で海を渡って」

「一人でか？」

「ああ」

「……手漕ぎの船か？」

「無理。死ぬから」

「だろうな」

分かってるなら聞くなよ。

「この国にもあるような普通の帆船だよ。一人でも操作出来るような小さいやつだけだな」

「どうして、この国に来たんだ？」

「別に何か目的があつて来た訳じゃないよ。暇な日常に飽きたんで刺激が欲しかったんだ。で、どうせなら他の奴が真似出来ような事をしようと思つてな。海を渡った先に別の国があるって聞いて、じゃあ行つてみるかって感じで海を渡つて来た。まあ無事に着くかどうかは一種の賭けみたいなものだったかな」

「ふむ……」

完全に納得は出してないって感じの表情だな。

まあ未来から神様に飛ばされて来たなんて言えないしな。

言つた所で信じて貰えないだろうし、下手したら狂人扱いされそう

だしな。

「まあ良いだろう。次の質問だが、お前の国の字というのはどういうものだ？」

「平仮名・片仮名・漢字っていうので構成されている。漢字っていうのが、この国で使われているのと同じ様な感じの字だ。まあ漢字っていうのは、この国から伝わって来たのが元になっているから、当たり前と言ったら当たり前なんだけども。取り敢えず、平仮名と片仮名はこう書く」

竹簡に平仮名五十音と片仮名五十音をスラスラーっと表の様に書いて冥琳に見せてみる。

各字には（この国の）漢数字を振っておいた。

「此方の表と此方の表で同じ漢数字が振ってあるのは同じ読みな。これらと漢字を組み合わせたのが俺の国の字だ。流石に漢字の方は数が多いから省くけど」

序でに、数字と英字も説明が面倒になるから省略。

「ほう…」

冥琳が興味深げに竹簡を見ている。

「まあコレに関しては後日詳しく聞くとして、お前はどうかやって読み書きを覚えたんだ？両親から習ったのか、私塾に通って習ったのか、書物を読んで独学で学んだのか」

「いや、普通に学校で習ったけど」

「“がつこう”とは何だ？」

そっぴゃ、この時代には学校つて無かつたんだっけ。

竹簡に“学校”と書いて冥琳に見せる。

「分かりやすく言えば、国が運営している私塾かな。ある年齢からある年齢までの一定期間、子供達に義務として学校に通わせ、同年齢の子供達を学年という単位で分けて、学年毎に同じ内容の勉強を教えるんだ。まあ“学校に行く義務”が子供にあるわけじゃなくて“学校に行かせる義務”が親にあるんだけどな」

「成る程。それは効率の良いやり方だな」

「確かにそうだな。学校があるお陰で子供から大人まで殆どの人が読み書き出来るんだしな」

「それは驚きだな。この国では庶民はおろか將軍の中にさえ読み書きが覚束無い者が多いのに…」

目を見張りながら、興奮気味に呟く。

こんな表情の冥琳は初めてみたな。

「まあ、勉強を教える人の費用や勉強をさせる場所の費用なんかの問題もあるけどな」

「その費用はどうやって調達しているのだ？」

「住民税とかの税金だよ。まあ子供は国全体で育てるって考え方だな」

「……ふむ。この国で学校という制度を導入するのは難しそうだな。民の反発を招くだろう」

「この国じゃ自分達が食べていくだけで精一杯って人も多いだろうからな」

「そういう事だ。それに農家の子供とかは無理だろうし……」

「子供が学校に通っている間、兵を手伝いに行かせるのはどうだ？」

「兵か……しかし、それだと戦が起きた場合は手伝いに行かせられなくなるが……」

「街の治安警備って軍が担当してるんだよな？」

「ああ」

「戦から切り離して雇う事は出来ないか？治安維持の為だけの兵みたいなの」

「ふむ……雇用を生み出すのにも有効だし出来なくは無いが……」

「俺の国じゃ治安維持の為の組織を警察って言っただけど、治安維持の傍らに農家の手伝いみたいなのは無理かな？」

「……学校の事も含め現段階では何とも言えんな。私だけで進めら

れる話ではないし。だが発想としては悪くないな。学校は国全体の民度の向上に繋がるし、“けいさつ”とやらは雇用の創出や治安向上にも繋がる。考える余地は十分あるな」

「冥琳にそう言ってもらえるなら嬉しいよ」

「お前の国は柔軟な考え方を持っているな。他にも色々話を聞きたいのだが構わないか？」

「ああ。俺で話せる事なら」

「そうか。ならまず」

こうして執務をしつつ、俺の国について冥琳と話し始めた。

・
・
・

「ふう。少し喋り疲れたかな」

「太陽の位置から察するに、あれから一刻程は話したか。すまなかつたな紫苑。長々と喋らせてしまって」

「気にすんなって。それより腹が減ったな」

今現在の時刻は12:45。

丁度お昼時だ。

「そつだな。食堂に食べに行くか」

「ああ」

「そつだ、紫苑」

「何だ？」

「食事を終えてからでいいから、この竹簡に書かれた書物を倉から探して来てくれないか？」

「ああ、構わないぜ。城を出て練兵場の方へ向かうと右手にある所だよな？」

「そつだ」

「了解。任せてくれ。」

「助かる。では行こうか」

「おう」

・
・
・

てな訳で食事を終えた俺は倉へと資料を探しに来た。

持つて行く資料の冊数は少ないが、倉には思ったよりも書物があるって探すのに苦労した。

四半刻程掛かって、ようやく残り半分になった。

残り半分は呉孫子兵法八十二篇の九地篇が数冊。

これ孫子の兵法書か。

冥琳なら頭の中に入ってそうな気もするけど、まあ必要な部分だけ抜き出して新人の武官や軍師にでも見せるんだろう。

さて、と。

何処にあるかな。

これか？

【江賊王に俺はなる！】

違った。

何処の麦わら帽子ですか？

えーと、これか？

【海虎】

違った。

パラパラと捲ってみる。

内容は、何処ぞの船衝突映像を流出させた人の職業を題材にした映画と似たような感じだった。

こっちなかな？

【熊猫号】

違った。

パラパラと捲ってみる。

内容は、熊猫号という船に乗っていた若者二人のラブロマンスを描いたものようだ。

船は沈没し、二人の若者も死ぬみたいだ。

どっかで見た事あるな…。

何か海に関係するものが多い。

まあ、らしいと言えbraしいが。

最後が中々見つからない…コレか？

【つるぺた天下統一伝】

違った。

パラパラと捲ってみる。

………《パタン》

艶本でした。

次だ次。

えーと、これは…、おっ、当たり。

よし、これで全部だな。

冥琳の所へ持っていくか。

・
・
・

結構量があるから重いし、前が見えづらい…。

つと、曲がり角か。

「きゃっ
」

「うおっ！？」

《ドサドサドサッ》

「悪い大丈夫か？」

誰かとぶつかってしまい、その拍子に書物を落としてしまった。

「いたた……大丈夫ですよ。お尻を強く打っただけですから。あら？紫苑さんじゃないですか」

誰かと思ったら穩だった。

「穩か。悪かったな。冥琳に頼まれて倉から書物を運んでいる途中だったんが、量が多くて視界が遮られてしまっただけじゃなかった」

「倉からですか？」

「ああ」

「そうですか……ん？ふほおおおおっ！？」

「！？」

何だ今の声！？

普段の穩からは想像も出来ない様な声だったんだが…。

「こ、これは……！呉孫子兵法八十二篇！」

「どうしたんだ、穩？」

「……じゅるりっ」

じゅるりっ……？

「くん、くんくん……はふう」

何か、くねくねしだしたんだが…。

「……はっ！？し、紫苑さん！早く、その本を私の目の届かない所に隠して下さい！」

「へ？」

「早く！」

「わ、分かった」

何なんだよ一体…。

取り敢えず、落ちた書物を拾って重ねて先程の様に持ったけど…。

「なああああゝゝゝにつ何でもないような顔で持ってるんですか！？全然隠れてないですよ！？」

「いや、だからどうしたんだよ？」

「ほふうう…はあ…はあ…私に見えないように御持ち下さい。でなければ、私…そろそろ自分を抑えられなくなりそうです」

「意味が分からないんだが…」

「もう……駄目です……」

「穏？」

ゆらあり、と穏が立ち上がる。

「……ウフフフフフ」

「の、穩さん？」

何か笑い方が怖いんですけど…。

「……アハハハハハハ」

「穩さん？何故に紫燕（穩愛用の九節棍）を構えているのでしょうか？」

「つか、今何処から出したんだ？」

「紫苑さ〜ん。そこを動かないで下さいね〜？」

「何で……」

《ブオンッ！》

「危なっ…！」

「ウフフフフ……何で避けるんですか〜？」

「避けなきゃ当たるだろ！？」

「当たって下さいよ〜」

「いやいや、何を言ってるんですか、穩さん？」

「大丈夫ですよ、メキヨツとなるだけですから」

聞いちゃいねえ…。

「つか、メキヨツって何だよ、メキヨツって。」

「大人しく、その御本ちゃんを渡して下さい」

本？

まさか、貴方も雪蓮と同じ様な特殊な性癖持ちですか、穩さん？

「やあああああ！」

仕方無い……氣絶させるか。

・
・
・

やっところさ、冥琳が居る執務室に辿り着いた。

何か疲れた…。

「冥琳、居るかー？」

「ああ、居るぞ」

「両手が資料で塞がっているんだ。悪いが扉を開けてもらって良いか？」

「分かった。今開ける」

《ギイツ》

「ありがとう」

持ってきた資料を机の上に置く。

「思ったよりも時間が掛かったな」

「すまん。何処に何があるか分からなくてな。探すのに手間取った。それに……………」

「それに何だ？…………お前、やけに疲れた様な顔をしているな」

「…………穩に襲われた」

「穩に？」

「ああ。曲がり角で穩とぶつかって書物を落としてしまったんだ。で、良く分からんが孫子の兵法書を見た穩が興奮しだしてな。俺が持っていた孫子の兵法書を奪い取ろうと襲って来たんだ」

「…………そうか。災難だったな」

「冥琳は知っているみたいだな。アレは何なんだ？」

「穩は知的快樂や興奮が性的興奮に繋がるという性癖を持っていたな。一度目覚めれば昏倒でもさせねば収まらぬ」

「やっぱりか……」

「しかも、穩自身にもどうしようもないという厄介極まりないものだ。だから倉にも入らないように言っておいたのだが、まさか、この様な形では……：そういうば、穩はどうしたんだ？」

「冥琳が言った通り、落ち着いてくれそうもなかったんで氣絶させたよ。で、通り掛かった侍女に穩の部屋まで運んでもらった」

「そうか。世話を掛けたな……」

「いや、まあ、うん……」

「しかし、襲いかかるとはな……：普段は頑張つて自制していた筈なんだが我慢させすぎたか……とにかくすまなかったな黒霆院。今日の所は、もう手伝わなくて構わないぞ。雪蓮の相手でもしてやってくれ」

「分かった。手伝いが必要なら、いつでも呼んでくれ」

「ああ。また頼む」

さてと、取り敢えず穩の様子でも見に行くか。

・
・
・

《コンッコンッ》

「おゝい、穩。居るか？」

穩の部屋の扉をノックしてみる。

「紫苑さんですか？開いてますので、どうぞ」

「じゃ、失礼します」

部屋に入ると、穩が机にグテーツと覆い被さっていた。

「さつきは悪かったな。大丈夫か？」

「いえいえ、此方こそすみませんでした。つい暴走してしまって…
特に怪我とかもしてないので、ご心配なく」

「そうか。そりゃ良かった。まあ性癖については冥琳から聞いたし、
さつきのは気にすんな。」

「そう言って頂けると有難いです」

「じゃあ俺は行くぜ？冥琳から雪蓮の御守りを頼まれたんでな」

「雪蓮様……そう言えば、紫苑さんは雪蓮様と関係を御持ちになられたんですよね？」

「ああ」

「……………！ピーンと来ました！」

「何が？」

「紫苑さんが私の性欲を満たしてくれれば、きっと冥琳様も本を読む事を許可してくれはすです！」

「はっ？」

「というわけで、私の事も雪蓮様のように抱いて下さい！私、紫苑さんの事嫌いじゃないですし！」

「何で！？」

「さあ！さあ！」

ヤバい………穩の目が血走ってる………。

取り敢えず……

「逃げるが勝ち！」

脱兎の如く駆け出した。

「あゝ待って下さいー！」

「待てるか！」

俺を追ってきた穩との鬼ごっこは、騒ぎを聞き付けた冥琳が駆け付け、穩を説教するまで続いた。

第8話〜冥琳の手伝い、穩の暴走〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

穩の武器（というか一部の恋姫キャラの武器）の名前って何が出典なんだろう？

wikipediaを見ると、見たことないやつが結構…。

アニメかな？

ゲームだと一部しか出てない気がする…。

雪蓮の南海霸王（剣）

なんかはゲームで見たことあるけど、

冥琳の白虎九尾（鞭）

穩の紫燕（九節根）

なんかは見たことないんだよね…。

- - - - -

現在の執筆状況：

第9話↓投稿可能

第10話↓六割

第11話↓三割

第X A話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第X B話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第X C話↓七割程度

全然進んでないって？

はい、予想通りマイソロ3に夢中で全く手を付けていません… 〇

r z

一応クリアしたんで今日辺りからは執筆活動に時間を割きます。

（モンスター図鑑埋めたり、装備図鑑埋めたり、称号集めたり、スキット集めたり、レディアント装備集めたり、ユニーク装備集めたり、闘技場制覇したり、裏ダンジョンのボス倒したり、「ほう…グミなら僕も持つてるよ」×4を倒したりetc…色々残ってますが、ノロノロ進める予定）

…が、2月24日にはGジェネの最新作が…。

まあそちらは元々ゆっくり進める予定なので執筆活動に影響は無いはずです。

たぶん…。

次回の更新は2011年2月26日の予定です。

第9話　弓比べ、マジギレ、ゴスロリ（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

冥琳の政務の手伝いをする

← 冥琳の頼みで倉に書物を取りに行く

← 執務室へ戻る途中で穩と鉢合わせ

← 書物に興奮した穩に襲われる

← 穩を気絶させて無事執務室へ戻る

← 冥琳から穩の性癖について聞かされる

← 穩の様子を見に行く

← 再び襲われそうになったので逃げる

← 逃げてる途中で救世主（冥琳）が表れ鬼（穩）は説教を受ける事になる

第9話　弓比べ、マジギレ、ゴスロリ

《カンッ》

「……………」

《カンッ》

只今、練兵場で弓の練習中。

黒霆院流古武術。

これが俺が爺ちゃんから受け継いだ流派の正式名称。

剣術・弓術・体術・馬術から構成されている。

剣術には槍術や薙刀術、弓術には投剣術や砲術、体術には柔術や合気道も含まれている。

合気道は爺ちゃんが取り入れたものだけど。

馬術や砲術は習っていない。

現代日本じゃ、その辺で適当に練習するわけにもいかなかったからな。

《カンッ》

で、まあ当然の事ながら、弓は此方の世界では当たり前のように戦で

使われている。

なので、久しぶりに練習でもしようかと思ったのだ。

桜との修行では弓の練習は一切しなかったから、約一年振りぐらいか。

腕が落ちてないか心配していたが杞憂だった。

《カンッ》

距離は目測で三十メートル程。

何処かで聞いた話によると、それなりの練習を積んだ者で、大体三十メートルぐらいまでが急所を狙える距離、大体四十メートルぐらいまでが人を狙える距離、大体八十メートルぐらいまでが騎馬を狙える距離らしい。

勿論、静止状態での話だ。

《カンッ》

まあ、このぐらいの距離で静止状態から射るなら、まず外さない。

《カンッ》

……もう少し距離伸ばすか。

そう思い、的から離れようと歩き始めると……

「中々の腕前じゃのう」

「祭か。仕事はどうしたんだ？」

少し前から距離を取って見ていた祭が、傍まで来て声を掛けてきた。

「今日は非番じゃ。で、少しぶらぶらしておつたら、矢が的に当たる音が聞こえてきてのう。誰が矢を射っているのか気になって見に来たんじゃ」

「そうか」

「紫苑は剣や弓の扱いを誰に習ったのじゃ？」

「母方の爺ちゃんだ。もう死んじゃったけどな」

「そうか……余計な事を聞いたのう。すまんかった」

「気にするな」

「もう練習は止めるのか？」

「いや、距離を伸ばそうと思ってな」

「ほう。どれぐらいの距離までなら、あの的に当てられる」

「的の直径は三十センチメートル程。」

「百メートルぐらいなら当てられると思うが」

まあ、それだけの修練は重ねている。

「めーとる?」

そついやメートルって単位は通じないのか。

「えーと、四十丈ぐらいだ」

一丈は二メートル四十二センチぐらいだったはず。

「ほう、その距離でも当てられるか。………のう、紫苑」

「何だ?」

「儂と勝負せんか?」

「勝負?」

「うむ。勝負と言っても、ある距離から交互に撃ち合って先に外した方が負けという単純なものじゃ」

「別に良いけど、その魂胆は何だ?」

「むつ、ばれおったか。何、大した事ではない。負けた方が勝った方に食事を奢るだけじゃ。どうじゃ?」

「食事じゃなくて酒だろ?」

「そつとも言つな」

「祭は本当に酒が好きだな」

「当たり前じゃ。酒は人生の伴侶とも言つべきものじゃ。この世から酒が無くなったら死ぬる自信があるわ」

「あつそ」

「で、どうするのじゃ？勝負を受けるのか受けないのか」

祭の弓の腕は先日見せてもらったけど、俺よりも上だ。

正直、勝てるとは思わないが暇潰しにはなるだろう。

「分かった。勝負を受けよう」

「よし、そうこなくてはな。勝負の規則と距離はどうする？」

「そうだな……交互に矢を放っていつて外したら負け。始めは三十丈（約七十三メートル）ぐらいの距離からで、お互い十本ずつ矢を放ち終えたら四丈（約十メートル）ぐらいずつ距離を伸ばす。こんな感じでどうだ？」

「ふむ。まあ良いじやろう」

「いきなり三十丈の距離が無理なら練習時間でも設けるか？」

「ふん。馬鹿にするでないわ小僧が。それぐらいの距離なら寝てても当てれるわい」

「……祭の弓の腕前は知ってるけど、流石にそれは無理じゃない？」

「……そうじゃのう。見栄を張りすぎた。とにかく三十丈から構わん。さっさと始めるぞ」

「言つとくが負ける気は全く無えからな」

「儂だつてそうじゃ。ただ酒が飲める良い機会なんじゃからな」

「なら早速始めるか」

「応！」

・
・
・

「《ゴクッゴクッゴクッ》ぷはー。昼間っから飲む酒は格別じゃのう」

「そりゃあ、ただ酒なら美味いだろうよ……」

結局、俺は祭に負けた。

五十丈（約百二十一メートル）の距離からの四本目を外した。

祭は五十丈の距離からでも、ほぼ的の中心に当てていた。

流石は年の功と言ったところか。

「……………お主、今、儂に対して失礼な事を考えなかったか？」

ジロリと睨まれる。

「いえ、滅相もない」

祭の目をジッと見つめ返す。

「……まあ良からう。ほれ、お主も飲め」

危なかった……祭は読心術の心得でもあるのか？

「まあ結局払うのは俺なんだけどな」

「細かいわね。男ならドーン！と構えてなさいよ」

「そして雪蓮さん。何故貴方が此所にいるんですか？」

「此所にお酒があるからよ」

「仕事は？」

「このお酒、美味しいわ」

またサボったんだな。

「ほらほら、注いであげるから紫苑も飲みなさいよ」

「後で冥琳に怒られても知らないからな」

「大丈夫、大丈夫」

随分と上機嫌だな。

既に出来上がってるのか？

まあ仕方無いから付き合おうか。

「なら、有り難く頂きます」

お猪口に注いでもらい一口飲む。

「《ブッ！》ゲホッゲホッ」

「きゃっ！？」

「どうした？」

アルコールがキツいんだが…。

「これ蒸留酒か？」

「うむ。白乾児^{バイカール}じゃ」

「二人とも、これをグビグビ飲んでたのかよ……」

「何じゃ、情けないのう、これしきの酒が飲めぬのか」

「悪かったな」

「紫苑は、お酒嫌い？」

「嫌いも何も、この国に来るまで酒なんか飲んだ事なかったからな」

「紫苑の国には、お酒ないの？」

「あるけど、俺の年齢じゃ法律に違反するから飲めなかったんだよ。まあ実際の所は罰則が適用される事は少ないから飲もうと思えば飲めるけどな」

「ふ〜ん。紫苑の国には、どんなお酒があるの？」

「え〜と、日本酒とか焼酎とかビールとかワインとかウイスキーとかカクテルとか色々あるよ」

「へ〜。ねえ、どんなお酒？味は？色は？作り方は？」

「策殿」

「何よ、祭。今忙しいから後で…」

「何やら向こうの通りが騒がしいのじゃが…」

「騒がしい？」

「………がつ」

「………ものを………」

「………じち………いさん………」

「本当だ。何かあったのかしら…」

「賊、刃物、人質、爺さんって言う単語が聞こえたが…」

「……嫌な予感がするわね。祭、兵士を連れてきて。紫苑は私と一緒に来て」

「承った」

「了解」

・
・
・

騒ぎが起きている場所に向かってみると、小汚ない格好をした男が老人の首筋に短刀みたいな物を当てて、何やら叫んでいた。

「近づくんじゃねえ！近づくとジジイを殺すぞ！」

「お爺ちゃん…！」

「雪蓮、知り合いか？」

「ええ。良く世話になっている人よ。あいつ…！」

「おいっ雪蓮。何処に行くんだ？」

「助けに行くに決まってるでしょ！？」

「どうやって助けるんだよ？」

「そんなの後で考えるわよ！取り敢えず私はあの男と話をするわ。」

脅せば解放するかもしれないし」

「そんな往生際が良い様には見えないけどな……」

「とにかく私は行くから。紫苑は紫苑で何か良い方法考えて。頼んだわよ！」

「おい、雪れっ……！行っちゃった。どうすっかな？」

『……るの』

『……っ！』

『……さい』

『……！』

……男の後ろにある建物を利用するか。

・

・

・

「いつまでそうしているつもり？いい加減に人質を離しなさい」

「うるせー！離せと言われて、はいそうですかって離すわけねーだろ糞が！」

「しえ、雪蓮ちゃん……」

「お前は、この状況で人質を取ってどうするつもりだ？」

「此処から逃げるに決まってるだろ！おら、下がれ！道を開ける！

道を開けないとジジイを殺すぞ！」

「くっ……この卑怯者が……！」

「黙れ女！仲間連れてきて町人共を血祭りに上げてやる！テメーは女に生まれた事を後悔させてやるから覚悟しろよ！」

「俺の女に手を出そうとは、いい度胸してるじゃねえか」

「紫苑！」

「！？な、何だ！？体が動かねえ！？」

「武装錬氣・ストリング」

俺は今、男の後ろにある建物の屋根の上に昇って、結氣で作った糸で男を縛っている。

ちなみに“武装錬氣”って言うのは、結氣ってイマイチなネーミングだと思ったので、新しく考えてみた名称だ。

まあ、ある漫画からのパクリだけだな。

「雪蓮！男は一切身動き出来ない！今の内に人質を助ける！」

「分かった！」

雪蓮が人質になっていた爺さんを助ける。

「大丈夫、お爺ちゃん？」

「大丈夫じゃ。助かったよ雪蓮ちゃん。ありがとう」

「そう、良かった。……紫苑、礼を言うぞ。はあぁっ！」

と言って、男の首を刎ねようとする雪蓮。

「ひいっ！」

「おっと」

間一髪の所で上に引き上げる。

「紫苑！何故邪魔をする！」

「まあ落ち着けて。なあアンタ。さっき仲間がどうこう言ってたが、その仲間は何処にいるんだ？」

「教えるわけねえだろ！糞が！」

こいつ、自分が置かれている立場が分かってないのか？

「教えてくれたらアンタの命を助けてやってもいいぜ？アンタだって死にたくないだろ？別に喋んなくても良いんだぜ？兵を偵察に出して見つければいいだけの話なんだから。俺は慈悲で言ってるってやっただぜ？どうする？仲間の居場所を吐いて助かるか、仲間の居場所を吐かないで死ぬか。アンタが喋ろうが喋らまいが、お仲間はどうちみち死ぬんだ。大人しく吐いた方が良いと思うけどな」

「……ほ、本当に助けてくれるのか？」

「ああ。勿論だ」

「……す、少し時間をくれないか？考える時間が欲し……」

「却下。今すぐ決めろ。十数えてやる。数え終わる前に居場所を吐いたら助けてやる。数え終わったら首を刎ねる。十、九、八、七、六……」

「分かった！言う！言うよ！西門から南西に見える山の中だ！山の中腹に野営していて、そこに仲間が居る！」

「だそうだ、雪蓮」

「こ、これで俺は助かるんだよな！？」

「ん？ああ、勿論……」

「ほっ……」

「殺す」

「えっ……」

《ドスッ》

男の心臓を一突きする。

「嘘……つい……た……のか……」

「お前みたいな奴、生かしておけるわけないだろ？」

仲間を裏切るような奴を生かしておけるか。

例え拷問されようが殺されようが仲間を裏切るなんて有り得ない。

仲間を売るぐらいなら死んだ方がマシだ。

少なくとも、俺はそう考えている。

「……………」

「死んだか」

男の死体を下に投げ捨て、俺も飛び降りる。

「さてと、コイツの仲間の居場所も分かったし、後は兵を出してつて…何処行くんだ、雪蓮？」

「決まってるでしょ。そいつの仲間を殺しに行くのよ」

「いや、だから兵を出して…」

「行くわよ、紫苑」

「ちよつ、人の話を…」

「策殿ー！」

祭か。

「祭！こつちだ！」

「紫苑か！今行くから待っておれ！」

待つてろって言われても、雪蓮の後ろ姿がどんどん小さくなっているんだが…。

「紫苑。賊はどうした？それに策殿は…」

「祭、時間が無いから手短に話す。人質は無傷で救出。賊は殺した。この近くに賊の仲間がいる。キレてる雪蓮がそいつらを殺しに行った。俺も雪蓮の後を追う。賊の仲間が居る場所は西門から南西に見える山の中腹。つーわけで後は頼んだ。じゃっ！」

「なっ……おいっ紫苑！ええい、行ってもうた。お主！」

「はっ！」

「今の話は聞いていたな！」

「はいっ！」

「公謹に伝えい！」

「はっ！」

「他の者は賊討伐の準備じゃ。急げよ！」

『はっ！』

「（全く、策殿にも困ったもんじゃわい……まあ紫苑も後を追ったし賊程度なら問題は無いと思うが……また冥琳に説教されそうじゃの……）」

・
・
・

中々雪蓮に追い付かない。

氣の力も使って相当速く走っているんだが。

いた……！

馬使ってるし。

「雪蓮！」

「……………」

反応が無い。

と言っても無視しているわけではなく、さっきまでの鬼気迫る表情は何処に行ったやら、口をポカーンと開けてコチラを見ている。

「……………何で全力疾走させている馬と同じ速さで走れるのよ」
「ですよー」。

当然の疑問ですし、ポカーンとなるのも分かります。

馬の最高時速って、たしか時速八十キロメートルぐらいだったっけ？

平均でも六十キロメートルぐらいだったはず。

現代日本で考えれば、車道を走る車の横に同じ速さで走っている人が張り付いている事になるのか？

もしそれが夜中で白髪の婆さんだったら……怖っ！完全に怪談だな。

「氣の力だ」

「そう」

「……少しは頭に昇っていた血が降りたか？」

「ええ。紫苑の出鱈目な走力を目の当たりにしたらね」

「そりゃ良かった。雪蓮が一番偉いんだから一人で飛び出したら駄目だろ」

「じめん」

「後で冥琳の説教確定だな」

「うつ……それは嫌ね……」

「自業自得だろ。まあ此処まで来たんだ。どうせ数は少ないだろう

し、ちゃっちゃと片付けて二人仲良く冥琳の説教受けようぜ」

「ぶーぶー」

「お喋りしている間に着いたぜ？」

「そうね。ここからは徒歩で行かなきゃ」

「行くぞ、雪蓮」

「ええ」

・
・
・

「……………！」

「……………あ！」

「……………！」

山の中腹に向かって走っていると、争うような声が聞こえてきた。

「仲間割れかしら？」

「さあな。行けば分かるだろう」

声がる方へ走って行くと、一人の女性が数十人の男達と戦っていた。

「オラァ！」

「ぐはっ…！」

身の丈以上の大剣を振るっている。

黒髪・長髪・長身・褐色と冥琳に似ている容姿だ。

雰囲気的には雪蓮みたいに野生的な感じだが。

そして服装は何故か黒のゴスロリ…。

何で、この時代に……まあ世界が違うから珍しくないのかもしれないかもしれな…。

「珍しい服ね…」

珍しいのか……まあそんな事気にしても仕方がない。

「女性に加勢するぞ、雪蓮」

「分かってるわよ」

「ハアアア！」

「せい！」

「ぎゃっ…！」

「ぐえっ…！」

「何だ！？女の味方か！？」

「手伝うぜ、お嬢さん」

「アンタ達は？」

「私は孫策伯符よ」

「南陽のお偉いさんか？」

「まあそつなるわね」

「俺は黒霆院紫苑。孫策の所で世話になっている客将だ」

「余所見してんじゃ…ぐぎゃっ…！」

「余所見なんかしてねえよ、タコ！話は後だ！コイツら片付けるぞ
！」

「ああ！」

「分かったわ！」

・
・
・

で、賊は五分もしない内に全滅した。

「ふう。終わったな」

五十人ぐらいしか居なかったし、ゴスロリの彼女も雪蓮と比較して

も遜色ないぐらい強かったからな。

「手伝わせてしまつて悪かったな二人とも」

「気にしないで。私達もアイツらを殺しに来たんだから」

「そうか。自己紹介がまだだったな。俺の名は太史慈子義。旅の武人だ。実は孫策、アンタに会おうと思つて来たんだが途中で奴等に絡まれてしまつてな。話を通じないから仕方無く戦つてたんだ」

「そう。私に会いに来た理由は？」

「腕が立つと聞いて、手合わせをしたいと思つてな。後は路銀稼ぎだ」

「貴方の強さは先程の戦いからでも伺えたし歓迎するわよ？」

「そうか、助かる。なら暫くの間よろしく頼む」

「ええ。此方こそよろしく」

「お二人さん。和やかに挨拶している所を悪いんだが、そろそろ街に戻らないか？遅くなれば遅くなるほど冥琳の機嫌が悪くなつて説教が長くなると思うんだが…」

「忘れてた…。太史慈、悪いけど話は街に戻ってからで良いかしら？」

「ああ。構わない」

「よし。なら、さつさと戻ろうぜ」

「ええ」

「ああ」

こうして、太史慈という女性を引き連れ街に戻る事になった。
その後、街に戻る途中で兵を連れた祭と会い、冥琳がカンカンに怒っている事を伝えられた。

街に戻ってみると、門の前に夜叉の表情をした冥琳が仁王立ちしており、俺と雪蓮は冥琳に耳を摘まれ執務室まで連行され正座で一刻程説教を受けた。

まあ殆どは雪蓮に対しての説教だったが、気を抜いて欠伸をしてたら冥琳に白虎九尾（冥琳愛用の鞭）でシバかれた。

冥琳を怒らせてはダメ、ゼツタイ。

そう思った俺だった。

第9話〜弓比べ、マジギレ、ゴスロリ〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

“武装錬氣”はアレです。

パピ ヨンな変態が登場する漫画の題名及び登場武器からのパクリです。

星、というか華蝶仮面の仮面も多分この漫画から。
（違ってたらすみません）

そして待望のオリキャラ登場！

紫苑、桜に続き三人目の黒髪…。

そしてキャラ被り…。

まあ細かい事は気にしない方向で。

作者的には、黒髪長髪だけどストレートな感じではなくボサボサな
感じをイメージしてます。

- - - - -

現在の執筆状況：

第10話↓投稿可能

第11話↓四割

第12話↓三割

第X A 話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第X B 話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第X C 話↓七割程度

次話と次々話で一話分の予定でしたが、思ったより次話の内容が長くなったので分割。

更に言うと、12話が13話になる可能性も…。

反董卓連合編が遠退く…。

20話までには反董卓連合編に入りたい作者です。

次回の更新は2011年3月5日の予定です。

第10話 別れの宴（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

← 弓の練習をする

← 祭と飯（というか酒）を掛けて弓で勝負する

← 負けたので街へ行つて、祭に加え何故か祭に加え雪蓮にも酒を奢る

← 街中で騒ぎが起きたようなので、祭は城へ応援を呼びに行き、雪蓮と二人で騒ぎの現場へ駆け付けてみると、雪蓮の知り合いが街に入り込んだ野盗の人質になっていて、雪蓮マジギレ

← 何とかして人質を救出し、街の近くにある野盗のアジトの場所も判明

← マジギレ雪蓮が一人野盗のアジトへ向かう

← 後から来た祭に一通り説明後、雪蓮を追っ掛ける

← 雪蓮と二人で野盗のアジトへ突撃

← 先に野盗と戦っていたゴスロリ（黒）の女性と協力して野盗殲滅

← ゴスロリ女性を連れ街に戻る

← 冥琳の説教

第10話　別れの宴

「あははははっ」

「雪蓮、飲み過ぎじゃないのか？」

「良いじゃないの、別に。ねえ冥琳」

「たまにはな」

「でしょ」ほらあ、紫苑も飲みなさい。秋絃もよ」

「俺は、酒は一人で大人しく飲むのが好きなんだがな」

「何よ、暗いわね」秋絃。えーい！」

「うわっ！雪蓮、何をする！胸を揉むな！紫苑もいるんだぞ！」

「あははははっ。別に減るもんじゃないし良いじゃない」

「この酔っ払いが。紫苑も見えてないで助ける！」

「冥琳、頼んだ」

「秋絃、諦めろ」

「この薄弱者共が！」

「あははははっ」

只今、庭で酒盛り中。

参加メンバーは俺と雪蓮と冥琳と秋絃。

秋絃っていうのは太史慈の真名だ。

雪蓮のマジギレ事件から約一ヶ月。

まあ、星や雪蓮と同じ様に、手合わせの後、お前強いじゃん認めてやるよ真名を呼ぶことも許してやるよ、みたいな感じで真名を教えもらった。

祭と穏がないのは野盗を討伐しに行ってるからだ。

まあ、大した連中じゃないし、そろそろ戻ってくるだろう。

さて、雪蓮に絡まれ続けてる秋絃を放っておくのも可哀想になってきたし、助け船を出してやるか。

「雪蓮」

「なあに？」

「そろそろ此处を離れようかと思うんだが」

「え……………」

……………予想以上の効果だな。

ピタッ…と動きが止まった。

「な、何で？私達と一緒にいて楽しくない？何か嫌われるような事した？」

「ちよっ…！何で目を潤ませてんだよ！？」

「だって…」

「別に雪蓮達がどうこうつてわけじゃねえよ。此処で世話になり始めてから一ヶ月ぐらい経っただろ？最初に会った日…の次の日にも言っただが、会いたい人物が何人かいるんだ。最近黄色い布を身に付けた連中が現れ始めただろう？」

「ふむ。黄巾党と呼ばれている連中の事か。良い噂は聞かないな」

「ああ。今現在、漢王朝や無能な領主に対する民の不満は限界ギリギリまで溜まっているだろう。そういう人達が参加して黄巾党は増え続けるだろう。けど言い方は悪いが所詮は貧しい農民達の蜂起に過ぎない。黄巾党の乱は各地の諸侯達によって終焉を迎えるだろう。だが知っての通り漢王朝の支配力は弱まっている。黄巾党の乱によって漢王朝の支配力の低下が白日の元に曝されるだろう。黄巾党の乱以降は、朝廷内の権力争いが激化したり各地の諸侯による覇権争いが激化したりするだろう」

「うむ。私達もそう考えている」

「で、そうなってからじゃ目的の人物に会うのも大変になると思うんだ。だから今の内に会いに行きたいんだ」

「成る程な」

「そういうわけだから構わないか、雪蓮？」

「むー…」

「雪蓮？」

「冥琳、鞭貸して」

「構わんが、どうするんだ？」

「紫苑を縛るわ。逃げられないように」

「勘弁してくれ…」

「いーやーよー！紫苑と離れたくないっ！」

「また会いに来るからさ。雪蓮が困った時には力を貸す。だから頼むよ」

「いーやー！」

「そういう事なら俺もそろそろ御暇させてもらっかな」

「秋絃も！？」

「ああ。この一ヶ月間楽しかったし十分休めた。そろそろ本来の目的其の二を果たしに行こうかと思ってな」

「本来の目的其の二？初めて会った時、雪蓮に会いに来たって言うてたが、他にも何かあったのか？」

「ああ。俺が使ってる剣あるだろ？」

「あの馬鹿デカい剣よね？」

「ああ。実は雪蓮に会いに行こうとした少し前に、愛用の武器が壊れちまってな。今使ってるのは、武器が無いと困るから取り敢えず買った安物なんだ。で、ある街に腕の良い武器職人が居るって以前聞いていてな。地理的に雪蓮がいる街の方が近いから、雪蓮に会った後で行こうと思ってたんだ」

「ふむ」

「雪蓮の事だ。どうせ別れの宴とか言って酒盛りするんだろ？なら、紫苑と一緒に出た方が一回で済んで良いだろ」

「えゝ！それなら尚更時期をずらしてくれた方が良いのに。そうしたら酒盛りの回数が増えるのにゝゝ」

「しえゝれゝんゝ？」

「うつ……じよ、冗談よ冥琳、冗談。だから眉間に皺を寄せないで？ね？」

「全く、お前という奴は……」

「まあそれは置いて、二人とも意志は変わらないのね？」

「悪いな、雪蓮」

「紫苑が今出ていく理由を聞いた後じゃ尚更な。大きな戦が始まったりでもしたら武器を作ってもらうのに時間が掛かる、最悪作ってもらえなくなるかもしれないからな」

「……はあ。本当は二人共ずっと此処に居てもらいたいけど、仕方無いわね。なら今日は思う存分飲み明かししょう！良いわね？」

「ああ」

「まあ騒がしいのは好きじゃないが、こういう時ぐらいは良いだろう」

「決まりね！冥琳、準備をお願い。祭や穩もそろそろ戻ってくるだろうし、美味しい料理や御酒を沢山用意してちょうだい」

「分かった。なら私は手配しにいくから、紫苑と秋絃は旅立ちの準備をしておけ」

「了解。まあ荷物はそんなに無いがな」

「だな」

「ちなみに紫苑は誰から会いに行くの？」

「位置的にエン州の陳留にいる曹操だな」

「おつ。俺が向かう街も同じ方向だ」

「そうか。なら暫くは一緒に行動出来るな」

「そうだな。俺としても、その方が退屈しないしな」

「えー！秋紘ずるーい！私だって、もっと紫苑と一緒にいたいのにー！」

「悪いな雪蓮。次に会う時は、俺の方が紫苑と親密な仲になってるかもな」

「……なら私も紫苑に着いてく！」

『は？』

「そういつわけだから、留守の間頼むわね冥琳。よし、それじゃ私も旅に出る準備を……」

《ゴツンッ》

「いったあー……！何するのよ冥琳」

「お前は何を考えてるんだ。そんな事出来るわけないだろう」

「だってー……」

「だってじゃない。駄々を捏ねるな、子供じゃあるまいし」

「ぶーぶー」

「雪蓮。必ず会いに来るし、雪蓮の事忘れたりなんかしないから」

「ふーんだ！」

そっぽ向きやがった。

仕方無いな…。

「雪蓮」

「何…むぐっ」

振り向きざまに抱き寄せ口付けをする。

「今の口付けは誓いだ。俺は必ず雪蓮の所へ戻ってくる。だから待つてくれ」

「紫苑…：分かったわ。貴方が戻ってくるまで待つてる」

「ん、良い子だ雪蓮」

頭を撫で撫でしてやる。

「紫苑…」

「…：なあ冥琳。今日はやけに暑くないか？」

「全くだな。…：はあ。雪蓮！」

「！…：な、何？」

「私は行くからな。二人の手伝いを頼む。終わったなら適当に時間を潰してくれ。それではな」

「了解。なら、ちゃっちゃと終わらせちゃいましょう」

「おう」

「はいよ。ああー暑い暑い」

「もうー悪かったてば、秋絃ー！」

「ははっ」

「こらそこ！紫苑も同罪でしょ！ていうか紫苑がああな雰囲気作ってたんだからね！」

「雪蓮が我が侬言うからだろ？」

「ぶーぶー」

「二人ともイチャついてないで行くぞー」

「イチャついてないってばー！」

さて、さっさと準備しますか。

・
・
・

「あははははは」

「ほれ紫苑、もっと飲まんかい！秋絃もじゃ」

「紫苑さ〜ん！一気に飲みましよう、一気に〜！穩が掛け声しますから〜」

「誰か〜！もっとお酒持ってきて〜！料理も足りない！」

「《ゴクッゴクッゴクッ》ぷはー。酒が足りぬぞ！誰か持ってこんかー！」

「雪蓮様〜お酌します〜」

「ありがと〜。ほら、穩も飲んで飲んで」

「あはは〜ありがと〜ございま〜す《ぐびっぐびっぐびっ》」

「良い飲みっぷりじゃのう、穩。ほれ、もう一杯」

「ありがと〜ございます、祭様〜」

「穩、儂はこっちじゃ」

「あはは、すいませ〜ん。何か周りの景色がグルグルしてます〜」

「情けないのう」

「祭〜、呑み比べしない呑み比べ？負けたら一週間酒断ちで！」

「はっはっはっ。いくら策殿といえど負けてはやれませぬぞ？誰か！酒を樽で持ってこぬか！」

……何だ、この状況。

「カオスだな」

「“かおす”って何だ？」

「混沌」

「ふむ。言い得て妙だな」

盛り上がる雪蓮と祭と穂を傍目に、俺と冥琳と秋絃は静かに酒を飲んでる。

つか、あの中に混ざったら確実に許容量越えて無理矢理飲まされそうだからな。

「全く、ハメを外しすぎだ。明日も政務があるというのに」

「まあ、雪蓮の事だから、どうせ抜け出してサボるだろ」

「だな。目に見えてる」

「全く……」

「冥琳」

「何だ？」

「短い間だったけど世話になったな」

「そんな事か。何、私の方こそ助かった。政務の手伝いに雪蓮の相手、賊の討伐など客将と言いつつ随分と頼ってしまったな。感謝している」

「気にするな。こっちこそ色々な経験を積まさせてもらって感謝している。部隊の指揮や政務の手伝いなんかは後々役に立つだろうし」

「……お前は今後どうするつもりだ？会いたい人物が何人かいると言っていたが」

「分からん。自分で兵を集めて傭兵みたいになるか、何処かに仕官するか、一般人として生きていくか。まあ最後の選択肢は無いだろうな。冥琳には以前言ったことがあると思うけど、俺は退屈が嫌いだ」

「うちに仕官する気は無いのか？」

「仕官するなら多分此処だな。雪蓮との約束があるし、居心地も良いし。まあ雪蓮よりも遥かに英雄たる器を持つ人物に出会ったなら別かもしれないし、何らかの事情で何処かに仕官するかもしれないし。それでも、雪蓮に刃を向ける様な真似は絶対にしたくない。例えば軍規違反で処刑される事になろうとも、だ。まあそんな事言うなら始めから他の所に仕官なんかするなって話だけだな」

「そうか……。なら、紫苑が戻ってくるのを期待して待っていていよう。仮に戦場で会ったとしても、雪蓮なら喜んで戦いそうな気もするかな」

「たしかにな」

「秋絃はどうするのだ？」

「武器を作ってもらって、その後は……なんだかんだで紫苑と一緒に行動するだろうな。一緒に行動している中で、雪蓮以上に気に入った人物がいれば、そいつの所に仕官するし、そうじゃなかったら紫苑同様此処に戻ってくるかな」

「秋絃の事も期待して待っているぞ」

「おう。その時はまたよろしくな」

「そういえば、紫苑が会いたい人物というのが誰だか聞いていなかったな」

「取り敢えず、劉備と曹操と馬騰と董卓と公孫賛に会いに行こうと思っっているんだが、冥琳が知っている人物はいるか？一応、当初の予定では袁紹や袁術にも会おうと思ってたんだが、星や雪蓮の話を聞いて止めた」

「曹操は善政を敷いていると聞いた事があるが、それ以上詳しくは知らん。公孫賛に関しては名前ぐらいしか聞いた事が無い。劉備と董卓に至っては名前すら聞いた事が無いな。袁紹と袁術に会う必要が無いと言っ意見には同意しておこう」

劉備を知らないのは当たり前か…。

俺の世界の歴史通りなら、まだ全く有名になっていない時期だろう

し。

董卓も有名になるのは十常時と手を組んだ辺りからだっけ。

劉備や曹操、董卓も女性なのかな……。

……ヤバい、俺の知ってるゲームの董卓（肥満体の髭面のやつ）を女性化したら吐きそうになった。

劉備や曹操は何となく美人そうだけど、董卓は……。

考えるのを止めよう。精神衛生上非常に悪い。

「……馬騰は？」

「公平にして勇敢、五胡の間にも勇名を轟かす豪傑であり、涼州の諸侯を束ねる名将だと聞いている。涼州軍は度々侵略してこようとする五胡と戦っているような状態だからな。機動性が高い騎馬隊を自由に操り、兵の練度も非常に高いと聞く」

「成る程。曹操に会った後は（会えるか分かんが）洛陽を経由して馬騰に会いに行ってみ……」

「しゝおゝん！」

「……っと！何だよ雪蓮、いきなり後ろから抱き着いてくるなよ。びっくりするだろ？」

「だって、冥琳や秋絃とだけ仲良く飲んでるんだもん。私も混ぜてよ」

「分かった！分かったから揺らすな！吐きそうになるから！」

「えへへ、そうこなくっちゃ。ほらあ、冥琳も秋絃も此方へ来なさい！朝まで呑み明かすわよ！」

「おいおい。俺も紫苑も明日出発するんだから、流石にそれは……」

「ごちゃごちゃ言つとらんで飲まんか秋絃！」

「さ……！？ゴボボ……」

「め……い……り……ん……さ……ま……も……い……つ……し……よ……に……吞……み……ま……し……よ……」

「穩……！絡み付くな……こら！何処を触っている！？」

あ……、秋絃は祭に大きな徳利を無理矢理口に詰め込まれ、冥琳は穩に絡み付かれ体をまさぐられている……。

そして俺は……

「し……お……ん。抱っこして……。頭撫で撫でして……」

この状況。

この酔っ払い共が……。

「はいはい。これでどうですかー姫様ー」

「ふみゃ〜」

……ヤバい、滅茶苦茶可愛い。

「じろじろ〜」

まあ祭や穩に絡まれるよりは百倍マシだな。

俺は俺で、ちびちびと呑むとするか。

・
・
・

酔っ払い三人に絡まれ始めてから三刻程。

ちょうど日付が変わるぐらいか。

今は六人で円を描くようにして床に座っている。

俺の両隣に雪蓮と秋絃、対面に祭、祭と秋絃の間に冥琳、祭と雪蓮の間に穩がいる。

で、どんな状況になっているかと言うと、

「どうした秋絃、この程度で限界か？情けないのう」

「はっ。まだまだ呑めるさ。祭こそ年なんだから無理しすぎると体壊すぞ？」

「ふん！まだまだ若い者にも負けんわ」

「あら？？祭が私に勝てると思ってるの？」

「祭様が三人いるーヒック」

「穩、呑みすぎだぞ。ほら水を呑め」

「冥琳、俺は穩じゃない。秋絃だ」

「む、そうか。すまん。ほら穩」

「あはははゝありがと、冥琳ゝ。って、このお酒味しなゝい」

……酔っ払いが五人に増えた。

俺も素面とは言えないが、頭はハッキリしている。

会話だけなら秋絃はあまり酔ってない様に聞こえるが、実際はかなり酔っている。

さつきから、お酒や料理を持ってくる侍女を口説きまくっている。

秋絃にそっちの気があるとは知らなかった。

冥琳や秋絃まで、こんな状態になるとは……お酒の力、恐るべし。

はあ……明日の事もあるし、そろそろ休みたいな……。

「おーい、皆ー。そろそろ俺は休みたいんだが……」

「む。紫苑、お主勝負から逃げる気か！」

「俺が祭と何か勝負してた記憶は無いんだが……」

「紫苑さんも一緒に呑みましょう」

「穏、それは祭だ」

「行っちゃダメ」

雪蓮が撓垂れかかってくる。

「明日出発だつて事忘れてないよな？」

「勿論よ、明日で紫苑と御別れなのよね」

「ちゃんと戻ってくるから」

「……ねえ紫苑」

「何だ？」

「最初に会った時みたいにしない？」

「今からか？さっきも言っただけど明日出発……」

「次いつ会えるか分からないでしょ？……もしかしたら二度と会え

ないかもしれない……だから……」

「雪蓮……。分かった。なら寢室行くか」

「……うん」

「ちょっと待った」

「冥琳？」

「私も混ぜろ」

「はい？」

「紫苑は雪蓮のものだ。雪蓮は私のものだ。つまり、紫苑は私のものだ。だから混ぜろ」

「冥琳さん、貴女は何ブツ飛んだ理屈を言ってますか？」

「いいわね、冥琳も一緒にしましょう」

「おいこら雪蓮……」

「ちょっと待った！なら俺も参加する！」

「秋絃さん、貴女まで何を言い出すんですか？」

「秋絃が参加するなら儂もじゃ！」

「対抗心燃やさなくていいから！」

「祭様が参加するなら私も」

「いやいやいやいや。川遊びに行く面子を誘っているわけじゃないんだから、そう次々と参加すると言われても困るんだが…」

「よし！なら皆で紫苑をひっぺかそー！」

「雪蓮！？」

「というわけなので」

「大人しくしておれよ」

「抵抗するなら白虎九尾で縛るからな」

「くつくつくつ…」

秋絃さん、笑い方が怖いです…。

というか、皆さん怖いです…。

取り敢えず……。

「逃げるが勝ち！」

脱兎の如く駆け出した。

あれ？以前にも似たような事があつた気が…。

俺は一体何処の兎園長だとセルフツッコミを入れなくなる。

「待たぬか！」

「待って下さい！」

「待ちやがれ！」

「待て！」

「待ってよう！」

はあ……最後まで騒がしい事この上無い……。

第10話〜別れの宴〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

オリキャラ設定の方を更新しました。

展開が早い気もしますが、まあ細かい事は気にしない方向で。

前回登場の太史慈さんの真名は“秋紘”です。

皆さん、覚えてあげて下さい。

- - - - -

現在の執筆状況：

第11〜13話↓ごちゃごちゃ

第XA話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第XB話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第XC話↓七割程度

はい、えゝ、上記を見ての通り、11話が完成してません。

色々ごちゃごちゃと修正中です。

というわけなので、次回の更新は一応2011年3月12日の予定ですが、19日になる可能性も半々ぐらいです。

第11話 南陽からの旅立ち (前書き)

< 前話の簡単な粗筋 >

南陽を離れると伝える

←

別れの宴 (という名の酒盛り)

←

酔った猛獣五匹に襲われる

第11話 南陽からの旅立ち

「ふああああ……朝か……」

頭痛てえ……。

昨日から今日にかけての深夜は散々だったな。

酒盛り自体は別に問題無かったけど、酔っ払って襲ってきた猛獣共（雪蓮、冥琳、祭、穩、秋絃）から逃げるのはマジで苦労した。

雪蓮は南海霸王抜き出すし、秋絃は大剣持ち出すし、祭は矢を射ってくるし、冥琳は白虎九尾で足を絡め取ろうとしてくるし、穩は……よく覚えてないけど、何故か皆さん本気で追い掛けて来られた。

俺何か悪い事した？と逃げた先、街にある行き着けの食堂の裏口付近で猫相手に四半刻ぐらい愚痴った。

雪蓮達も流石に街にまでは追い掛けて来なかったんで、そのまま野宿しようとしてたら、猫と喋ってた、もとい一方的に話し掛けていた俺に食堂のオヤジさんが気付いてくれて、事情を話したら食堂内に泊まらせてくれた。

水を飲みに起きたら声が聞こえたそうだ。

……オヤジさんにしてみれば、深夜に猫に話し掛けている俺は、さぞや不気味だった事だろう。

さて、今の時間は……七時半か。

いつも通り、六時間睡眠ってところか。

レム睡眠やらノンレム睡眠やらの関係で三時間区切りが起きやすいとかテレビで見てから、六時間睡眠にしている。

んー、……そろそろ戻るか。

流石にこの時間なら酔ってないだろうし。

その前にオヤジさんに挨拶しないと。

オヤジさんは……と、居た。

料理の仕込みをしてる。

「オヤジさん、世話になったな。そろそろ戻る」

「おう兄ちゃん、目え覚めたか。もう戻っても大丈夫なのかい？」

「……たぶん」

「何か食ってくかい？簡単な物なら作れるが」

「いや、ありがたいけど遠慮しとく。昨日の酒が残ってて、今食べると吐きそうな気がする」

「そうかい。なら、また今度来てくれ」

「ああー……」

そついや、オヤジさんには酒盛りの事しか話してなかったな。

「暫くは無理かな。実は今日から旅に出るんだ」

「なんでい、兄ちゃんは孫策様の所の將軍じゃなかったのか？」

「あくまで客将だからな。正式に仕官したわけじゃない」

「孫策様じゃ不満かい？」

「まさか。仕事はサボるし昼間から酒飲むし戦好きだしと一緒にいて振り回される事も多いけど、それ以上に楽しく過ごせてるよ」

「じゃあ何で旅に出るんで？」

「俺はこの国の人間じゃないんだ。東の海の先にある国から来たんだ」

「海の先！？へへ、海の先にも国があつたのかあ……知らなかったなあ」

「で、最初に客将として仕官したのが孫策様なんだ。さっき言ったように孫策様に不満は無いけど、会いたい人物もいるし各地を回ってみたいんだ」

「……海を渡ってきた兄ちゃんに、会いたい人物なんかいるのかい？」

「この街に着くまで一緒に行動してた人がいるんだけど、その人に

聞いたんだ。この先、飛躍するであろう人物はいないか？ってな」

「成る程ねえ」

実際は星達に聞いたわけじゃなく、自分が知ってる有名な武将に会いに行ってみたんだけど。

関羽や張飛は劉備と一緒に、夏侯惇や夏侯淵は曹操と一緒に、馬超は馬騰と一緒に、呂布や張遼は董卓と一緒に居るだろうから、冥琳には聞かなかったけど。

他にも知っている名前はあるが、有名所だとこんなもんだらう。

まあゲームの知識が殆どだから間違ってるかもしれないが。

「そういうわけだから暫くは来られない。まあたぶん戻ってくる事になると思うけどな」

「そうかい。残念だが兄ちゃんには兄ちゃんの都合があるしな。戻ってきたら、また来てくれよ」

「ああ、約束する。じゃあな、オヤジさん」

「おう。元気だな兄ちゃん」

「オヤジさんもな」

さて、戻りますか。

・

・

と、食堂を出たのはいいが…。

何故か十数人程の兵士の皆さんが待ち構えていた。

「え〜と…」

「周瑜様から城まで連れて来るよう仰せつかっています」

流石、冥琳。

居場所はバレバレって事か。

「……抵抗したり逃げたりしたらどうなる？」

「私の説教を中庭で下着一枚で正座で侍女数十人に囲まれながら
半日受けたいのならば好きにしろ」だそうです」

それは……うん、勘弁して下さい。

罰ゲームにしてもツライです。

「分かった。大人しく着いてくよ」

「ありがとうございます。では行きましょう」

こうして俺は自ら死刑台へと昇って行くのだった…。

・ ・ ・

で、まあ城に戻ったわけだが…。

「ごめんね」

「すまなかった」

「すまぬ」

「すみませんでした」

「悪い」

と謝られ、後は冥琳から無断外泊について注意されただけだった。

ちなみに、皆さん二日酔いにはなっていないそうです。

俺より軽く三倍以上は飲んだのに…。

秋絃を除いて、みんな赤っぱい色の服を着ているから通常の三倍は酒に強いのかな？

呉の武将の胃袋は化物か！？

「さてと、昨日の件については、これでおしまいだ。それでどうするんだ？紫苑と秋絃は予定通り今日出発するのか？」

「俺はそのつもりだが、紫苑はどうする？」

「俺もそうするつも《ズキンッ》っ…！」

「ちょっと、大丈夫なの紫苑？」

「大丈夫だ。酒の飲み過ぎで少し頭が痛いだけだ」

「出発を明日に延ばしてはどうじゃ？」

「そうよ。一日ぐらい延ばしたって大丈夫でしょ？」

「……大丈夫だけど、別れの宴二日目とか言って、また酒盛りするつもりじゃ……」

「しないしない。約束するから。ね？」

「そうだな。別に俺も急いでいるわけじゃないし、一日ぐらい延ばしたって何の問題も無い」

「というわけだ。皆も心配しているし、出発は明日にしろ」

「冥琳……分かった。出発は明日にするよ」

「それでいい。今日は世話になった人達に挨拶でもして来い。それぐらいなら大丈夫だろう。さて、私は仕事を始めるか。雪蓮、行くぞ」

「えー、私も？」

「雪蓮は昨日全く仕事をしていないだろう。午後から仕事をする約束で酒を飲んでいたが、紫苑と秋絃の手伝い及び別れの宴で結局手を着けなかったからな。雪蓮の約款が必要な書類が溜まってるんだ。つべこべ言わずに来なさい」

「はい。また後でね、紫苑、」

「ああ」

「祭殿と穩は黄巾党の討伐に向かつてくれ」

「承った」

「了解です」

「また出たのか？」

「うむ。昨日討伐してきたばかりじゃと言うのに……困ったもんじやのう」

「今日も祭と穩が行くのか？」

「安心して軍を任せられるのは祭殿しかいなくてな。雪蓮も行きたがるが、毎度毎度君主が討伐に行くのも問題があるしな」

「私は別に構わないって言ってるんだけどね」

「お前にとって問題が無くとも、此方にとっては問題が有るのだ。少しは自重しろ」

「はいはい」

「祭殿の報告を聞いた限りでは軍師は必要無い様に思うが、万全を期するためには必要だろう。私は政務が忙しいし、そうなると必然的に穩が行く事になる。結果として祭殿と穩に動いて貰わざるを得な

くなるのだ」

「まあ、そう言われればそうだな」

「明日の昼前には戻ってこれると思いますよ」

「そういうわけだから、儂らが戻ってくるまで待っておれよ？」

「了解。気を付けてな二人共」

「うむ」

「はいはい」

「さて、俺と紫苑は挨拶回りだな」

「了解。そんじゃ行きますか」

・
・
・

秋絃と一緒に挨拶回りをして、挨拶回りが終わった後は昼過ぎに今朝別れの挨拶をしたばかりのオヤジさんの店で昼食を取り、城に戻ってからは部屋で一人ダラダラしてた。

夕食は、俺と雪蓮と冥琳と秋絃の四人で普通に食べた。

勿論、俺は酒を飲んでいない。

雪蓮は飲んでたが…。

で、今は自分の部屋の寝室で横になっている。

「人肌って暖かいわよね」

「そうだな。しかし狭いな」

「仕方ないでしょ？この寝台は三人で寝る事は想定されてないんだから」

「まあな」

雪蓮と秋絃と俺の三人で。

いや、まあ雪蓮だけなら結構頻繁に二人で寝たりしてるから別段不思議な光景じゃないんだけどな。

そこに何故か＋秋絃。

……何て言うか罪悪感が。

俺、二ヶ月間弱で三人の女性とそういう関係になってるわけで……。

いや、三人とも本当に好きだよ？

責任を取る覚悟もある。

（桜に関しては、どうしたらいいのかわからないけど）

桜、雪蓮は言うまでもなく、秋絃だってフィーリングが合うからか、一ヶ月近くの間、雪蓮も含めて大半の時間を三人一緒に行動してた

し、秋絃も俺の事が好きだと言ってくれた。
でもなー…。

「紫苑？どうかした？」

右隣に寝ている雪蓮が話しかけてきた。

「……いや、雪蓮は何とも思わないのか？」

「？何が？」

「自分の好きな人が自分以外の異性と仲良くしたりして」

「んー、まあ秋絃なら別に問題無いかな。流石に知らない女の子と仲良くしてたら嫉妬すると思うけど」

「秋絃は？」

左隣に寝ている秋絃に聞いてみる。

「俺か？俺も雪蓮と同じ様な感じだな」

「そうか」

この時代の中国だと、一夫多妻も不思議じゃないのかな……身分が高い人だと一夫多妻もOKなんだっけ？

「……今更だけどさ、二人とも何で俺の事好きになったの？」
「何でって……」

「そりゃあ…」

『なんとなく』

……見事にハモったな。

ていうか、なんとなくって何だよ、なんとなくって。

「なんとなくで好きになるって意味が分からないんだが」

「えーと…、私の場合は、手加減してたとはいえ手合わせで負けて、その時に“あつ、この人が私の運命の人なんだ”的な感じ？」

「俺に聞かれても困るんだが…」

「まあ最初に襲った理由は今言った通りだけど、一ヶ月以上一緒に暮らしてきて、やっぱり私の勘は間違ってたと思ったわ。紫苑と一緒に居ると凄く楽しいの。食事をしてても、ただ街をぶらぶらしているだけでも、手合わせをしてても、何をしてても楽しい。寝顔を見ただけで幸せな気分になれる。好きになるような特別な出来事があったわけじゃない。でも私は紫苑の事が好き。その気持ちに嘘偽りは無いわ」

俺の目をじっと見詰めて、自分の気持ちをハッキリと伝えてくる雪蓮。

聞いている俺の方が恥ずかしくなる。

「……秋紘は？」

「俺も似たようなもんだな。取り敢えず興味を持った切欠はアレだ。私と互角に戦える男と初めて会ったっていう事かな？弱い男には興味無いし」

「あ、それ分かる！やっぱり自分より弱いと微妙よね。幾ら強いとは言っても女の子なんだから、いざって言う時は男の子に守ってもらいたいもの。まあ、自分より弱い男の子を好きにならないとは限らないけど」

「……俺は二人より弱いと思うけど」

「それは紫苑が本気出さないからでしょ？」

「だな。本気出せば俺や雪蓮とも十分互角の戦いが出来る筈だ」

「最近は結構本気で相手してると思うけどな……」

「そう？まだまだ本気じゃない気がするけどな」

「まあ紫苑の本気云々は置いて話を戻すが、興味を持った切欠はさっき言った通りな。で、後は雪蓮が言った理由と同じで、一緒に過ごす内に自然と好きになったって感じだな。まさか俺が男を好きになるなんて思ってもみなかったけど」

「秋絃は女の子が好きだもんね？」

「ばっ…違っ…昨日のアレは何て言うか、酔っ払ったから偶々ああいう風になっただけで、別に俺はそういう趣味は無えよ！」

「本当に？」

「雪蓮と一緒にすんな！」

「別に女性同士だつて良いじゃない。まあ秋絃が嘘を言つてるとは思つてないわよ。だつて…」

「何だよ？」

「さっきの秋絃、初々しくて可愛かつたもんね」

「なっ…」

「普段大剣振り回してる男勝りな俺っ娘があんな風になるとはね」

「違つ…あれは紫苑が…」

「そうよね。流石、紫苑。よっ！この女誑し！憎いわね」

「俺のせいだよ」

「勿論よ。ねえ秋絃」

「俺に振るな！そんな事より紫苑はどうなんだよ！」

「何が？」

「俺や雪蓮の事をどう思つてるかとか、どうして好きになつたかとか」

「話逸らしたわね」

「うつさい」

「はいはい、俺を挟んで喧嘩するな。秋絃の問いに対する答えだけど、勿論二人共好きだよ。雪蓮も秋絃も本気で愛してる」

そう言つて二人を抱き寄せる。

「好きになった理由は、結局俺も二人と一緒にかな。一緒に居て楽しいから。それが一番の理由だと思う」

「相思相愛つてやつね」

「ああ」

「紫苑もそういう風に思ってくれてるなら嬉しいよ……ふぁ」

「眠いのか？」

秋絃が欠伸をしている。

「疲れた……」

「そろそろ寝るか？」

「ああ……おやすみ、紫苑……」

「おやすみ、秋絃」

「く……」

「早っ！寝付き良すぎだろ」

「私達もそろそろ寝る？」

「そうだな。明日は万全の体調で出発したい」

「今日は体調最悪だったもんね」

「誰のせいだ、誰の」

「あははは、ごめんごめん。なら今日は早く寝ましょう。おやすみ、紫苑」

「ん、おやすみ、雪蓮」

雪蓮と口付けを交わして眠りに入る。

・
・
・

太陽は丁度てっぺん辺り。

祭と穏が黄巾党討伐から戻ってきたので、出発する事にした。

一ヶ月以上此処で過ごしたが、本当に楽しかった。

雪蓮や秋絃と手合わせしたり、雪蓮が仕事サボって冥琳に説教されたり、雪蓮や祭と酒を酌み交わしたり、祭が酒を飲んで上機嫌にな

り溢した冥琳に対する愚痴を本人に聞かれ説教されたり、冥琳や穂と一緒に政務を行ったり、賊の討伐で先陣切って突っ込んだ雪蓮が冥琳に説教されたり。

……冥琳が心労で倒れないか心配だ。

そんな事を考えてる内に、門の前に全員揃った。

「全員揃ったな。それじゃあ別れの挨拶でも交わしますか」

「そうね。じゃあ、私から順番に。まあ私から言いたい事は紫苑に一つだけ」

「何だ？」

「浮気したら殺すから」

「……………了解」

「やあね、冗談よ、じょ・う・だ・ん」

嘘だ。

ニコニコ笑ってるけど、声が物凄く低かった。

最初に会った時は拘束しないと言ってたような気がしたが、雪蓮の中で予想以上に大きな存在になったのかな？

まあ、それはそれで凄く嬉しいんだが、何もあんなドス効かせた声で言わなくても…。

「じゃあ、次は穩ね」

「はいはい。お二人共、黄巾党には気を付けて下さいね」

「あの程度の奴等、例え千人相手にしようが負けないさ」

「だな。紫苑も俺も黄巾党如きに遅れは取らねえよ」

「風邪を引くんじゃないぞ？」

「子供じゃないんだからさ…」

「儂からすれば紫苑も秋絃も、まだまだ子供みたいなもんじゃ」

「まあ気を付けるよ」

「寒かったら紫苑にでも抱き着いて暖を取るさ」

「野宿も多いだろうし、それも有りだな」

「……何やら儂らが居ない間に紫苑と秋絃の中が進展しとるような……」

「ですね。私達は除け者ですか…」

「心配するな。私も除け者だ。昨日は三人で仲良く寝てみたいだからな。なあ雪蓮」

「うつ……冥琳、怒ってる？」

「別に怒ってなどいないさ。私じゃなくて秋絃と一緒に紫苑の部屋に行った事など全く気にしていない」

「……気にしてるじゃない」

「何か言ったか？」

「何でもございませう」

「まあ良い。二人共、元気だな。これは饞別だ」

「……手紙？」

「馬騰殿への紹介状だ。昔、一度だけだが、孫堅様と雪蓮と一緒に御会いした事が会ってな。覚えておられるどうかは分からないが、無いよりは有る方が良いだろう」

「馬騰？会った事あったっけ？」

「ああ。確か、十七、八年程前だったか？幼い時に会った覚えがある。茶色く長い髪を左右で纏めてたはずだ」

「んー、覚えてないわね」

「まあ、私の記憶も顔が思い出せないぐらい曖昧な物だから仕方無いな。受け取れ、紫苑」

「ありがとう、冥琳。助かるよ」

「なに、気にすることはない。役に立つかどうかとも分からないしな」

「そんな事ないさ。本当にありがとう。冥琳は普段から根詰めて仕事し過ぎてると思うから、体調には気を付けろよ」

「自分ではそんなつもりは無いのたがな。紫苑からの助言だ。心に留めておこう」

「穏、俺が言うような事じゃないと思うが、冥琳の事、しっかり支えてやってくれ」

「勿論ですよ。冥琳様に倒れられたら困りますからね。不肖ながら、私、陸伯言が精一杯手伝わさせて頂きます」

「頼んだ。雪蓮と祭は冥琳の負担を増やさないように。分かったな？」

「分かってるわよ」

「無論じゃ」

「どうにも不安なんだよな……」

「大丈夫大丈夫♪」

「心配し過ぎるとハゲるぞ？」

「……はあ。まあ俺からは以上だ。秋絃からは？」

「みんな元気だな。以上」

「短っ！」

「いやまあ、言いたい事は殆ど紫苑が言ったしな。取り敢えず、元
気ならそれでいい。それだけだ」

「ふっ……それもそうだな。なら、そろそろ行くか」

「応」

「じゃあな、雪蓮、冥琳、祭、穩！また必ず会おう！」

「じゃあな皆！」

「二人共、必ず戻ってきなさいよ！」

「元気だな二人共」

「土産は酒で頼むぞ」

「お体には気を付けて下さうい」

こうして雪蓮達四人と別れ、俺と秋紘は南陽から旅立った。

第11話 南陽からの旅立ち（後書き）

まず始めに、東北地方太平洋沖地震について。

昨日は地震の影響で電車が止まってしまったので、仕事場から歩いて帰ったんですが、ニュースを見て驚きました。

予想以上に酷い状況ですね。

宮城県仙台市若林区では200人から300人の方が津波によって亡くなられたそうです。

他にも行方不明の方が沢山…。

もしかしたら、今回の地震による死者は全国で合わせて1000人を超える可能性もありますね…。

今回の地震で亡くなられた方々の御冥福を心より御祈りするとともに、行方不明の方々が無事に見つかる事を切に願います。

- - - - -

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

うーん…。

エロスな方に進みすぎかな？

まあ、当初の予定では五に……ゲフンゲフン……の予定でしたが、流石に不味いかなと思ひ、三に……ブワッホンッ……も不味いかなと思ひ、結局この様な形に。

という事で、キーワードに“微エロ”を追加。

今話とは直接は関係ありませんが、以前書いた通り小説タイトルを変えさせて頂きます。

旧タイトル：真・恋姫†無双〜黒き刃〜

←

新タイトル：真・恋姫†無双〜黒き霆〜（読み：クロキイカズチ）

という風になります。

次話投稿時に変更予定です。

何卒ご理解・ご了承の程 お願い申し上げます。

あと、小説とは関係無いですが作者は無事です。

怪我もしてませんし家の方も特に大きな問題はありませんでした。

精々、積み上げていた漫画タワーが崩れていたぐらいです。

愛猫もスヤスヤ寝てました。

……足はパンパンですが。

まあ元々地震対策（張っ付けたり固定したり高さのある家具は置かなかったり）はしてたので無問題。

- - - - -

現在の執筆状況：

第12～13話↓ごちゃごちゃ

第X A 話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第X B 話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第X C 話↓七割程度

はい、えゝ、上記を見ての通り、12話が完成してません。

色々ごちゃごちゃと修正中です。

前話の後書きと書いてある事が一緒ですね。

というわけなので、次回の更新は一応2011年3月19日の予定ですが、26日になる可能性も半々（いや、七割？）ぐらいです。

第12話、身体に傷を持つ少女と心の傷を抉る少女（前書き）

< 前話の簡単な粗筋 >

二日酔いで出発を延期

←

雪蓮、秋絃とストロベリ

←

出発

第12話　身体に傷を持つ少女と心の傷を挟む少女

雪蓮達と別れてから約一ヶ月半。

俺と秋絃は順調に旅を進めていた。

いや、順調と言うには随分時間掛かってるけどな。

普通に進んでいるだけでも黄巾党に遭遇するし、何処何処で黄巾党が暴れている、何処何処に黄巾党の根城があると聞けば進行方向と違っても退治しに行っるからだ。

一日一回は黄巾党と戦闘になるような感じで、一日複数回戦闘になる事もしばしば。

俺達の運が悪いのか、それだけ黄巾党の数が増えてるのか…。

雪蓮達と別れてから何千人ものの黄巾党を殺した。

鬱になりそうにもなったが、助けが間に合わなかった村の惨状を見て弱音を吐いてる場合じゃないと割り切る事にした。

そっぴゃ、暴れすぎたせいかな妙な異名まで付けられたんだよね…。

でもって…。

「またか」

「まただな」

視界の先で黄色い奴等がウジャウジャしてる。

後少して目的の街に着くっていうのに…。

三百人ぐらいか？

「商隊が襲われてるっぽいな」

「だな。行きますか」

「応。準備はいいか？」

秋絃に確認を取る。

「勿論。纏めてブツ飛ばすぜ！」

「黒霆院紫苑、推して参る！」

「太史子義、目標を殲滅するぜ！」

・
・
・

不味いですね…。

「楽進さん、大丈夫ですか？」

「はい。徐庶殿こそ大丈夫ですか？」

「ええ。ですが、非常に不味いです。やはり黄巾党が徘徊している中、軍の協力無しで荷物を運ぶのは無理がありましたね」

「とは言っても、街に籠っているだけでは物資が足りなくなりますし…。軍の方も各地に発生する黄巾党の対処に追われていて、全ての街や村が軍の協力を仰げるわけではありません」

「分かっています。さて、どうしましょうか……」

考えても考えても打つ手がありません。

黄巾党に囲まれ、有志で募った護衛は手負いの者ばかり…。

死者が出ていないのは幸いですが、このままでは…。

楽進さんなら生き残れるかもしれませんが、私含め他の者はキツイですね。

……………これまで、ですかね。

「……イイイ」

ん？なんか上空から声みたいのが聞こえ…。

「イイイイヤッホー！ー！」

《ドロンッ！》

「紫苑様華麗に参上！」

……追い詰められて頭がおかしくなったのでしょうか。

空から人が降ってきました。

周りを見渡すと、楽進さんも他の護衛の者も黄巾党の連中も呆然としています。

空から降ってきた、黒い服で全身を包んだ黒髪の青年。

彼は一体…。

・
・
・

黄巾党に向かって疾走中。

「……そろそろやるか。秋絃！俺は商隊の方へ行く。秋絃は奴らの後ろから切り崩して行ってくれ」

「了解！またアレか？」

「アレだ」

「アレを最初に見た時は驚いたもんだ」

「まあ俺も上手くいくか半信半疑だったけどな。武装錬氣・グリーブ！」

グリーブ、日本語に直せば脚甲。

イメージは、何処ぞの教団に所属する、過保護な兄がいる黒髪ツインテールの女の子の武器。

色は正反对だけど。

「じゃあ、俺は行くからな」

「応」

グリーブの底を爆発させ空中に飛び、氣で足場を作りながら商隊の所へ駆けていく。

「この辺か」

下を見ると、商隊の護衛の者らしき人達十数人と黄巾党の連中が交戦中。

近くに馬車三台もある。

完全に囲まれてるな…。

「さて、落ちますか」

再び、グリーブの底を爆発させ頭から真下に落ちていく。

「YYYYYYYYヤッホー！」

これ、かなり爽快感があつて癖になりそうなんだよな。

思わず声が出てしまう。

途中で姿勢を反転させて、足から地面へ突貫。

流石に頭から落ちたら死ぬだろうしな。

《ドゴンッ!》

「紫苑様華麗に参上!」

女性が苦手な金髪さやわかイケメン剣士の台詞を真似して地面に着地。

ちょっとしたクレーターが出来てる。

……あ、足が痺れた。

気で身体を強化しているから足が痺れるぐらいで済むんだけどな。

さて、と。

辺りを見渡すと全員呆然としている。

まあ、当たり前と言えば当たり前か。

「あ、あの……貴方は?」

銀髪で身体に多数の傷を持つ女の子が話し掛けてきた。

「悪党退治が得意な、ただの通りすがりだ」

「はあ…」

「何だテメーは！？どつから湧いてきやがった！？」

黄巾党の一人が話し掛けてきた。

「空から」

「空からだ！？ふざけやがって！そんなわけあるか！大体、何が悪党だ！俺達は腐った朝廷を倒す正義の集団だ！」

「……そつちこそ、ふざけるなよ糞野郎共」

「うつ…」

睨み付けると同時に氣で増幅した殺気を放つと、馬車や護衛の人達を囲んでいた黄巾党連中が全員後退りやがった。

この世界に来てからも氣の修行は続けているんだが、さっきの空中疾走も含め習った事以外にも色々出来る事に氣が付いた。

氣って便利だな…。

「別に自分が正義だなんて言うつもりは無えよ。黄巾党に参加してる人にだって事情があるのは知ってる。けどな、真面目に暮らしている何の罪も無い人達に牙を向けるなら見過ごすわけにはいかねえ。正義だ？商隊を襲うのがテメーらの正義なのかよ？」

「う、うるさい！正義の為には多少の犠牲が…」

「……正義なんて言葉チャラチャラ口にしてんじゃねえよ！テメーらは正義という言葉で盾に自分達がやっている事を正当化したいだけだろうが！本当に自分達で世の中を良くしようと思っているなら、志を持って集まった集団なら、こんなこと恥ずかしくて出来るわけが無えだろ！」

「ぐっ…」

『………す！』

『………ま……る！』

『………ぜ！』

「やっと来たか」

「何でしょうか？向こうの方が騒がしいですが…」

黒い防止を被った橙色の髪の子が、声をする方を指差し呟く。

……背が低いな、この子。

「俺の仲間が攻撃を仕掛けたんだろう」

「仲間？一体何人くらいですか？」

橙色の髪の子が聞いてくる。

「一人」

「ひ、一人ですか？」

今度は銀髪の女の子。

「ああ」

「へへっ…馬鹿じゃねえのか！？たった二人ぐらい加わった所で死体の数が増えるだけだ！」

「それはどうかな？」

「何！？」

「武装錬気・円筒結界」

馬車と護衛の人達を氣で作った円筒状の壁で覆う。

勿論、銀髪の女の子と橙色の髪の女の子も。

流石に、この人数を守りながら戦うのはキツイしな。

高さは五メートル弱ぐらいか？

これぐらいあれば大丈夫だろう。

「これは一体…」

橙色の髪の女の子が呟く。

「その中にいれば安全だ。こいつらを片付けるまでの間、その中で

負傷者の手当でもしててくれ」

《ガギイイン！》

「な、何だ！？攻撃が阻まれる！？」

「お前ら程度じゃ破れねえよ。まあ、俺を殺せば消えるから精々頑張ってくれ」

「くそっ！おいつ！この黒い格好の奴を殺すんだ！」

「俺に任せろ！おらー！」

「遅いん……」

「ハアアアアア！」

《ドガンッ！》

「うがつ……！」

俺に攻撃をしてきた奴が吹っ飛ぶ。

今のは氣弾か？

「私も一緒に戦います！」

銀髪の女の子が横に降りてきた。

「……どうやって出たんだ？」

「馬車を踏み台にしました」

成る程。

「通りすがりの方だけを戦わせるわけにはいきません。私達も戦います」

橙色の髪の子も出てきた。

「……困まっているんだ。悪いが君達を守れるとは限らないぞ?」

「未熟者ですが武術の心得もあります。足手まといになるようなら見捨ててもらっても構いません」

「この壁?を背にすれば四方から囲まれる事はありません。楽進さん同様、足手まといになるようなら遠慮なく見捨てて下さい」

そうこう話している内に黄巾党がジリジリと距離を詰めてくる。

「……分かった。無理はするなよ?」

『はい!』

まあ、二人ぐらいなら守りながらも戦えるか。

取り敢えず…

「武装錬氣・円筒結界之蓋」

二人が出てきた事で、弓矢で中を狙われたら不味い事に気付いた、
もとい弓矢の存在を忘れていた事を思い出したので、念の為に蓋を
しておく。

さてと…。

「覚悟はいいな、二人共」

『はい!』

「黒霆院紫苑、推して参る!」

「楽文謙、目標を駆逐します!」

「徐元直、目標を狙い撃ちます!」

「やっちまえ野郎共!」

《ウオオオオー!》

・
・
・

「こんなもんか」

戦闘開始から僅か十分程度で商隊を襲っていた黄巾党は全滅。

銀髪の女の子も秋絃ほどではないが強かったし、橙色の髪の女の子
も後ろから弓で援護してくれたので思ったよりも早く終わった。

銀髪の女の子の戦闘スタイルは中国武術＋氣弾かな？

この世界に来てから初めて氣弾を撃てる人に会ったな…。

「あ、あの…！ありがとうございます！本当に助かりました！」

「氣にするな。大した事をしたわけじゃない」

「大した事だと思いますよ。僅か二人で、あれだけの人数を倒したのですから。申し遅れました。私は徐庶元直と申します。私からも御礼を言わせて頂きます。助けて頂き有り難う御座いました」

「私は樂進文謙と申します」

銀髪の女の子と橙色の髪の女の子が話し掛けてきて、それぞれ礼と名前を言ってくれた。

徐庶に樂進か…。

二人とも名前ぐらいは聞いた事あるな。

たしか樂進は魏の武将で、徐庶は……… 忘れた。

「あ、あの…」

「ん？ああ、悪いな樂進。少し考え事してた。俺は黒霆院紫苑だ。紫苑って呼んでくれ。で、こっちが…」

「太史慈子義だ。よろしくな」

秋絃が隣に普通に居るのは、戦闘中に合流したからだ。

「そっぴや紫苑、商隊は大丈夫だったか？」

「っと忘れてた。円筒結界解除」

氣で作った結界を崩す。

「怪我人とかは大丈夫か？」

馬車の近くにいた男性に話し掛ける。

「はい。お陰様で怪我人の手当も出来ましたし、亡くなった者もいません」

「そりゃ良かった。って事だ秋絃」

「死者が出なくて何よりだ。そっちの女の子二人は？」

「商隊の護衛……で合ってるよな？」

橙色の髪の子に聞いてみる。

「いえ、正確に言えば私達は商隊の護衛ではありません。というより馬車自体が商隊というわけではありません」

「違っのか？」

今度は銀髪の女の子に聞いてみる。

「黄巾党が暴れ回っているせいで街に必要な物資が届かなくなったのです。軍に協力を頼んだのですが他の街や村からの要請もあり、いつになるか分からないと…。それで街の人達と相談した結果、有志を集い必要な物を買に行く事になったのですが、帰りに黄巾党に見つかってしまい襲われたというわけです」

「そういう事か」

「まあ、あちらこちらで黄巾党が暴れてるからな。ここ一ヶ月半近くで俺達二人も何回襲われた事が。なあ、紫苑？」

「ちゃんと数えてはないけど十数回は襲われたな」

まあ、こつちから仕掛けたのも含めれば軽く五十回は戦闘になっているけど。

「そ、そんなにですか!？」

「ああ。秋絃が美人だからかな？」

そう言つて秋絃の頭を撫でると、秋絃も抱き着いてくる。

「紫苑の格好良さに嫉妬したんだろ？」

「えーと、あの御二人共…」

「……この馬鹿夫婦は一体何なんですか？」

意外と口悪いな、徐庶。

つり目だし気が強そうな感じではあるが。

「まあ冗談はさておき、そろそろ此所から動くか。また黄巾党に襲われでもしたら面倒だからな」

「そうですね。貴方達馬鹿夫婦はどうするんですか？」

…… 本当に容赦ないな、徐庶。

「俺達二人は、この先にある街に用があるんだ。腕の良い武器職人が居ると聞いて、その人に秋絃の武器を作って貰いたくてな」

「噂で聞いたただだから本当かどうかは分からないがな。あと、変な物を作るのが得意だとか聞いたな」

「変な物？俺も初耳なんだが」

「言ってなかったつけ？具体的にどんな変な物を作っているかまでは聞かなかったけど、とにかく変な物も作っているらしい」

「へ」

「（この先にある街に居る腕の良い武器職人で変な変な物も作っている……もしかして真桜の事かな？）」

「まあ、取り敢えず俺達も君達に着いて行くよ。心配だしな」

「それは有り難い申し出です。では早速行きましょうか。楽進さん」

「（真桜って、そんなに有名なのか？）」

「楽進さん？」

「へ？あ、す、すみません。少し考え事をしています。何ですか？」

「そろそろ街に向けて出発します。紫苑さんと太史慈さんも一緒に着いて来てくれるそうです」

「本当ですか！？」

「あ、ああ」

何故そんなに食い付く。

「あの……！歩きながらで構わないので幾つか質問に答えて頂けませんか！？」

「まあ、答えられる事なら」

「ありがとうございます！徐庶殿、早く準備をして出発しましょう」

「は、はい」

徐庶の手を引っ張って馬車へ向かう楽進。

「何なんだ一体……」

「はあ……」

「何だよ、秋絃。溜め息なんかついて」

「いや、また紫苑が女を誑しこんだのかな」と。後ろから雪蓮に刺されても知らないぞ？」

「人聞き悪い事を言うな。そんな暇なかっただろ」

「まあ、そりゃそうだが……紫苑なら戦の最中でも女を口説き落としそうな気がするな」

「お前の中で俺はどういう認識だ」

「んー……強い奴と戦うのが好きだけど女相手は苦手で、女に甘くて、女誑しで……」

女誑しって、騙したり言葉巧みに誘惑したりして女性を弄ぶ男性の事を指す言葉だった気が……。

「冗談だよ冗談。そんな顔するなって。女誑しは言い過ぎかもしれないけど女好きではあるだろ？」

ニヤニヤして言うなよ。

「……否定はしない」

女が嫌いな男なんて滅多にいないだろ。

可愛い女の子なら尚更な。

「馬鹿夫婦の御二人！出発しますよ！」

「分かった！今行く！後、いい加減、馬鹿夫婦は止めてくれ！」

「分かりました！」

本当に分かったのかよ…。

・
・
・

「紫苑殿」

「楽進か。どうした？」

「先程言った通り幾つか質問があるのですが良いですか？」

「ああ」

「お二人は、この先の街にいる武器職人に会いに行くと仰られてましたよね？」

「ああ」

「その武器職人の名前は分かりますか？」

「いや、俺は分からない。秋絃から聞いただけだから」

「太史慈殿は分かりますか？」

「ああ。たしか李典って言ったかな」

「やはりそうですか」

「知り合いか？」

「はい。私の友人です。武器を作るよりは絡繰……太史慈殿が言うところの変な物を作る方が好きだと言ってますが」

「同じ街に住んでるのか？」

「はい」

「なら、楽進達が向かっている街と俺達が向かっている街は同じという事か」

「そうなりますね」

「へー。こういう事もあるんだな。なら、悪いが楽進から俺の武器を作って貰えるよう、李典に頼めないか？」

「はい、それぐらい御安い御用です。お二人は命の恩人ですし、太史慈殿なら真桜……李典が作った武器を大切に使うと信じています」

「ああ、大切に使うと約束するよ」

「はい、お願いします。それで次の質問なんですが、えっと……」

「どうした？」

「……お二人の關係は徐庶殿が言っていたように夫婦なのですか？」

「今は未だ夫婦じゃないが、いずれ夫婦になる仲だ。なつ、紫苑」

「まあ平和になってからだけだな」

「そうですか」

「ちなみに、今のところ妻になる予定の者は五人居る」

「五人もですか！？」

「うおーい！何か増えてないか？」

「増えてないだろ。俺に雪蓮に冥琳に祭に穩で、ほら五人」

「後ろ三人は違うだろ」

「冥琳や祭や穩は嫌いかな？」

「そんな事ねえよ。むしろ好きだ。けど俺の気持ちは置いておくとして、確かに三人とも好意を寄せてくれているけど、夫婦になるほどの好意を俺に抱いてるかどうかなと言ったら微妙だろ」

「そうか？俺からすれば三人共十分脈有りだと思うけどな。まあいいや。取り敢えず二人は確定だ」

「やはり紫苑殿みたいに強くて格好良い方はモテるんですね」

「……………ほう。楽進も紫苑の事を格好良いと思ったんだな」

「えっ、いや、それは、あの、あくまで一般的に見ればという事で、私がどうこうという話では、第一、多くの女性を取っ替え引っ替え相手しているような不誠実な男性は好みじゃないですし…！」

「不誠実……………」

ちよつとシヨック…。

「ああつ、すみません。別に紫苑殿が不誠実というわけではなくて、あくまで一般的には、そういう男性は不誠実な人が多いと言いたかっただけで…！」

「いや、まあ否定しきれないしな…」

「くつくつくつ」

「笑わないで下さい！そもそも太史慈殿が茶化してきたから…！」

「あー、はいはい。悪かった悪かった。この話は終わり！」

「全く……………。本当にすみませんでした、紫苑殿」

「もういいって。会ってからそんなに時間は経ってないけど、楽進が真っ直ぐで素直な良い子だっていうのは分かったから」

楽進の頭を撫でる。

「あ、ありがとうございます」

「（楽進、顔真っ赤…。そういう所が女衒しだって言うんだよ）」

「何だよ、秋絃。何か言いたそうだけど」

「別に」

「……あつそ。他に何か聞きたい事はあるか、楽進」

頭を撫でるのを止めて聞いてみる。

「あ、はい。黄巾党との戦闘に入られる前の事についてなんですが、馬車の周囲に壁みたいなのを作られましたよね？あれは妖術と呼ばれる類いの物ですか？」

「いや、あれは氣だ」

「氣ですか？」

「ああ。楽進も氣は使えるだろ？氣弾使ってたし」

「たしかに氣弾は使えますが、あのようなこと私には出来ません。誰に習ったのですか？」

「俺は師匠に習った。楽進は？」

「私は独学です」

「独学か……凄いな」

「いえ、それほどでもありません。……さっきの技、私にも出来るでしょうか？」

「うゝん、正直分らない。師匠が言うには、氣の扱いは個人の先天的な資質による所が大きいからな。俺が出来るからって樂進も出来るとは限らない」

「そうですか……あの！」

「ん？」

「もしよろしかったら街に滞在してる間だけでも構わないので氣について教えて頂けますか？私、もっと強くなりたいんです！」

「んゝ、人に教えたい事ないし、上手く教えられるかどうか分からないけど、それでもいいか？」

「構いません！」

「分かった。ならよろしくな」

「はい！よろしく願います！」

ふむ、やっぱり真面目で素直な子だな。

「他に質問は無いか？」

「はい。もう大丈夫です」

「よし。さてと、街までは後どれくらい…」

「楽進さん、紫苑さん、太史慈さん」

「おつ、徐庶か」

「そろそろ街に着きます」

「分かった。街に着いたら宿を探さないとな」

「だな。俺は宿を確保した後は李典の所へ行く。案内頼んだぞ、楽進」

「はい」

「（ジーーーー…）」

「何だよ、徐庶」

徐庶が俺と秋絃を交互にじーつと見てる。

「……黒い格好をした男女二人組……男は細身の剣……女は大剣……圧倒的な強さ……もしかして……」

何か徐庶がぼそぼそ呟いている。

「あの、お二人に御聞きしたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ああ」

「“黒き霆”と“黒き暴風”と呼ばれている男女二人組とは御二人の事ですか？」

「……何を言ってるのか分からな……」

「まあ、最近そんな風に言われてるな」

「って、おい！俺が誤魔化そうとしているのに何故ばらす！？」

「別に良いじゃんか、隠す様な事じゃないし」

「黒き霆に黒き暴風……私も聞いた事があります。ここ一ヶ月近くの間に関くようになった、黄巾党に襲われている村や人達を無償で助けるという男女二人組ですよね？」

「はい。元々は、黄巾党内部で使われていた最近荊州付近で黄巾党に対して攻撃を仕掛けてくる要注意人物二人組を指す言葉だそうです。街を襲っていた黄巾党が、攻撃を仕掛けてきた男女二人組に対して“黒き霆が来たぞー！”“黒き暴風が来たぞー！”などと叫び慌てふためていてそうで、偶々その街にいた商隊が、黄巾党を追い払ったあと特に報酬などを要求する事もなく街を去った男女二人組を素晴らしいと思い、黄巾党が叫んでいた通り名らしきものと合わせて他の村や街で広めたらしいです。ただの噂だと思っていましたが、本当だったのですね……」

「でも、それなら何故隠す必要があるのですか？誉められこそすれ責められるような事ではないと思います……」

「いや、実際には食事を御馳走になったり旅に必要な物資を安く譲

り受けてたりするから無償っていうわけじゃないし…」

「命の恩人に対して何か礼をしたいと思うのは当然の事です。それぐらいならば誰も責めないでしょう」

「徐庶もそう思うよな。折角だから黄巾党と戦う時に名乗ろうぜって言ってるんだが、何故か紫苑は了承しないんだよな」

「二つ名とか通り名とかそういう感じのは何か恥ずかしいと言うか…」

中二病はとっくに卒業したんだ。

「……先程の名乗りを参考にすれば“黒き霆・黒霆院紫苑、推して参る！”とかになりますよね？」

「まあ、そうだな」

「……“紫苑様華麗に参上！”よりは遥かにマシだと思いますが」

「ぐっ…いや、あれはノリでつい…」

「自分に“様”付けて何処の貴族ですか、貴方は」

いや、彼は元貴族でな…。

「しかも華麗じゃないですし。どちらかと言うと豪快の方が合ってます」

いや、原作では華麗……華麗でもなかったけど。

「あれだけノリノリで名乗っておいて、今更恥ずかしいも何もないでしょう。黒き霆の方が幾分かマシです」

「……仰る通りです」

「よし。なら、紫苑も納得したし次からは名乗るか」

「ヤー」

「あの……何故“黒き霆”“黒き暴風”と呼ばれているのですか？」

「俺や秋絃の戦い方からじゃないか？秋絃は大剣を振り回し周囲の敵を薙ぎ払う。距離を詰めれば吹き飛ばされ、距離を取っても秋絃から近づいてきて吹き飛ばされる。その様子が、さながら局地的な暴風が発生したみたいに見えるから“暴風”って言われているんだと思う。“黒き”は黒い服を着てるからだろうな」

「紫苑の場合は、まず始めに指揮官を狙う。邪魔する奴を全員薙ぎ払いながらな。敵陣を高速で一直線に突き進む様子が“霆”（激しい雷という意味）に例えられたんだろうな。“黒き”の部分に関しては私と一緒にだな」

「成る程。そういう意味ですか。……そう言えば」

楽進が徐庶の方を見る。

「何ですか、楽進さん？」

「いえ、徐庶殿も黒い格好をしていると思ひまして」

「そついやそつだな」

「たしかに黒いな……」

徐庶の格好は、黒い帽子に丈が短い黒のワンピース、黒のオーバーニースックスといった出で立ち。

絶対領域が眩……ゲフンゲフン。

長い髪を後ろで三つ編みにしていて、先端には蝶の形をした黒いリボンが付いている。

ちなみに楽進も同じ様な感じの髪型だ。

帽子はアレだ、シルクハットのクラウンを短くして簪を長くした様な感じの帽子なんだけど、何て言うんだっけ……何処ぞの仕事の過程が楽しめればそれでいい最強最悪の運び屋さんが被っている帽子に非常に似ているんだが……駄目だ、分からん。

「よし。じゃあ今後は徐庶も“黒き雨”とでも名乗ろうぜ。何故、雨かと言うと弓矢を使っているか……」

「嫌です、格好悪い」

「……………」

おいこら徐庶、秋絃が落ち込んでるぞ。

っか、

「お前、自分が格好悪いと思うようなのを人に名乗れと言ったのかよ」

「そうですけど、何か問題でも？」

この野郎……。

「徐庶殿！楽進殿！門に着きました。確認作業の為、此方へ来て頂けますか？」

「あ、はい！分かりました！今行きます！では、また後ほど」

「紫苑殿と太史慈は此所で暫く御待ちください。それでは」

馬車の業者に呼ばれ門の方へ走っていった。

「……楽進は素直な良い子だけど、徐庶は一癖ある感じだな」

「……そうだな。……なあ、紫苑」

「何だ？」

「あの小娘の尻、百回ぐらい平手打ちしていいか？」

「……百回は可哀想だから五十回ぐらいで勘弁してやれ」

「分かった」

その後、街へと入り、何やかんやと理由を付けて楽進に加え徐庶も一緒に宿探し。

見つけた宿で部屋を取り、何やかんやと理由を付けて二人も一緒に部屋へ上げた。

部屋に入った後は、秋絃の平手打ちが徐庶の尻に炸裂。

半泣きの徐庶を置いて、秋絃は楽進と一緒に李典に会いに行った。

俺は頭でも撫でて慰めようと思い、徐庶の頭を撫でてみた。

徐庶の事だから拳でも飛んでくるかと思ったがそんな事は無く、膝の上で大人しくしている徐庶を見て可愛いと思う俺だった。

第12話 身体に傷を持つ少女と心の傷を抉る少女 (後書き)

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

長え！

今までで最長です。

そして新オリキャラ登場です。

弓使いです。

が、次話で変わるかも…。

馬車を守る為に使った技。

これのせいで次話の構成が大変な事になっています。

行き当たりばったりでやるからこついう事に……。

今更ですけど、四振り作つたのに一振りしか使っていない刀…。

行き当た r (r y

その内、使う予定です。

サブタイトルと話の内容が合っていない気がします、気にしないで下さい。

サブタイトル考えるのムズい…。

前話の後書きで書いた通り、小説タイトルを変更しました。

『真・恋姫†無双〜黒き刃〜』改め『真・恋姫†無双〜黒き霆〜』
を今後ともよろしく願います。

- - - - -

小説とは関係無いですけど、地震の影響がヤバいですね…。

前話投稿時の甘く考えていた自分にデンプシーロールからのカウ・ロイからのジャーマン・スープレックスからの腕挫十字固を喰らわしてやりたいです。

幸いな事に自宅も職場も停電にはなっていませんが（停電になって
いる地域の方々、すみません…）地震酔いが続いています。

まあゲームに熱中している間や音楽聞いている間、仕事中は問題無いのですが、就寝時に揺れてるような感じがするんですよね。

なので最近ヘッドホンをして音楽を流したまま寝てます。

読者の皆様も体調を崩さないよう御注意下さい。

- - - - -

現在の執筆状況：

第13話↓三割

第XA話（反董卓連合・シ水関戦）↓七割程度

第XB話（反董卓連合・虎牢関戦）↓七割程度

第XC話↓七割程度

次話が完成していません…。

というわけなので、次回の更新は一応2011年4月2日の予定ですが、9日になる可能性も半々ぐらいです。

第13話 黄巾党襲来・壱（前書き）

《前話の簡単なあらすじ》

秋絃の新しい武器を作るべく、腕の良い武器職人が居るとの噂がある街を目指し旅をする紫苑と秋絃

← 黄巾党に襲われている徐庶と楽進を助ける

← 楽進の住む街が目指す街だったので一緒に行く事になった

第13話 黄巾党襲来・寺々

「師匠——！」

《ドガッ》

楽進の右ストレートが俺の左頬にヒット！

「楽進——！」

《ペシッ》

俺の激弱右平手打ちが楽進の左頬にかすりヒット！

「師匠——！！！」

《バキッ》

楽進の右フックが俺の左頬にヒット！

「楽進——！」

《ペチッ》

俺の激弱右平手打ちが楽進の左頬にかすりヒット！

『流派！』

「黒霆院流は！」

「覇者の風よ！」

「疾風！」

「迅雷！」

『天魔深淵！見よ！ 東方は赤く燃えている！』

ふっ……やりきったぜ。

「……………お二人は何をしているのですか？」

「おっ、徐庶か。どうしたんだ？」

楽進と熱い（かどうかは微妙な）殴り合いからの、拳を突き合わせたの掛け合いをしていると徐庶がやってきた。

今居る場所は街の一角にある広場。

裏通りにあるから人はそんなにいない。

「太史慈さんから御二人が此所で修行をしていると聞いたので様子を見に来ました。それで、お二人は一体何をしていたのですか？」

「今のは修行に入る前の儀式だ。何事も形から入るのが大事な気がしなくもないからな」

「はあ……何故、楽進さんは結構本気で殴っているのに紫苑さんは軽く叩くだけなんですか？」

「いや、本来は御互いに全力で殴り合うものなんだけど、楽進を全力で殴るなんて俺には無理だから」

「まあ、まだ出会ってから数日程度ですが、紫苑さんが女性に甘いのは十分承知していますし、当たり前と言えば当たり前ですね」

「そういうこと」

楽進と徐庶に出会ってから一週間。

俺は今、楽進と氣の修行を始めようとしていた所だ。

さっきのは、修行を始める前にテンションを上げる為の儀式的なもの。

伐折羅な赤い師弟と、巨大機動兵器を生身で壊す師弟を参考にした。

掛け合いの方の台詞は適当に語呂が良いのを並べただけだけど。

前の世界に居た時に気になって調べてみたけど、掛け合いの台詞で使われている単語の意味は分からなかった。

たぶん造語。

ちなみに、楽進には戦闘時に装備していた手甲を外してもらっている。

あんなので殴られたら痛いし、下手したら齒の二、三本ぐらい折れそうだからな。

「で、修行は順調なのですか？」

「いや、正直微妙。あんまり上手くいってない」

「役に立ちませんね」

やれやれと言った感じで、肩をすくめる徐庶。

「仕方無いだろ？人に教えた事なんて無いし、俺だって修行中の身だし」

街に着いた日は、そのままグータラ過ごし、その次の日から修行を始めている。

…のだが、言った通りあまり芳しくない。

取り敢えず、氣弾を散弾みたいに放つのと、身体や手甲（閻王という名前らしい）に氣を纏わす事は出来るようになったが、それ以上は現状では出来ていない。

どうしたものか……と、思っていると、

「そんなことはありません！たしかに、この前の戦闘で師匠が使った技は未だ出来ませんが、確実に強くなっていると実感出来ています！」

握り拳を作り熱く語る樂進。

「樂進……！」

「師匠……！」

「楽進……！」

「師匠……！」

《バギッ》

「ぐはっ！」

楽進の右ストレートが俺の左頬にクリティカルヒットした。

「す、すみません！つい……」

「いや、ナイス一撃だった」

そう言い右手の親指を立てる。

勿論、親指は上向きだ。

「“ないす”？」

「俺の国の言葉で“見事な”という意味だ」

俺が、この国の人間じゃない事は楽進と徐庶にも伝達済みだ。

「つまり、先程のは“見事な一撃だ”と誉めて下さったのですね？」

「ああ」

「師匠……！」

「樂進……！」

《ガッ！》

くの字に曲げた右腕同士で熱く握手をする。

「あの……お二人だけで盛り上がっている所をすみませんが、いいですか？」

呆れた様な顔をした徐庶が訪ねてくる。

「何だ？」

「何ですか？」

「何故、樂進さんは紫苑さんの事を師匠と呼んでいるのですか？」

「師匠がそう呼ぶようにと」

「俺も師匠からそう呼ぶようにと言われたから、樂進にもそう呼ぶようにと。まあ、ぶっちゃけ俺が師匠と言われたかったただけけど」

「そうですか。まあ、別にいいですけど」

興味無さげに広場の隅にいる猫に眼を向ける徐庶。

興味無いなら聞くなよ。

「そついや、秋絃の方の武器作りはどくなってるんだ？」

「順調だそうですよ。今日にも完成するそつです」

「という事は……」

「……そろそろ御別れという事ですね」

「そつなるな……」

顔を俯ける楽進。

「楽進さん……」

「……なあ楽進。別に俺達の旅はそんなに急ぐようなものでもないし、少しぐらいなら出発を延ばしても……」

「……師匠！」

「ん？」

「短い間でしたが本当に御世話になりました！氣については一通り教えて貰ったので後は自分一人でも大丈夫です！師匠みたいに強くなれる様、日々精進していきます！だから、私に氣を使わず出発して下さい！私のせいで師匠と太史慈殿の旅を中断させたくはありません！」

笑顔で元気良く宣言する楽進。

……やっぱり楽進は良い子だな。

「分かったよ。なら時間が勿体無いし早く修行を始めるか」

「はい！」

「それじゃあ、まずは模擬戦からだな」

「はい、師匠！」

《カチャカチャ》

閻王を装着する楽進。

「模擬戦？」

徐庶が首を傾げる。

「俺は素手での戦闘も出来るからな。氣の修行を始める前に小一時間程やってるんだ」

「楽進さんみたいに手甲は装着しないのですか？」

閻王を指差す徐庶。

「氣で身体を覆えば、そこら辺の雑魚の斬撃を弾くぐらいは余裕で出来るから必要無し」

「氣でそんな事も出来るのですか」

「ああ。怪我や病気を治したりなんか出来るぞ」

「凄いですね……後で詳しく教えて頂けますか？」

「楽進との修行が終わってからでいいか？」

「はい、構いません。今日は特に予定も無いですし、見学していてもいいですか？」

「ああ。楽進も構わないよな？」

「勿論です」

「ありがとうございます」

礼を言って俺達から距離を取り、広場の端に重ねて積んである木材の上に座る徐庶。

……。

「徐庶ー」

「何ですか？」

「下着が見え……」

《カンッ!》

素早く立ち上がり矢を射ってくる楽進。

「…………ぶち抜きますよ?」

射った後で言わないでくれ。

擦っただけだ…。

「…………すみませんでした」

「全く…」

俺のせいだよ。

折角教えてやったのに…。

ちなみに色は白だっ…

《カンッ!》

「今、何か邪な事を考えていませんでしたか?」

「よし、始めよう! 慎ましくな」

「え? あ、はい!」

「(ジーーーー)」

「行きます!」

構える楽進。

「来い！」

それに呼応するように構えを取る俺。

「（ジーーー）」

徐庶に睨まれながら模擬戦を開始した。

・
・
・

「楽進。日も落ちてきたし、そろそろ終わりにしよう」

模擬戦を終え、氣の修行をしている楽進に声を掛ける。

まあ模擬戦を終えたのは随分前だが。

しかし、結局今日も進展は殆ど無かったな…。

「楽進さん、今までの修行の時間も今日と同じぐらいですか？」

「はい、そうですけど」

修行を観戦していた徐庶が此方へ歩いてきて楽進に話し掛ける。

ちなみに、修行時間は休憩を挟んで六時間ぐらいだ。

「成る程。そういう事ですか」

一人納得した様子で、うんうんと頷いている徐庶。

「どうかしたのですか？」

「いえ、于禁さんが李典さんも樂進さんも付き合いが悪いと愚痴を言っていたので」

「そういえば、ここ最近は遊んだりしていませんね。一緒に仕事をしたり夕食を食べたりはしてますが」

今度は于禁か…。

今更だけど、この世界に来てからの武将遭遇率はヤケに高いな…。

何でだろ？

「李典さんも太史慈さんの武器造りが忙しいみたいですからね」

「そうですか……あの、紫苑殿」

「何だ？」

「今日は一緒に夕食を食べませんか？お別れする前に親友二人を紹介しておきたいのです。紫苑殿は李典とも会っていませんよね？」

「ああ。李典とはまだ会ってない。食事の件は勿論構わないぜ。断る理由が無いからな」

「ありがとうございます。徐庶殿も来ますよね？」

「はい。お邪魔でなければ御一緒させて頂きます」

「勿論大歓迎です」

徐庶の手を取り笑顔でそう言う楽進。

「なら、取り敢えず俺と徐庶は宿に戻るから後で呼びに来てくるか？」

宿の方向を親指で指差す。

「はい、分かりました」

そう、実は徐庶と一緒にの宿に泊まっているのだ。

徐庶はこの街の住人ではなく俺達と同じ旅人で、見聞を広める為に一人旅をしていたのだが、黄巾党が活発に動き出すようになった二ヶ月ぐらい前から此処で様子を見ているのだそうだ。

弓を扱えるとは言え、黄巾党が跳梁跋扈している中での女の子の一人旅は危険極まりないからな。

まあ、仮に黄巾党が存在していなくても、女の子の一人旅は危険だと思うが。

「紫苑さん」

「ん？何だ、徐庶？」

徐庶が畏まった様子で話し掛けてきた。

「紫苑さんと太史慈さんに御願いがあるのですが」

「お願い？」

「はい。紫苑さん達は太史慈さんの武器が完成したら、また旅に出るんですよ？」

「ああ」

「……私も一緒に連れて行ってくれませんか？」

上目遣いで不安げに聞いてくる徐庶。

うむ、やはり可愛いな。

性格は若干アレだけど。

「俺は別に構わないよ。秋紘も苛める相手が出来て喜ぶだろ」

「むっ……それが唯一の懸念ですね」

嫌そうな顔をする徐庶。

「徐庶殿も行かれるのですか？」

「はい。始めは数日程度の滞在予定でしたが、黄巾党のせいで街から出るに出れずで約二月。楽進さん達には大変お世話になりました。ですが、私もそろそろ旅を再開したいと思ひまして」

「そうですか…」

「紫苑さん達に会ったのも何かの縁。お二人と一緒にならば黄巾党が暴れ回っていようが関係無く旅をする事が出来るでしょう。ですが、この機を逃せば次は何時になる事やら…。黄巾党が壊滅するまで少なくとも半年は動けないでしょう。そして、黄巾党が壊滅した後も平和になるとは限りません。今現在、朝廷の内外には数多くの火種が有り、それらは高確率で黄巾党の乱を切欠に激しく燃え上がる事になるでしょう。国全体を巻き込む程に…。そうなってからでは見聞を広めるといふ旅の目的を達成する事が困難になります」

真剣な眼差しで語る徐庶。

「徐庶殿が決めた事ですから、私に止める資格はありませんし止めるつもりもありません。ですが……寂しくなりますね」

悲しそうな表情を見せる楽進。

「私も楽進さん達と別れるのは名残惜しいです……。ですが、今生の別れというわけではありません。きっと、また会う機会が有ります。機会が無ければ作ります」

また会いに来ると笑顔で楽進に言う徐庶。

「徐庶殿…」

「俺と秋絃も必ず会いに来る。だから、そう落ち込むな」

「紫苑殿……そうですよね。また会えますよね」

「ああ（ナデナデ）」

「あっ……」

楽進の頭を撫で撫で。

くすぐったそうに眼を瞑る楽進。

「……女誑し」

徐庶が呟く。

「失礼な。誰が女誑しだ」

「さあ？一体誰でしょうね？」

「……（ナデナデ）」

何かムカついたので徐庶の頭も撫でる。

帽子越しだけど。

「……まあ悪くはないですね」

あれ？思ってたのとは違う反応が……まあいいか。

「楽進ちゃん！ようやく見つけた！」

「ん？」

二人の頭を撫でていると見知らぬ女性が慌てた様子で走ってきた。

取り敢えず、二人の頭を撫でるのを頭を止める。

「楽進、知り合いか？」

「はい。隣に住む張延さんです。張延さん、何かあったのですか？」

「大変なのよ！東にある街が黄巾党に襲われたって！それで、その黄巾党が明日にでも此所に来るって言うのよ！」

「なっ……それは本当ですか！？」

「勿論よ！さつき東の門に着の身着のままで怪我とかをしてる人達が数十人来たのよ！で、何かと聞いたら黄巾党に襲われたって！今、長老達がどうするか話し合っているわ！」

身振り手振りで大変さを伝える張延さん。

「くっ……！紫苑殿と徐庶殿は宿に戻って太史慈殿にこの事を伝えて下さい！私は長老達の所へ行きます！」

そういつて走り出す楽進。

速っ！

あっという間に姿が見えなくなる。

取り敢えず追うか。

「徐庶！俺は樂進を追う！秋絃への伝達は任せた！」

「分かりました！」

宿へと走り出す徐庶。

「張延さん！長老達は何処にいますか！？」

樂進に伝える事を伝え一息着いている張延さん（推定四十歳）に聞いている。

「え！？ちょ、長老達は東大通りにある長老宅の前に集まっているわ。此所からだ中央広場に出てから右手方向よ」

「ありがとうございます！」

全く…タイミングが良いのやら悪いのやら…。

・
・
・

人が沢山集まっている。

この辺りか…。

しかしピリピリしてんな…。

まあ仕方無いと思うが…。

つと、見つけた！

数十人の大人達に混じって話をしている。

「楽進！」

「紫苑殿！？太史慈殿に伝えに言ったのでは…」

「そっちは徐庶に任せた。詳しい状況を教えてくれ」

「は、はい！えっと…」

「楽進や。その方は一体どなたかの？」

「長老！」

立派な白い髭を蓄えた老人が楽進に話し掛けてきた。

「この方は、この前私達を助けてくれた旅の方です」

「おお、貴方が楽進達を助けて下さった方ですか。その件では世話になりましたな」

「その話は後です。黄巾党が攻めてくるそうですね」

「うむ。困った事になったものじゃ。この街に逃げてきた方々の話を聞くに、明日の朝にはこの街に来るでしょう」

「数は分かりますか？」

「正確な数は分かりませんが、数百人という規模で収まる数ではなく、数千人規模との事です」

多いな……。

「どうするおつもりですか？」

「取り敢えず、陳留の州牧で有らせられる曹操殿の元に早馬を送りましたが、着くのに二刻以上は掛かるでしょう。曹操殿は良い為政者でありますから必ずや助けに来てくれると信じております。軍が来るまで我等は四方の門を閉じ、防柵などを街の中に設置し耐えるつもりです。本当なら女子供だけでも逃がしたいのですが、生憎、街の外も危険なのは同じ。しかも、これから夜になりますからな」

二刻以上、つまり陳留に着くのは夜遅くか……その時間だと大軍を動かすのは難しいだろうから取り敢えず先遣隊を送り、朝方早くに本隊を送るといった感じだろうな……黄巾党が攻めてくるのが先か軍が到着するのが先か……。

「長老、明日の朝にでも黄巾党が攻めてくるとの事です、仮に軍の到着より黄巾党が攻めてくるのが早かった場合、本当に耐えられるのですか？」

「形だけではありませんが、我が街では義勇軍を結成しております。何とか耐えましょうぞ」

『（コクン）』

周囲の人達も頷く。

……強いな、この人達は。

「分かりました。なら俺達も協力します」

「紫苑殿!？」

「……お気持ちは有り難いですが、軍が間に合わない可能性もあります。この街の者ならいざ知らず、旅の御方を危険に晒す訳には……」

「長老、貴方が言った通り街の外も危険です。ならば、この街に留まったとしても同じでしょう。とにかく、俺達……少なくとも俺はこの街の人達を守るのに協力します。まあ、連れも協力してくれると思いますが」

「ふむ………」

眼を瞑り考え込む長老。

「……分かりました。なら、申し訳ないのですが指揮を取ってもらえないでしょうか。義勇軍がおるといっても実際の所は素人に毛が生えた程度の集まり。こういった事態に慣れてる者がいないもので……」

「分かりました。自分でよろしければ承りましょう」

「ご協力感謝します」

頭を下げる長老。

「紫苑殿……本当によろしいのですか？」

樂進が心配そうに話し掛けてくる。

「勿論だ。戦に巻き込まれようとしている罪無き人達を見捨てわけにはいかない」

「紫苑殿…」

「それに此処には樂進もいるしな」

ポンポンと樂進の頭を軽く叩く。

「あう…」

「……ふむ。どうやら随分と樂進が懐いているようだな。樂進は真面目で素直な良い子です。嫁にでもどうでしょうか？」

「オオ…！」

周囲がざわつく。

「ち、長老！？いきなり何を言っ…！」

「まあ樂進なら自分も大歓迎ですが…」

「紫苑殿まで何を言い出すんですか！？」

「樂進は俺じゃ不満か？」

じっと眼を見つめて問い掛ける。

『何や、あの兄ちゃん随分と女慣れしてる感じやの〜』
『いやいや、若い者はあれぐらい積極的に行かないと』

うるさいぞ、周囲のオッサン達。

「えっ、いや、そんな事はないですけど、でも、まだ会ってから幾日も経っていませんし、真名すら教えていませんし、それにそれに」

「冗談だ、冗談。さてと、ちゃっちゃか準備しますか」

「……………」

《カチャカチャ》

「?」

楽進が何故か右手の手甲を外している。

あ、作業がしづ…

《ゴスツ》

「ぐはっ…!」

楽進の右アッパーが俺の顎にスーパークリティカルヒット!

「な、何故…」

「知りません!」

『ハハハハ！』

からかい過ぎたかな…。

まあピリピリした空気が少しは和らいた気がするからいいか。

「長老も変な事を言わないで下さい」

「ふおっふおっふおっ。すまなかった。張り詰めた空気を吹き飛ばす為のジジイのちょっとした茶目っ気のつもりだったんじゃないかのお」

髭を弄りながら笑う長老。

やっぱりそういう狙いか……

話が突然過ぎたしな。

まあ、そんな感じだろうな〜と思ったから乗ってみただけ。

しかし、長老は意外とフランクだな。

「そんな茶目っ気要りませんから！」

『ハハハ…』

「（ギロリ）」

『……………』

楽進が睨むと一斉に静かになるオッサン達。

いい大人が情けないぞ。

「全く揃いも揃って…」

楽進は少し真面目過ぎな気もするな。

こういう時は心に余裕を持った方が良いと思うんだが…。

「紫苑さん！楽進さん！」

「紫苑！楽進！」

「凧ちゃん！」

「凧！」

ん？この声、徐庶と秋絃か？と思っていたら姿が見えてきた。

「やっぱり徐庶と秋絃……と誰だ？」

徐庶と秋絃と一緒に知らない女の子が二人駆けてくる。

眼鏡を掛けた金髪の女の子と、紫髪の女の子だ。

金髪の女の子は、何て言うか御洒落だな。

一方、紫髪の女の子は凄い格好をしている。

年頃の女の子がああ格好って恥ずかしくないのか？

つか、あの手を持っているのは何だ？

ドリル？

「沙和！真桜！」

「知り合いか、楽進？」

「はい。先程話した于禁と、太史慈殿の武器を作っている李典です」

「そうか」

「聞いたで、凧！何や大変な事になったな」

「凧ちゃん、黄巾党が襲ってくるって本当なの？」

李典と于禁が楽進に駆け寄る。

“凧”って言うのが楽進の真名か。

「ああ。ほぼ間違いない」

「ふええ、どうするの？凧ちゃん？」

「軍が来るまで街に籠って防衛戦って感じた」

「えーと、兄さんは誰や？」

紫髪の子が聞いてくる。

「黒霆院紫苑だ。楽進から聞いてないか？」

「風ちゃん達を助けてくれた人なの！」

此方を指差してそう言う金髪の女の子。

他人を指差すのはマナー違反だぞ。

まあ可愛いから許すが。

「正解」

「おおー、兄さんがそうなんか。うちは李典や。よろしゅうな」

「沙和は于禁なの～。よろしくなの～」

李典が俺の右手を、于禁が俺の左手を握り、二人揃って腕をブンブンと振ってくる。

「よろしく、二人共」

二人と握手をしていると、今まで静観していた秋絃が話し掛けてきた。

「黄巾党が攻めてくるんだってな」

「ああ。数千人規模だそうだ」

「数千人って……何じゃそら！？少し多過ぎやないか！？」

李典は関西弁か…。

何故、この国に…。

「少し……どころじゃなく多いな」

秋絃の眉間に皺が寄る。

「ああ。攻めるなら兎も角、普通に守るとなると数千人はキツイ。軍には救援要請を出したから、楽進が言った通り軍が来るまで街に籠って防衛戦をする事になった」

「防衛戦か……どうするつもりだ？」

「取り敢えず、街中には柵を作って、門の方は閉じた後に結界を張る。出来れば街全体を覆うように囲いたいけど、ちょっとキツイと思う」

普通に守ってキツイなら、普通じゃない方法で守れば良いだけだ。

「まあ、門さえ突破されなきゃ大丈夫だろ」

「たぶんな。……なあ李典」

「何や？」

さっきから気になっている事を聞いてみる。

返事次第では、より守りやすくなるかもしれない。

「その手に持ってるやつなんだけど……」

李典が右手に持っているドリルみたいなものを指差す。

「螺旋槍の事かいな？」

「そう。その螺旋槍つて先端が左右に高速で回ったりするか？」

「おっ！よう気付いたな兄さん。この螺旋槍は氣い流すと高速回転するんや。兄さんも絡繰に詳しいんか？」

眼をキラキラと輝かせる李典。

「いや、それほどでもないけど」

「そら残念やな。折角、絡繰談義が出来ると思ったのに」
シヨボーンとした顔になった。

「まあ、絡繰談義は一先ず置いておいて。螺旋槍で地面に穴を掘る事は出来るか？」

「穴？やろうと思えば出来ると思うけど…」

よし。

「なら、門の外に落とし穴を掘ってくれ。深い落とし穴をな」

「……成る程。たしかに、そうすれば門を破られにくくなるわな」

「そういう事。深さは出来るだけ深くしてくれ。少なくとも、自力

で上がれたり誰かが手を伸ばしたぐらいじゃ助ける事が出来ないくらいに深くな。出来れば人が落ちても大丈夫なように下の方は土を柔らかくしておいてくれ。あくまで門を破らせない為の落とし穴だからな。間違つて街の人達が落ちて怪我されても困るし」

「なあ、兄さん」

「何だ？」

「落とし穴に落ちた黄巾党が横壁を掘つて街中に侵入してくる可能性はあらへんか？」

「その辺の対策もちゃんと考えてある。出来た落とし穴は結界で囲むから」

「結界つて何や？」

「簡単に言えば氣で作った壁だ。楽進を助ける時に使ったやつな。少なくとも丸太の先端に鉄の突起を付けた程度の破城鎚ぐらいなら余裕で防げる」

この辺は以前実験済みだ。

今言つた様に破城鎚ぐらいなら破られる事は無い。

秋絃が攻撃したら破れたが。

強度次第では強い奴なら破れるだろう。

まあ、秋絃でも破れないぐらいの強度にする事も出来るけどな。

勿論、氣の消費量は増えるが。

つか、秋絃の攻撃力>破城鎚の攻撃力かよ…。

しかも、秋絃は全力じゃなかったし…。

「落とし穴を掘る時に出る土についてだが、これは土嚢にして門の内側に積む。落とし穴を掘り終わった門には結界を張る」

「ん？門にも結界言うのを張るなら落とし穴は必要無いんとちゃうか？」

首を傾げる李典。

「念の為だ。さっき言った通り絶対に破れないってわけじゃないし、時間が経てば消えるからな」

「消えるんかい！《バシッ！》」

手首のスナップを効かせてツツコミを入れてくる李典。

お前は関西人か。

「ああ。触れてないと時間経過で消える。門同士は離れてるから全部の門に直接触るのは無理だし、門と俺を氣で繋ぐ事も出来るが、それだと戦いづらいしな」

「お兄さん、誰と戦うの？」

「黄巾党に決まってるだろ」

「街に籠るんとちゃうんか？」

「街の人達はな。あ、言い忘れてたけど、落とし穴を掘るのは東門以外な。東門は餌として使うから」

「紫苑殿、それは一体どういう事ですか？」

「たしかに街に籠っているだけの方が楽だろう。だが、そのせいで黄巾党が略奪不可と考えて他の街に行かれても困る。だから俺は門の外で戦う。東門以外には落とし穴を掘る。当然、門を破るのは難しくなるだろう。その状態で落とし穴が掘られていない東門を見つければ連中の事だ。こぞって東門に集まるだろう。そこを叩く」

「そう言われればそうですが、危険ではないのですか？何千人規模の敵を相手にするなど…」

「大丈夫だよ。あの程度の奴等に遅れを取ったりはしないさ」

「紫苑殿…」

「へー、兄さんホンマに凄いやな。風がべた褒めしてただけはあるわ」

李典が楽進の腕を指でつんつんする。

「なっ…！真桜、何を言って…」

「ええやん別に」

「風ちゃん、可愛い～。照れてるの～」

「武術一辺倒の風にも恋の風が吹いたか…」

二人でキヤイキヤイと盛り上がっている。

「二人共…！」

あ、楽進が怒った。

右腕に氣を溜めている。

「どわあああ！風、それはアカン！此処で氣弾撃ったら大惨事になるで！」

「そ、そうなの～！流石にそれは不味いの～！」

「楽進、落ち着け」

楽進の頭をポンポンと軽く叩く。

「紫苑殿……分かりました」

楽進が腕に溜めていた氣を霧散させる。

「ふいー、助かったわ～」

「寿命が縮んだの～」

腕で額の汗を拭う二人。

「二人へのお仕置きは黄巾党を追い払ってからだ」

「はい！」

良い返事だ。

「ちよっ……！」

「えゝ！？」

大袈裟なりアクションで驚く李典と于禁。

「話を再開しようか」

「無視かいつ！？」

「無視なの！？」

「はいはい、漫才は後でな。今、忙しいから」

二人のツツコミを華麗にスルーする。

「ひどっ……！」

「お兄さん、鬼畜なのゝ！」

「ところで李典」

「何や？」

「螺旋槍に予備ってあるか？出来れば二本ぐらい」

あれば良いんだが、流石にそう都合良くは…。

「あるで。二本」

あるのかよ！

「ただ、両方とも試作品やから戦闘に使うのは無理やで？強度が足らへん」

「落とし穴を掘るのは可能か？」

「岩にぶつかったりしなければ可能や」

「螺旋槍は誰でも使えるか？」

「氣が使えるんなら誰でも使えると思うんやけど…。沙和は使えへんけど風は使えたで」

「よし、なら予備も持ってきて来れないか？李典と樂進と俺の三人で三門同時に落とし穴を掘る。その方が効率が良いからな」

「了解や！風、一人じゃ持って来れへんから手伝い頼むわ」

「分かった。それでは行ってきます」

「頼む」

李典と樂進が螺旋槍の予備を取りに行く。

「秋絃！」

「応」

「たしか夜目が利いたよな？」

「ああ」

「なら東門からの監視を頼む。予想より早く黄巾党が来ないとも限らないからな」

「了解」

東門へと走っていく秋紘。

……さつきから気になってたんだが、あの白い袋は何だろ？
大きさに新しい武器かな？

後で聞けば良いか。

「徐庶！」

「何ですか？」

「街中に防柵を設置する。防柵の設計と指揮を頼めるか？」

「勿論です」

「于禁は徐庶の手伝いを頼む」

「分かったの」

「長老！」

「何ですかの？」

今まで静観していた長老に話し掛ける。

「楽進達とのやり取りは聞かれましたよね？」

「うむ」

「今の案でよろしいでしょうか。まあ既に指示出しちゃいましたけど」

「勿論異論はありません」

「分かりました。取り敢えず、やる事は三つ。一つ目、東門以外の三門の前に落とし穴を掘る事。これは自分と李典と楽進が担当します。二つ目、掘り起こした土を使って土嚢を作る事。土嚢は門の内側に積みます。三つ目、街の東西南北各大通りに防柵を設置する事。出来れば大通りに面している路地にも設置したいですが無理ならば自分が何とかします。街の人達には土嚢作りと防柵作りを手伝ってほしいのですが構いませんか？」

「勿論です。皆の者、聞いておったな！手分けして作業に当たるのじゃ！此処に居らぬ者達にも声を掛けい！街の人間を総動員するのじゃ！」

《オー！》

威勢良く腕を突き上げる街の人達。

「土嚢作りを担当する方は、西門・南門・北門に向かって下さい！指示は後から門に行く自分と李典と楽進に仰いで下さい！防柵作りを担当する方は此所にいる徐庶に指示を仰いで下さい！以上です！」

『男衆は五つに分けるぞ。各門での土嚢作りに防柵用の材料調達、それに防柵作りだ！』

『女子供は土嚢を作る為の袋をかき集めてくれ！』

『俺は南門へ行く！』

『なら俺は北門だ！』

『俺たちは西門だ！』

『空き家を解体して防柵用の資材を調達してくるぜ！』

『街の人達に今話してた事を伝えて来ます！』

長老の言葉を受けて動き出す街の人達。

「頼もしい人達ですね」

「全くじゃ」

……この調子なら大丈夫かな。

「徐庶、此処は頼んだぞ！于禁もな！」

「はい！」

「分かったの〜！」

取り敢えず、楽進達を追うか。

第13話、黄巾党襲来・杏（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

オリキャラ設定を更新しました。

初の前編・後編二部編成です。

…更に長くなった。

以前、描写が足りないとの感想を頂いたので意識して増やしていたつもりなのですが、まだまだ描写不足だったみたいで、再び描写不足との感想を頂きました。

なので、かなり意識して書いてみたのですが、どうでしょうか？

よろしければ、ご感想を。

- - - - -

小説とは関係無いですが、7日の余震は大きかったですね。

読者の皆さま方はご無事でしたでしょうか？

被災地の方々も心配です。

2004年のスマトラ沖地震では、約3ヶ月後に最大余震が発生。

今年2月のニュージーランド地震は、昨年のM7.0地震の約5ヶ月後に発生した余震とみられているそうです。

つまり、今後更に大きな余震が起きる可能性があるという事です。

いたずらに不安がる必要は無いと思いますが、心構えぐらいはしておいた方が良いでしょう。

- - - - -

現在の執筆状況：

第14話↓三割弱

第XA話↓反董卓連合・シ水関戦↓三割

第XB話↓反董卓連合・虎牢関戦↓二割強

第XC話↓三割弱

旧基準（空白・改行・タグを除いて500文字）から新基準（空白・改行・タグを除いて1000文字）に変更しました。

まあ、最初の頃は兎も角、今はあまり意味がありませんが。

次話が完成していません…。

というわけなので、次回の更新は2011年4月23日です。

前回の御知らせで書きましたが（削除してしまったので今は見れません）、これからは二週間に一回程度の更新になると思います。

遅筆な作者で申し訳御座いませんが、これからもよろしく願います。

第14話、黄巾党襲来・弐（前書き）

《前話の簡単なあらすじ》

楽進達の住む街に滞在

←

楽進に修行を着ける

←

黄巾党が襲ってくるとの情報が入る

←

防衛戦の準備を開始する

第14話　黄巾党襲来・弐

「オッサン達！最終確認は済んだか！？」

門の向こうにいる街の人達に声を掛ける。

「応よ！バッチリだぜ！」

「分かった！なら他の所へ手伝いに行ってくれ！俺も直ぐに行く！」

「あいよ！行くぜ、皆！」

《オー！》

防衛戦の準備を始めてから三刻半程。

俺は今、北門の外にいる。

今しがた北門の内側に土嚢を積み終わった所だ。

落とし穴を掘る事自体は四半刻程度で終わったのだが、土を入れる袋が足りなくなり代用品を探したりして時間が掛かった。

既に西門と南門の方は終わっているから、これで東門以外の三門で落とし穴を掘るのも土嚢を積むのも門に結界を張るのも完了した事になる。

門の結界は明日の昼ぐらいまでなら秋絃の攻撃（手加減）にも耐えられるはずの強度にした。

結界の大きさと密度で結構な量の氣を消費したが。

時間が掛かるようなら途中で補強しないとな。

街中の防柵もあらかじめ設置し終わっているので、防衛戦の準備は大体完了。

後は黄巾党を迎え撃つだけだ。

……と言いたい所だが、お客さんか。

北の方角から、それなりの人数の集団が結構な速さで近付いてくる。

馬の蹄の音も微かに聞こえる。

方角的には陳留がある方向だけど軍が到着するには早い氣もするな…。

感じる氣の性質的には軍だと思っただが…。

取り敢えず臨戦態勢に入るか。

黄巾党か……それとも……。

・
・
・

「秋蘭様ー！街が見えてきました！」

「うむ。街は無事な様だな」

松明の火が見える。

特に異常は無いようだし、間に合ったか。

「はい！皆ー！もう少しで着くから頑張ってー！」

『ハッ！』

季衣、もう少し威厳ある掛け声をしてもらいたいのだがな…。

まあ、季衣らしいと言えば季衣らしいか。

ん？

「秋蘭様！」

「うむ」

季衣も気付いたか。

「全軍、止まれ！」

『ハッ！』

『ヒーンー！』

号令を出すと騎馬も含め全軍が止まる。

「秋蘭様、これって…」

「殺気、だな」

この威圧感……姉者に勝るとも劣らないぐらいのものだな。

まさか、街は既に落とされているのか？

それにしても静かすぎる…。

街を落としたならば、もつと騒がしい筈だ。

それに黄巾党の中に、これ程の殺気を放てる強者が居るとは考えにくい…。

……此処で考えていても仕方が無いな。

「秋蘭様、どうしますか？」

「目的の街は目の前なのだ。進むしかあるまい。季衣、警戒しながら進むぞ」

「はい！」

・
・
・

暫くすると、騎馬を含めた集団がハッキリと見えてきた。

……しつかりとした装備をしているし統制も取れている、曹の旗も見えるから軍だな。

殺気を放つのは止めるか。

しかし、思ったよりも早く到着したな。

流石は曹操といった所か。

ん？動きが止まったな。

集団の中から二人だけ此方へ近付いてくる。

若い女性と……小さい女の子？

「その者！私は貴公の後ろにある街から助力を請われた、陳留の州牧である曹猛徳の部下の夏侯妙才と言う者だ」

「同じく曹操様の部下である許仲康です」

「貴公は街の者でよろしいか？」

「街の者っていうか旅人だな。偶々この街に滞在していて巻き込まれたから街の人達に協力をしている」

「そうか。そちらへ行っても構わないか？」

「勿論だ」

夏侯淵に許緒か……随分と大物が来たな。

夏侯淵と許緒が近付いてくる。

ふむ、青髪知的美人に桃髪元気っ子って感じだな。

ていうか、あのトゲトゲ付き巨大鉄球って何？

あの小さい女の子がアレをぶん回すのか？

まあ、いいや。

まずは挨拶だな。

「初めまして。私は黒霆院紫苑と申します。この度は街の救援要請に応じて下さり感謝しております」

「なに、民を守るのは軍として当たり前の事だ。気にする事はない」

「秋蘭様の言う通りです！ボクは許緒だよ。よろしくね、兄ちゃん」

兄ちゃん…？

まあ、いいや（二回目）

許緒が手を差し出してきたので握手する。

「よろしくお願いします、許緒殿」

「私は夏侯妙才だ。よろしく頼む」

夏侯淵も手を差し出してきたので、夏侯淵とも握手をする。

「よろしくお願いします、夏侯淵殿」

「……ふむ。名乗っていない淵と言う名前を口に出したという事は、貴公は私を知っていると事で構わないか？」

やば……つい“夏侯淵”って言ってしまった。

「ええ。夏侯淵殿と夏侯惇殿は曹操殿の腹心の部下であり、優秀な武官である聞いています。あくまで噂ではありますが……」

「おお！流石、春蘭様と秋蘭様ですね！」

「ふむ。私の事はともかく、姉者の事が民に知られているのは嬉しいな」

あまり表情は変わらないが嬉しそうな夏侯淵。

何とか誤魔化せたみたいで良かった。

しかし、夏侯惇も女か。

この世界の有名武将が全員女性である可能性がマジで高くなってきたな。

「夏侯淵殿、許緒殿」

「何だ？」

「どしたの？」

「申し訳御座いませんが私は敬語が苦手なもので、敬語を使わないで話させて頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ボクは全然気にしないよ」

「私も構わない」

二人共、快く了承してくれた。

というわけで、

「改めて挨拶するけど、俺は黒霆院紫苑だ。よろしくな、夏侯淵に許緒。早速だが、街の中に案内するから着いてきてくれるか？」

「あ、ああ。分かった」

夏侯淵は少し驚いた様な顔をしている。

流石にフランク過ぎか？

「皆ー！街の中に入るよー！此方まで来てー！」

許緒は特に気にする事もなく、少し離れた所にいる部隊に声を掛ける。

声デカいな、おい。

見た目通り元気っ子か。

「此方だ。着いてきてくれ」

夏侯淵と許緒に着いてくるよう促し、東へ歩き出す。

「黒靈院、一体何処へ行くのだ？」

夏侯淵が不思議そうに聞いてくる。

そっぴや説明してなかったな。

「東門。北門からは入れないからな」

「北門からは入れない？」

「ああ。門の前まで行ってみな。理由が分かるから。下に気を付けてな」

「？分かった」

「秋蘭様、ボクも行きます！」

北門の方へ歩いていく夏侯淵と許緒。

「これは…」

「落とし穴ですね？」

顔を見合わせる夏侯淵と許緒。

「ああ。東門以外の門の前には、これと同じ様な落とし穴が作つてある。ついでに、落とし穴を作る時に出た土で土嚢を作り、門の内側に積んである」

「成る程。黄巾党が攻めてくるのに備え、街でも準備をしているのか。頼もしい住民だな」

腕を組み頷く夏侯淵。

「ああ。街中には防柵を設置しているし、準備は万端だ」

「……なあ、黒霆院」

「何だ？」

「先程から気になっていたのだが、門が白い壁みたいので覆われているが一体何だ？」

門の方を見ながら問い掛けてくる夏侯淵。

「あつ、それボクも気になってました！」

ピシッと拳手をする許緒。

うーん……口で説明するのは面倒だし分かりづらいだろうから、実際に見てもらった方が早いかな。

「そうだな……。許緒、質問があるんだが構わないか？」

「いいよー」

屈託の無い笑顔で答える許緒。

楽進並に素直な子だな。

「それって許緒の武器だよな？」

トゲトゲ付き鉄球を指差して問い掛ける。

「そうだよ」

「許緒の戦い方って力で推す感じ？」

「うん！こう、バーン！って押し潰したり、ドーン！って吹き飛ばす感じ！」

竹刀を振り下ろしたりバットを振るみたいなジェスチャーをする許緒。

まあ、そうだろうな。

ていうか、その武器じゃそういう戦い方しか出来ないだろうし。

「その武器で門を攻撃してくれないか？」

「ええー！？そんな事したら門が壊れちゃうよ！」

「黒霆院、許緒は見た目は幼いが、黄巾党相手なら数十人を相手に

しても圧倒出来るぐらいの強さだ。あの門ぐらいなら壊せてしまうだろう」

俺の申し出に、口を大きく開けて分かりやすく驚きを表現する許緒に、訝しむ様子の夏侯淵。

「壊れないから思いっきりドーン！とやっちゃって大丈夫だって」

たぶんな。

まあ、破れたら張り直せば良いだけだ。

「秋蘭様あ、どうしたらいいですか？」

「……本当に構わないのだな」

俺の眼をジッと見据え確認を取る夏侯淵。

「ああ」

「……分かった。季衣、頼む」

俺が本気で言っていると感じたであろう夏侯淵が許緒に行動を促す。

「うええ……ボク知りませんからね？」

心配そうな表情をする許緒。

「もし壊してしまったとしても俺が責任持つから」

許緒の頭をポンポンと叩く。

「……じゃあ二人共下がってして下さい」

「ああ」

「うむ」

やってくれるみたいだな。

夏侯淵と一緒に距離を取る。

「……行きます！ちりゃー！ー！！」

《ドゴンッ！》

トゲトゲ付き鉄球を思いきりブン回し壁へ叩き付ける許緒。

「……驚いたな」

口を開けポカーンとした顔の夏侯淵。

一方、許緒は……。

「（ギュッ）」

眼、瞑ってるし。

「許緒ー、眼を開けて門を見てみ？」

「怖くて見れないよ……」

門を壊してしまったか心配で、眼を開けたくないらしい許緒。

「大丈夫だって。なっ、夏侯淵」

「……………」

「夏侯淵？」

未だに呆けている夏侯淵に同意を求める。

「！う、うむ。眼を開けても大丈夫だぞ、季衣」

「……分かりました。（そ、チラッ）！わっ……！本当に門が壊れてない！ねえ、兄ちゃん！一体、どうなってるの？！この門、どんな頑丈な木で出来てんの！？」

興奮した様子で捲し立てるように問い掛けてくる許緒。

「落ち着け。別に門の素材が特別なわけじゃない。門を気で覆って強化してるだけだ」

「木？」

首を傾げる許緒。

「氣」

「その辺に生えてる木？」

……会話が噛み合っていない。

恐らく、俺が言っている“き”と許緒が言っている“き”は漢字が違うはずだ。

「夏侯淵は氣つて分かるか？」

「ああ、一応な。季衣、黒霆院が言っているのは植物の木ではなく、不思議な力の方の氣だ」

「えーと、不思議な方の力の氣つて言われても、ボク分からないんですけど……」

「私も聞いたことがあるだけで、実際に使えるわけではないし、見たことがあるわけでもないしから何とも言えんが……」

「妖術ってやつですか？」

「いや、妖術とは違うらしいが……」

「氣つて言うのは全員が体内に宿しているもので特別な力ってわけじゃないから、訓練すれば許緒でも使えるようになるかもしれないぞ」

「ホントに？」

「ああ。とは言っても、訓練したからといって誰でも使える様になるわけじゃないから、特別な力と言えば特別な力になるけどな」

「へー、そうなんだ」

「まあ、とにかく不思議な力で門が強化されていると思ってくれ」

「うん、分かった!」

分かったのかよ!?

下手したら楽進より素直かもしれないな……夏侯淵も苦笑してるし。

「まあ、取り敢えず氣についての話は終了。時間が沢山あるわけでもないし、そろそろ東門へ行こう」

「はい!」

「うむ」

さて、東門まで行くか。

・
・
・

「黒霆院、聞きたい事があるのだが構わないか？」

「ああ。俺に答えられる事ならな」

東門へ向かって移動中の俺達。

先程まで許緒と話していた夏侯淵が話し掛けてきた。

「街に着く直前に強烈な殺気を感じたのだが、あれは黒霆院のもの

か？状況から考えるに黒霊院以外は有り得ぬと思うが…」

「ああ。集団が近付いてくるのが分かったから、取り敢えず威嚇の為に殺気を放っておいた」

所謂、気当たりだな。

殺気を相手に叩き付けて動きを制限するわけだ。

まあ、効果は相手次第だけだな。

完全に動きを止められる場合もあれば、数瞬しか怯ませられない場合もあるし、全く効かない場合もある。

秋紘みたいに強い奴や訓練された軍人、本能とか欲望とかが理性を上回っている相手には効きにくいな。

黄巾党の場合も逃げ出したり立ち向かって来たりと反応は様々だが、自分達の方の人数が多いからと勢いに任せて突っ込んでくる奴が殆ど。

戦っている内に逃げ出す奴は多いけどな。

「あれほどの殺気、一般人には出せないはずだ。黄巾党が彷徨っている御時世に旅をするという事は、何か武術でも習っているのか？」

「ああ。先祖代々伝わる武術を爺ちゃんから習った」

「そうか。あれほどの殺気を放てるのだ。さぞや強いのだろうな」

「いやいや、俺なんて大して強くないさ」

手を左右に振り、そう答える。

「謙遜するな。私とて武官の端くれだ。身のこなしを見れば分かる隙が見当たらないからな。華琳様に紹介すれば喜んで下さりそうだな」

「ええー、秋蘭様が武官の端くれなら、ボクなんて端くれの端くれの端くれになっちゃいますよー」

「そんな事はないさ。季衣は良くやってくれている。自信を持て。まあ、多少勉強をする必要はあるがな」

「うわ……やぶ…やぶ…藪から棒？でした？」

「それを言うなら藪蛇だろう。やはり勉強が必要だな」

「あはは……」

苦笑いの許緒。

許緒は力は強いが頭はスツカラカンみたいだな（失礼）

「最低限の事は勉強しておかないと、敵の策略に嵌められたりして大変だからな」

「あー、それはそうですよねー。そのせいで華琳様に迷惑掛けたくないですし」

「必要以上に気負う必要は無い。勉強に関しては私や桂花が分かり

やすく教えてやるさ」

「はい」

さつきから気になってたが、華琳って誰だ？

恐らく曹操の事だろうけど。

まあ聞けば分かるか。

「夏侯淵」

「ん？」

「今、夏侯淵と許緒が話している時に出てた名前は真名か？」

「ああ、すまない。その通りだ。曹猛徳の真名が華琳様で、姉者の真名が春蘭、桂花というのは軍師の荀イクの真名だ」

荀イクもいるのか…。

「さつき言ってた紹介したら喜ぶってのはどういう意味だ？」

「まだ黒霆院がどれほど強いかはハッキリ分らないが、私が見る限りでは仕官すれば華琳様は採用して下さるだろう。華琳様は常に優秀な人材を求めていらっしゃるからな。優秀な人材が増えれば華琳様が喜ばれるだろうという事さ」

「仕官ねえ…」

「黒霆院は誰かに仕える気はないのか？」

「今の所はな」

まあ、実際は雪蓮の所に仕官するき満々だが。

「でも、春蘭様や桂花様は反対しそうですよね」

「たしかにな」

「何でだ？」

「二人共華琳様に陶醉していて、男が近付くのを嫌うからな」

「男嫌いかな」

「荀イクは極度の男嫌いだが、姉者は男嫌いというわけではない。というか男に興味が無い。……あまり人に言えるような事ではないが、私も姉者も荀イクもアレなのでな」

アレ？

極度の男嫌い……男に興味がなくて……あまり人に言えるような事ではなくて……陶醉……もしかして……。

「………女性にしか興味がない？」

「まあ、そんな感じだ」

同性愛者かよ。

「許緒もか？」

「にゃ？」

にゃ？

「いや、季衣にそういう趣味は無い。というか季衣にはまだ早い話だ」

「そりゃそうか」

「話が逸れてしまったが、華琳様達も後ほど合流される。黄巾党を追い払った後に、出来れば華琳様と会って話をしてもらいたいのが構わないか？」

「ああ。仕官云々の話は兎も角、曹操と話をさせてもらえるなら願ったり叶ったりだ。俺も曹操がどんな人物に興味あるしな」

「ありがとう。仕官の話は華琳様と話してから考えてくれればいい。少なくとも私は無理強いしない」

「……何か引つ掛かる言い方だな」

「……まあ、華琳様は欲しい物は手に入れる主義の方なのでな」

「……ああ、そう言う事ね。まあ、いずれにしる黄巾党を追い払ってからの話だけだな。そーいや、兵は何人連れて来たんだ？」

「五百人ぐらいだよー」

「何分、連絡を受けた時間が時間なのでな。そう多くは連れて凝れなかった」

五百か…。

「それだけあれば十分だ」

軍が間に合わなかつたとしても守りきれるように準備したしな。

「本隊の数と到着予定時刻は？」

「恐らく五千人程度で、陳留を出発するのが日の出前ぐらい、到着するのは日の出から二刻程度になると思う」

日の出から二刻か…。

「まあ、何とかなるだろ」

「随分と楽観的だな」

「そうか？」

油断は禁物だが、所詮黄巾党だからなあ…。

「大丈夫ですよ、秋蘭様！さっきの門への攻撃見ましたよね？自慢じゃないですけど、ボクは力に自信があります。でも、門にはヒビ一つ入ってませんでした！黄巾党なんか門が破られるはずないです！それに今から暗くなっても仕方ありません！気持ちで負けたらダメです！絶対に全員で生き残るんです！」

「……ふっ、そうだな」

握り拳を作り熱く語る許緒と、その姿を見て微笑む夏侯淵。

良い上下関係が築けているみたいだな。

「うむ。許緒は分かっているな」

許緒の頭をグリグリする。

「えへへ」

「端から見ると年の離れた兄弟に見えなくもないな」

「許緒みたいな子が妹だったら毎日楽しいだろうな。振り回されて疲れそうだけど」

「そんなことないよー。毎日、山を走り回るぐらいしかないもん」

「この年になると、体力は此方の方があはすなのに、子供と同じ様に走り回ると何故か先に疲れるんだよ」

「ぶー。ボク、子供じゃないもん」

「ふふっ」

口を尖らせ不満を漏らす許緒を見て笑う夏侯淵。

「秋蘭様も笑わないで下さいよ」

「すまんすまん」

俺から言わせりゃ、二人の方が姉妹みたいだけどな。

その後は夏侯淵や許緒と他愛ない会話をしながら東門へ向かった。

・
・
・

ようやく東門に着いた。

え〜と、秋紘に徐庶に樂進に李典に于禁に長老と全員揃っているな。

街の人達も結構いる。

「おーい！軍が到着したぞ！」

声を掛けると全員此方へ駆け寄ってきた。

…訂正、流石に長老は走れないらしく歩いてくる。

「陳留の州牧である曹操の部下の夏侯淵と許緒だ」

取り敢えず俺から紹介する。

「許緒仲康だよ。よろしくね」

「夏侯淵妙才だ。よろしく頼む」

「おお、これはこれは。急な要請にも関わらず来て下さるとは。ありがとうございます」

頭を下げ感謝を述べる長老。

「なに、気にすることはない。民の安全を守る者として当たり前的事だ」

「そうそう。お爺ちゃんも街の人達も全員ボクが守ってあげるから！」

「ふおっふおっふおっ。お願いしますぞ、許緒殿」

「うん、任せておいて！」

こついう暗い雰囲気の中での許緒の明るさや無邪気さ、前向きさは、空気を和ませる良い方向に働くな。

「夏侯淵に許緒、取り敢えず中心となつて行動する事になった人物を紹介するな。まずは、この街に住む女の子仲良し三人組」

「私は楽進文謙です。よろしくお願いします」

「ウチは李典や。よろしゅう頼みます」

「沙和は于禁なの。よろしくお願いしますなの」

三人娘と夏侯淵、許緒が握手をする。

「次に俺と一緒に旅をしてる相棒」

「太史慈子義だ。よろしく頼むぜ」

次に太史慈と二人が握手をし、

「最後が黄巾党が暴れ回っていたので、二月ぐらい前からこの街に滞在している徐庶だ」

「徐庶元直です。よろしくお願いします」

最後に徐庶と二人が握手をする。

「で、あとは俺。この六人が話の流れで中心となって動く事になった人物だ」

「話の流れ？」

「まあ大した事じゃないから気にしないでくれ。さてと、黄巾党が来るまで早ければ二刻程だし配置を決めるか。夏侯淵、弓を使える兵士は何名ぐらいだ？」

「全員使えるぞ。軍人として基本的な事だからな」

「なら、兵士達は三つに等分して東門以外の城壁に配置してくれ」

「此所はどうするのだ？」

「此所には配置しなくていい」

「何だと？」

夏侯淵の表情が険しくなる。

まあ、俺が夏侯淵の立場だったら、同じ様な表情をすると思うけどな。

「夏侯淵、西門・南門・北門には落とし穴が有り門に近付けない。一方、東門には落とし穴が無い。黄巾党の連中はこういう風に動くと思う？」

見た目は子供、頭脳は大人な某探偵がよくやっているポーズで考えている様子の夏侯淵。

「……………穴を埋めようとすれば弓兵に射られるだろう。門以外から入ろうとするか、落とし穴が無い東門に集まるだろう」

「俺もそう思う。秋絃、さっき頼んでおいた事は調べてくれたか？」

「応、幸いな事に壁が崩れたりして簡単に侵入出来そうな場所は無かった。門以外から侵入しようとするなら梯子を掛けて城壁からだな」

「崩れた壁とかがあれば、ちゃんと直してるもんな、ウチら」

『応よ！』

「というわけで、ほぼ確実に黄巾党の連中は東門に集まるだろう。あいつら単純だし、梯子掛けるにしたって弓兵的だしな。で、集まってきた黄巾党の連中は俺と秋絃が叩く。正直、弓兵は邪魔だから」

「必要無い」

「兄ちゃん、叩くってどうやってやるの?」

「そのままの意味だよ。門の外で白兵戦、要は斬り伏せるって事だ」

「街に籠るのではないのか?」

「街の人達はな。勿論、東門も北門と同じ様に氣で強化する」

「何故わざわざ戦う必要があるのだ?」

「いくら黄巾党が馬鹿の集まりだとしても、半刻も攻撃して街の中にすら入れないなら諦めるだろう。問題は諦めた後だ。そのまま他の街を襲われても困るからな。此所に引き止めておく為にも戦うのさ」

「だが、危険ではないのか?それに、もし仮に黒霆院が死んだ場合、門を強化してる氣は無くなったりしないのか?」

「俺が死んだとしても、ある程度の時間なら大丈夫だ。それに、黄巾党如き何千人集まろうが敵じゃねえよ。千人ぐらいなら秋絃と二人で何度か蹴散らしてるし」

「だが……」

「大丈夫だって」

「まあ、紫苑さんなら大丈夫でしょう。油虫なみにしぶといですし」

油虫……たしかゴキブリだよな。

「久しぶりに口を開いたかと思ったたら随分と辛辣な言葉だな、徐庶」

「いえいえ、信賴してるからこそその言葉ですよ」

「嬉しくねー」

ニヤニヤしながら言うなよ。

「考えは変わらないのだな？」

「ああ」

「……分かった。黒霆院の言う通りにしよう。死ぬなよ？」

「応よ」

「紫苑さんの特攻が認められた事ですし、早く配置を決めましょう」

「特攻言うな」

「明日の朝に来るらしいですが、それも確定というわけでもないですし」

無視かよ！

「それもそうだな。紫苑、どうするんだ？」

「さっき言った通り、兵は三等分して東門以外に配置。東門以外に

指揮官を一人ずつ配置って感じかな」

「なら私とその指揮官役を承ります」

「徐庶か……まあ弓使いだし冷静だし頭良いし適任か」

「誉めても惚れませんか？」

「惚れてもらう為に女の子を誉めたことなんてないから」

「そうですか？」

「そうだ。後、二人は……」

「私と許緒が行こう。指揮をするのも慣れてるからな」

「秋蘭様！」

「何だ？」

「ボクは兄ちゃんと一緒に戦います！」

『は？』

俺と夏侯淵の声が重なった。

「季衣、何を言って……」

「さっき言いましたよね。街の人達はボクが守るって。街の人達の中には兄ちゃんや色黒の姉ちゃんも入ってます。だからボクも一緒

に戦います!」

「色黒の姉ちゃん……って俺か」

許緒、その言い方は微妙だぞ。

「私も一緒に戦います!」

「凧!？」

「凧ちゃん!？」

「師匠だけを戦わせるわけには行きません!」

何だろ、このデジャヴユ。

初めて会った時にも、こんな事言ってたような…。

というか、弟子モードかよ楽進。

「紫苑、どうする?」

「どうするって言ったって……出来れば街の中にもらった方が
気兼ね無く戦えるんだけどな」

「私は一緒に戦うと決めました!」

「ボクもだよ!兄ちゃん達だけに危険な役割をさせるなんて出来な
いよ!」

「うーん…」

どうすっかな。

……まあ、いざって言うときは街の中に放り込めばいいか。

「仕方無いな…。許緒を借りていいか、夏侯淵？」

「季衣がそう決めたのならば仕方が無い。だが、無理はするなよ季衣」

「はい！」

「無理はしない事、俺の言う事を守る事。楽進、この二つを守れるか？」

「はい！」

本当に二人揃って返事が良いな。

「なら、残りの門には李典と于禁に行ってもらうか」

「ウチら！？」

「えゝ指揮なんて無理なのゝ」

「夏侯淵、隊の中に指揮を出来るような人物はいるか？」

「ああ。何人かいるが…」

「なら、李典と于禁の補佐に付けてくれるか？」

「分かった」

「というわけで頼んだぞ、二人共。配置は敵が一番来なさそうな西門にするから」

「じゃあないな。まあ適当に頑張るわ」

「まあ補佐の人を付けてくれるなら何とか頑張るの」

「後は北門に徐庶、南門に夏侯淵と言った感じかな。夏侯淵、どう思う？」

「街の中には配置しないのか？」

「防策は設置してあるし義勇軍もいるし、そもそも黄巾党を街に入らせるつもりもないから必要ないかと思ったんだけどな……」

「義勇軍？」

「はい。街の者で結成されている軍です。とは言っても、基本的に街を襲ってきた者を追い返すだけで、極稀に近くに野盗が出たら退治に行く程度なので実戦経験が乏しいですし、義勇軍というより自警団といった感じですが……」

『一番強いのが楽進ちゃんだしな』
『だよな』

ダメンズな大人達だな。

「うーん、なら念の為に少し配置するか。五十人もいれば十分だろ」

「分かった。なら街の中に五十人、西門・南門・北門に百五十人ずつ配置しよう。東門は零人で構わないのだな？」

「ああ、頼む。で、東門は楽進と許緒」

『はい！』

「に俺と秋絃だな」

「任せろ」

「……なあ、秋絃」

「何だ？」

「さっきから気になってたんだが、それが新しい武器か？」

秋絃が地面から肩に立て掛けている大きく長い麻袋を指差す。

「そついや、まだ紫苑には見せてなかったな」

《バサッ！》

秋絃が袋を取る。

武器を覆っていた袋が取られると、そこにはチェーンソーと大剣を合体させたような武器が…。

「えっと、それ何だ？」

「回転式鋸や。此処の引金を引きながら使用者の氣を流す事によって回る様になつとる。うちの自信作や」

「へー。凄いな、李典」

いや、冗談抜きで。

「本当ですね。李典さんは変な絡繰を作るだけじゃ無く、こんな事も出来たんですね」

徐庶も興味深けに見ている。

「変な絡繰つて何やねん？」

「変な絡繰は変な絡繰です」

「素人には変に見えても本当は凄い物なんや！」

ピシッと徐庶を指差す李典。

「そうですか。まあどうでもいいですけど。私としては、変な絡繰ばかり作っている李典さんが、このような武器を作れるとは思ってもいなかったので正直驚いてます」

「ふふん、見直したやろ？」

そのドヤ顔は何なんだ李典。

「そうですね。于禁さんの戦闘力分ぐらいは見直しました」

「微妙！？沙和の戦闘力分って微妙！」

「真桜ちゃん、ひどいの～！沙和だってやる時はやるの～！」

「そうだぞ真桜。幾ら沙和の戦闘力が微妙だからと言って、口に出したら駄目だろう」

楽進……その言い方は……。

「ううー……。不真面目な真桜ちゃんよりも真面目な凧ちゃんの言葉の方がグサツと来るのー……」

案の定というか何と言うか、于禁が座り込んで地面に指で円を描きながら落ち込んでいる……。

……于禁の戦闘力は微妙なのか。

「す、すまん沙和！？そんなつもりじゃ……」

全く……。

「三人共、そろそろ漫才は終了だ。配置に着くぞ」

「了解や」

「はいっ！」

「分かったの～」

「ほな、ウチと沙和は西門へ行くで」

「行ってくるの～」

「ああ。頑張れよ」

「二人共、気を付けてな」

「凧もな」

「そうなの、凧ちゃんの方が遥かに危険なんだからね？」

「分かってる」

「行くで、沙和！」

「うん！」

「王節！兵百五十人を連れて李典達に着いていけ！」

夏侯淵が指示を出す。

「はっ！」

「こっちや！」

と言って北へ駆け出す李典。

北！？

「李典、配置は西門だぞ！」

「分かつとるわ！街の中、防冊を梯子で越えながら行くより、冊を設置していない城壁沿いの道を進んで行った方が早いんや！」

ああ、成る程な。

「黒霆院、街の人達は何処に集まっているのだ？」

「えーと、街の中央だよな？」

徐庶に聞いてみる。

「はい。その通りです」

「分かった。韓恩！兵五十を連れて街の中央へ向かい、街の人達を守ってくれ」

「はっ！」

「高徽は兵百五十を連れて徐庶と一緒に南門へ向かってくれ！」

「はっ！」

「よし。紫苑、東門も閉めてしまふのдарう？」

「ああ」

「そこの者。すまないが東門の外で待機してもらい、敵が来たら馬を走らせ曹操様に伝えに行ってもらいたいのが頼めるか？」

「はっ！お任せ下さい！」

「すまないな。その右隣の三人は東門へ残り、敵が来た場合の各門

への連絡を頼みたいのだが構わないか？」

『はっ！お任せ下さい！』

「よし、残りは私と一緒に北門へ向かうぞ！」

『はっ！』

「季衣、無理はするなよ」

「分かってます！」

「黒霆院、季衣の事を頼む」

「ああ。任せておけ」

「うむ。行くぞ皆の者！」

『応！』

北門へと走り出す夏侯淵達。

「では私も行きます」

「気を付けろよ、徐庶」

「分かっています。……紫苑さん」

「何だ？」

「貴方に私の真名を預けます」

「何だよ、急に」

「いえ、生きている紫苑さんに会う事が出来なくなるかもしれないので記念に預けておこうかなと」

「不吉な事を言うな」

記念って何だ、記念って。

「冗談ですよ。これから暫くは一緒に行動するようになるわけですし、まあ悪い人ではない気がしなくもないので、丁度良い機会だから真名を預ける事にしたんです」

悪い人ではない気がしなくもないって微妙な表現だな…。

「私の真名は瑠里です。呼び捨てで構いません」
防止を弄りながら、そっぽを向いて言う徐庶。

照れてるのか？

「分かった。なら、改めて言うけど気を付けろよ、瑠里」

「はい。皆さん、行きましょう！」

『はっ！』

瑠里達が南門へ走り出す。

そういや、夏侯淵が指示を出した三人は全員女性だったな……この世界の女性は強いつてか。

さてと。

「どなたか毛布を！」

すぐに街の人が毛布を持ってきてくれた。

「門を閉めますので、すみませんが曹操殿への伝令係の方は門の外へ。気を紛らわす程度にしかありませんが防寒対策に毛布をどうぞ。自分は見張りの為に起きているので何かあれば呼んで下さい」

「いえ、これも仕事なのでお気にならずに。お心遣い感謝致します。それでは」

伝令の人が馬を連れて門の外へ行く。

「門を閉めても構いませんぞ」

「分かりました！長老、お願いします」

「分かりましたぞい。皆の衆、門を閉めるのじゃ！」

『応！』

《ギギイイイッバタンツ！》

門が閉まったな。

「これで良し。じゃあ、長老達は街の中央に行って下さい。黄巾党が来たら警鐘を鳴らしますので臨戦態勢へ。よろしいでしょうか？」

「了解ですぞ。皆の衆、街の中央へ行くぞい。旅の御方、ご武運を」

「ああ」

『頑張れよ、兄ちゃん！』

『無理はすんなよ！』

『楽進も無理するな！』

『姉ちゃんや嬢ちゃんも気を付けろよ！』

「皆さんも油断はしないで下さい」

「大丈夫！皆はボクが守るから安心してね！」

「まあ適当に頑張るさ」

「紫苑の適当は黄巾党千人を軽く葬れるぐらいの強さだけだな」

「秋絃だって同じ様なもんだろ」

「まあな」

長老達は、それぞれ応援の言葉を残して街の中央へ向かった。

「それじゃあ、俺と秋絃が見張りをするから楽進と許緒は仮眠を取ってくれ」

「えー、ボクも起きてるよ！」

「私事です」

「いいから寝てろ。許緒は分からないけど、楽進は相当疲れてるだろ？」

「それは……そうですが……」

「見張りは二人いれば十分だ。万全の体調で迎え撃つべきじゃないのか？」

「……はい」

「俺も紫苑も体力だけはあるから一晩ぐらい寝なくたって大丈夫だ。だから二人は寝ろ」

「でも……」

「いいから許緒も寝てこい。年長者の言う事は聞くもんだぞ。なあ、紫苑？」

「そういうこと」

「……分かりました。お言葉に甘えさせていただきます。行きましょう
許緒殿」

「むー、分かったよ。じゃあよろしくね、兄ちゃんに姉ちゃん」

「ああ」

「敵が来たら俺が起こしにいつてやるから安心しろ。まあ紫苑でもいいなら紫苑に頼むが」

「い、いえ。太史慈殿が起こしに来て下さい（寝顔を見られるのは恥ずかしいですし）」

「あいよ。まあ警鐘の音で目が覚めると思っけどな」

「それじゃあ、お休みなさい。紫苑殿、太史慈殿」

「兄ちゃんに姉ちゃん、おやすみー」

そう言う二人は近くの民家へ寝に行った。

「兵の方々も休んで下さい」

「いえ、そういうわけには…」

「構いません。それに二人きりの方がいいんで」

秋絃の方を見る。

「…！成る程、そういう事ですか。では御言葉に甘えさせて頂きます。それでは」

三人とも納得してくれたようで、楽進と許緒が入った民家とは別の民家へと向かっていった。

理解が早くて助かる。

まあ別に何かするつもりはないけど、二人きりの方が気が楽だからな。

「……取り敢えず城壁の上へ行くか、秋絃」

「ああ」

城壁の上へ行き、誰かが用意してくれたであろう椅子に腰掛ける。

「……静かになったな」

「そうだな。紫苑、腹減ってるか？」

「腹？そついや夕飯食ってなかったな」

「ほれ。街の人達が作ってくれた飯と酒だ」

秋絃から飯（炒飯と餃子）と酒を差し出してくる。

今、どっから取り出したんだ？

「ありがと」

「……冷めてるけど美味しいな。」

「大丈夫かな？」

「何がだ？」

「いや、守りきれるかなって」

「大丈夫だろ」

「……そうだな」

「お前は意外と心配性だな」

「悪かったな」

「まあ、それも紫苑の良い所だけだな。のんびりしながら黄巾党が来るのを待とうぜ」

「ああ」

秋紘と寄り添いながら他愛のない話をして見張りを続けた。

第14話〈黄巾党襲来・弐〉（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

オリキャラ設定を更新しました。

（徐庶の真名を追加しただけです）

お知らせ消し忘れてました。

（今度こそ消しました）

初の前編・後編二部編成です。

と前話の後書きで書きましたが訂正します。

前編・中編・後編の三部構成になりました。

だって、終わらないんだもん…。

次話は半分ぐらいの長さになるかもしれません。

今話は前話より描写が減っていると思います。

やはり描写を書くのが難しい…。

あと、時間足りない…。

前話で書き忘れてましたが設定を微妙に変えています。

・黄巾党に襲われる街と楽進達が住んでいる街は別
・この小説では義勇軍と言つか自警団、ゲームではちゃんとした（
？）義勇軍

上記辺りが変更点です。

まあ二次創作小説なのに何を今更って感じですが一応。

以前お知らせで書いたのですが、特に反対の方がいらっしやらない
（ていうか興味無い？）のでネタ帳を追加します。

超亀更新です。

- - - - -

現在の執筆状況：

第15話↓二割

第X A 話↪反董卓連合・シ水関戦↪三割

第X B 話↪反董卓連合・虎牢関戦↪二割強

第X C 話↓三割弱

当初の予定では、今頃は反董卓連合編に入る予定だったのですが延
びてます…。

次回の投稿予定日は2011年5月7日です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第15話 黄巾党襲来・参（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

許緒と夏侯淵率いる先遣隊が到着

←

敵が来るのを待つ

第15話　黄巾党襲来・参

「秋絃、どうだ？」

日の出から一刻程、東門に結界を張った後、各門の様子を見に行つて帰ってきたところだ。

夏侯淵と徐庶は起きていたが、李典と于禁は眠りこけていた。

襲われても知らないぞ、と言いたいところだが、夏侯淵が二人に着けてくれた補佐の人が女性だったら安心して寝てたんだろう。

「丁度良い所に帰ってきたな。見ろ、全体が見えるぐらいまで近付いてきた。五千人ぐらい居るんじゃないか？」

「あー、たしかにそれぐらいいいそうだな。秋絃、取り敢えず警鐘を鳴らしてくれ」

「あいよ！」

《カンツ！カンツ！カンツ！カンツ！》

警鐘を鳴らすのは秋絃に頼んだから、次は各門への連絡だな。

「兵の方達は各門に伝えに行つて下さい。敵兵数はおよそ五千人です」

『はっ！』

次は門の外にいる伝令さんか。

「おーい！兵隊さん！起きてますかー？」

「はい！勿論です！早速ですが敵の数はどれぐらいでしょうか？此処からでは把握しづらいもので…！」

「およそ五千人です！」

「分かりました！それでは私は曹操様に伝えに行きます！」

「お願いします！」

「それでは！」

伝令の人が北へ馬を走らせる。

敵は……特に追う様子はないな。

うーん……しかし、あれだけの数があると正直面倒だな。

……そういや、この世界に来てから黒霆以外の刀を使ってないな。

乱戦になるだろうし、久しぶりに翠樹でも使って大暴れするか。

しかし黄巾党の連中も行動が遅いな…。

頭悪いのか？

「紫苑殿！」

「兄ちゃん！」

楽進と許緒が寝ていた民家から飛び出てくる。

「おっ、目が覚めたか楽進に許緒。敵が来たぞ」

「うわぁ、すつごく多いねえー」

「……まさか、こんなに多いなんて」

楽進が黄巾党の人数の多さに呆然としている。

「目測で五千人つてところだな」

「ど、どうするのですか？」

「どうするって、予定通り門の外で戦うさ」

「本気ですか！？あんなにいるんですよ！？」

「まあ何とかなるだろ。なっ、秋絃」

「応よ。黄巾党の連中には悪いが試し切りには持ってこいだな」

「……………」

楽進が胸の前で右手で握り拳を作り、それをジッと見つめている。

「……………楽進、恐いか？」

「えっ、いや、そんな事は…」

「別に無理しなくてもいいんだぞ？俺も楽進を危ない目に会わせたくないし」

「私は……」

「許緒はどうする？」

「勿論、戦うよ！」

「恐くないのか？」

「恐くないって言ったら嘘になるかもしれないけど、華琳様に仕えるようになった時に決めたんだ！力の無い人達を守るって！だからボクは戦うよ！」

「許緒殿……そうですね。私が武を磨いてきたのも街の人を守る為です。今此処で逃げ出しては何の為に武を磨いてきたのか分かりません。私も戦います」

「分かった。気負うのは良いが無理はするなよ、二人共」

『はい！』

《カンッ！カンッ！カンッ！カンッ！》

「紫苑、そろそろ警鐘を鳴らすのを止めていいか？」

そっぴゃ、鳴らしっぱなしだったな。

「ああ、もういいだろ」

「了解」

秋絃が警鐘を鳴らすの止める。

「それじゃ街の外に行きますか」

「そう言えば門は閉じてしまっていますが、どうやって外へ？」

「勿論、此処から飛び降りる」

『へ？』

《ドゴンッ！》

取り敢えず許緒の武器を下へ投げる。

あの武器かなり重いな。

「あの……一体何を？」

「いいからいいから。楽進も許緒もこっち来て」

「？はい」

「何ー？」

近くに来た二人を引き寄せ抱き締める。

それはもつしつかりと、落ちないようにがっちり。

「し、紫苑殿！？一体何を！？」

「にゃあ？」

楽進の顔が真っ赤になつてゐる。

何を考えているのやら。

「よし、降りるぞ」

『え？』

城壁の上から飛び降りる。

「きゃあああああああ！？」

「にゃあああああああ！？」

可愛い悲鳴を上げる楽進に、猫っぽい悲鳴を上げる許緒。

二人共、イメージ的には猫って言うより犬って感じだけど。

《スタンツ》

「十点満点！」

両足を揃えて地面に綺麗に着地をする。

「いきなり何をするんですか！？」

涙目の楽進が可愛い。

「楽しかっただろ？」

「楽しくなんかありません！」

「そうか？」

俺は高い所から飛び降りるの楽しいんだけどな。

「許緒は？」

「ボクは楽しかったよ！もう一回やって、兄ちゃん！」

楽しいよなー、許緒。

「出来ればやってやりたいけど、敵が近付いてきてるから後でな」

「はい」

「秋絃！受け止めるから飛び降りろ！」

城壁の上にいる秋絃に声を掛ける。

「あいよ」

そして躊躇無く飛び降りてきた秋絃をお姫様抱っこでキャッチする。

武器を持っているから重い…。

「あっさり飛び降りましたね」

「それだけ信頼関係が構築されているって事さ」

お姫様抱っこ状態の秋絃を下ろす。

「何だよ楽進。涙目じゃねーか」

楽進の顔を見て秋絃が一言。

「いきなりあんな事されたら涙目にもなりますよ!」

そりゃ悪かった。

「さてと、いつものをやるか」

「兄ちゃん、いつものって何？」

「警告」

「警告……ですか？」

「そつ。三人共、耳の中に人差し指を入れて音を聞こえづらくして」

「いつも通りだな」

「?分かりました」

「はい」

三人共、指で耳栓をする。

「あーあー。あえいうえおお。虎徹正宗数珠丸恒次虎徹正宗数珠丸恒次虎徹正宗数珠丸恒次。…よし」

「（紫苑殿は一体何を…）」

「（兄ちゃん何してんだろ？）」

声を氣で増幅させて、

《街を襲おうとしている黄巾党に告ぐ！俺は貴様らの間で黒き霆と呼ばれているものだ！街を襲うのを止め今すぐ武装解除をするならよし！武装解除をしないのなら街を襲おうが逃げ出そうが殲滅する！尚、当然の事ながら黒き暴風も一緒だ！返答は如何に！》

……そのまま此方へ向かってくるな。

仕方無い…。

秋絃に耳栓を解くよう合図を出す。

それを見た秋絃が耳栓を解き、楽進と許緒にも耳栓を解くよう促す。

「一応警告はしたけど止まる気配が無いから戦闘になるな。三人共、準備は良いか？」

「応よ！」

「はい！」

「もっちらん！」

「三人は門の前で戦ってくれ」

「紫苑殿はどうするのですか？」

「いつも通り指揮官狩り。秋絃、二人の事頼んだぞ」

「あいよ」

「さてと、行くぜ翠樹」

異次元空間から翠樹を取り出す。

「？」

「！？」

「ほわ」

「し、紫苑殿？」

「何だ？」

「今、その大きい剣は何処から出したのですか？」

楽進が翠樹を指差す。

「氣だ」

「へ？」

「氣を極めればこんな事も出来るのさ」

「おー！氣って凄いんだね、兄ちゃん！」

「その通り」

「いや、でもどうやって…」

翠樹を左肩に立て掛け、右手を樂進の左肩に置く。

「樂進」

「な、何でしょうか？」

「考えるな、感じるんだ」

都合が悪い事は取り敢えず氣のせいになっている。

説明しても理解してもらえないだろうからな。

「いや、意味が分からないのですが…」

「樂進にもいつか分かるさ。なつ、秋絃」

「ああ」

「太史慈殿は分かるのですか？」

「分からん。が、紫苑が無茶苦茶なのは今に始まった事じゃないかな。氣にしたら負けだ」

「そうですか…」

「悪いけど、お喋りはそろそろ終わりだ」

楽進は納得出来ないみたいだが、敵が攻めてきてるので話を切り上げる。

さてと。

「黒き霆・黒霆院紫苑、推して参る！」

敵に向かって全力疾走を開始する。

「行っちゃった…」

「行っちゃいましたね…」

「油断するなよ二人共。その内、敵が押し寄せてくるからな」

『はい！』

俺が聞き取れた会話はそこまでだった。

・
・
・

《……カンッ！……カンッ！……カンッ！……カンッ！》

「敵が来たようですね。高徽さん」

「分かつてる！テメーら、敵が来やがったぞ！仮眠を取っている奴は叩き起こせ！さっさと戦闘態勢に入るんだ！」

『はっ！』

高徽さんが兵達に指示を出し、静寂に包まれていた空気が急に騒がしくなる。

高徽さんは口が悪いです。

何でも本来は夏侯淵さんや許緒さんの部下ではないらしく、尊敬する普段の上官の方の口が悪いので、高徽さんも自然と口が悪くなっただそうです。

まあそれは置いておいて、紫苑さん達は大丈夫でしょうか…。いくら二人の戦闘を見た事があるとはいえ、心配ですね。

黄巾党が此方に来ないようならば、後で東門へ様子を見に行きますか。

・
・
・

《……カンッ！……カンッ！……カンッ！……カンッ！》

「あらあら、敵が来たようですね。李典さん、于禁さん、起きて下さーい。……起きませんわね。仕方ありませんわ。その方、鍋を二つ持って来て下さる？序でに戦闘準備に入って下さい」

「はっ、少々お待ち下さい。………これでよろしいでしょうか？」

「はい。それでは行きますわよ。鍋を両手に持って二人の頭に、えいっ！」

《ガンッ！》

「いたー！ー！何やねん、一体！？」

絡繰に囲まれて幸せや〜と思ってたら頭に激痛が…！

「な、何！？何なの！？敵襲なの！？」

「起きましたか、お二人共。敵が来ましたよ」

「王節はん、起こしてくれたんか………って、手に持っている鍋は何や？」

「はい、これで御二人の頭をガツーンと叩いて起こしました」

「何で叩くねん！？鍋同士打ち合わせて音鳴らせばいいやんか！？」

頭の激痛の原因はアンタか！

「あらあら思い付きませんでしたわ」

「ホンマかいな…」

「ひい〜ん、タンコブになってるの〜」

「あらあら、大変ですわね」

「あんたのせいやる！」

「そうともいいますわね。あつ、兵達に指示は出しておいたので、ご安心を」

「全く……」

夏侯淵様は、何故こない癖がある人をウチらの補佐に着けたんやろか。

「……真桜ちゃん」

「何や？」

「凧ちゃんや紫苑さん達は大丈夫かな？」

「……大丈夫だと信じるしかないやろ」

「……そうだな」

信じとるで、凧……。

・
・
・

《……カンッ！……カンッ！……カンッ！……カンッ！……カンッ！》

来たか…。

「皆の者！戦闘準備に入れ！」

「はっ！」

今頃、東門の外に待機させておいた伝令が馬を走らせ陳留がある方角に向かっていているだろう。

華琳様達は間に合うだろうか？

黒霆院は二人いれば十分だと言っていたが…。

季衣、無理はするなよ…。

・
・
・

《……カンッ！……カンッ！……カンッ！……カンッ！》

「李秋様ー！警鐘が鳴ってますがどうしやすかー！？」

「構わん！突撃しろ！」

「了解しやしたー！野郎共ー！突撃だー！」

《オォー！》

ふんっ！門を閉めているようだが直ぐに決じ開けてくれるわ！

《街を襲おうとしている黄巾党に告ぐ！》

ん？

《俺は貴様らの間で黒き霆と呼ばれているものだ！街を襲うのを止め武装解除をするなら良し！武装解除をしないのなら街を襲おうが逃げ出そうが殲滅する！尚、当然の事ながら黒き暴風も一緒だ！返答は如何に！》

「なっ…！黒き霆だと！？」

「李秋様ー！どうしやすかー！？」

「ぐっ…！構わん！突撃しろ！幾ら黒き霆と黒き暴風とは言え五人近くいる我等から街を守りきれなどしない！奴に構わず街を落とせ！四方に分かれて進むんだ！西門へは陳楽と呂才の部隊を、北門へは胡楽と周允の部隊を、南門へは許班と丁然の部隊を向かわせろ！黄図！お前の部隊と俺の部隊は東門だ！」

「了解しやしたー！聞いたな、野郎共ー！黒き霆と黒き暴風には構うなー！突撃だー！」

《オォー！》

これでいい。

幾ら黒き霆が強いとは言え街を四方から攻められれば守りきれまい。

「李秋様ー！一人此方へ突っ込んで来ますー！恐らく黒き霆かとー！」

「構うなど言っている！」

「失礼しましたー！あつ！黒き霆が陳楽隊、呂才隊、胡楽隊、周允隊に向かっています！は、速い！何だアレは！？」

……黒き霆と北門・西門に向かった部隊との距離が縮ま
ていく。

俺は何を恐れているんだ。

たった一人、たった一人だぞ！

臆する事は無い！

「ま、間も無く交戦しまーす！……黒き霆が陳楽隊、呂才隊、胡楽隊、周允隊に突っ込みましたー！」

馬鹿が！あの人数に突っ込むなど自殺行為だ！

・ ・ ・

「分かれたか」

黄巾党の集団に向かって疾走しているのだが、三つに分かれやがった。

……翠樹重い。

人数的に考えて、左手側が北門と西門へ向かう部隊、右手側が南門へ向かう部隊、正面が東門に来る部隊か。

正面が二千、左手側が二千、右手側が千ぐらいか。

取り敢えず左手側の部隊からだな。

……左手側の部隊に進行方向を変えたんだけど反応が無いな。

あいつら俺を無視するつもりか……まあ、関係無く突っ込ませてもらうけど。

……接敵するまで五百メートル……四百……三百……二百……百……
……ようやく迎撃態勢を取ったか……五十……十メートル！

「行くぜ、翠樹……！」

《ザン！》

「がっ！」

「ぎゃあ！」

「いでー！？」

「がふっ……」

「ぐばふっ」

敵陣の横っ腹に突っ込み、外側にいた連中を五人ほど風ぎ払い、そのまま奥へ突っ込む。

「ぐわっ！」

「ぎいあー！」

「ごへっ……」

「ぶへら！」

立ち塞がる奴を斬り伏せながら奥へ奥へと進む。

指揮官は……。

「くそっ！こうなつては殺るしかないか！」

「囲め！囲むのだ！」

「何してんだ、てめーら！さっさと殺せ！」

「俺様を守りやがれ！」

……あいつらか。

一、二、三、四……指揮官四人に……その副官が四人か。

取り敢えず八人殺したら南門へ向かった部隊の方へ行くか。

「くそがつ……ぎやえ！」

「陳が……ぐえっ！」

二人。

「おい、早く殺……れぐあやつ！」

「周允様が殺らぎやつ！」

四人。

「ぶひっ！」

「胡げふうっ…！」

六人。

「囲めつついつてどうふっ…」

「隊ち…がっ！」

八人！

よし、次だ。

・ ・ ・

「…！黒き霆が陳楽隊、呂才隊、胡楽隊、周允隊の集団から抜け出し、許班隊と丁然隊に向かって行きます！陳楽隊、呂才隊、胡楽隊、周允隊は統制が取れていない模様ー！北門へ向かう部隊と此方へ戻って来る部隊に分かれました！」

「なっ、何をやっているんだアイツらは！？」

くそっ！何で俺の言う事を聞かないんだ！

……まさか呂才達が殺られたのか。

そんな馬鹿な事が…。

………ノロマ共が！戻ってくるなら早く戻ってこい！何が起きた

のか分からないだろうが！

………！早く！早く何が起きたのか伝えに来いよ！あと少し！

『……………た！』

黄図が何か騒いでるが、そんな事より北門と西門に向かった部隊の事の方が重要だ……イライラする……待っている時間がやけに長く感じる。

「李秋様！北門に向かった部隊の連中が戻ってきました！」

やっと来たか！

「り、李秋様ー！」

「北門と西門に向かった部隊の奴だな！？一体何があった！？」

「く、黒き霆が突っ込んで来まして、陳楽様、呂才様、胡楽様、周允様、及び各副官方も殺られました！指揮官を失い部隊は混乱！北門と西門へ向かうと言い出した者に約半数が着いていき、残りは指示を仰ぐ為に此方へ戻ってきました！」

まさかとは思ったが殺られたとは……俺以外の隊には約五百名ずつ割り振っている。

戻ってきたのは半分か…。

『……………せー！』

『……………ろ！』

『……………がー！』

『……………ね！……………！？』

くそっ……！戻ってきた奴等も含め此処には三千はいる……今なら黒き靈は南門へ向かった部隊の方にいる……今の内に東門へ突撃……。

「李秋様ー！」

「何だ、黄凶！俺は今考え事を……！」

「黒き靈が突っ込んで来ましたー！」

「仕方が無い……許班と丁然は殺られるだろうが……」

「違います！俺達がいる此処に突っ込んで来ましたー！」

「な、何だと！？黒き靈は許班隊と丁然隊に向かったはずじゃ……！」

「そちらは既に許班と丁然が殺られたらしく指揮系統が混乱したようで、南門に向かう部隊と東門に向かう部隊に分かれたようです！」

「なっ……！ばっ……！そっ……！」

何だ！？何が起きている！？奴は化物か！？何でそんなに早く移動出来るんだ！？いや、そんな事はどうでもいい！？俺の身を守らないと……

「よっ」

「!？」

「アンタが頭か？」

目の前にいきなり現れやがった……黒い服に身を包んだ黒髪のカギ……こいつが黒き霆か……噂と違う点は黒い刀ではなく淡い緑色の刀身の糞長い刀を持っている事ぐらいだが……。

「返事が無いって事はアンタが頭でいいんだな？」

「い、いや違う……！俺は下端で……そう！そこにいる黄図、いや黄図様が頭で……！」

「黄図って言うのは誰だ？」

「だから、そこに……る……」

黄図が死んでる……いつの間に……。

「俺の見立てじゃアンタが頭で、そいつがアンタの副官だと思ったんだがな……」

「そ、それはっ……そのっ……」

「まあいいや。取り敢えず死ね」

「！野郎共！さっさとコイツを殺せ！俺を守るんだ！」

『……………』

……くそっ！みんなビビっちまって動きやしねえ！

「やっぱりアンタが頭か」

「くっ……！殺つてやる！俺だつて腕つぶしでコイツらを纏めてきたんだ！見る！この大剣を！テメーの持つてる細い剣じゃ防げねえだろ！」

「いいから掛かってこいよ」

「舐めやがつて！」

……殺つた！俺の剣はコイツの頭の上、コイツは構えてもねえ！このまま降り下ろせ……ば……あれ？……何で俺の体が真つ二つに……。

「ば……けもの……」

・
・
・

「胴！」

「ぐわっ！」

近くにいた黄巾党を横に真つ二つにする。

「おーい、大丈夫か？」

取り敢えず指揮官っぽい奴等は殺してきたので東門に戻ってきた。

秋絃と楽進と許緒が門の前で戦っている。

「ぐぎゃっ……」

「紫苑か。まだ数は少ないし問題無いぞ。コイツらは右手側の部隊から分かれた奴等だ」

近くにいる奴を真つ二つにしながら秋絃が答える。

……あの武器エグいな。

「楽進と許緒は？」

秋絃から少し離れた場所で背中合わせで戦っている二人に聞いてみる。

《ドガンッ！》

《ドゴーンッ！》

「問題ありません！」

「大丈夫だよ！」

楽進は氣弾を撃ちながら、許緒は鉄球を振り回しながら答える。

「まだまだ余裕そうだな」

ひーふーみーよーいつむーななやーことー………目測で死んでるのが百五十ぐらい、東門を囲んでいるのが三百百ちよぐらいか。

右手側の部隊の内、半数が南門へ向かい、残り半数が此方へ来たということがある。

……様子を見ているのかビビっているのか散発的にしか仕掛けてこないみたいだな。

「何人ぐらい殺った？」

秋絃が背中を合わせながら聞いてくる。

「部隊長つばいのが六人に、その副官が六人、この集団の頭に、そいつの副官の計十四人に道を塞いだ雑魚数十……いや、百数十人つて所だ」

「何か敵の動きがバラバラだねー」

「はい。統制が取れていないみたいで各自の判断で動いているようです。指揮官を失うだけでこんな風になるとは……」

楽進と許緒も此方へ来て背中を預けてきたので、四方をカバーする形になる。

「まあ、所詮黄巾党だからな。指揮系統がしっかりしてないんだろ。ちゃんとした軍相手じゃこう上手くは行かないだろうな。指揮官も強いだろうし」

「おつ、正面の部隊が突撃してくるぜ」

「指揮官失って逃げ出すかと思ったんだけどな。正面の部隊が三千、

南門に向かった部隊が五百、北門に向かった部隊が千つ所か」

「よく分かるな」

「冥琳に軍の指揮を習ったのが良かったな。城壁の上から見た部隊の景色を参考にすれば遠目でも大体の人数が分かるからな」

「城壁の上からなら俺も分かるんだが、ここからはちょっとな……」

「そんな事よりも気合入れろよ三人共。これからが正念場なんだからな」

「分かってら！」

「はい！」

「うん！」

士気は十分高いな。

そんじゃあ俺自身も気合入れる為に一言言つか。

「死にたい奴から掛かって来いや！」

この台詞、一度言ってみたかったんだよな。

・
・
・

「遂に居なくなっただか……」

黄巾党が攻めてきてから約半刻。

最初は門を開けようと必死になっていた奴等も、門に近付こうとすれば射られ、何とか門に近付いても落とし穴のせいで門に触れられず、落とし穴を埋めようとすれば射られと徐々に数を減らしていき、残った連中も諦めたのか東門の方へ戻っていった。

奴等が此处に来た時、半数近くがそのまま西門へ向かったが、此处を攻めていた部隊が諦めて戻る少し前に西門の方から戻ってきてそのまま東門へ戻っていったな。

恐らく此处と同様に門を破壊するのを諦めたのだろう。

あの連中を見て北門を攻めていた奴等も東門へ戻る決断をしたみたいだな。

死体の数は三百ぐらいか。

伝令の話だと、この街に攻めてきた黄巾党の人数は五千人ぐらいとの事だから一割にも満たないか…。

…敵が居なくなった事だし東門へ様子を見に行ってみるか。

「夏侯淵様」

ん？

城壁の下から誰かが呼んでくる。

…… あれは于禁と李典か。

下を除いてみると二人が立っていた。

「西門はどうした?!」

「敵が居なくなっただんで、王節はんに任せました。ウチと沙和は東門の様子を見に行こうとしてます!」

「北門はどのようなですか?」

「此方も西門と同じ状況だ!」

「なら夏侯淵様も一緒に東門の様子を見に行きませんか?」

…… ふむ。丁度私もそう考えていた所だ。

此処は部下に任せてしまっても大丈夫だろう。

「ああ、私も行く!下に行くから待ってて来れ!」

「分かったの!」

「了解や!」

二人がブンブンと手を振っている。

待たせるのも悪いな。

「文良!話は聞いていたな!」

「はっ!」

「私は東門の様子を見に行く。此処は頼んだぞ」

「お任せを！」

季衣達は大丈夫だろうか？

・
・
・

「あれは……季衣に楽進、それと徐庶か」

李典、于禁と共に東門の城壁に上がってみると季衣、楽進、徐庶の三人が居た。

徐庶は私達同様、東門の様子を見に来たのだろうか、季衣と楽進は何故城壁の上にいるのだ？

「季衣！」

「呬！」

「呬ちゃん！」

「あつ、秋蘭様ー！どうしたんですか？」

「真桜に沙和？二人共、持ち場はどうしたんだ？」

「敵がいなくなったから様子見に来たんや」

「私も李典達と同じだ。季衣と楽進の二人は一体どうしたのだ？門の外で黒霆院達と一緒に戦っていたのではないのか？」

「あはは…」

「それが…」

二人共バツが悪そうな顔をして、お互いの顔を見ている。

「先程まで一緒に戦っていたのですが、体力的にも精神的にも限界だったようで、見かねた紫苑殿が城壁の上まで連れて来た下さったのです」

「ボクも楽進さんと一緒です。流石にアレはキツイです。倒しても倒しても減らないんですもん」

「？城壁の上まで連れて来た？門が閉まっているのにどうやってだ？」

「紫苑さんが楽進さんと許緒殿を抱えて壁を垂直に駆け上がって来ました。勿論、許緒さんの武器である鉄球も一緒に」

「は？徐庶は今なんと言ったのだ？壁を垂直に駆け上がったと？」

「信じられないでしょうが事実です。人間業じゃないですが紫苑さんはそういう事が出来てしまうのです」

「にわかには信じがたいが…」

「秋蘭様…」

「いや、季衣と楽進の言葉を疑っているわけではない。だが…」

そんな事が出来る人間なんて存在しないはずだ。

知っている人物を思い浮かべてもそんな人物は………そんな人物は………姉者なら………姉者なら“華琳様の為ならばー！”と言って出来てしまう姿を想像してしまう私は疲れているのだろうか？

最近忙しいからな…。

「たしかに無茶苦茶ですけど、春蘭様なら“ふははははー、華琳様の命令ならば壁ぐらい垂直に上ってやろうー”とか言って上ってしまいそうですよね」

……季衣も同じ様な事を思ったのか。

「まあ御二人の戦いぶりを見れば、その程度の事は出来てしまっても不思議では無いと思えてしまいますが」

「……たしかにな」

城壁の下を見てみると数えきれないほどの数の黄巾党が門を開けようと必死になっている……のだが凄まじいな。

「ハアッ！」

「オラァ！」

その黄巾党の連中よりも目立つ二人がいる。

そう、黒霆院と太史慈だ。

敵に周りを何重にも囲まれているのに、それを物ともせず暴れ回っ

ている。

長物の武器を振り回し近付く者を吹き飛ばしている。

……太史慈はともかく、黒霊院はあんなに長い武器は持っていないかったはずだが…。

「紫苑さんも太史慈さんも楽しそうですね」

たしかに、徐庶が言う通り二人とも笑いながら戦っている。

何千と言う敵を相手にしながらだ。

「流石、黒き霊に黒き暴風と言われとるだけの事はあるな。あれだけの人数を相手にして半刻以上経つとるのに全く動きが衰えておらんもん」

「風ちゃんから聞いてはいたけど、こうして実際に戦う姿を見るまでは信じてなかったの」

黒き霊…？

「聞いた事があるな。たしか荊州辺りで黄巾党を相手に大活躍している二人組だったな」

「はい。私も楽進さんも黄巾党に襲われているところを御二人に助けられたのが縁で知り合いました。で、たまたま御二人がこの街に用があつたので滞在していたのです」

「私達は運が良かったです。もし紫苑殿と太史慈殿がいなかったら

どうなっていたか……」

「そやな。いくら夏侯淵様達が援軍に来て下さったとは言え、あの人数から街を守るのは至難の業だったやろうしな。」

「沙和、考えただけでも気絶しそうな。」

……そうだな。防柵を作って街に籠ったとしても、民間人を守りながら十倍の人数を相手にするのは正直キツイ。

「夏侯淵様」

「何だ？」

徐庶が北の方角を見ながら聞いてくる。

「本隊はいつ頃来られるのですか？」

「そうだな……あと半刻と言ったところだな」

「半刻ですか……もしかしたら本隊が来る前に終わってしまうかもしれませんね」

「……流石にそれは無理があるのではないか？」

「私は四半刻程前には此処に来てたのですが、先程までは楽進さんや許緒殿を気に掛けながらの戦いでしたので二人から付かず離れずといった感じでした。ですが今はその必要が無いからか、先程までと比べるとかなり積極的に敵を倒しにいています。今現在の黄巾党の人数は恐らく最初の半分程度。この調子ならば本隊が付く頃に

は黄巾党は全滅してしまうかと思われます」

「なんちゅうか黄巾党の連中が可哀想に見えてくるわ」

「紫苑殿も太史慈殿も本当に強いですね。どれほどの修行を積みめばあれほど強くなれるのでしょうか…」

「だよね〜。ボクももっと頑張らなくちゃ」

「沙和なんか、あまりにも強すぎて雲の上の存在に見えちゃうの〜」

……ふむ。まだ戦いは終わっていないし敵が二千人以上もいるのに、既に勝ったような雰囲気になっているな。

だが、皆の言いたい事は分かる。

あと半刻で黄巾党を全滅させられるかは置いておくとして、不思議な事に負ける気が全くしない。

もし黒霆院や太史慈が華琳様の下で働いてくれれば、これほど頼もしい事は無いな。

だが、もし敵になったならば…。

いや、今はそんな事を考えている時じゃないな。

華琳様…。

・
・

・

「ハアッ！」

「オラァ！」

「ぎゃっ」

「ぐえっ」

「あ、足がー！？」

「がっ…！」

「ごふっ…」

「あぎゃっ」「うぎゃっ…」

今の一振りで俺が四人、秋絃が三人斬ったな。

「減らねえな」

「だなあ」

門の外で本格的に戦い始めてから一時間ぐらい。

何人斬ったかな…？

えーと、指揮官殺すまでに百人ぐらい。

「死にやがぐえっ！」

門の前に戻ってきた所で百五十人ぐらい死んで、計二百五十人ぐらい。

「余所見してんじゃねぎまっ…」

俺と秋絃がそれぞれ一分間に十人ぐらい殺っているとして掛ける六十で千二百人。

「このやぐえっ…！」

楽進と許緒が半分として六百人。

ざっと数えて二千つてところか。

「どうした、紫苑。考え事か？」

「ああ。何人ぐらいやったかなー、つてな！」

「ぎゃっ！」

「あー、六割ぐらいじゃねえ、か！」

「ぐえっ…」

「俺は四割ぐらいだと思っただけど、な！」

「ぐぶう…」

「そんなに少ないか？他の門でも少しは倒しただろ。しかし齒応えがねえ、な！」

「いっふっ…！」

「そついや他の門の分は計算に入れてなかったな。齒応えが無いのは仕方無いだろ。ちゃんとした戦闘訓練を受けているわけでもないし、な！」

「がつ…！」

「まあそりゃそつだけどさ」

「文句言わないで体を動かす。おっ」

困んでいた奴らが一斉に攻撃してくる。

「はぁ、面倒臭……。紫苑、頭下げろ」

「ん？」

《ビュオンッ！》

「うおわ！？」

風切り音がしたので慌てて態勢を低くする。

「がつ！？」

「ぎっ？！」

「ぐっ…！」

「げえっ…！」

「ごうっ！」

「じよえ！？」

「ぶぎよっ？！」

「危ねえな」

一斉に攻めてきた奴らが全員上半身と下半身に綺麗に分かれる。

「悪い悪い。紫苑、バラバラに戦うか？」

「んゝそれもそうだな。楽進も許緒も居ないんだから固まってる必要も無いし、バラバラの方が効率良いしな」

「よっしゃ。じゃあ、俺は門に群がっている奴等を殺りに行くか」

「応。なら俺は引き続き此处で暴れるとしますか」

「そんじゃあな、紫苑」

「あいよ」

秋絃が敵を蹴散らしながら門の前へと走っていく。

あとどれぐらいで終わるかな…。

第15話＼黄巾党襲来・参（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

“次話は半分ぐらいの長さになるかもしれませんが”とか書いておきながら普通に長くなりました…。

待たせた割には内容的にも微妙ですし。

そしてまさかの四部構成に変更。

終わらねえ…いつまで経っても終わらねえ…。

本当に遅筆ですみません。

戦闘シーン難し…。

次話は完成しているので来週投稿します。

その次はいつになるか分かりませんが…。

- - - - -

現在の執筆状況：

第16話＼黄巾党襲来・破↓完成

第X A話↪反董卓連合・シ水関戦↪↓三割
第X B話↪反董卓連合・虎牢関戦↪↓二割強
第X C話↓三割弱

次々話に全く手をつけてねえ…。

まずはストーリーを考える
すかさず大まかに書き込む

そこへ速やかに詳細を詰める…！
締めは見直し！

チツ、呆れるほど有効な戦術だぜ

実践出来ればね…。

次回の投稿予定日は2011年5月21日です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第16話　黄巾党襲来・肆（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

黄巾党が攻めてくる

←

指揮官狩り

←

雑魚狩り

第16話　黄巾党襲来・肆

《ジャーン！ジャーン！ジャーン！》

おっ、銅鑼の音か。

北の方を見てみると曹の旗を掲げた集団が此方へ突っ込んでくる。

曹操率いる本隊か。

戦闘開始から一時間半弱つてところか。

予定よりは早い到着だな。

残っている黄巾党は千人ぐらいか。

おーおー、蜘蛛の子を散らす様に逃げやがる。

警告ではああ言ったけど逃げる奴を後ろから斬り殺す趣味は無いし戻るか。

あー、返り血浴びまくって気持ち悪い…。

あとで洗い流さないとな。

秋絃は大丈夫かな？

……体力は人一倍あるから大丈夫だな。

しかし、久しぶりに翠樹使ったけどやっぱり重いな。

秋絃の大剣よりは軽いけど。

秋絃はよくあの細腕でブンブン振り回せるよな。

まあそれを言ったら許緒もそうだけど。

そついや曹操が来たんだよな…。

どんな女の子なんだろ。

雪蓮があんな感じなんだし、スタイル抜群の美女かな？

まあ会ってみりゃ分かるけど。

「おい、紫苑」

ん？秋絃か。

考え事してたらいつの間にか門に着いたな。

「そつちは大丈夫だったか？」

「ああ。数だけは多かったが終わってみれば大した事は無かったな。まっ、朱墮の試し切りには十分過ぎるぐらいだったけどな」

「朱墮？」

「ああ。こいつの名前。紫苑も刀に名前を付けてるだろ？だから俺

も付けたんだ。そんな事より、門の結界解こうぜ。徐庶に楽進、李典に于禁に許緒に夏侯淵、先遣隊の奴等も全員門の向こうに揃ってるぜ」

「余程暇だったんだな。なら結界を解きますか」

門に触れ結界を解く。

「これでよし。もう開けられるぞ」

「あいよ。門を開けてくれー！」

秋絃が大声で呼び掛けると門が開く。

「紫苑殿！太史慈殿！無事で何よりです！って血が…！」

楽進が飛び出してくる。

「返り血だから大丈夫だよ。俺自身は掠り傷が幾つかあるぐらいだ」

「俺もだ。何せこの武器を使うと血飛沫が凄くてな」

だろうな。

「そうですか……安心しました」

「紫苑さんも太史慈さんも御無事で何よりです」

「兄さん達、ホンマに強いな」

「沙和、驚いたの」

次いで、瑠里、李典、于禁が駆け寄ってくる。

門の向こうには先遣隊が集まっていて夏侯淵や許緒が何か話をして
いる。

「そつちこそ大丈夫だったか？」

「ウチらは大丈夫や。敵もそんなに来いへんかったしな」

「兵隊さん達が弓を射ってたら、その内いなくなつたの」

「南門も問題ありませんでした」

「瑠里はかなり早く来てたよな」

「ええ。まあ居てもやる事が殆ど無かつたものですから」

「こつちは大変だったけどな」

「ご苦労様でした。しかし凄い返り血ですね」

「ああ。取り敢えず洗い流したいな」

「見てて吐きそうになるの。おうえっ……」

于禁、女の子が人前でオウエツとか言うな。

「兄ちゃん！」

許緒か。

話は終わったのか？

「許ち…」

『……………オオオ！』

ん？何か雄叫びみたいのと馬の蹄の音が…。

「季衣から離れる！でりやああああ！」

「！？」

《ガギイイン！》

視界の外から馬に跨がり猛スピードで突っ込んで女性に斬り掛かれた。

咄嗟に翠樹で防いだが、秋絃並みに重い一撃だったな…。

「黄巾党如きが良く受け止めたな！誉めてやろう！だが次は…！」

「姉者！」

「春蘭様！」

「下がっている二人共！今私が成敗して…！」

「その兄ちゃんは悪い人じゃないよ！ボク達と一緒に街を守ってくれたんだから！」

「何！？……秋蘭、もしかして私は何か勘違いをしていたか？」

春蘭… って事は夏侯惇か。

辺りを見渡し自分に向けられてい視線が許緒の言葉を肯定していると受け取ったのか、妹である夏侯淵に確認を取る夏侯惇。

秋絃と瑠里と楽進は武器を構えて戦闘態勢になってるし。

「うむ。季衣の言う通り、その者は敵ではなく味方だ。それも、この戦において一番の功労者と言っている」

「そ、そうか…。すまなかったな、その者。血まみれだったからつい…」

「…まあ誤解が解けたようで何よりだよ。取り敢えず秋絃と瑠里と楽進は武器を下ろせ」

「姉者も馬から降りろ」

「応」

「分かりました」

「はい」

「う、うむ」

「紹介しよう。姉の夏侯惇だ。姉者がすまなかったな、黒霆院」

「夏侯元讓だ。本当にすまなかった」

夏侯惇が頭を下げる。

「いや、別に怪我をしたわけでも無いし気にしないでくれ」

「そう言ってもらえると助かる」

見た目は美人だな。

デコだけど…。

性格的には猪突猛進なのかな？

服装は夏侯淵と色違いなだけだな。

武器は幅広の剣か。

「春蘭、秋蘭達とは合流出たようね。秋蘭、季衣、大丈夫だったかしら？」

「はい！」

「はい、詳しくは後で報告しますが大きな被害はありません。逃げた黄巾党はどうされました？」

夏侯惇について色々考えていると、後ろから金髪の女の子と栗色の髪をした女の子が現れた。

「華音が追撃しているわ。……………何か変な空気だけど何かあったのかしら？」

「姉者がこの街の者を黄巾党と勘違いして斬り掛かってしまいましたし

て…」

夏侯淵が俺の方を見る。

「はぁ…何をしているのよ春蘭…」

金髪クルクルツインテールの女の子が呆れたような顔で夏侯惇を見る。

もしかして、この子が曹操か？

何かイメージと違うな。

「も、申し訳ありません。その…季衣に近付こうとしていて、血まみれだったものでつい…」

「ついじゃないでしょ。いつも言っている事だけだと考えてから行動しなさい」

「はい…」

見るからに落ち込んでるな。

「猪」

もう一人の女の子が呟く。

「桂花！貴様、私に喧嘩を売っているのか！？」

「猪だから猪って言ったのよ、猪！」

「貴様ー！二回も三回も同じ事を言いよって！チビの癖に！」

たしかに小さいな。

曹操も小さいけど。

「なっ…！？身長は関係無いでしょ！？外見じゃなくて中身の話をしているのも分らないの！？」

「うるさい！貴様は私を馬鹿にしたいだけだろ！」

「だったら何よ！」

「我が剣、七星餓狼の垢にしてくれる！」

錆じゃね？

「垢じゃなくて錆よバーカ！やれるものならやってみなさいよ！」

「いいだろう！今そっちに行くから…」

「二人共止めなさい！！」

『！？』

おお…びっくりした。

「全く貴方達は…。周りを見なさい。皆呆れているでしょう」

『あつ…』

皆の視線が二人に突き刺さる。

『すみませんでした』

「全く…。春蘭が無礼を働いてすまなかったわ。貴方名前は？」

「黒霆院紫苑だ」

「私は曹孟徳よ。春蘭が斬り掛かったらしいけど怪我はなかったかしら？」

「ああ。ちゃんと防いだから問題無い」

「……へえ。春蘭の攻撃を防いだの」

今、キラーンと目が光ったような気が…。

「春蘭」

「何でしょう、華琳様」

「この者に斬り掛かった時に手加減はした？」

「いえ、馬を全力で走らせ力の限りを込めて七星餓狼を振り下ろしました」

「いやいや、少しは手加減しようぜ。」

黄巾党じゃなかったらどうするんだよ。

「そう。……ねえ、貴方」

「ちょっと待った」

「何かしら？」

「長くなりそうか？」

「それは貴方次第ね」

「先に返り血を流したいんだけど構わないか？このままの状態は気持ち悪いんだけど」

「…そうね。見ている側としても気持ちが良い物ではないし構わないわ」

「ありがとう。え〜と、それじゃあ…」

「紫苑殿、街の人達が湯を沸かしてくれていたので、それを使って下さい」

「本当か？なら、ありがたく使わせてもらうか。秋絃も来るだろ？」

「ああ、流石にこの状態はな…」

「許緒と楽進は…」

「ボクは大丈夫だよ。返り血は殆ど浴びてないし」

「私も大丈夫です」

「そっか。なら楽進は曹操達を長老の所へ連れて行ってくれるか？」

「分かりました」

「なら私が紫苑さんと太史慈さんを湯浴みをする場所まで連れて行きます」

「お願いします。湯浴みが終わったら長老宅へ来て下さい。恐らく長老宅にいるはずです」

「分かった。瑠里、案内頼むな」

「はい。では此方へ」

「では曹操殿。私に着いて来て下さい」

「分かったわ。春蘭、秋蘭、桂花、季衣、行くわよ。此处は高懿に任せるわ。先遣隊の被害の把握、物資の補給、追撃部隊からの報告の確認などをお願い」

『はっ！』

曹操達が楽進の案内に従い街の中心へ向かっていく。

「楽進、防柵は壊してしまつて構わないか？」

「はい、問題ありません、夏侯淵様」

「姉者、頼む」

「任せろ！」

《ゴシヤツ！バキツ！グシヤツ！》

夏侯惇が防柵を破壊しながら進んでいく。

瑠里の話だと、かなり丈夫に作っただけが簡単に壊してるな…。

まあ、さっきの一撃でも分かっていた事だけど秋絃並の馬鹿力だな。

「紫苑さん、行きますよ」

「ああ」

俺と秋絃は瑠里の案内に従い湯浴み場所へ向かった。

・
・
・

「此処です」

案内されたのは一軒の料理屋の厨房。

そこには大きな樽が二つ置いてあり中にお湯が入っていた。

「湯浴みって此処で？」

「はい。店の御主人が快く提供してくれました。店の椅子や机を防柵の素材として使ってしまい再開するにも時間が掛かるからと」

「結局、防柵作った意味無かったよな」

まあ結果だけ見れば秋絃の言う通りだな。

「ですが、万が一の事を考えると作らないわけにもいかないでしょう」

「まあな」

「手桶や手拭いはそこに置いてあります。お二人の荷物も宿から持ってきておきました」

徐庶が指差した先を見ると確かに置いてあった。

「仕切りがありませんね…。布か何かを持ってきて…」

「別に必要無いだろ」

そう言うとき秋絃が服を脱ぎ出した。

「ちょっと…！紫苑さんが居るのに何で普通に脱ぎ出しているんですか！？」

「え？いや、別に今更紫苑に裸見られたってどうって事は無いし」

「……そう言えば、お二人はそういう関係でしたね。なら私は店の入口で待機しています」

「了解」

「あいよ」

「全く…少しは羞恥心というものをですな…」

瑠里はブツブツと何か言いながら出て行ってしまった。

「服洗うの面倒だなあ…」

「でも洗わないと着る物なくなるしな。俺は二着しか持ってないし。秋絃も二着しか持ってないだろ？」

「ああ。この服かさ張るからな」

『はあ…』

二人揃って溜め息が出た。

「曹操も待っている事だし、さっさと終わらせようぜ」

「了解」

……さっき曹操は何を言おうとしてたんだろう。

まあ予想は付くが。

・

・
・
『遅い!』

「貴様、何をちんたらしていたんだ!」

「そうよ! 華琳様を待たせるとか汚らわしいケダモノの分際で何様のつもり!？」

湯浴みを終え長老宅に行ったら、皆は中央広場に居ると言われたので中央広場に來たのだが、到着するなり馬騰された。

汚らわしいケダモノって…。

何で会ったばかりの女の子に、そんなこと言われなければならないんだ？

まあたしかに服を洗うのに多少の時間は取られたけど…。

「二人共黙りなさい」

『ですが…!』

「いいから。黒霆院、と言ったわね？」

「ああ」

「秋蘭や季衣から聞いたのだけれど相当強いらしいわね」

曹操が値踏みするような目で俺の目をジッと見つめてくる。

「まあそこそこな」

「別に謙遜する必要は無いわ。未だに信じられないけど、貴方のお陰で先遣隊にも民にも被害全く出ていないそうじゃない。黒き霆の噂も聞いているわ。全力の春蘭の一撃も受け止めたわよね？」

「まあ間違っではないない」

「単刀直入に聞くわ。私に仕える気は無い？」

……やっぱりな。

そんな事だろうと思ったよ。

まあ曹操に会うという目的は達成したし俺の返事は決まってるけどな。

「悪いが断る」

「…へえ」

「おい貴様！華琳様がお声を掛けて下さってるのに、その態度は何なんだ！？」

「ちょっとアンタ！華琳様がお声を掛けて下さってるのに、その態度は何なのよ！？」

「あー、はいはい。悪かったよ、デコにチビ」

「誰がデコだ!？」

「誰がチビよ!？」

「春蘭に桂花、私は黙りなさいと言ったわよね？」

『はい…』

「黒靈院、私の誘いを断る理由は何かしら？私では不満？」

「いや、別に君に不満があるわけじゃないよ。君が為政者として優秀なのは噂で聞いているし、実際目の前に居る君は、王とし十分な器があると思うし」

お世辞を言っているわけじゃない。

流石は乱世の奸雄と呼ばれるだけの事はある。

小さいながらも覇気や威圧感といったものは既に感じられる。雪蓮とどっちが上かと言われれば、雪蓮の方が上だと答えるが。

……この子、一体何歳なんだろ。

「なら何故？」

「まあ一言で言えば見聞を広めたいからかな。会いたい人物がいるんだ」

「誰かしら？」

「西涼の馬騰」

「馬騰……たしかに彼女の評判は非常に良いわね」

「そういうわけだから今は誰かに仕える気は無い」

「……そう。後ろにいる太史慈や徐庶はどう？太史慈の武も見事だと聞いているわ。徐庶は桂花と同じく頭が回るみたいだし。さっきから私の事を“観察”しているでしょう？」

「悪いが俺も紫苑と同じだ。序でに言えば紫苑から離れる気は無い」

「……まあ否定はしません。申し訳ありませんが私も断らせて頂きます。紫苑さん達と一緒に行動するつもりなので」

「……！貴様らー！黙って聞いていれば華琳様に向かって失礼ではないか！華琳様が誘って下さっているというのに揃いも揃って何なんだ！貴様らの目は洞穴か！？」

「節穴じゃね？」

「そんな事はどうでもいい！華琳様に仕える気がないのならばこの場で叩き斬ってやる！」

「いいぜ？さっきの事もあるし決着を着けたいなら受けて立ってやるよ」

面白そうだな。

《チャキッ》

「…！」

《ジャキッ》

此方が刀に手を掛けると夏侯惇も剣に手を掛ける。

「おい、姉者！」

「落ち着け紫苑」

「俺は落ち着いてるよ。その台詞は向かいの猪に言ってくれ」

「その減らず口、今に聞けなくしてくれ…」

「……春蘭、怒るわよ」

『…！』

…今の低い声色はゾクッとしたな。

「で、ですが…！」

「……………」

「…分かりました」

曹操の無言の圧力に屈したみたいだな。

「繰り返し繰り返し、すまないわね」

「いや、今のは挑発した俺も悪いしな。気にしないでくれ」

「そう言ってくれると助かるわ。それでどうかしら？考え直すつもりは無い？」

「悪いけどな」

「……そう。なら仕方無いわね」

あれ？以外とあっさりと引いたな。

「馬騰に会った後はどうするつもり？」

「まだ決めてない」

これは本当だ。

洛陽で董卓に会ってから馬騰に会いに行く予定で、その後は一応白紙だからな。

まあ雪蓮の所に戻る可能性が高いけど。

もつとも、董卓が洛陽にいなかった場合は先に馬騰に会って、その後董卓を探す事になるけどな。

「なら馬騰に会った後、陳留に来なさい」

「へ？」

「一ヶ月でいいから客将になってくれないかしら。もしそれで私の所が気に入ったのなら正式に仕官してくれればいいし、もし一ヶ月

客将をしても気に入らないのならば、それ以上は勧誘しても無駄だ
と思うから好きにしてくれていいわ。どうかしら？」

……諦めるつもりなんて毛頭無い、けど今此处で無理矢理勧誘し続
けるのは得策ではない、一ヶ月客将として過ごせば必ず仕官するだ
ろう、って曹操の目は語っているな。

いや、何となくだけど。

「分かった。曹操がそこまで言ってくれているんだ。馬騰に会った
後は曹操を訪ねるよ」

まあ董卓の事があるから必ずというわけではないけど。

「ふふつ。期待して待っているわ。後ろの二人もそれでどうかしら
？」

「別に構わないぜ」
「私事です」

「そう…。貴方達が来るのも楽しみに待っているわよ」

……何だろ。

俺を見る目とは違って、秋絃や瑠里を見る目には将として以外の期
待も含まれているような…。

………そういや、夏侯淵の話だと曹操は同性愛者だったな。

その辺の期待も混じっているのか。

……そうだな。

「なら話は終わりね。それじゃあ、また会った日を楽しみにしているわよ」

「ちょっと待った」

「何かしら？」

「曹操に一つ頼みがある」

「頼み？」

「ああ。楽進」

楽進を手招きする。

「何でしょうか、紫苑殿」

「曹操、この子を曹操に仕えさせてやってくれないか？」

楽進を曹操の方へ向かせて突き出す。

「その子を？」

「え！？し、紫苑殿！？一体何を……」

「楽進。楽進は朝こう言っていたよな？“街の人を守る為に武を磨いてきた”と」

「はい」

「俺は楽進なら街の人だけじゃなく、もっと多くの人を守れると思うんだ」

「もっと…多くの人を…」

「ああ。けど此処に居るだけじゃ限界がある。軍に入ればそれが出来ると思うんだ」

「……………」

…流石に急すぎたかな…俯いて考え込んでいるみたいだけど。

曹操は黙って待っていてくれている。

「……………そうですね」

おっ、楽進が顔を上げた。

「今回の戦いでは自分の未熟さを思い知らされました。でも私はまだまだ強くなれます。強くなればもっと多くの人を守る…！」

「……………身体が強さだけじゃなく心の強さも磨かなきゃ駄目だけだな。まあ楽進なら、その点には関しては心配ないけど」

「はい！曹操様！お願いします！私を曹操様に仕えさせて下さい！」

「……………秋蘭、この子の能力はどうなの？貴方からの報告は特に無か

ったけれど」

「申し訳ありません。私は楽進が戦っている所を見ていないので何とも…」

「はい！華琳様！」

「はい、許緒」

「ボクは楽進さんと一緒に戦ってましたが、ボクと同じぐらい強いです！」

「…そう。良いわ、楽進、貴方も今日から我が軍の一員よ」

「あ、ありがとうございます！」

うむ、これで良し。

近い将来、敵になる可能性もあるけど、それはそれこれはこれ。

楽進なら多くの人を守るようになるだろう。

良い人材は国の宝だからな。

旅に連れて行ってやるのも悪くないんだけど、この先どうなるかわからないからな。

…おっと、忘れてた。

「序でに、この二人も一緒に頼む」

近くにいた李典と于禁の腕を掴んで曹操の前に連れて行く。

「ウチらも!？」

「沙和も!？」

「何だよ、二人共嫌なのか？」

顔を見合わせる李典と于禁。

「嫌っちゅうか何て言うか……」

「沙和達で役に立つのかな」と……」

「その二人は？」

「楽進の親友だ」

「私は別に構わないけれど本人達の意志はどうなの？」

「どうする？」

「……分かった、覚悟決めたるわ。ウチも行く。風一人だけ行かせるんもアレやしな。それに陳留の州牧様の話はよう聞いとります。曹操様が大陸を治めてくれるなら、今よりは平和になるっちゅう事やろ？」

「ええ、そうなるように行動していくわ」

「ならウチは決まりや。沙和はどうする？」

「ううゝ…。風ちゃんも真桜ちゃんも得意な事があるからいいけど沙和は…」

于禁が両手の人差し指をツンツンしながら返事に困っている。
ふむ。

「よし。なら後で俺が軍に入ってから役に立つ秘策を于禁に教えてやろう」

「秘策？それは何かしら？」

「曹操には秘密。まっ、見てからのお楽しみってね。于禁、どうする？」

「その秘策って言うのがあれば、沙和でも軍でやっていけるの？」

「ああ、勿論だ。保証する」

「分かったの。私も風ちゃんや真桜ちゃんの力のなりたいもん。曹操様、私も仲間に加えて下さい！」

「良いでしょう。なら三人共、名を覚えてくれないかしら？」

「楽進文謙と申します。真名は風。曹操様にこの命、お預け致します」

「李典曼成。真名は真桜や。以後よろしゅう」

「于禁文則なの。真名は沙和って言うの。よろしく御願いしますなの。」

「風、真桜、沙和ね。私は華琳よ。真名で呼んでくれて構わないわ。差し当たり、貴方達三人人は秋蘭に面倒を見させるわ。良いわね？」

『はい!』

「それじゃあ…」

「曹操様!」

一般兵らしき男性が駆けてくる。

「何かしら?」

「高懿様からの連絡です!曹洪様達が戻られました!追撃部隊は逃げ出した黄巾党の拠点を発見し襲撃!生き残っていた者を尋問に掛けた所、此処から馬で半日程度の距離にある砦を物資集積所として使っているとの情報を入手!その付近に住んでいた兵によると確かに古ぼけた砦があったとの事!曹洪様が指示を仰いでいるそうです!以上です!」

「分かったわ。秋蘭!」

「はっ!」

「貴方には、この街での事後処理を任せるわ。風、真桜、沙和も残していくわ。上手く使いなさい」

「御意！」

「凧！真桜！沙和！」

『はっ！』

「話は聞いていたわね？秋蘭の補佐を頼んだわよ」

『御意！』

「季衣も疲れているだろうから秋蘭の補佐を頼むわ」

「華琳様達は敵の砦を攻めるんですね？」

「ええ、そうよ」

「その、大丈夫ですか？たしかに少し疲れてますけど、将が足りないのならボクも行きますけど…」

「心配してくれてありがとう、季衣。けど大丈夫よ。華音と春蘭の二人がいれば十分。それに春蘭は力が有り余っているみたいだから、季衣の分も頑張ってくれるはずだわ。そうよね？春蘭」

「はい！季衣、私に任せておけ！秋蘭の分も季衣の分も新しく入った三人の分も暴れてくれるわ！」

「分かりました。頑張ってください、春蘭様」

「応！」

「暴れるのはいいけど無闇矢鱈に突っ込まないでよね、猪」

「貴様に言われんでも分かってるわ！」

「話は以上よ。首領の情報が殆ど入手出来ない中、折角見つけた手掛かりだもの。逃がすわけにはいかないわ。春蘭、桂花、行くわよ」

『はっ！』

「また会いましょう、黒霆院」

「ああ」

そう言つと曹操達は東門へ向けて歩きだした。

……夏侯惇と荀イクは俺を睨み付けてからだけど。

「すまんな、黒霆院」

「ん？」

「いや、姉者と荀イクが去り際に黒霆院を睨み付けていただろ」

「ああ。まあ別に気にしてないよ。取り敢えず俺は各門の結界を解きに行く。門の内側に積んである土嚢を崩したいから街の人達に声を掛けておいてくれるか？」

「紫苑殿、それならば既に取り掛かっているはずですよ」

「おっ、そうなのか。仕事が早いな」

「はい。まあ被害と呼べるようなものは出ていないですからね」

「街の人達に被害が出なくて良かったよ。それじゃあ俺は行くから。夏侯淵、此処は頼んだ」

「うむ。頼まれよう」

「まずは南門に行くか。え〜と、秋絃と瑠里は…」

「紫苑殿！あの…！少し御話があるので着いていつでもよろしいですか？」

「ああ。俺は構わないよ」

「なら私と太史慈さんは此処で夏侯淵さん達を手伝います」

「そうだな。俺らが着いていつてもやる事ないし」

「分かった。行くぞ、楽進」

「はい！」

まだ防柵が残っているので、一旦東門へ戻って城壁沿いに東門へ向かう事にした。

・
・
・

只今、南門の結界を解き、城壁沿いに西門へ向かって歩きだした所。
なのだが…。

「ま、街の人達に被害が出なくて良かったですね」

「ああ。まあ防柵は無駄になっちゃったけどな」

「そ、そうですね。……………」

また会話が止まった。

ちなみに、この会話五回目。

秋絃達と分かれてから、ずっとこんな感じだ。

話があるとの事だが、もじもじしたり悶えたりしているだけで中々話しかけてこない。

話し掛けてきても雑談ぐらい。

何か声を掛けづらいので、俺からも話し掛けていないしな。

どうしたもんか…。

「あの…」

「ん？」

「え〜と、その…」

「話があるんだろ？別に遠慮しないでいいからズバッと言ってくれ」

「わ、分かりました。スー…ハー…スー…ハー…」

何故に深呼吸。

「あの…！真名で、な、呟って呼んで下さい！」

「……え〜と、話ってそれ？」

「そ、そうです」

「呟」

「は、はい！」

「呟」

「な、何ですか？」

「いや、呼んでみただけ。ていうか緊張し過ぎ」

「し、仕方無いじゃないですか…。男性に真名を教えるのは初めてですし…それに…その…ごによごによ…」

……ヤバい、滅茶苦茶可愛い。

（あれ？以前にも同じ様な事を思った気が…）

顔を真っ赤にしながら胸の前で人差し指をツンツンしてる。

アレだ、ギャップ萌え？

凧は素直だし真面目だし良い子だけど、あんまり女の子の子女の子してない感じなんだよな。

けど、目の前の凧は凄く女の子っぽくて可愛い。

いや、普段も可愛いけどね。

俺さっきから何回可愛いって言ってんだろ。

……取り敢えず謝っておこう。

雪蓮、浮気してごめんなさい。

雪蓮の事を嫌いになったわけでも忘れたわけでもありません。

今でも愛しています。

だから出来れば許して下さい刺さないで下さい御願います。

よし、懺悔終了。

「凧」

「な、何ですか？」

「嫌だったら、ぶん殴ってくれていいから」

「はい？ん…！」

凧に口付けをする。

「……………凧」

息が苦しくなってきた所で唇を離す。

「……………えっと、あの、私、今、紫苑殿と口付けを……………」

「うん、した」

「あ、あう……………」

……………すつつつつごく顔が真っ赤になっている。

「だ、大丈夫か、凧」

「いえ、だ、大丈夫です。その、あの、えっと……………あう……………」

流石にいきなり過ぎたか。

凧の頭がオーバーヒートしてるっぽい。

暫く放っておくしかないか…。

・
・
・

五分程すると、凧がようやく正気に戻った。

「ごめん、凧」

「いえ、謝らないで下さい。その……凄く嬉しかったです。……口付けしてくれたということは、紫苑殿は私の事が好き……という風に解釈してもいいのでしょうか？」

「ああ。俺は凧が好きだ」

「あつ……そういう凧にはつきり言われると恥ずかしいです」

「好きな人に好きって言ふ事は、別に恥ずかしくなんかないさ。言葉にしなきゃ伝わらない事だってあるだろ？」

「それはそうですが……あの……紫苑殿は私の何処が好きになったのですか？」

「全部」

「全部……ですか？」

「ああ。容姿も性格も声も全てだ」

「容姿も……紫苑殿……その……体の傷とかは気にならないのですか？」

「？全然気にならないけど？何でだ？」

凧が俯く。

「その……やっぱり男性からするば傷だらけの体は見るのも触るのも嫌でしょうし……」

……はあ。

「凧、顔上げて」

「はい……」

《ベシッ！》

「あう……！」

顔を上げた凧の眉間にデコピンを放つ。

「凧、今度そんなこと言ったら本気で怒るからな」

「でも……」

《ズビシッ！》

もう一発、凧の眉間にデコピンを放つ。

「痛っ……」

「さっきよりも力込めたからな」

「ん……！」

凧の左頬にある傷を撫でる。

「この傷は凧が街の人達を守る為に負った傷だろ？なら、この傷は凧が街の人達を守ってきた証だ。誇りこそすれ恥ずかしがる事も無い目を感じる事も無い。違うか？」

「それは…」

「もし凧の傷を見て、凧を傷付けるような言葉を言う奴がいるなら俺がぶん殴ってやる。誰が何と言おうとも、その傷は凧の誇りだ。だから、自分で自分を傷付けるような事は言わないでくれ」

「紫苑殿…（ギュッ）」

「凧、好きだよ」

抱き締めてきた凧を強く抱き締め返し、暫くその場で抱き合い続けた。

・
・
・

中央広場に戻ってくると皆揃っていた。

「遅かったな、紫苑」

「そうか？」

「そうですね、少し時間が掛かりすぎた気がします」

「まあ凧と雑談しながら、ゆっくり歩いていたらな」

「凧ちゃん目が少し赤いの」

「何かあったんか？」

「い、いや別に何も無かったぞ。そうですね、紫苑殿」

「ああ。凧の言う通りだ」

「ほら、何も無かつ…」

「おや？おやおやおや？兄さん、今“凧”って呼ばへんかったか？」

…何故ニヤニヤするんだ、李典。

「……呼んだけど、それがどうかしたか？」

「いつの間に、そんなに仲良うなったんかな」と思つて」

「べ、別に特別な意味は無いぞ。ただ、もうすぐ御別れだし、師匠には色々お世話になつたし、紫苑殿とは戦場で背中を預けて戦つた仲だし…」

凧、動揺しすぎだ。

「あ、ほつぺたに口付けの後」

「えっ！？そんな筈は…ちゃんと拭つて…！」

頬を触る風。

お馬鹿…。

「何や、やっぱりスケベな事してたんか」

「あつ…。ち、違っ…！別に…！ただ口付けして抱き合っただけで…！」

「ヒューヒュー！風ちゃん大胆なの〜」

「風に春が来たのは本当やったんや。これは街の皆に言い触らしに行かんと！行くで、沙和！」

「分かったの〜！」

「なっ…！？ちよっ…！待て二人共！」

李典と于禁が走りだし、それを風が追っ掛ける。

「全く…」

「これは雪蓮に刺されるな」

「ケダモノ…」

微笑ましい光景に和んでいると、物騒な言葉と傷付く言葉を掛けられる。

「お前らなあ…」

「俺は楽進が良い子なのは知ってるし、紫苑とそういう仲になって
も別にいいと思ってるけど、雪蓮はどうかな」

「うぐっ…」

「ふむ。つまり黒霆院は付き合っている女性がいるのに楽進と恋仲
になったという事か」

「うわあ。兄ちゃん、それって修羅場ってやつ？」

「いや、まあ、そうとも言えるけど。って許緒には未だ早い話だか
ら」

「ええ、子供扱いしないでよ」

「まあ確かに季衣には早いな。黒霆院」

「何だ？」

「二股は良くないぞ。子供達に示しが付かん」

「いや、それはだな…」

「だから、子供扱いしないで下さいよ」

「夏侯淵」

「何だ？」

おい秋絃、まさかとは思うが…。

「二股じゃない。俺も含めて三股だ。場合によっては六股になる」

「そ、そうか。まあ、あまり男に興味が無い私から見ても美形だと思うしな。英雄色を好むとも言っし良いのではないか？」

夏侯淵が微妙に引いてるだろが！

「秋蘭様〜！ボクも話に加えて下さいよ〜！」

「もういい、煮るなり焼くなり好きにしてくれ…」

そうさ、三人共本気で愛しているんだ！

何もやましい事なんか無い！

「…ケダモノ」

瑠里、流石に何回も言われると傷付くからやめてくれ。

あと、ボソツと言っな。

「なはははは！」

「真桜の馬鹿ー！」

さっきまで五千人もの黄巾党に攻められていた街とは思えないぐらい平和だな…。

・ ・ ・

黄巾党が襲撃してきた日の翌日。

俺は今、北門にいる。

風、李典、于禁、夏侯淵、許緒達も一緒に、雑談をしていた所だ。

街の方は夏侯淵達が何とかしてくれるだろし、昨日洗っておいだ服も乾いたので出発する事にしたのだ。

ちなみに曹操達はまだ戻ってきていない。

既に長老や街の人達とは挨拶を済ませた。

「そろそろ行くか」

「だな。こうして喋っているのは楽しいが、このままだといつ出発出来るか分からなくなるからな」

「それじゃあ夏侯淵、曹操によりしく言っといてくれ」

「うむ。了解した」

「今度はゆっくり酒でも酌み交わそうぜ」

「ああ。楽しみにしているぞ、太史慈」

「許緒、また今度な」

「お元気で」

「じゃあね、兄ちゃんに姉ちゃん達」

「于禁、昨日教えた秘策は覚えてるな？」

「勿論なの！沙和、頑張れそうなの！」

「おう、頑張れよ」

「また今度買い物に行きましょう」

「うん！徐庶ちゃんと買い物に行ける日を楽しみにしてるの！」

「李典には世話になったな」

「その子はじゃじゃ馬やけど、姐さんは使いこなしてるみたいやからな。大事に使ってえな」

「おう！」

「風」

「紫苑殿…」

（ギュウッ）

「元気でな。必ず会いに行くから。ん…」

凧を抱き締め口付けを交わす。

「……………ん。紫苑殿もお元気で。無理はなさらないで下さい」

「ああ」

名残惜しいが、凧の背中から手を離す。

「……………秋絃、瑠里。行くぞ」

「応」

「はい」

こうして俺達三人は洛陽を目指し街を出発した。

第16話 黄巾党襲来・肆（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

ようやく、黄巾党襲来篇終了。

長かった…。

え、今話も会話メインで描写が少ないと思います。

ちよいちよい修正していますし修正していきますが、今後も描写が少ない事が多々あると思います。

なるべく描写を増やすように努力しますが、駄目だこりゃと思っただけなら未限して下さい。

「黄巾党襲来」のこの部分の文字を繋げると“天元突破”になります。

まあ、たまたま遊んでいたゲームに、そういうタイトルの作品が出ているからというだけで、特に意味はありません。

起承転結だと内容的に合わない……いや、一応合っていると思います。が、まあ何となく起承転結は使いませんでした。

- - - - -

現在の執筆状況：

第17話↓三割

第X A話↘反董卓連合・シ水関戦↘↓三割

第X B話↘反董卓連合・虎牢関戦↘↓二割強

第X C話↓三割弱

次回の投稿は2011年6月8日が目標です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第17話 白銀の槍 (前書き)

《前話の簡単な粗筋》

曹操軍本隊が到着

←

曹操や夏侯惇と顔合わせ

←

楽進に真名を呼ぶ事を許される

←

旅立ち

第17話　白銀の槍

「迷ったか？」

「迷ったな」

「迷いましたね」

俺と秋絃と瑠里の三人は洛陽に向かっていた……のだが、今現在は森の中。

どうやら迷ってしまったようだ。

「だから言っただじゃないですか。あそこは右に曲がるべきだと……」

「俺の勘じゃ左だったんだけどな」

頭をポリポリと掻く秋絃。

「まあ、最終的に決めたのは俺だから、瑠里も責めるなら俺を責める」

「別に責めるつもりはありません。ただの愚痴です。紫苑さんと秋絃さんが勘を頼りに旅をしている事は、最初の数日間ですごく分かりましたから。そもそも今現在迷う前だって洛陽に近付いているんだかいらないんだか分からないような状況でしたし」

「まあな。黄巾党が暴れていると聞いてコッチへ移動、黄巾党の拠点の情報を入手しソッチへ移動、黄巾党が暴れていると聞いてアッ

チへ移動、何となくでムコウへ移動って感じだからな。後は秋絃の勘に頼ったり瑠里の頭脳に頼ったりか」

「はあ…。何となくで進行方向変えないで下さい」

「まあ別にそこまで急いでいるわけじゃないしな」

「雪蓮の所を出発してから瑠里達と出会うまでの俺達の行動と全く同じだな。変わった事と言えば…」

秋絃が瑠里の方をニヤニヤしながら見る。

「よう、黒き流星」

《ドガンッ!》

「つぶねえな」

秋絃の後ろにあった木が吹っ飛ぶ。

「…ぶち抜きますよ？その名で呼ばないで下さい」

「いいじゃねえか別に。黒き霆に黒き暴風、そして黒き流星。三人揃って黒の兄妹！ってか？なあ紫苑」

バシバシと俺の肩を叩くな。

こっちに振られても困るんだが…。

「まあ御愁傷様としか言い様が無い」

「くっ……まさか私にまで恥ずかしい異名が付けられるとは……」

帽子を人差し指でクルクル回しながら呟く瑠里。

そう、此処数週間間に瑠里にも変な異名が付けられたのである。

その名も“黒き流星”

瑠里と最初に出会った時に秋絃が冗談で言った“黒き雨”よりもグリードアップしている。

「……………」

「……………」

瑠里はただ矢を射っているだけなんだけどな、氣を矢に纏わせて。

はい、瑠里に氣の使い方を教えました。

とは言っても、氣を体に纏わせて数秒だけ身体能力を上げる事と、氣を矢（と弓）に纏わせる事ぐらいしか出来ないみたいだけど。

「……………」

「……………」

氣量も少ないし、瑠里が氣を纏わせられる限界まで矢を氣で強化した場合、精々十数本射るのが限界だ。

俺や秋絃みたいに一人で無双出来る程に強くなったわけじゃない。

まあ身体強化と合わせて戦場で自分の身を守れるくらいには強くな
った。

とは言っても一人じゃ不安なので基本的に秋絃を傍に居させるよう
にしているけど。

『……………！』
『……………！？』

で、まあ限界まで強化した矢を城壁の上から地面に向かって放つと
小さいクレーターが出来るので、晴れて“黒き流星”という異名が
付いたというわけだ。

さて、意識を思考の海に沈めていた（ちよつと格好良い表現にして
みた）ので、どんな会話をしてたのかは分からないけど、さっきか
らじゃれついてる二人を宥めて先に進みますか。

「秋絃ー、瑠里ー。じゃれあうのは終了。そろそろ進もうぜ？」

「あいよ」

「分かりました」

さて、洛陽は一体どつちなんだろう？

・
・
・

「どつちする？」

「どうしようか」

「どうしようか」

前方では茶髪でポニテで十文字槍を構えている女の子が、白い仮面を被った黒っぽい服装の変な奴ら数十人に囲まれていた。

まあ俺達三人も黒っぽい服装とう点では同じだが。

俺達は取り敢えず茂みの中に身を潜め様子を窺いながら小声で会話している。

「紫苑さん、どうしますか？」

「どうするって助けるに決まってるだろ。どう考えたって仮面の奴らの方が悪党だろうが」

「私は紫苑さんに聞いたのですが…。まあそれはいいとして、あの仮面を被った人達は五胡の人達だと思います」

「五胡って言うのと西方の騎馬民族か？」

「はい。それにあの女性、以前涼州からの商人達に聞いた馬超さんという方の外見と酷似しています。もしかすると、洛陽に向かっているつもりが涼州の方に進んでいたのかもしれない」

「どんだけ方向音痴なんだよ、俺達」

「そういう事は地図などで進行方向を確認するなりしてから言っして下さい。適当に進んで着く方がおかしいのですから」

「地図見るの面倒」

「はあ…。秋絃さんは何でも面倒じゃないですか」

「まあな。食う寝る戦うは好きだけど、他は嫌いだ」

「…脳筋」

「何か言ったか？」

「ふあんもいつひえましえん。ふおふおをひっひゃらないれくらさい」

瑠里の頬が左右にギュニと引っ張られている。

ていうか二人は俺の左右にいるわけで、秋絃は人の頭の上で瑠里の頬を引っ張っている事になる。

頭の上の乗っかっている胸が重いんだが…。

あと、騒ぎすぎだから。

隠れている意味無くなるから止めてくれ。

全く…。

「二人共緊張感無さすぎだぞー。まあ此所が何処かは、あの女の子を助けて聞こう。つーわけで」

「紫苑？」

「紫苑さん？」

茂みから出て助走をつけて勢い良く

「ドロップキック！」

を、女の子を後ろから攻撃しようとしていた奴の顔面に喰らわしてやっただ。

「あの馬鹿……」

「紫苑さんも何だかんだで脳筋ですよ……」

おいこら聞こえているぞ二人共。

さて、一暴れしますか。

・
・
・

くそっ……あたしとした事が……。

街に進攻してきた五胡の連中を追い払ったまでは良かったが、深追
いしすぎた。

五胡の別動隊に奇襲を受けて、あたし率いる追撃部隊は本隊と分断
され森に追い込まれちゃうし。

別動隊の方は本隊と交戦し始めたけど、街を襲った部隊の敗残兵達

に反撃されて、追撃部隊の仲間達は森の中でバラバラになっちゃった。
皆、無事だと良いが…。

《ジャリッ》

人の心配をしている場合じゃないな。

五胡の奴等がジリジリと包囲を狭めてくる。

足を負傷してるし、この人数相手だと流石に厳しいか…。

母様…。

《ブンッ!》

「!くそっ…!後ろか!」

防げるか!?

「ドロップキック!」

「ぐへあっ!?!」

「なっ…!?!」

何かが振り下ろされる音がしたので振り返ってみると、あたしに攻撃をしようとしていたであろう五胡の奴の顔面に、真っ黒な服に身を包んだ男が両足を揃えて蹴りを入れていた。

《ギューイーンッ！》

「ぐはっ！？」

「余所見すんなよ嬢ちゃん」

《ザスッ！》

「がっ…！？」

「接近戦は苦手なんですけどね」

「！」

もう二人、五胡の奴に蹴りを入れた男とあたしを挟むようにして、真っ黒なフリフリの服に身を包み変な形の大剣を持った女と、黒い帽子と黒い服に身を包み弓を持った少女が現れた。

「あんた達は一体…？」

「ただの通りすがりだ（です）」

・
・
・

「ただの通りすがりだ（です）」

「通りすがり？」

「ああ。ちょいとばかり強い通りすがりだ」

「何であたしを助けてくれるんだ？」

「細かい話は後だ、嬢ちゃん。名前は？」

嬢ちゃん……何かオッサン臭い言い方だぞ、秋絃。

「馬超だ」

おー、瑠里の言った通りだったな。

「怪我とかはしてるか？」

取り敢えず怪我の有無の確認。

「足をやられた」

……右足の脹ら脛辺りから出血してるな。

「走れるか？」

「すまないが走るのは無理だ。槍を振るぐらいなら何とか出来る」

「そっか。どうしたもんかな……」

走るのが無理という事は逃げるのは無理だな。

「東の方、森を抜けた先で結構な人数同士が戦っているみたいだけど、誰だか分かるか？」

直線距離にしたら七、八百メートルぐらいかな。

氣つて便r(ry

「東？たぶん五胡の連中と母様達だと思う」

馬騰か…。

「助けにくると思うか？」

「…ああ！勿論だ！」

「よし。ならばそれまで持ちこたえるぞ」

「おうさっ！」

「あいよ！」

「了解です！」

各々武器を構えて敵の攻撃に備える。

「一応聞いておくけど大人しく退く気はないよな？」

『……………』

問い掛けてみたが返事は無い。

……………何だ？

五胡の奴らはジェスチャーを取り合ったり此方をジッと見てくるば

かりで動こうとしない。

「仕掛けてこないな……ビビったのか？」

秋絃が呟く。

「いや、戦においては死兵の如く攻めてくるような奴等だ。相手の方が強いからといって臆したり逃げ出したりするような事はないはずだ。けど、確かに様子がおかしい。あたしは今まで何十回と五胡と戦ってきたけど、こんな連中を見るのは初めてだ」

馬超の言う通りだな。

隙は少ないし殺気も十分、体つきもしっかりしているし、この前見た曹操軍と比べても引けを取らないくらいだ。

さっきドロップキックを喰らわした奴も起きてるし。

乱入者の数人ぐらいでビビるとは思えない。

一体何が…。

「何をしている」

『！』

森の奥から現れた一人の男に敵味方全員の意識が向かう。

他の五胡の奴ら同様に仮面を被っている。

形が微妙に違うが。

……強いな。

周囲にいる奴らよりも数段強いはずだ。

「秋絃」

「分かってる。恐らく、あいつが指揮官だな」

「ああ」

「成る程な……」

周囲の奴らとジェスチャーを取り合っていた指揮官らしき男が此方を見る。

そして、そのまま睨み合いになる。

とは言っても仮面を被っているし表情は読み取れないが。

「……殺れ」

《ウオオオオー！》

指揮官らしき男の命令で一斉に襲い掛かってきた。

「秋絃、そっちは頼んだぞ！」

「分かってら！太史慈子義、敵を殲滅する！オラアアア！」

《ギューイーンッ!》

「ぎゃあああっ…!」

「瑠里!弓兵を片付けてくれ!」

「了解です!徐庶元直、目標を狙い撃ちます!ヤッ!」

《ザスッ!》

「がっ…!」

「馬超は自分の身を守る事だけ考えてくれ」

「分かった!オッシャオラー!」

《ブンッ!》

「がはっ…!」

「黒霆院紫苑、推して参る!ハアアアッ!」

《ザンッ》

「ぐあっ!」

さて、どれくらいで馬騰が到着するかな。

・

・

五胡の連中と戦闘に入ってから十数分。

周囲には五胡の連中の死体がゴロゴロしている。

五胡の連中は予想通り強かったが俺と秋絃の敵ではなかった。

……こんな言い方すると窮地を脱したように思われるかもしれないが絶賛戦闘中。

既に四〇五十人は倒したのに一向に数が減らねえ。

倒しても倒しても森の奥から増援が出てくる。

ゲームなら経験値稼ぎに持ってこいだがりアルだとキツい。

指揮官らしき男は全く動かないし。

周囲を囲んでいる奴らも様子見しているのか攻撃してこなくなったし。

「馬騰はいつ助けにくるんだろ……」

「だろ。こいつら一人一人がそれなりに強いし守りながらだと疲れ」

「……巻き込んでしまつてすまない」

「ああ、悪い。そういう意味で言ったつもりじゃないんだ。喧嘩は好きなんだけど、こういうまどろっこしいのは苦手なんだよ、俺。それに巻き込まれたんじゃなく自分から巻き込まれに来たんだから馬超が気にする事はないさ。紫苑、面倒だから氣を使つて纏めてブツ飛ばせないか？」

「やろうと思えば出来るけど、あとどれぐらい森の奥から増援が来るか分からないしな。ブツ飛ばしても、また囲まれるのがオチだと思う。ん、三人を抱えて木の上を飛び移りながら森を抜けるかどうかだ？」

「……変態」

「ちょい待て瑠里。何故に変態呼ばわりされなきゃならん」

「女の子に埋もれたいのではないですか？」

「この状況でそんなこと考えるわけ無いだろ。お前は俺の事を何だと思ってるんだ？」

『女誑し』

「……否定出来ないのが悔しい」

秋絃まで瑠里にハモらせてきやがった。

二人とも後で御仕置きとして、お尻ペンペンして泣かせてやる。

…いや、秋絃は喜びそうだから御仕置きにならないな。

「アンタら、こんな状況でも随分と余裕があるみたいだな」

「ん？そうか？まあこれぐらいの修羅場なら何度も経験し…」

「とう！」

《シュタツ》

「ん？」

上空から人が降ってきて馬超の横に着地した。

「キュピーン！西涼の舞姫・馬鉄ちゃん登場！悪い子は月に代わって御仕置きしちゃうぞ！キラッ」

『……………』

「え〜と…」

敵も味方も動きが止まった。

何かポーキングを決めてるんだが、この子は一体……馬鉄という事は馬超の妹か？

武器は片鎌槍だな。

「あり？どしたん？何か微妙な空気が流れてる気がするんだけど」

お前のせいだ、お前の。

「…何しにきたんだ、芙蓉」

「翠姉を助けに来たに決まってるじゃ〜ん」

「……妹？」

「妹だ。幼い頃に頭でも打ったのか意味不明な言葉を言う事も多いけど基本的には良い子だから可哀想な目で見ないでやってくれ」

「……分かった」

「母様と水仙は？」

「もう少しで来るんじゃない？母様の命令で、あたしだけ先に来たんだよね〜。で、囲まれてるのを見て木の上をピョンピョン移動して来たってわけ。で、この人達は誰？」

「通りすがりの人達だ。あたしが五胡の連中に囲まれている所に助けに入ってくれたんだ」

「今も囲まれてるけどね〜。で、お兄さん達は何者？」

「馬超が言った通り、ただの通りすがりだよ」

「ふ〜ん。ただの通りすがりねー。嘘くさ」

「こら、芙蓉！」

「だって、ただの通りすがりが五胡の奴らと戦えるわけないじゃ〜」

ん。帽子の人は別として、お兄さんとお姉さんは翠姉ぐらい強いんじゃない？それでただの通りすがりって言われてもねえー」

「馬鉄、悪いけど話は後にしてくれ。仕掛けてくるみたいだぞ」

先程まで様子見をしていた周囲の奴らが徐々に包囲を狭めてくる。

「仕方無いなー。後でちゃんと聞かせてもらうかんね？」

「分かった」

「約束破ったら馬でグワングワン引きずり回すからよろしくー。さて、そんじゃあー丁暴れー」

「翠ー！芙蓉ー！何処にいるんだー！」

「おっ、母様の声じゃん。おーい！こっちだよー！翠姉も一緒だよー！男連れでー！」

「何だと！？」

「変な言い方すんな馬鹿！」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだよー」

「このやろ…！」

「おーい、緊張感無さすぎだぞー。まだ囲まれてるぞー」

馬鉄が来てから緊張感が一気に無くなったな。

いや、その前から無かった様な気もするが。

さてと、五胡の連中はどうするのかね？

馬騰以外にも結構な人数が近付いてきてるけど。

指揮官らしき男の方に視線を向けるが仮面のせいで何を考えているのかが分からない。

「……引き上げるぞ」

指揮官らしき男がそう言い放つと周囲を囲んでいた五胡の連中が森の奥へと消えていった。

「……………」

「何だよ？」

指揮官らしき男が俺の顔をジッと見てくる。

「貴様は……………いや、何でもない。命拾いしたな」

「それは俺の台詞だ」

「……ふんっ」

そのまま指揮官らしき男も森の奥へと消えていった。

「何なんだ一体……」

「紫苑、知り合いか？」

「いや、俺には悪趣味な仮面を被るような知り合いはいないさ。それよりも…」

「待て芙蓉！」

「嫌だよー。翠姉のノロマー」

馬超と馬鉄が追い掛けっこをしている。

足は痛くないのか、馬超。

「子供ですね」

「ははっ。確かに子供だな」

呆れ顔の瑠里に、楽しそうに笑みを浮かべる秋絃。

まあ微笑ましい光景ではあるな。

「瑠里は精神年齢が高過ぎる様な気がするけどな」

「そうですか？」

「瑠里には可愛いが足りないと御姉さんは思っただよなー」

「誰が御姉さんですか、誰が。もし秋絃さんが私の姉なら、その面

倒臭がりの性格を矯正している所です」

「口煩い妹になりそうだな」

「秋絃と瑠里なら意外と良い姉妹になりそ…」

「翠！無事だったか！」

ん？馬騰が到着したか。

「うしししし。翠姉はトロいなー」

「この…！その壊れた頭ぶつ叩いて正常に戻してやる！オッシャオ
ラー！」

《ブオンツ！》

「（ヒョイツ）当たらないよーだ」

馬超も馬鉄も可愛いし、馬騰も美人なん…《ゴツン！》

『あ』

「……………くそつ、油断した……………犯人は……………馬……………ち……………」

馬騰の姿を見ようと振り向いた瞬間に、後頭部に激痛が走り俺はそのまま意識を失った…。

第17話〜白銀の槍〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

西涼篇突入。

話の長さが一気に半分に減りました。

え〜と、後は特にありません。

そう言えば、何故か前話の次回投稿目標日が6月8日（水）になってましたね。

一応土曜日に投稿する様にしてたのに、何故水曜日…。

まあ一日遅れたましたけど。

カレンダーを読み間違えるとは……………穴があつたら入りたい、穴がなければ掘って入りたい気分です。

- - - - -

現在の執筆状況：

第X A 話〜反董卓連合・シ水関戦〜↓三割

第X B 話〜反董卓連合・虎牢関戦〜↓二割強

第X C 話↓三割弱

次 話 に 全 く 手 を 着 け て ね え ！

次回の投稿は2011年6月18日が目標です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第18話 容姿は子供、精神は大人 (前書き)

《前話の簡単な粗筋》

洛陽に向かう

←

道に迷う

←

五胡に襲われている女の子を助ける

←

あゝありのまま今起こった事を話すぜ！

『おれは女の子を助けたと思ったらいつのまにか女の子に倒されていた』

なゝ何を言ってるのか (ry

第18話　容姿は子供、精神は大人

「……………ん……………此処は？」

目が覚めてみると見知らぬ天井が視界に入ってきた。

《ズキンッ》

「頭痛えー……」

後頭部に鈍い痛みが走ったので触ってみるとタンコブが出来ていた。

「俺は一体……」

目が覚める前の記憶が定かではない。

取り敢えず体を起こし部屋の中を見渡してみる。

「やっぱり見覚えがない……」

此処は一体何処なんだ？

部屋の外に出てみるか……？

《ギイツ》

そんな事を考えていると、誰かが扉を開けて部屋の中に入ってきた。

「目が覚めたようだな」

銀髪ロングストレートの女性だ。

「翠様や楓様、君の連れを呼んでくる。此処で少し待っていてくれ」

《ボタンツ》

そう言うのと、銀髪の女性は返事も聞かずに部屋の外へと出ていってしまっただ。

窓の外を見てみると太陽がサンサンと輝いていた。

暫くすると、銀髪の女性を含め八人の女性が部屋に入ってきた。

その中の一人、複数居る茶髪でポニーテールの女の子の内、一番身長が高い馬超が最初に話し掛けてきた。

「えーと、すまなかったな。わざとやったわけじゃないけど、命の恩人の頭を殴るような真似しちゃって」

「……………君は誰？」

「そついや、ちゃんと名乗っていなかったな。あたしは馬超、馬超孟起だ。あんたの名前は？」

「……………俺は……………俺は誰だ？」

「はあ!?!」

馬超がすつとんきょうな声を上げ、驚いたような顔をしている。

いや、馬超だけでなく他の女の子も全員驚いたような顔をしている。

「何馬鹿な事を言っているのですか、紫苑さん」

溜め息を付きながら瑠里が近付き話し掛けてくる。

「……君は？」

「……まさか本当に？」

「おいおい、勘弁してくれよ」

秋絃も傍に来る。

「ほ、本当に自分が誰だか分からないのですか!？」

此方へ詰め寄ってくる瑠里。

「ああ……」

「わ、私の事も全く覚えていないのですか？」

泣きそうな表情の瑠里。

「ああ……口や性格は多少悪いけど、野宿する時なんかは俺に引っ付いてきて寝たりなんかして意外と甘えん坊だったりなんて事は全く覚えていな《ゴスツ》」

「覚えているじゃないですか!しかも、他人には秘密にしておきた

い事をサラッと暴露してますし！一瞬でも心配した私が馬鹿でした！」

「ぐおおおお……か、顔が凹む……」

泣きそうな表情だった瑠里の顔が一瞬にして般若になったかと思ったら、瑠里の拳が顔面に突き刺さった。

「はあ……お前は何がしたかったんだ……」

溜め息付かないでくれ、秋絃。

「いや、すまん。何て言うか、つい遊び心で……。ただ何故此処にいるかは本当に分からん。さっき馬超が頭を殴ったとか言ってたけど……」

「馬超が五胡に襲われている所に乱入しただろ？その後、暫くして馬鉄、あの子が乱入してきただろ？」

秋絃が銀髪の女性の隣にいる馬鉄を指差す。

「ああ。で、馬騰が来たから五胡の連中が去って、馬超と馬鉄が追い掛けっこして……」

「馬騰さんの声がすぐ傍から聞こえたので、紫苑さんが声がした方向に振り向いた直後に……」

「翠姉が私の頭を槍の柄で殴ろうとして、誤って御兄さんの頭を殴っちゃったというわけ。ホント翠姉ってドジだよね」

「誰のせいだ！誰の！」

「翠姉のせいでしょ？」

「ムキー！やっぱりシメてやる！」

「みつともないですから、姉上も芙蓉も客人の前で喧嘩しないで下さい」

これまた茶髪でポニテの女の子が馬超と馬鉄の間に入る。

馬超を姉と呼び馬鉄を呼び捨てにしているって事は馬休かな？

「だって芙蓉が…！」

「だって翠姉が…」

「芙蓉の言う通りだ。全く…いつまで経っても子供だな…」

茶髪ロングツインテールのこの子が馬岱かな？

でも、もう一人茶髪ポニテの女の子もいるな…。

他に馬一族で有名な人って誰か居たっけな…。

そっぴい馬騰はいないのかな？

見渡しても、それらしき女性が居ないけど…。

「紫苑、どうかしたか？」

「ん？いや、何でもない。少し考え事をしていただけだ。そっぴい、

俺ってどれぐらい気絶してた？」

「一刻程です」

馬休と思わしき女の子が答えてくれた。

「……え」と、君は？」

「私は馬休です。以後、お見知り置きを」

やっぱり馬休か。

「ふむ。そう言えば自己紹介をしていなかったな。改めて全員に自己紹介させるとするか。……その前に一応聞いておくが記憶はあるんだな？」

「ああ、大丈夫だ」

何故に、この子が仕切っているんだ？

「問題が無いならいい。じゃあ、翠から順番に頼むぞ」

「分かった。さっきも言ったけど、あたしは馬超。馬騰寿成が長女、馬超孟起だ」

茶髪ポニテで太い眉毛が特徴的な可愛い子だな。

「姉上が世話になりました。私は次女の馬休仲仁ちゅうじんです。よろしくお願いします」

姉と同じく茶髪ポニテ。

容姿は馬超より多少幼いかな。

馬超や馬鉄と違って真面目みたいだな。

「あたしは三女の馬鉄。字は叔鍊しゅくれんだよ。よろしく」

容姿的には馬休とそっくり。

双子かな？

まあ性格は似てないけど。

「蒲公英はね、馬岱って言うの。字は伯瞻はくせん。馬超お姉さま達の従姉妹に当たるの。よろしくね、お兄さん」

此方も茶髪ポニテの女の子。

ショートポニテだな。

容姿は馬休や馬鉄よりも幼い。

何となくだけど、性格的には馬鉄と似ているだろうと思った。

「翠様を助けてくれてありがとう。私は鳳徳令明だ。よろしく頼む」

銀髪ロングストレートのクールビューティといった感じだな。

俺の世界の歴史でどんな活躍をしたかは覚えていない。

いや、馬休や馬鉄なんかも覚えていないけど。

「最後は私だな。私は馬騰寿成だ。娘が世話になったな」

……は？……馬騰？……え？……この子が？……いや、だって容姿的には馬岱とそんなに変わらないぞ？

表情が凛々しいから馬岱の方が幼く見えない事もないけど…。

「えーと、すみません。もう一回お聞きしますが、貴方が馬騰さん？」

「そうだ」

「娘さんが三人？」

「そうだ」

……。

「小さ…」

《チャキッ》

「いくら翠様の命の恩人とは言え、楓様を馬鹿にするような発言は止めてくれ。場合によっては君の首を刎ねなくてはいけなくなる」

鳳徳が腰に交差して差している二振りの刀の内、片方に手を掛ける。

……そう、鞘の形状といい鞘と柄の間から見える刀身といい日本刀に似ている。

この世界に来てから初めて刀を見たな。

雪蓮の所の兵が使ってたのも黄巾党が使ってたのも両刃で分厚い剣だったからな。

「……十六夜さー、その言い方だと母様が背が低い事を気にしているみたいに聞こえるぞ？別に母様は背が低い事なんか気にしていないだし、そう目くじらを立てなくてもいいと思うぞ」

「ですが…」

「翠の言う通りだ。剣から手を離せ、十六夜」

「……分かりました」

《カチャ》

鳳徳が刀から手を離す。

「部下が脅かす様な真似をしてすまなかったな」

「いえ、自分の方こそ失礼な事を言ってしまいすみませんでした。まさか貴方が馬騰さんだとは思わなかったので…」

「良く言われる事だ。気にしないでいい。敬語も不要だ。堅苦しいのは嫌いなんでな。君の名前を覚えてくれるか？」

「では敬語は使わないで話させて頂きます。俺は黒霆院紫苑だ。姓が黒霆院で名が紫苑。字は無い」

「字が無い？」

「ああ。え」と

まあそこからはいつも通り、俺がこの国の人間じゃない事と、この国に着いてから今までの行動について簡単に説明した。

勿論、洛陽に向かっていたのに何故か西涼に辿り着いてしまった事も。

・ ・ ・

「成る程。結構やんちゃをしているみたいだな。しかし君が黒き霆か…」

「西涼にまで情報が伝わっているのか？」

「ああ。五胡の連中が居る事や位置的な事もあつて黄巾党の連中が此方にまで来る事は少ないんだが、ここ最近現れるようになってな。捕まえた奴等に聞いたら黒き霆に襲撃されて逃げてきたと。南から襲撃されて、位置的に北は漢の領土じゃないから北西に向かい西涼に逃げるか東に向かい洛陽へ逃げるしかないからな。洛陽には董卓軍が駐留していて、呂布、張遼、華雄、徐栄といった優秀な将がいるから、まだ西涼の方がマシだと思ったのだろう」

「成る程ねえ」

「あたし達も甘く見られたもんだよな。年がら年中五胡の連中と戦っているんだから実戦経験なら中央より上だっつーの」

「姉上、そういう慢心が今日の様な事に繋がったのではないのですか？」

「うっ…」

「芙蓉の言う通りだ。翠はもう少し頭を鍛えた方がいいな」

「精進します…」

「まあそういうわけで君達の噂はある程度聞いていたというわけだ。それで、君達はこれからどうするつもりだ？当初の予定通り洛陽に向かうのか？」

「いや、出来れば暫く此处に留まろうかな〜と思っている。洛陽に向かっていたのは一度行ってみたいと思っていたのと董卓がいるかどうか確認したかったからだからな。洛陽に董卓が居るのは馬騰の発言で分かったし、元々馬騰も訪ねるつもりだったからな」

「ふむ…。洛陽に董卓が居るかどうかが確認しようと思ったのはいつだ？」

「三ヶ月ぐらい前かな」

「三ヶ月前……か……」

「それがどうかしたか？」

考え込む様な仕草を取る馬騰。

「いや……孫策に曹操、それに私の名はそれなりに知られているだろうから分かるが何故董卓の事を知っているのかと思ってな。あの子が名前を知られるようになったのは十常時の張讓に助力を請われ洛陽に駐留する様になってから、つまり此处一ヶ月程度の話だ。何故異国出身の君が三ヶ月前に董卓の存在を知っていたのかとってな」

「それは……えーと……」

『……………』

ヤバい……まさか董卓がそこまで有名じゃなかったとは思ってなかった……そういや冥琳も知らないって言ってたしな……瑠里達も含め皆から物凄い疑惑の目で見られてる……訂正、秋絃は興味無いみたい……しかしどうしたもんかな……皆が納得しそうな理由が思い付かない……仕方がない……。

「……秘密だ」

「……何だと？」

馬騰の表情が微妙に陰しくなった。

まあ当たり前と言えば当たり前前だけど。

「……………」

「……………」

馬騰が俺の目をジッと覗き込んでくるので、俺も視線を逸らさずに馬騰の目を覗き込む。

「……………まあいいだろう」

馬騰が後ろを向く。

「楓様、よろしいのですか？」

「うむ。黒霆院」

「何だ？」

「先程君は此処に暫く留まりたいと言ったな？」

「ああ」

「部屋を用意させるから、この屋敷で生活しないか？翠の事もある。此処に居る間は私が面倒をみよう。その代わり……」

「…その代わり？」

「もし君が董卓にとって害をもたらす人物だと判断したら斬り捨てさせてもらう。どうだ？」

「……………表情は伺い知れないが本気だろうな。」

微かに殺気が漏れ出てる。

「ああ。それで問題無い」

まあ董卓が悪い奴じゃなければ俺としても何かするつもりはないかな。

董卓が悪い奴じゃない場合、また別の問題が出てくるけど…。

「よろしい。ならば此処にいる間は私が責任を持って面倒をみよう。何か要望があるなら私に言ってくれ。出来る限り善処しよう。皆もそれで構わないな？」

「あたしは別にいいよ」

「たんぽぽも別にいいよ」

「母様が決めた事なら、あたしは口を挟まないよ」

「姉上に同じです」

「楓様が決めた事なら異論はありません」

「決まりだな。黒霆院、太史慈、徐庶、三人とも歓迎するぞ。十六夜、部屋の準備を頼む」

「分かりました。少々お待ち下さい」

そう言うのと部屋から鳳徳が出ていった。

「……なんか随分あつさりと馬騰の所で世話になる事がきまつたな。冥琳に書いてもらった紹介状が無駄になっちゃったな」

「紹介状？」

「ああ。周公謹つて覚えているか？幼い頃に孫堅と一緒に会った事があると言つてたんだが。それで、もしかしたら覚えているかもしれないからと紹介状を書いてくれたんだ」

「周家の御令嬢か。覚えているぞ。たしか孫堅の娘も一緒だったな」

「あつ、やっぱり雪蓮……孫策も一緒だったんだ」

「うむ。孫堅が亡くなって今は孫策が当主か」

「まあ今はまだ袁術の部下だけだな」

「その内、独立するだろう。猿が虎を飼う事など出来ない。これから先、世の中は荒れるだろうから機会は幾らでもあるだろう」

「そうだな。……なあ馬騰」

「何だ？」

「董卓つて、どんな人物なんだ？」

馬騰の口振りから察するに、かなり親しいのだろう。

取り敢えず人伝でもいいから董卓がどんな人物なのかを知りたい。

「……気になるのか？」

「ああ」

「聞いてどうする？」

「……場合によっては今すぐ此处から出ていく事になるな。殺されたくないし」

「……所謂お嬢様だから多少世間知らずな所はあるが凄く優しい子だ。民にも分け隔てなく接する。見た目は儂げな少女だが芯は強い。戦いが嫌いなあの子が張讓の誘いに応じたのも民の事を思ってたろう」

少女……董卓も女性か……儂げか……俺の頭の中のイメージとは正反対だな……。

「まあ詠が一緒だし大丈夫だろう。あの嫌味つたらしい性格で月に近づく変な輩はことごとく追い払われるだろうし」

「翠姉は詠に会えば毎回口喧嘩で負けてたもんね」

「悪かったな。殴り合いなら勝てるんだけどな」

「武官である姉上が文官である詠ちゃんに勝てるのは当たり前でしょう。阿呆な事を言わないで下さい。あつ、黒霆院さん達に説明しておきますと、月というのは董卓の真名で、詠というのは月ちゃんの親友であり軍師でもある賈馱の真名になります」

「……馬超さんは秋絃さんと同じで脳筋みたいですね」

「何だとー！？お前こそ詠と一緒に性悪だろが！」

「賈馱さんという方がどんな方かは知りませんが、脳筋よりは性悪の方がマシです」

「ムキー！つーか太史慈も怒れよ！」

「まあ瑠里の悪口には慣れてるからな。一々気にしてもしょうがないけど、ム力ついたなら尻でも叩いたらどうだ？どうせ口じゃ勝てないし俺はそうしてる」

「成る程、それは良い案だな。じゃあ早速……」

《スパーン！》

「痛っ！何すんだよ母様！」

馬騰が馬超の尻をひっぱたいたみたいだけど、いい音がしたな。

「早速じゃないだろ馬鹿娘が。口で負けたからって暴力で解決するな。情けない」

「ぐぬぬ……」

「だってよ、秋絃」

「別に俺はいいんだよ。愛情表現だ愛情表現」

秋絃が瑠里の頭をクシャクシャと撫でる。

「……愛情表現で毎回毎回お尻を叩かれる方の身にもなってほしいのですが」

「力はそんなに込めてないだろ？」

「まあそれはそうですが」

「それで黒霊院」

「ん？」

「董卓の人となりは一応伝えたわけだが、君はどうするつもりだ？」

「いや、どうするつもりもないよ。董卓が世間一般でいう悪者だつたら何らかの行動を起こしたかもしれないけど、馬騰達の話聞く限り悪い子じゃないみたいだからな」

「？月が悪者なわけないだろ？一体誰からそんなこと聞いたんだ？詠なら兎も角、月を悪く言う様な奴なんて居ないと思うんだけどな」
「……」

「……酷い言われようだな賈馱って子は……そんなに性格悪いのか？」

「たんぽぽもそう思う。詠は……まあ悪口言われても仕方ないよね」

馬岱も馬超と同じ意見か。

「詠ちゃんは月ちゃん命って感じですからね。愛情が月ちゃんに偏

「っちゃっているだけで根は優しい子だと私は思いますよ」

あゝ、夏侯惇や荀イクみたいなものか。

あの二人も曹操LOVEって感じで、他の人には攻撃的だったしな。

「悪いけど誰から聞いたかは秘密だ。まあぶっちゃけると、その秘密の誰かさんに董卓が悪い奴だって聞かされたから三ヶ月前から董卓の存在を知っていて、董卓がどんな人物か尋ねたってわけだ」

実際は俺の世界の歴史だと悪者だったからだけだ。

「……嘘臭いな」

「……嘘臭いです」

「……嘘臭ー」

「……嘘でしょ？」

……このポニテ集団め、（馬休以外は）頭悪そうなのに勘は鋭いな。

まあ嘘だけだ。

「……何か失礼な事を考えられた様な気がするの、あたしの気のせいかな？」

「気のせいだ」

心でも読めるのか、馬超は…。

「楓様、部屋の準備が終わりました」

「ご苦労だったな、十六夜。取り敢えず今日はここまでにしよう。
黒霊院については、これから一緒に過ごしていく内に見極めれば良
い」

『はい』

「十六夜、部屋への案内を頼む」

「分かりました。此方へ」

そう言い部屋を出ていった鳳徳の後を三人で着いていった。

・
・
・

「なあ母様」

「ん？」

「本当に良かったのか？」

「何がだ？」

「黒霊院の事だよ。命を助けてくれた事には感謝している。けど、
月の事に関しては言ってる事が信用出来ない。もしかしたら月の命
を狙ってるかもしれないのに放っておいていいのか？」

「言っただろう？これから見極めればいいって」

「でも…」

「あの子は強い。もしかしたら私でも負けるかもしれない。恐らく太史慈も翠と同じぐらい強いだろう。下手に手を出したら此方が痛い目を見る」

「だよね。あたしじゃ、あの人達に勝てないもん。あたしと水仙と蒲公英の三人で漸く少しの間だけ足止め出来るって感じじゃない？」

「……たんばぽは三人で挑んでも一瞬しか足止め出来ないに一票」

「そうね。母様や姉上ならともかく私達じゃ…」

「まあ、いざいう時は私が何とかするさ。でも、たぶん大丈夫だ。たしかに月ちゃんの件に関しては真実を言っていないだろう。だけど、あの子も悪い子ではないと思う。信じてみようじゃないか」

「まあ悪い人じゃないかもしれないけど女誑しである事は確かだね。太史慈って人に聞いたんだけど黒霆院って人、嫁が二人居るみたいなんだよね。あと、嫁候補が五人。全員めとるなら奥さんが七人になるって事だよん」

「七人！？それって本当なのか、芙蓉！？」

「ホントだよ。嘘だと思うなら徐庶か太史慈に聞いてみれば？ねえ水仙」

「うん。私も聞きました」

「……まあ水仙が言っんなら本当だろうな」

「ちょっと翠姉、それどういう意味よ」

「……黒霆院ってエロエロ魔神なのか」

「聞いてないし。ていうかエロエロ魔神って何だよ」

「まあとにかく様子見だ。分かったな？」

『はい』

……あの子達は私達や月ちゃん達にどういう影響を与えるのだろうか……私の命もいつまで持つか分からないし、願わくば力になってもらいたいな。

・
・
・

しかしどうしたもんかな……。

董卓は良い子みたいだけど、そうなると反董卓連合をどうするかだよな。

確実に組まれると決まったわけじゃないけど、黄巾党の乱が起こっているわけだし可能性は十分にある。

うーん……。

「着きました。此方です」

おっ、着いたか。

「こことそこそこ。三部屋を自由に使って。昼間は侍女を待機させておくから用があれば言って。食事に関しては食堂を利用するなり侍女に部屋まで持ってこさせるなり好きにして。それじゃあ私は戻るから」

そう言つと鳳徳は俺が眠っていた部屋の方へ戻っていった。

「……愛想が無いですね」

「だな」

「感情が読めない子だな。さっき刀に手を掛けた時も殺気とか出てなかったし。でも美人だ」

「……またですか」

「……まただな」

「……何だよ？」

『女好き』

声を合わせるな。

「何か疲れたから俺は寝る」

「あいよ」

「お休みなさい」

「応」

《ギッバタンッボスンッ》

はあ…董卓の事とか、これからの身の振り方とか考える事は一杯あるけど取り敢えず休もう。

おやすみ。

第18話 容姿は子供、精神は大人（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

鳳徳さんの鳳は本来鳳ではありませんが恋姫の鳳統の鳳に合わせて鳳にしました。

……一回の文章で何回“鳳”を使うだと思わずセルフツッコミ。

馬休と馬鉄の字はオリジナルです。

馬岱の字はオリジナルではありません。

どっかからパクってきたわけでもありません。

普通にアレらしいです。

調べるまで馬岱に字がある事を知りませんでした。

オリキャラを出すのはいいけど、キャラ付けをちゃんとして個性を出さないと既存キャラと被りそう。

既に被っているような気がしなくもないですけど…。

取り敢えず馬鉄はたんぼよりもフリーダムにします。

- - - - -

現在の執筆状況：

第X A話↘反董卓連合・シ水関戦↘↓三割

第X B話↘反董卓連合・虎牢関戦↘↓二割強

第X C話↓三割弱

次話に全く手を着けてねえ！

つーか暑い！

次回の投稿は2011年7月9日が目標です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第19話 小悪魔二人・寺々（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

馬超に殴られ気絶

←

目が覚める

←

馬騰、馬超、馬休、馬鉄、馬岱、鳳徳と挨拶を交わす

第19話　小悪魔二人・壱

「……………（モグモグ）」

「……………（ジイー）」

「……………（モグモグ）」

「……………（ジイー）」

この居心地の悪い空間は何だろう…。

只今、食堂で食事中。

鳳徳が作ってくれた食事を鳳徳と二人きりで黙々と食べている。

朝起きて食堂に行ったら鳳徳が居て、朝食は食べたかと聞かれたので未だだと言ったら作ってくれた。

メニューは麻婆豆腐に炒飯。

両方とも凄く美味しい。

凄く美味しいんだけど居心地が悪い。

対面に座っている鳳徳が、俺の顔を何故か無言で無表情でジーーーーと見つめているのだ。

表情から感情が全く読み取れない。

美人に見つめられるのは嫌じゃないし、別に不愉快というわけでもないんだけど、何を考えてるのが分からない。

うん…。

「…（ゴクン）あー、鳳徳さん」

「呼び捨てで構わないし敬語も必要無い」

「了解。で、鳳徳さー」

「何？」

「もしかして昨日のこと怒ってる？」

「昨日の事？」

「えーと、ほら、馬騰に対して失礼な事言っただじゃん？」

「……ああ、その事。別に今は怒っていない」

「そうか…。えーと、今何考えてる？」

「特に何も。強いて言えば料理が口に合ったかどうか気になっている」

「お世辞じゃなくて麻婆豆腐も炒飯も凄く美味しいよ」

「そう、ありがとう」

「どういたしまして」

「……………」

「……………」

会話は続かないし、やっぱり何を考えているか良く分からない。

空気が重い……誰か来ないかな……。

「……………?」

「……………」

「……………!?!」

「……………!」

「……………」

そんな事を考えていると女の子の話し声が聴こえてくる。

食堂に近付いてきてるみたいで、話し声が段々と大きくなっていく。

この声は馬鉄と馬岱かな？

「あれ？十六夜っちじゃん？おっはよー。ついでに、お兄さんもおはよう」

馬鉄と馬岱が食堂に入ってきた。

「ホントだ。おはよー二人とも。お兄様は何食べてるの?」

「芙蓉様、蒲公英様、おはようございます」

「おはよー。っていうか馬岱、お兄様って何だ、お兄様って」

お兄さんは兎も角として、お兄様は無いだろ。

「あれ？男の人ってこういう呼ばれ方すると喜ぶんじゃないの？嫌なら別の呼び方にするけど」

「…いや、別に嫌じゃないし好きに呼んでくれていいけど」

まあ馬岱の言う通り御兄様と呼ばれるのも悪くない。

「じゃあ、これからも御兄様って呼ぶね」

「なら、あたしは女誑しって呼ぼうかな」

「ちょい待て、何故にそんな風に呼ばれなきゃならん」

「だって、嫁が二人に嫁候補が五人もいるんでしょ？」

「蒲公英達も気を付けないと手籠めにされちゃったりして」

二人揃ってニヤニヤしながら言うな。

話したのは秋絃か…。

「別に誰彼構わず手を出しているわけじゃないから」

「そうなの？」

「そうなの。だから刀から手を離してくれ、鳳徳」

「……分かった」

そう言つて、いつの間にか後ろに手を回して掴んでいた刀を離す鳳徳。

素直に聞いてくれて助かった。

誤解で斬られたりしたら堪ったもんじゃない。

「ていうか鳳徳も聞いてたんじゃないのか？その話をしたのは秋絃……太史慈だろ？」

「お兄様の言う通り、話をしたのは太史慈さんだよ」

「その時、十六夜たちは一緒に居なかったけどね」

「一緒に居なかった？」

「十六夜は御兄様の事を見張ってたから」

「ああ、成る程」

部屋の外で監視してたのか。

どつりでタイミング良く部屋に入ってきたわけだ。

「話を戻すけど、お兄様は何食べてるの？」

「麻婆豆腐と炒飯。鳳徳が作ってくれた（モグモグ）」

「へー、十六夜が作ってあげたんだ？」

「たまたま食堂に居た時に黒霆院殿が来られ、お腹が空いているとの事だったので作って差し上げました」

「十六夜つちが作った御飯美味しいでしょ？十六夜つちは炊事・洗濯・掃除・裁縫・暗殺と何でも出来るよん」

「……（ゴクン）最後なんかおかしくなかった？」

「別に？」

「……そうか（モグモグ）」

聞き間違えじゃなかったら“暗殺”って言った気がしたんだが……。

「十六夜は無愛想なのが欠点だねー。そのせいで誤解されやすいし」

「……申し訳ありません」

「ああ、ごめん。責めてるんじゃないよ？蒲公英は十六夜のこと尊敬してるもん。何でも出来るし気配り出来るし、きつと良いお嫁さんになれるよ」

「ありがとうございます。まあ相手が見つければの話ですので暫くは独り身だと思いますが。芙蓉様や蒲公英様も食べられますか？」

「蒲公英は食べるー」

「じゃあ、あたしも食べるー」

「分かりました。少々お待ち下さい」

そう言うのと鳳徳は椅子から立ち上がり、二人の分も作り始める。

馬鉄と馬岱は俺と向かい合わせになるように、さっきまで鳳徳が座っていた場所に座る。

「……………（モグモグ）」

「お兄さんの名前って黒霆院紫苑って言うんだよね？」

「（ゴクン）ああ」

「紫苑って呼び捨てにしていいい？」

「ああ、いいぞ。名字だと長いしな」

「そんじゃあ紫苑って呼ぶね。それで紫苑さー、この後って暇？」

「後で秋絃…太史慈と瑠里…徐庶と今後どうするか話し合うけど、今の所は特に予定は無い。つまり暇」

「えーとさー、蒲公英達なら御兄様が太史慈さんや徐庶さんの事を真名で呼んでも、太史慈さんや徐庶さんだって分かるから言い直さ

なくていいよ？」

「あたしも大丈夫だよ」

「あつ、そう？ていうか前から思ってたんだけど、真名を許されていない人の真名も覚えるもんなの？（モグモグ）」

「？普通はそうなんじゃない？親しい人は真名で呼ぶのが普通だから、呼ぶ事が出来なくても相手と共通の知り合いの場合は真名も覚えるよ。喋る側としては相手によって一々使い分けるのも面倒だし使い分けようと思っても自然と真名で呼んじゃう事も多いし、聞く側としても一々直されると会話が調子良く進まないしね」

「まあ分かんなかったら聞けばいいしね。例えば蒲公英があたしの事を芙蓉って真名で呼んでて、あたしの事だと分からなかったら、ふなんとかさんとは誰の事ですか？って聞けば真名じゃない方を教えてくれるよ」

「（ゴクン）それもそうか」

「何回も同じ人の事を聞かれるとウザっ！いい加減覚えろよ！って思われるかもしれないけど。まあ脳の翠姉でも上手くやってるんだから心配しなくても大丈夫だよ」

「……実の姉に対して容赦ないな」

「まあ事実だしね」

「お姉様は頭悪いもんね。お姉様、蓉ちゃん、仙ちゃん、蒲公英の中だと一番頭悪いし」

芙蓉だから蓉ちゃん、水仙だから仙ちゃんか…。

「……本人達を目の前にして言うのもあれだけど、馬鉄と馬岱も勉強は出来なさそうだな」

「まあ、否定は出来ないね」

「勉強は嫌いー」

「でも悪知恵は働きそうだな（モグモグ）」

『正解！』

ピシッと二人揃って指差ししてくる。

「自慢じゃないけど悪知恵は働くよね」

「何でもかんでも正面から当たればいいってもんじゃないしね。翠姉は脳筋だから真正面から挑もうとするけど」

「まあ単純な武力で言えば御姉様が一番強いんだけどね」

「（ゴクン）馬休はどうなんだ？」

「水仙は文武両道って感じかな。お互い真面目に戦えば、あたし達より強いし、頭も四人の中じゃ一番回るしね。悪知恵は働かないから奇策には弱いかな」

「……その言い方だと不真面目に戦ったら馬鉄や馬岱の方が強い

「つて事か？」

「何でも有りなら蒲公英の方が有利かな？お姉様ほど簡単に引っかけはくれないけどね」

「ふうん。まあ四人集まればバランスは良いのかな？」

「ばらんす？」

馬岱が首を傾げる。

「あー、えーとバランスって言うのは釣り合いって意味ね。武力一辺倒というわけではなく知力一辺倒というわけでもない。定石に沿った策も定石から外れた策も出来る。お互いの弱点を補える関係だよねってこと」

「成る程。そういわれればそうかもね」

「そこに叔母様と十六夜も入るわけだしね」

「馬騰ってやっぱ強いのか？（モグモグ）」

「強いよ。真正面から正々堂々戦った場合、母様が一番強くて二番目が翠姉、三番目が十六夜っち、四番目が水仙、五番目があたしと蒲公英っていう順番になるかな」

「蒲公英も蓉ちゃんの見立て通りだと思っ」

「（ゴクン）馬騰は馬超よりも強いのか……小柄だし力よりも速さや技術を駆使して戦うのかな？」

あ、食い終わった。

ご馳走様でした。

「そだよー。お姉様はどちらかというと馬鹿力で押す方だね」

「翠姉と模擬戦した後は腕が痺れるからな……って、模擬戦！」

「何だ？馬鉄がいきなり立ち上がった。

「蓉ちゃん、どうしたの？」

「話ずれてるし！」

「ずれてる？」

「紫苑がこの後暇かどうかの話から真名云々、頭の良さ云々、強さ云々って話がどんどんずれてる」

「あー、そう言えばそうだな」

「でしょ？今までの話ぶった切って悪いけど、この後暇なんだよね？」

「ああ」

「じゃあ、あたし達と模擬戦しない？」

「模擬戦？別に良いけど」

「よし、決まり！それじゃあ…」

「芙蓉様、蒲公英様、出来上がりしましたよ」

「おつ、丁度いいところに来た」

「お兄様は食べ終わったみたいだね。悪いけど先に中庭の方に行つて待つてくれる？食べ終わったら直ぐに行くから。場所は侍女の子に聞いて。あつ、可愛いからって手出しちゃダメだよ？旦那さんがいる人だっているし」

「出さねえよ！俺の事を何だと思つてんだ…」

『女誑し？』

馬鉄と馬岱に加え鳳徳にまでハモられて同じこと言われた…。

「もう好きにしてくれ…。」馳走様、鳳徳。美味しかったよ」

「どういたしまして」

「それじゃあ後でな」

「うい」

「はいはい。おつ、相変わらず十六夜の作った御飯は美味しいね」

「だよね」

「ありがとうございます、蒲公英様、芙蓉様」

昨日感じたとおり、馬鉄と馬岱は性格的に似てるからか仲良しみた
いだな。

さてと、中庭はどこかな？

・
・
・

「やつ！」

「よつと」

《ガギイン》

「虎薙！」

「ほいつと」

《ガギイン！》

馬岱の突きを右手の緋炎で弾き、馬鉄の薙ぎ払いを左手の蒼氷で弾く。

約束通り中庭で馬鉄・馬岱の二人と模擬戦中。

ただし、鳳徳の監視の元で。

まあ当たり前と言えば当たり前だな。

昨日会ったばかりで何か隠しているだろう相手を、自分の主君の娘、姪っ子と三人つきりにするのは不安だろうし、監視するのは部下として当然の行動だからな。

「余所見は禁物！」

「おっと」

鳳徳の方に視線を向けてたのが馬鉄にバレた。

「模擬戦の最中でも女性に目が行くんだ…」

「違うから。別にやましい気持ちで見てたわけじゃないから誤解しないでくれ」

何故そっち方面に結び付けるんだ、馬岱。

「二人を相手にしてるのに御兄様は余裕だね」

「いや、別にそれほど余裕ってわけでもないけど」

そう、実力に差があるのでハンデとして一対二で戦っている。

一対二なので、この世界に来てから初めて緋炎と蒼氷を使う事にした。

久しぶりに使ったけど、使い心地はまずまず。

まあ緋炎と蒼氷は翠樹と違って扱いやすいからな。

「せいっ！」

「熊突き！」

「ほいさ」

同時に仕掛けてきた二人の攻撃を身を振りかわす。

「当たらないねー。やっぱり御兄様は余裕あるよね」

「だねー。かれこれ数十回仕掛けてるけど一向に当たらない。これじゃあ修行になんないじゃん。当たってよ、紫苑」

「いやいや、いくら刃引きした模擬槍を使っているとは言え当たったら痛いから。どうすれば当たるか考えながらやれば修行になるから」

「どうやってたら当たるかー。それじゃあ取り敢えず……蒲公英！」

「了解！ やっ！」

馬岱が槍を足元へ振るう。

足払いか。

「ほいっ」

緋炎と蒼氷は刀身が短めで足元への攻撃は止めにくいので軽く飛んでかわす。

「熊猫落とし！」

「よつと」

《ガキン》

間髪入れず馬鉄が上段から槍を振り下ろしてきたので蒼氷で受け止める。

上下からの同時攻撃が狙いか？

後、さっきから思ってたがその技名は何なんだ馬鉄。

何の変鉄も無い只の突きや薙ぎ払いなんだけど…。

「その状態なら避けられないで、しょ！」

足元へ振るった槍を避けられた馬岱はそのまま半回転し、石突きで腹の辺りを狙ってくる。

これが狙いか。

まあたしかに空中にいては避けられない。

「よつと」

《ギーン》

「あっ!?!」

まあ避けられないなら受け止めるだけ。

という事で緋炎の刀身で受け止める。

まあ緋炎だから出来る技だな。

普通の刀で受け止めたら折れる可能性もあるし。

「ちえゝ、今のは当たるとおもったのになゝ」

残念だったな、馬岱。

「まだまだだね」

某左利きの王子様の決め台詞を言ってみる。

「……何かイラッときた。蒲公英!何が何でも一撃与えるよ!」

「了解!」

「その意気だ。掛かって来い!」

さて、どれぐらいで一本取られるかな。

・
・

・
「もうダメ〜疲れて動けない〜」

「蒲公英ももう無理〜」

二人揃って仰向けで寝転がっている。

模擬戦を開始してから半刻ぐらいかな？

「何だよ、もう終わりか？」

「もう動けないってば〜腕も脚もパンパン…」

「お兄様は未だ余裕みたいだね〜」

「まあな。でも半刻ぐらいしか経ってないだろ？」

「半刻もだよ〜。ね？十六夜っち」

いつの間にか鳳徳が傍まで来ていた。

「いえ、私は半刻程なら余裕です。いつも翠様と模擬戦をしているので」

「あ〜そっぴやそうだったねん…」

「蒲公英達は未だ未だ修行が足りないのだろうか……とか思ったりして。お兄様っていつもこれぐらい鍛えてるの？」

「取り敢えず、秋紘とは殆ど毎日一刻ぐらい修行と称して本気でド突き合ってるかな」

「……お兄様、それ本気で言ってるの？」

「勿論」

サッカー選手なんかも四十五分間掛ける二の時間を走り回っているんだし、別に変じゃないと思うんだけどな……。

あくまで暇な事が前提だから他に用事があればやらないし。

「信じられない……御姉様や御兄様って蒲公英達とは体の作りが根本的に違うんじゃない？」

「努力の問題だ」

「翠姉もよくそれ言ってるね。努力が足りないとか気合が足りないとか」

「努力は兎も角、気合で強くなれるなら苦労しないよ」

馬岱が手足をジタバタさせる。

「まあそりゃそうだな。それでどうするんだ？少し休憩したらまたやるか？」

「うーん、どうしよつか……まあ休憩しながら決めよう。紫苑、悪いけど手え貸してくんない？」

「芙蓉様、それなら私が…」

「十六夜っちは蒲公英に手え貸してあげて（チラッ）」

「……………！十六夜お願い」

「分かりました」

鳳徳が馬岱の傍へ行き手を差し伸べる。

今、馬鉄と馬岱がアイコンタクトを取ってたけど何だろう？

「紫苑、早く手え貸してー」

馬鉄が手を此方に伸ばしてブラブラさせてる。

「ほらよ」

馬鉄に向かって手を差し出《ゴスッ！》

「なん…だと…！？」

こ、股間に激痛が…………馬鉄に蹴られたのか…。

思わず膝を着き、うずくまる俺。

「よし、一矢報いた」

一方の馬鉄は笑顔でそう言いながら一人で立ち上がる。

お前…。

「イエーイ！流石、蓉ちゃん。」

「イエーイ！見事に決まったね。やっぱあれだけやって一撃も当たらないのは悔しいもんね」

「だからって、模擬戦が終わって油断してる所を蹴るなよ…」

「ちつつちつ。甘いな紫苑は。誰も模擬戦が終わったなんて言っていないよ？此処が戦場だったら死んでたよ？」

「……屁理屈ではあるが間違っちゃいないな」

「でしょ？」

満面の笑みを浮かべるな。

……しかし痛いな……かなりいい角度で入ったみたいだ……。

「……大丈夫か？」

鳳徳が手を差し出してくる。

「ありがとう。取り敢えず潰れてはいないと思う」

「そうか。それは何よりだ」

鳳徳の手を取って立ち上がる。

……うん、まだ痛い。

馬鉄め…。

「おーい！」

ん？あれは秋絃か。

「ようやく見つけた…って何で股間を押さえてんだ？」

「簡単に言つと模擬戦が終わつたと思つて油断してたら馬鉄に股間を蹴られた」

「そんなに痛いのかよ。馬鉄の蹴りだと体格的にそこまで痛くなさそうだけど」

「うっさい、此処を蹴られる痛みは女には分かんのだ」

「それは仕方無いだろ、付いてないんだから」

『だよね』

「すまないが私にも分からない」

「まあそりゃそうだろうけどさ…。で、どうした？何かあったか？」

「ああ、そっぴや用があつて来たんだつた。模擬戦とか言つてたけど、この後暇か？」

「今は暇だけど、この後は分からない」

「そうか…。馬休の案内で瑠里と一緒に街に行こうって話になってな。どうせなら紫苑も一緒と思ったんだが無理そうか？」

「え」と…」

馬鉄と馬岱の方を見る。

「行っていていいよー。模擬戦やるなら十六夜っちに相手してもらおうから」

「そうか。なら悪いけど行かせてもらおうよ」

「お土産よろしくね、お兄様」

「了解」

「……お兄様？」

「そう呼ぶ事にしたそうだ」

「そういうこと。別に特別な意味は無いよ？翠お姉様の事も御姉様って呼んでるし。水仙や芙蓉は年が近いから仙ちゃんや蓉ちゃんって呼んでるけどね」

「へ」。まあ別にいいけどな。紫苑の女誑しは今に始まった事じゃないし。そんじゃあ行くぞ、紫苑」

サラッと酷いこと言ったな。

「了解。頑張れよ二人共。鳳徳もな」

「まあ、ほどほどに頑張るよ。お土産よろしく」

「うい。いってら。あたしにも土産よろしく」

「応」

「水仙様の事は頼んだ。……手は出さないでくれ。芙蓉様も蒲公英様も君を気に入っているようだし斬りたくはない」

「分かってるって」

鳳徳の信頼はいつになったら得られるのだろう……まあ地道に頑張っ
ていくしかないな。

西涼の街か。

何か変わった所はあるかな？

・
・
・

《ボスンツ》

あー、疲れた。

色々見て回ってたら何だかんだで夜になっちまった。

馬休と瑠里が行く先々の店で盛り上がって長時間居たのが主な原因だけだ。

女の子の買い物って何で長いんだろう……。

結局の所、俺も秋絃も只の荷物持ち状態だった。

馬休は瑠里と話してばっかで、俺や秋絃とは殆ど話さなかったからな。

まだ警戒されてるのかな？

明日以降、俺から話し掛けてみるか……。

あー、寝台に横になってたら眠くなってきた。

夕飯は食ってきたし、寝ちやおうかな……。

汗掻いてるから手拭いで体拭きたいけど起きるの面倒だな……。

この世界（というか時代）で一番不便なのは毎日風呂に入れないことだな。

まあライフラインがしっかりしているわけじゃないし仕方無いけど。

蛇口を捻れば水が出るわけじゃないし、スイッチを押せば風呂が沸くわけでもないからな。

あー、何か考えるのも面倒になってきた。

寝る。

・
・
・

《ギイイイッ…》

「……紫苑、寝てる？」

「……寝てるみたい」

「よし、それなら予定通り行動しよう」

「了解。明日の朝が楽しみだね」

「うん」

くふふふふ。

ホント、紫苑の反応が楽しみだ。

第19話〜小悪魔二人・㍻（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

この小説を投稿し始めてから半年…。

まさか飽き性な自分がここまで続けられるとは…。

これもひとえに皆様のお陰です。

ちゃんと完結できるよう、これからも頑張ります。

第19話の内容に関しては、まあうんあれだ、結局芙蓉が第二の蒲公英になりつつある。

動かしやすいからいいですけど。

- - - - -

現在の執筆状況：

第20話↓完成

第21話↓半分？

第XA話↓反董卓連合・シ水関戦↓三割？

第XB話↓反董卓連合・虎牢関戦↓二割強？

第X C 話↓三割弱？

久しぶりに次話が出来てる。

という事で、次回の投稿は2011年7月16日です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第20話 小悪魔二人・弐 (前書き)

《前話の簡単な粗筋》

鳳徳が作ってくれた飯を食う

←

馬鉄、馬岱と模擬戦

←

馬休、秋絃、瑠里と買い物に行く

(ただし馬休との会話は殆ど無し)

←

部屋に戻り寝る

第20話　小悪魔二人・弐

「…きろ」

「……………」

「…きろ！」

「……………ん？」

「起きろって言ってたんだ！」

「んー…。…誰だ？」

目の前には端正な顔立ちをした銀髪美女。

「っーか鳳徳。」

「なんだ、このデジャヴユ。」

「いや、前とは目の前にいる人物が違っけど。」

「一体何回同じ様な起こされ方をするんだ…。」

「今回で三回目だっけか？」

「あと今の声って馬超の声だった様な気がしたんだけど…。」

「……………」

「……………」

……目が合ったけど反応が無い。

取り敢えず今分かっている事は、両腕が誰かに押さえ付けられていて動かない事と、鳳徳に馬乗りにされて首を絞められそうになっている事。

まだ力は込められていないけど、その気になればゴキツと折られそうだ。

何故こんな事に…。

「黒霆院」

声がした方に視線を向けると引き攣った笑顔の馬超が目に入る。

やっぱり馬超も近くに居たか。

「おはよう」

声が低い……何か怒ってる？

「お、おはよう。えーと、馬超に質問があるんだけど聞いていい？」

「いいぞ。その代わり、あたしもお前に質問があるから答える。分かったな？」

命令形かよ。

「ああ」

「じゃあ質問するけど俺は何で鳳徳に首を絞められそうになって
いるんだ？あと、両腕が動かないのは何でだ？」

「何でだろうな？」

質問に質問で返すのは良くないぞ。

「そうだな……両腕が動かない原因を教えてやろう。左を向いてみ
る。十六夜、手を離してやれ」

「分かりました」

鳳徳が首から手を離してくれたので左を向いてみる。

「……………why？」

何故か馬岱が俺の左腕に引っ付いて寝ている。

ポニーテールは解かれている。

こっちの髪型も可愛いな。

…じゃなくて、

「…何で馬岱が俺の腕を枕にして寝てんだ？」

「何でだろうな？」

だから、質問に質問で（ry

「右を向いてみる」

「右？」

言われた通り右を向いてみる。

「……………oh…」

何故か馬鉄が俺の右腕に引っ付いて寝ている。

ポニーテールは（ry

両腕が動かなかったのは二人のせいか。

「何か申し開きはあるか？」

額に槍を突き付けられる。

「落ち着け、馬超。君はきっと勘違いをしている。これは誰かの陰謀だ。俺は無実だ」

「言いたい事はそれだけか？」

相変わらずの引き攣った笑顔が火山が噴火する前みたいで怖い。

「待て、早まるな。槍を振りかぶるな。妹達に当たったらどうする。まずはあれだ。馬鉄達を起こそう。起こして何故俺の寝台で寝てい

るのか聞こう。俺が悪いかどうか判断するのはそれからでも遅くないはずだ」

「問答無用！」

噴火したー！？

「うおい！待て！マジで落ち着け！頼むから！」

まだ鳳徳が馬乗りになっっているせいで身動き取れないんだから、今攻撃されたら避けられねえ！

「……もう、五月蠅いな。一体何なの」

「ん、何か騒々しい……………」

《ピタッ！》

！二人が起きかけてる。

馬超も動きを止めたし誤解を解くなら今しかねえ。

「馬鉄！馬岱！起きてくれ！そんなもって、何で此処で寝ているのか馬超に説明してくれ！」

「……ん？あつ、おはよー、お兄様」

「おはよう……って呑気に挨拶してる場合じゃないから！」

「（ピキピキ）お兄様？」

不味い、火に油を注いだみたいだ。

「おはーようーしおーん！。昨日は（修行が）激しかったね」

「だよね〜（修行のせいで）足腰立たなくなっちゃったもん」

ちよっ…！お前ら何だその誤解を招きそつな台詞は！

「（ニコー）」

「あはは…」

「芙蓉も蒲公英も動くなよ…。死ね、黒霆院！」

「マジかよ！？」

槍を振り下ろしてきやがった！

仕方無い…氣でガードして…！

《ガシッ》

「落ち着け、馬超」

「邪魔するな太史慈！幾ら命の恩人とは言え妹達に手を出されて許しておけるか！」

「だから落ち着けつて。紫苑は…」

……秋絃が止めてくれたみたいだな……助かった……けど、いつから居たんだ？

「相変わらず節操がないですね」

鳳徳の後ろから声がしたので見てみると瑠里と馬休も居た。

「居たのか、瑠里」

「ええ、最初から」

最初からかよ！

「……………」

瑠里の隣にいる馬休と目が合う。

「お、おはよう」

「……………貴方、最低です」

腐った生ゴミを見るような目で見られた…。

「……………！」
「……………」

秋絃と馬超は言い合いしてる（というか秋絃が馬超を宥めてる）し、俺の体に馬乗りになっている鳳徳は無表情で何考えてるのか分からないし、マジカオス。

「いや、ホント誤解だから。ていうか、馬鉄と馬岱は何で俺の寝台で寝てたんだ？」

「それはね〜…」

「全く、朝から騒がしい…。何を騒いでいる？」

「母上」

「母様！聞いてくれよ、黒霆院が…」

馬騰も来たか…。

ドストロスと足音を立てて馬騰の所へ行き説明し始める馬超。

「……言い損ねたね、蒲公英」

「……そうだね、蓉ちゃん」

俺も聞きそびれた。

やましい事は一切無いけど、下手したら冗談抜きで首チョンパだな……。

「おい、紫苑」

「よお、秋絃」

秋絃が傍まで来て小言で話し掛けてくる。

「一体お前は何してんだ…」

「何もしてないって。起こされたら、この訳の分からない状況に放り込まれてただけだから」

「馬鉄と馬岱の事はどう説明するんだよ」

「知らんがな。昨日寝る時は俺一人だったし」

「馬鉄と馬岱は何で此处で寝てたんだ？」

「それはね……」

「……というわけ！！母様だって許せないだろ！？」

おおう、びつくりした。

馬超が馬騰に説明し終わったみたいだな。

「……言い損ねたね、蓉ちゃん」

「……そうだね、蒲公英」

俺もまた聞きそびれた。

「取り敢えず落ち着け、翠。黒霆院の話も聞いてからだ」

そう言うところ方へ近付いてくる馬騰。

「おはよう、黒霆院」

「おはようございます」

「翠が君を発見した状況は聞いたか？」

「いや、聞いてない」

「翠、話してくれ」

「……分かった。朝、蒲公英に用事……まあ朝一の馬の世話に誘おうと思ったんだけど……があつて部屋を訪ねたら蒲公英が居なかったんだ。で、仲が良い芙蓉の部屋に居るかもと思って訪ねてみたら蒲公英はおるか芙蓉まで居なかったんだ。じゃあ二人とも水仙の所に居るのかな？と思ってても部屋を訪ねてみても水仙しかない。水仙も二人が何処にいるか知らないっていうから、水仙と一緒に適当に屋敷の中を探してたんだけ。十六夜とはその時に会って、十六夜も知らなくて、そのまま一緒に探す事になった。で、一通り探して見たけどやっぱり居ない。もしかしたら太史慈や徐庶と仲良くなつて一緒に居るのかもしれないと思って訪ねてみたけど空振り。徐庶が“まさか紫苑さんの部屋に居たりして”とか言い出したから念の為に覗いてみたら三人一緒に寝てたんだけ。で、後は黒霊院も知つてのとおりで」

お前のせいかな、瑠里！

「黒霊院、昨日寝る時から芙蓉や蒲公英と一緒にだったかの？」

「いや、昨日寝た時は一人だった」

「嘘だ！」

馬騰の質問に嘘偽りなく答えたのだが、馬超が何処ぞの鉈女の如く叫ぶ。

「いや、嘘じゃないから」

「なら何で一緒に寝てたんだ!」

「分からない。俺だつて馬超に起こされてから始めて二人が横に居る事に気付いたんだし」

「芙蓉、蒲公英。お前達は何で黒霆院の寝台で寝てたんだ?」

馬騰が馬鉄と馬岱に問う。

「別に大した理由じゃないよん。朝起きた時に、あたし達と一緒に寝てたら紫苑がビツクリするかな〜と思って。ただそれだけ」

「そ、それだけ?」

馬超が目を丸くして聞き返す。

「それだけだよ。昨日お兄様と模擬戦したんだけど一本も取れなくてさ。腹いせに驚かせようと思っただけ。つまり、お姉様が考えたような事は何も無かったってこと。まさか此処まで大事になるなんて蒲公英思わなかったもん」

「……………さっきの“昨日は激しかったね”とか“足腰立たなくなっちゃった”とかは?」

「蒲公英も言つてたけど、昨日は朝から半刻ぐらい紫苑と模擬戦してたんだよね。あたしと蒲公英対紫苑でやってたんだけど一撃も当てられなかったよ。いや、一応最後に一撃決めたかな?」

アレを一撃にカウントするのか…… まあ別にいいけど。

「……蒲公英が御兄様って呼んでるのは？」

「昨日も誰かに説明したけど別に特別な意味は無いよ？ 翠お姉様の事だって御姉様って呼んでるし、ただ単に御兄様って呼んでみたかったからそう呼んでるだけ」

「……えーと……」

呆然と立ち尽くす馬超。

まあそれは置いておくとして、

「馬鉄も馬岱も無防備すぎないか？ 恋人でもない年頃の男性の寝台に潜り込むなんて。もし本当に俺に襲われたりしたらどうするんだ？」

「んー、まあその時はその時で大声挙げれば誰かしら来てくれるだろうし、紫苑がそんな事するなんて思ってたし」

「そだねー。何だかんだで御兄様いい人だし」

「……まあ、会ったばかりなのに信頼してくれるのは嬉しいけど、もうちょい危機意識を持った方がいいと思うぞ？」

『はい。以後気を付けます』

……気を付ける気ねーな。

「……誤解は解けたようだな。私は自分の部屋に戻るぞ。芙蓉と蒲公英は後で私の部屋に来るように。騒ぎを起こした罰として説教するから」

『はい』

そう言うと馬騰は部屋から出ていった。

「……すみませんでした、黒霆院様」

さっきの発言を気にしているのか馬休が頭を下げ謝ってくる。

「気にするな。紫苑が女絡みで問題に巻き込まれるのはいつもの事だ」

「……まあ悔しいけど秋絃の言う通りだ。だから別に気にしないでいいよ。あと、名字じゃなくて名前で呼んでくれ。馬騰と同じで俺も堅苦しいのは嫌いだから」

「分かりました。今後は名前で呼ばせて頂きます。改めて本当にすみませんでした、紫苑様」

再度、頭を下げる馬休。

「だから気にしないでいいし謝らなくてもいいから」

「でも……」

「そうですね。そもそも紫苑さんが誰彼構わず女性に優しくするの

「が悪いのですから」

「…………嫉妬か？」

「……………」

《キリキリキリ》

「冗談だ、冗談だから怒るな、矢を放とうとするな、ていうか室内でそんな事したら危ないだろ、暴発したらどうするんだ」

無表情なのが逆に恐い。

「鏝をよく見て下さい」

矢を弦から外し此方へ差し出してくる。

「これは対紫苑さんお仕置き用の特別な矢です。鏝を取って代わりに布を何重にも巻き付けたものになります。仮に当たったとしても大して痛くありません。紫苑さんに当てる時は氣で強化するので痛いと思いますが」

「わざわざそんな物を作るなんて、何て無駄な労力なんだ」

「布をグルグルと巻き付けただけですから大した労力じゃありませんけどね。お仕置きは後でしましょう。私は戻ります。行きましょう、馬休さん」

「えっと…」

表情が浮かない。

まだ気にしているみたいだな。

「馬休、こつちおいで」

「あつ、はい」

呼ぶと素直に傍までくる馬休。

「ちょっとしゃがんで」

「これでいいですか？」

これまた素直にしゃがんでくれる馬休。

「ああ」

「あつ……」

で、しゃがんでくれた馬休の頭を撫でる。

「本当に気にしていないから落ち込むな。そんな表情をされる方がつらい」

そのまま少しの間、馬休の頭を撫で続ける。

「……………」

目を瞑り大人しく撫で続けられる馬休。

「…ふふっ」

暫くすると軽く笑みを浮かべてくれた。

「おっ、ようやく笑ってくれたな」

「何だか父上に撫でられているみたいで落ち着きます」

「そうか。そっぴや馬休達の父親って今は…」

「私や芙蓉が小さい頃に病気で亡くなりました」

「あー、すまん。嫌な事を思い出させちまったな」

「気にしないで下さい。さっき言った通り父上は私達が小さい頃に亡くなったので、父上に関しての記憶が殆どありませんから」

「そっか。なら、お互い失言は忘れよう」

「はい。それでは失礼します。紫苑様、暇な時でいいですからまた頭を撫でてくれますか？」

「ああ」

「楽しみにしてます」

そう言つと会釈をして馬休は部屋から出ていった。

『……………』

「……………何だよ？」

部屋に残ってる女性陣の視線が突き刺さる。

「いえ、何でもありませんよ。まあいつも通りだな、と。では私も戻ります」

「いつも通りだな。眠いから俺も戻るぜ」

馬休に続き、瑠里と秋紘も部屋から出ていった。

「……………あたしも戻るね。母様に呼ばれてるし」

「……………じゃあ蒲公英も戻ろうかな。叔母様に呼ばれてるし」

更に馬鉄と馬岱の二人もそそくさと部屋を出ていく。

残されたのは、俺と馬超と鳳徳の三人。

「……………」

「……………」

「……………」

全員無言。

馬超はバツが悪そうに俯いてるし、空気が重い……………。

「……取り敢えず鳳徳に言いたい事があるんだけどいいか？」

「何？」

「鳳徳はいつまで俺の上に馬乗りになってんだ？」

そう、起きてから今までずっと馬乗り状態。

つまり、今までの会話は全て寝台の上で鳳徳に馬乗りにされながらという事になる。

どんなプレイだ。

「翠様が命令を破棄もしくは変更されるまで」

「あつ、そう……」

命令に忠実だな。

いや、命令に忠実なのは部下として良い事なんだけど、状況的にそこは馬超に降りていいかぐらいは聞いてもらいたかった。

「……十六夜、黒霆院から降りてやれ。それと戻っていいぞ」

おっ、ありがとう馬超。

「分かりました。それでは」

鳳徳が部屋を出ていき、これで馬超と二人きり。

気まずい…。

「……えーと、馬超さー」

「……スマン！」

「へ？」

いきなり土下座しだす馬超。

「蒲公英達が悪戯好きなのは十分分かったのに、三人が一緒に寝てるのを見て感情的になっちゃって、事情も聞かずに黒霆院が悪いと決め付けて、命の恩人に対して攻撃しようとしたり、いつも考えてから行動しろって母様にも言われてたのに…」

「ちよつ、待て。少し落ち着け。別にあの程度の事なら気にしてないから」

「…あの程度って槍を突き付けたんだぞ？」

「いや、普段から瑠里に矢を向けられてるしな」

下手すりゃ一日数回ぐらい。

まあ原因は俺が瑠里をからったからだけど。

「でも…」

「馬超は妹達を大切に思ってるからこそ、ああいう行動を取ったんだろ？なら責められはしないさ。まあ今度同じ様な事があった場合、

気を付けてはもらいたいけど。さっきも言ったけど俺は気にしてないから、馬超も気にしなくていい。馬休にも言ったけど女の子の悲しそうな顔なんて見たくないんだ。だから笑ってくれ。ほら」

「……うん」

手を差し伸べると馬超も素直に手を取ってくれる。

……しかし今日は臭い言葉を連発してるな。

後で思い出して恥ずかしさで悶えそうだ。

「あーあ、五胡の連中には殺られそうになるわ勝手に勘違いして暴走するわ、黒霆院には恥ずかしい所ばかり見られてるな。情けない……」

苦笑いする馬超。

「だから気にするなつて。馬超は可愛いんだし笑顔の方が似合うから」

「……可愛い？」

不思議そうな顔で聞かれる。

「可愛い」

「……誰が？」

また不思議そうな顔で聞かれる。

「馬超が」

「……はああああっ！？ななな、何言ってんだ！？あ、あたしが可愛いわけないだろ！？可愛いって言うのは十六夜とかに使っ言葉で……」

なんか急にあたふたし出した。

「鳳徳は可愛いっていうより綺麗って感じだな」

「じゃあ徐庶だ」

「確かに瑠里は可愛いな。でも馬超も可愛い」

「# \$ ¥ £ % ∩ Δ ∟」

おお、面白い反応するな。

真っ赤になって何か言ってるが、何言ってるかは分かん。

あまり男から褒められたこと無いのかな？

「あ、あれか！？さっきの事に対する仕返しか！？そりゃ確かに悪い事したけど、だからってこんな風に仕返しするなんて……」

……あれ？もしかして本気で自分のこと可愛くないって思ってるのか？

……。

「なあ馬超」

「……何だよ」

「馬休や馬鉄、馬岱って可愛いと思うか？妹としてじゃなく女の子として」

「……まあ身内だから鼻屑目になるかもしれないけど可愛いと思うぞ」

うむ、俺も三人とも可愛いと思う。

三人と一緒に名前挙げたら怒ると思って挙げなかったけど、馬騰も可愛い。

「じゃあ何で馬超は自分の事が可愛くないと思ってるんだ？」

「へ？」

「だって、馬超と馬休や馬鉄は姉妹だろ？」

「勿論だ」

「馬休や馬鉄の事は女の子として可愛いと思ってるんだろ？」

「ああ」

「なら馬超も可愛いって事になるじゃん」

「何でだよ!？」

「だって姉妹なら似ているんだから可愛いだろ」

「姉妹だからって似てるとは限らないだろ!？あ、あたしなんか男勝りだし不器用だし頭悪いし手入れとかもあんまりしないし…」

……頭が悪いって自分で自覚してんだな。

まあ可愛いとは関係無いけど。

「いや、俺は似てると思う。仮に似てなくても俺は可愛いと思う。つまり馬超は可愛い」

「¥\$¢£%#&

」

……反応が可愛い。

何て言うか苛めたくなる。

という事で馬超の頭も撫でてみる。

どんな反応をするか…。

「なっ…!？あっ…!えっ…!？」

「馬超は可愛いよ。自信を持って言える」

「ううゝ…」

耳まで真っ赤になってる。

プルプルと小刻みに体が震えて…

「あああああああつ！」

《ドガッ》

「ぐはっ…！？」

「このエロエロ魔神がー！蒲公英達もそうやって懐柔したんだな！
？やっぱり信用なんかしてやるもんかー！」

強烈なアッパーを喰らい、そのまま寝台へと倒れる。

馬超は叫びながら部屋を出ていってしまった。

怒らせてしまったみたいだな。

そして俺はそのまま意識を失………わねえよ。

そう何度も意識失ってたまるか。

まあ脳がグワングワン揺れてる感じがして暫く立てそうにないが。

ていうかエロエロ魔神って何だ、エロエロ魔神って。

つい瑠里と同じ感覚でからかってしまったけど不味かったかな…。

まあ失った信頼はこれから取り戻していくしかないな。

取り敢えず頭の揺れが治まるまで寝台の上でダラダラしてるか。

第20話〜小悪魔二人・弐〜（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

都合三回目の同じ始まり方…。

引き出しが少なくてすみません。

次話は、ちょいシリアス。

- - - - -

現在の執筆状況：

第21話↓完成

第XA話〜反董卓連合・シ水関戦〜↓三割？

第XB話〜反董卓連合・虎牢関戦〜↓二割強？

第XC話↓三割弱？

先週に引き続き次話が出来ているので、次回の投稿は2011年7月23日です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第21話、黒い感情・杏（前書き）

《前話の簡単な粗筋》

朝起きたら何故か馬鉄と馬岱が一緒の寝台に寝てる

←

馬超激怒で命がヤバい

←

馬鉄と馬岱がふざけて忍び込んだだけでした

←

馬超と和解、出来るかと思っただけ、可愛いつて言ったらぶん殴られた

第21話　黒い感情・杏

「国境付近の巡邏？」

「そうだ」

紫苑濡れ衣で馬超に槍を突き付けられる事件（たった今命名）から三日。

朝早く馬騰に呼ばれ部屋に行ってみたら、国境付近の巡邏を頼まれた。

「国境付近に駐留している軍から五胡の連中が不審な動きをしていると連絡が入ってな。何かあった時の為、また五胡側を牽制する為にも国境付近の巡邏を頼みたい。期間は一週間程度の予定だ。その後は韓遂や旗本八旗などと交代で巡邏する事になる。まあ元々巡邏は行っていたから、それを強化するという事になる」

「旗本八旗？」

「聞いた事ないか？まあ簡単に言えば同盟関係にある諸侯八人、侯選、張横、程銀、成宜、李堪、馬玩、梁興、楊秋の事だ。一応私が涼州連合の盟主になっているので形式上は配下になるが実際には対等な関係だ。旗本八旗に義姉妹の契りを交わしている韓遂、それと私を合わせた十人が西涼で有力な諸侯になる」

「韓遂か…」

うる覚えだけど、馬騰と韓遂って仲が悪かったって何かに書いてあ

った記憶が…。

「どうした？」

「いや、義理の姉妹って事は韓遂さんとは仲が良いのかな？って思
って」

「まあ結構ぶつかり合ったりしてるが、お互い言いたい事があれば
言ってるし、時には拳で語り合ったりしてるから仲は良いと思うぞ」

「そうか」

馬騰も体育会系なのか？

「で、どうだ？頼まれてくれるか？」

「……面子はこの三人と兵か？」

「そうだ。不服か？」

「不服ってわけじゃないけど…（チラッ）」

「（ジーーーー）」

左の方を見ると馬超がジト目で睨んでいるのが分かる。

そう、馬騰と二人きりで話しているわけではなく、部屋には馬騰を
含め四人の人間がいる。

部屋の主であり椅子に座っている馬騰に、馬騰の正面に立っている

鳳徳、鳳徳の左隣に立っている馬超に、鳳徳の右隣に立っている俺だ。

「……お前達、まだ仲が悪いのか？」

馬騰が怪訝な顔をする。

「…残念ながら。まあそれは置いておいて、巡邏とは言っても何があるか分からないし、足を怪我している馬超が行くのはどうかな」と思つて。無理はさせない方が…」

「足の怪我は治つた」

「…だそうだ」

「……それは良かった」

機嫌が悪いからか俺が嫌いだからか或いは両方かは分らんが、ぶっきらぼうな言い方だな。

「…翠は黒霊院の事を良く思っていないみたいだが、十六夜はどうだ？黒霊院の事をどう思ってる？」

鳳徳に聞くのかよ。

きつと手厳しい言葉が…。

「まだ完全には信用していませんが、不穏な動きは今の所ありませんし一緒に居て不愉快というわけでもありません」

おお、意外と…

「別に一緒にいて愉快なわけでもありませんが」

やっぱり厳しかった。

「ふむ…。まあ良い。とにかく此所にいる三人に行ってもらう。準備は既に済ませてある。出発は四半刻後だ。集合場所は北門。黒霆院は馬に…。コホツ、コホン。すまん、馬に乗れるのか？」

「ああ、問題無い」

前の世界では幼い頃から爺ちゃんに連れられて乗馬クラブに行ってたからな。

まあ高校生ぐらいからはあまり行っていないけど大丈夫だろ。

「なら話は以上だ。見送りはしないからな。解散」

その言葉を聞くと馬超も鳳徳もさっさと出ていってしまった。

気が重い…。馬鉄か馬岱のどちらかが居れば…。いや、馬超や鳳徳と親睦を深める良い機会だと考えよう。

どうすれば親睦を深められるかは今の所、思い付かないけど。

まあ此所でウジウジ考えててもしょうがない。

部屋に戻ってバッグに必要な物を詰め込んで北門に行こう。

「じゃあ俺も行くから」

「ちょっと待て」

「ん？どうした？」

部屋を出ていこうと後ろを向いた所で馬騰に声を掛けられた。

「いや、誤解は解けた筈なのに何故未だに翠が君を敵視しているのかと思つてな。私が出ていった後に何かあつたのか？」

「まあ、あつたと言えばあつた」

「何があつた？」

「……馬騰が出ていった後に馬休、瑠里、秋絃、馬鉄、馬岱、鳳徳と順番に出ていって最後に馬超が残つたんだ。で、色々あつて和解しかけたんだけど……」

話せない理由も無いので、馬騰の方を向いて話し始める。

「だけど？」

「可愛いって言って頭撫でたら、ぶん殴られた」

「冗談でからかう様な感じではなく本気で言つたのか？」

「からかうつもりだったけど、馬超が可愛いと思つたのは本当だし結構真面目に言つたと思う」

「……成る程な」

あれ？何か納得してる。

「翠は男女関係に疎いというか初心だからな。本気どころか冗談でも男に褒められた事は殆ど無いだろうし頭の中が混乱したんだろう」

「……母親を目の前にして言うのもなんだけど、馬超って可愛いから男も言い寄ってくると思うんだけどな」

「まあ母親が私だし、翠自身も幼い頃から武に関しての才能の片鱗を見せ始め、今では私を除けば我が軍で一番強くなるまでになったからな。言い寄ろうと思っても遠慮したり畏縮したりするのだろう」

「あー、そういう事ね」

家が超お金持ちの御嬢様で、御嬢様自身も全国模試で一位取るぐらいの天才、みたいなもんか。

そりゃ言い寄りづらいわ。

「まあそういう事なら私から言う事は特に無い。翠の機嫌もその内に直るだろう」

「だと良いんだけどな。まあ俺も機嫌を直してもらえる様に努力するよ」

「そうか。……黒霆院」

「何だ？」

「その気があるなら翠を口説き落としても構わないぞ」

「……はい？」

いきなり馬騰は何を言い出すんだ？

「いやな、母親としては娘の将来が心配なんだ。ちゃんと結婚出来るかどうか。さっき言った通り言い寄ってくる者が現れる可能性も低いだろうし、あの通り翠は恋愛に関しては奥手だから誰かを好きになったとしても自分から告白したりはしないだろう。どちらにしても翠が好きになるような男は中々いないだろうしな。……コホッ」

「やっぱり自分より弱い男だと嫌なのかな？」

「翠も武人だから自分の武には誇りを持っているだろう。武力だけが男を選ぶ基準では無いとは言え、相手が武人なら自分より弱いというのは減点対象だろうな」

「優秀な人物は何故か女性ばかりだもんね」

趙雲、孫策、周瑜、曹操、夏侯惇、馬超と、この世界に来てから知り合った有名な武将は全て女性。

有名な武将だけでなく指揮官クラスは女性が多いからな。

一般兵は男ばっかだけど。

この世界での強さって言うのは氣が大きく関係しているわけだけど、氣に関して才能があるのが女性に多いのかな？

「そういう事だ。我が軍でも高い地位に居る女性は少なくないからな。何故かは分からないが優秀な男が中々居ないのが現状だ。その点、君なら武力は翠と互角以上で容姿も性格も悪くない。芙蓉や蒲公英も懐いているしな。……ふむ。冗談で言っただつたが、本気で翠を嫁がせるのも悪くない……いや、婿にきてもらう方が良いか……何なら芙蓉や蒲公英も……」

……この人は一体何を真剣に考えてるんだろうか。

「あのさー、自分で言うのもアレなんだけど、俺が董卓の事で馬騰達に隠し事をしてるのは覚えてるよな？」

「勿論だ」

「そんな男に自分の娘を勧めるってどうなんだ？」

「そう言われればそうだが、私は君が悪い人物だとは思わない。芙蓉や蒲公英が懐いているのが証拠だ。あの子達は昔から人懐っこくて街の人達にも積極的に話し掛け交流していた。そのせいかどうかは分からないが、人を見る目は確かだ。嘘を吐いたり邪な考えや感情を持つている者には敏感に反応する。もし本当に君が悪い事を考えているのなら、あの子達は君に近付かないだろう。……コホン」

「猫を被るのが上手いだけかもしれないぜ？ありがたくない事に、世の中には息を吐く様に嘘をつく様な奴も存在する。もし俺がそんな人間だつたらどうするんだ？」

「その時は私の目が節穴だったという事が証明されるだけだ。もしそのせいで娘達や董卓に被害が及ぶようなら私が全力を持って君を

潰すだけさ」

ニヤリと笑う馬騰。

顔は笑っているが掛けてくる威圧感は半端じゃない。

あの曹操以上と言っても過言では無いぐらいだ。

「……まあ嫁云々は兎も角、馬騰の信頼は裏切らない様に努力するさ。悪いけど時間があまりないから行かせてもらおう」

「ああ。引き留めてすまなかったな。さつき君が言った通り何が起きるか分からない。気を付けてな。……ケホッ」

「……なあ馬騰」

「何だ？」

「さつきから咳をしてるけどどうしたんだ？」

「……風邪でも引いたのかもな」

「……本当か？」

「こんな事で嘘をついてどうする」

「……それもそうだな。悪化しない様に仕事は程々にして、ちゃんと休めよ？」

「分かってる」

「…じゃあ俺は行くから」

「ああ。気を付けてな」

「応」

《キイツ…ボタン》

……風邪ね。

帰ってきたら調べてみるか。

・ ・ ・

「よし、黄鵬も紫燕も麒麟も良い子だな。もうちょっとで出発だから大人しく待っていてくれよ」

北門に行ってみると馬超や兵達が集まっていた。

馬超は馬に話し掛けているみたいだな。

「準備は済んだか？」

「！？……何だ、鳳徳か」

誰も居ないはずの後ろから声を掛けられたので後ろを振り向いてみると、いつの間にか鳳徳が後ろに立っていた。

「気配消して人の背後に立つなよ。びっくりするだろ」

「そうか、すまなかったな。癖でつい消してしまっんだ」

癖…ね。

この前、食堂で馬鉄が言ってた暗殺も出来るって言うのも、あながち嘘じゃないみたいだな。

「翠様が話し掛けている馬の内の一頭が君が乗る馬になる」

「了解。おーい、馬超」

手を振りながら馬超の所へと歩いていく。

「……黒霆院か。遅かったな」

「悪い、少し馬騰と話をしててな」

「母様と？」

馬超の表情が険しくなる。

「ただの世間話だよ。で、俺が乗る馬は…」

（クイクイ）

「ん？」

服の袖を引つ張られたので見てみると、馬超が話し掛けていた馬の内の一頭が袖を咥えていた。

《ブルルツ》

その馬が頭を擦り付けてくる。

「軍馬だから気性が荒い馬ばっかだと思ってたけど人懐っこいな。おーい、撫でてもいいか？」

馬の視界内に入るように、ゆっくりと両手を上げて、ゆっくりと手を伸ばしてヒラヒラさせる。

馬は臆病な生き物だから、いきな撫でたりすると驚いちゃう可能性があるからな。

《ブルル》

「おーし、良い子だな（ナデナデ）」

伸ばした手に頬を擦り付けてきたので、そのまま頬を撫でる。

猫も可愛いけど馬も可愛いよな。

こっちが愛情を持って接すれば馬の方も懐いてくれるからな。

人の顔や声も、ちゃんと覚えるし。

《ブルルツ》

「ん？」

馬の頬を撫でていると、さっき馬超が声を掛けていた他の馬二頭も近くに來ていた。

「お前達も撫でてほしいのか？」

最初に近付いてきた馬にしたのと同じ様にして手を差し出すと一頭が頬を擦り付けてくる。

もう一頭も撫でてほしいみたいだけど、残念ながら俺の手は二本しかない。

「馬超でも鳳徳でもいいから撫でてあげてくれない？」

「分かった。おいで、麒麟」

鳳徳が声を掛けると、麒麟と呼ばれた馬は大人しく鳳徳の方へと歩いていった。

「馬超、この子達の名前は？」

「……………」

「馬超？」

馬超の方を見てみると、目を丸くして此方を見ていた。

「え？あ、ああ。右手側の子が紫燕で、左手側の子が黄鵬だ」

「紫燕ー、黄鵬ー、気持ち良いかー？」

《ブルル》

お気に召したみたいだな。

「……………」

「さつきから驚いた様な表情でこっち見てるけど、どうかしたか？」

「え？あ、ああ。いや、紫燕達が初対面の人間にそんなに懐くとは思わなくてな。一応、誰に乗られても大丈夫な様に訓練はしてるけど、それと懐くのは別の話だし…」

「ふふん。それは俺が心優しい善人だからだ（ドヤッ）」

「自分で言っな（ビシッ）」

鳳徳から抑揚の無い声でツツコミを入れられた。

「意外とノリがいいな、鳳徳」

「いや、芙蓉様や蒲公英様がいたらツツコンだろうなと思ったから代わりにやっただけだ」

「それでも反応が全く無いよりはいいよ」

「そうか」

「ああ」

今みたいな感じで、少しずつでいいからコミュニケーションを取って鳳徳とも仲良くなればいいな。

「むゝ…。そりゃあ確かに紫燕達は乱暴な奴や悪い事を考えてる奴には自分から近付いたりしないけど、だからと言って黒霆院が良い奴だって事にはならないし…」

一方の馬超はボソボソと小声で何かを呟いている。

馬超と仲良くなるには、まだまだ時間が掛かりそうだな。

「翠様、そろそろ出発の時間です」

鳳徳が馬超に声を掛ける。

「分かった。じゃあ黒霆院は紫燕に乗ってくれ。十六夜は麒麟に。あたしは黄鵬に乗る」

「分かりました」

「了解。よろしくな紫燕」

《ヒーン！》

紫燕も了承してくれたみたいだな。

「よし！皆、出発するぞ！」

『応!』

さて、何事も無ければいいが…。

・
・
・

「次は俺の番だな。じゃあハートの七で。次は馬超の番だな。ハートの三、ハートの五、ハートの七とハートが三枚続いてハート縛りが成立してるから流れるまでハートしか出せないからな、馬超」

「何度も同じこと言われなくなつて分かつてるよ。ほら、ハートの九。次は十六夜の番だぞ」

「はい。では私は…」

国境付近に着いてから二日経つたが特に何事も起きなかった。

只今、トランプで大富豪中。

昼飯の後に暇な時間が出来たので遊んでいるわけだ。

トランプは、この世界に来る前に桜がバッグに放り込んでおいたやつだ。

参加メンバーは、俺と馬超と鳳徳に兵士の女の子二人。

今さっきルールを説明したばかりだから、ローカルルールは革命と八切りとマーク縛り（三枚）だけ。

本当なら、スペ三返しにイレブンバック、階段に階段縛りぐらいはローカルルールに入りたいんだけど、馬超が混乱しそうだから止めた。

「ハートの二。ジョーカーは既に使われていますし出せる人はいませんね？じゃあ流します。スペードの九。次は黒霊院様の番ですよ」

隣に座っている女の子兵士に声を掛けられる。

「おう。えーと、それじゃあ…」

《タッタッタッタ》

「馬超様！緊急事態です！」

ん？

「どうした！？」

「斥候からの報告です！この先にある村から火の手が上がっているとの事！遠目での確認なので詳細は不明ですが恐らく五胡の連中に襲われたかと！如何なさいますか！」

何！？

「くそっ…！休憩は終了だ！陣地はこのままでいい。輜重隊と少しの見張りを残して村へ向かうぞ！輜重隊は陣地の撤収作業を頼む！急いで行動しろ！」

『はっ！』

「馬超！」

「何だ！」

「先に村へ向かう！」

「一人だけ先行したって意味が無いし危険だ！皆の準備も直ぐに終わるから……」

「悪いが待つてられない！俺は行く！」

「あつ、おい！」

間に合つてくれ……！

・
・
・

「悪いが待つてられない！俺は行く！」

「あつ、おい！……行っちゃった……ああ、もう！何で言うこと聞けないんだよ！あたしだって今すぐにも行きたい……って速！？何だあれ！？」

黒霆院の奴が馬並み、下手すりゃ馬以上に速く走っている様に見えるのは気のせいかな？

「……馬超様、黒霆院様が馬以上に速く走っていかれた様に見えたのは私の気のせいでしょうか？」

……気のせいじゃなかったっぽいな。

後で問い質さないと。

・
・
・

「遅かったか……」

村の中は滅茶苦茶だ。

建物は破壊され女子供関係無く皆殺しにされてる……。

火が着けられた建物はそれほど多くないな。

五胡だか黄巾党だか知らないが村を襲った奴らは既に居ない。

暫く歩き回って民家の中を見たりもしたが、全員亡くなっている。

遺体に触れてみたが、まだ温かみがあった。

襲われてからそんなに時間は経ってないか……？

《ガタツ》

！？

「誰だ!？」

「……助け……」

音がした方向を見ると、路地裏から小さな女の子が出てきて、そのまま倒れる。

「おいっ!？大丈夫か!？」

「……お腹……痛い……」

「お腹？」

お腹付近の布には血がベツタリと付いている。

「!？これは……」

服を捲つてみると、お腹に穴が空いていた。

槍か刀で刺されたのだろう。

路地裏の奥を見ると、おびただしい量の血液が地面を赤く染めていた。

その血が全てこの女の子のだしたら、この子はもう…。

いや、内臓は傷付いていないみたいだから駄目元で傷を塞いで…。

「……お兄ちゃん」

「喋るな！今手当てをしてやる！」

「……隣の家だね……好きな男の子がいてね……それでね……大きくなったらね……お母さんやお父さんみたいに……一緒に暮らそうって……約束したの……でも……その子も……死んじやつ……たの私が死ん……だら……あの子に……会える……か……な？」

「いいから喋るな！その子の事を思うなら、その子の分まで生きるんだ！」

「……………」

「おい！返事をしろ！」

「……………」

……脈が無く心臓も止まっている……くそつ。

「ようやく見つけた！黒霆院！」

「馬超か……」

「酷い有り様だな……生きている奴はいたか？」

「……ついさっき一人見つけた……けど、亡くなった」

腕の中の女の子を抱き締める。

「……そうか。村の外には見張りを立てている。生存者がいないか

村の中を探そう。皆も生存者の搜索を頼む！消火活動も並行して行
つてくれ！」

『はっ！』

「……ごめんな、助けられなくて」

動かなくなった女の子を近くの民家に寝かせる。

「……行くぞ、黒霆院」

「……ああ」

……。

・
・
・

「一通り回ったけど誰もいないな」

「……ああ」

「村の人は皆殺しか。民家や酒屋、飯屋の台所を見てみたが食糧
が一切無かったから食糧目当てだな」

「……ああ」

「……さっきの女の子の事を気にしているのか？」

「……別に」

「……こんな世の中だ。言っちゃ悪いが、一々気にしてたら身が持たないぞ?」

「……分かってる」

「……そうか」

《タッタッタッタ》

「馬超様!」

「何だ?」

「生存者が見つかりました!」

「ホントか!?」

「はい。馬小屋の中に隠れていた女性一人だけですが……。場所は村の外れ、私達が入ってきた場所とは反対側になります」

「分かった、すぐ行く。お前は引き続き生存者の搜索を頼む」

「はっ!」

「黒霆院も行くだろ?」

「ああ、勿論だ」

・ ・ ・

「え〜と、この辺りの筈だけど…」

村の端っこって言ってたよな？

「……………」

黒霆院の奴、さっきから一言も喋らないな…。

「馬超様！生存者をお探しなら此方です！」

「そこか！今行く！」

声を掛けてきた兵士の所へ行くと、女性が膝を抱える格好でうつくまっているのが見えた。

「おい、あんた。大丈夫か？怪我は無いか？」

「………… 貴方は？」

「あたしは馬孟起だ」

「………… もしかして錦馬超？」

「あー、まあそんな風にも言われてるな」

恥ずかしいから止めてもらいたいんだけどな。

「そんな事より一体何があった？」

「……いきなり五胡の人達がやってきて、食糧を寄越せ、抵抗しなければ殺しはしないと言われました……命あつての物種ですので大人しく食糧を渡す事にしました……五胡の人達は村の人を一ヶ所に集めた後、食糧を運び出し始めました……わざわざ村の皆を一ヶ所に集めるなんて可笑いと思つてたんです……食糧を粗方運び出し終わつたと思つたら村の皆を殺し始めたんです……そつから先はよく覚えていません……とにかく必死で逃げ、目に入つた馬小屋に隠れる事にしたんです……怖かつた……皆の悲鳴が絶え間無く聞こえてた……その内、声は聞こえなくなつた……でも、怖くて馬小屋から出られなかつた……」

女性は肩を震わせている。

「やっぱり五胡か……。話してくれてありがとう」

「……村の皆は？……誰か生きてる人は……？」

「…残念だけど、今の所は、あんた以外見つかつてない」

「そんな……うっ……うっ……」

「……（ポンポン）」

女性を抱き締めて背中を叩いてやる。

……こんな事しか出来ない自分が情けない。

「……食糧だと？……そんな事の為に……そんな事の為に無抵抗な村の人達を殺したのか！？」

《ガンッ！》

「（ビクッ）」

黒霆院が壁を殴り付けたみたいで大きな音がした。

女性の方を見るとガタガタと震えている。

「おい、黒霆院。この人が怯えてるだろ」

「……すまん」

……槍を突き付けても怒らなかったこいつでも、感情的になって怒る事があるんだな。

「馬超様！」

「どうした！？」

慌てた様子で兵が駆けてくる。

「見張りから連絡です！五胡の兵が此方へ向かっているとの事！数は凡そ五百程かと思われます！恐らく、この村を襲った者達かと」

「五百か……。此方も輜重隊を除いて五百人ぐらいだから何とかなるか。村の中に散っている兵を急いでかき集めろ！」

『はっ！』

「十六夜は居るか！」

「此所に」

今まで姿が見えなかった十六夜が現れる。

「この女性を頼む」

十六夜に女性を任せる。

「分かりました。お気を付けて」

「ああ。行くぞ、黒霊院つ……て、おい！」
目の前で黒霊院が屋根の上に飛び乗る。

どんな跳躍力してんだよ…。

「……先に行く」

「はあ！？だから勝手に動くなって言ってるだろって行っちゃったし！」

あの野郎…。

……あいつ、いつもヘラヘラ笑ってる印象しか無かったけど、あんな風に真面目な顔も出来るんだな。

それに、見ず知らずの村の人達の為に本気で怒ってた。

……少し見直したかな。

つと、のんびりしてる暇は無いな。

あたしも早く黄鵬の所に戻らないと。

・
・
・

「馬超様！」

「どうした！？」

「見張りから連絡です！五胡の兵が此方へ向かっているとの事！数は凡そ五百程かと思われます！恐らく、この村を襲った者達かと」

五胡…。

「五百か…。此方も輜重隊を除いて五百人ぐらいだから何とかなるか。村の中に散っている兵を急いでかき集める！」

『はっ！』

あいつらが…。

『……か！』
『……に』

あいつらが、この村の人達を殺したのか…。

『…………む』

『…………て』

…………。

「ああ。行くぞ、黒霆院つ…………て、おい！」

五胡の奴らが何処に居るか確認する為に近くの民家の屋根に飛び乗る。

…………居た、あいつらか。

「…………先に行く」

「はあ！？だから勝手に動くなつて…」

馬超が何か叫んでいるが関係無い。

…………一人残らず殺してやる。

第21話〜黒い感情・杏（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

うーん、相変わらずテンプレな展開から脱却出来ない…。

- - - - -

現在の執筆状況：

第22話↓二割？

第XA話〜反董卓連合・シ水関戦〜↓三割？

第XB話〜反董卓連合・虎牢関戦〜↓二割強？

第XC話↓三割弱？

残念ながら次話は出来てないっす。

次回の投稿は2011年7月30日が目標です。

無理なら8月6日に投稿する予定です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第22話　黒い感情・弑　（前書き）

《前話の粗筋》

馬騰に呼び出され国境の巡邏に行つてほしいと言われる

←

国境で二日ほど何事もなく巡邏

←

村人が皆殺しにされている村を発見

←

生存者を一人見つける

←

村を襲つたと思われる部隊が村に近付いてきたので迎撃の為に移動し始める

第22話　黒い感情・弐

戦闘に入ってから少し経ち、五胡の兵は半分以下に減っていた。

《ザンッ!》

「がっ……!?!」

正面にいた五胡の兵を翠樹で武器毎縦に真っ二つにする。

「……許さねえ……許さねえぞ、五胡……!」

「くっ……退却、退却だ!」

戦況が不利だと悟ったのか、司令官らしき男が撤退の指示を出す。

俺と相對している奴を除いて反転を始めるが、誰一人として生かして帰すつもりは無い。

「逃げんなよ……逃げんなよ、五胡!」

『!?!』

武装錬氣・方陣結界。

氣を足から地面に流し込み、そのまま五胡の連中を取り囲むように移動させ結界を張る。

これで奴らが逃げ出す事は出来なくなった。

《ザシュッ!》

「ぎゃっ…!」

右側にいる五胡兵の胸を黒霆で穿つ。

「戦意の無い村の人達を皆殺しにする…!　それが…!　それが、お前達のやり方なのか!」

「ウオオオオ!」

《ヒュン!》

「がつ…」

左側から攻撃してきた五胡兵の攻撃を避け黒霆で首を刎ねる。

「あの子を殺した罪を…!」

《ドスッ》

「ぐはっ…!?!」

右斜め前にいる五胡兵を黒霆で斬る。

「村の人達を殺した罪を…!」

《ザンッ!》

「がぁぁあ……!?!」

「ぐっ!?!」

「ごふっ……」

翠樹で周囲の五胡兵を薙ぎ払う。

「貴様らの命で贖え!」

・
・
・

……“また”感情の赴くままに殺してしまった。

嫌な気分だ……。

「おい、黒霆院! 五胡の連中はどうした!」

五胡の奴らを一人残らず殺し村へ戻ろうと歩いていると、馬超率いる騎馬隊が近付いてくる。

「見ての通りだ。全員殺した」

親指で後ろを指差す。

まだ戦闘を行っていた場所からそんなに離れていないので見えるはずだ。

「あの僅かな時間で倒したのか……逃げた奴は?」

「全員殺したって言っただろ。一人も逃がしていない」

「……そうか。情報を聞き出す為にも何人が生け捕りにしたかったんだけどな」

「……すまん、そこまで頭が回らなかった」

失敗した……。

「まあ、どうせ五胡の連中は拷問したとしても口は一切割らないから別にいいけどな」

そうなのか。

「保護した女性は何？」

「村の中だと精神的に良くないだろうから、十六夜には村の外へ連れて行くように言つといた。取り敢えず村まで戻ろう。後ろに乗れ」

「……いいのか？」

「一人だけ歩かせるわけにもいかないだろ……。い、言っておくが、へ、へへへ、変な事したら振り落とすからな！」

「……ああ、ありがとう」

馬超の好意に甘えて後ろに乗せてもらう。

この馬は確か黄鵬だったな。

「……よし！ それじゃあ村まで戻るぞ！ 最後尾から反転していけ！」

『はっ！』

馬超の合図と共に村へと戻り始める。

「……なあ、黒霆院」

「……ん？」

「お前……いや、何でもない」

「……そうか」

何か言いたそうだったが口をつぐんでしまった。

「………」

「………」

気まずい雰囲気の流れ、お互い無言になる。

まあ、今は誰かと話したい気分でもないし丁度良いか……。

・
・
・

……遅いな。

一当てしてくるだけでいいと言ったのに、やけに時間が掛かっている。

「若」

ようやく来たか。

「雅丹か。兵はどうした？」

「……申し上げにくいのですが全滅しました」

「全滅？俺の命令を無視したのか？」

「いえ、指揮官には一当てしたら戻ってくるよう厳命しておりまして」

「ならば何故全滅したのだ？細作の報告には馬超と鳳徳の名前しか無かったが、まさか馬騰自らが来ていたのか？馬騰の指揮ならば同数でも包囲殲滅させられる可能性はあるが……」

「いえ、相手は一人でした」

「一人だと？」

「はい。遠目での確認ではありますが、黒髪に上下共にゆったりとした黒い服、細身の黒い剣を使用していました。恐らく、少し前に若が遭遇したと仰られていた人物かと。細作が調べた情報によると、一部の漢の民の間で黒き霊と呼ばれている男でしたね」

「あいつか……武威に居る事は知っていたが、まさか此方へ来ていたとは……」

圧倒的な力を持つ弱者の味方……だったか。

「相手が一人だったので斬り伏せてそのまま村に向かおうとしたようです、たった一人の敵を倒す事が出来ず、逆に此方側の兵が徐々に減っていきました。兵数が半分程になった所で撤退しようとして反転したのですが、いきなり白い壁が兵士達を囲む様に現れました。そして、暫く経ち白い壁が崩れ落ちた時には、中に居た兵士達は誰一人として立っていませんでした」

噂には尾ヒレが付き物だが、今回の事を鑑みるに噂は本当だったみたいだな。

「……状況から判断して、あいつがやったのだろうか面妖な事だ。妖術でも使えるのか？」

漢の人間は我々五胡の人間が妖術を使えるなどと思っているそうだが、残念ながらそんな物は使えない。

そんな物が使えるなら今頃漢を滅ぼしているさ。

「……最初に会った時にも思ったが、あいつは今後我らにとって最も邪魔な存在になるだろう」

「予知ですか？」

「ただの勘だ。村に向かわせた部隊は全滅してしまったが目的は達成した。計画は予定通り進める。物資を運んでいる部隊に合流する

ぞ」

「はっ」

我らが長年の悲願を達成する為にも力を蓄えねばな。

・ ・ ・

村へ戻ると、鳳徳と少数の騎兵に輜重隊、それと村の中で見つけ保護した女性が村の入口付近に集まっていた。

「戻ったぞ、十六夜」

「お帰りなさいませ。……二人乗りとは、私が居ない間に随分仲良くなられたようで」

「ばっ……違っ……そんな暇あるわけないだろ！黒霆院が乗る馬が無かったから仕方無くだな……って着いたんだから降りろ、黒霆院！」

「了解」

あたふたしながら顔を真っ赤にして降りるように言ってくる。

あの程度のからかいで動揺するなんて本当に初心だな。

俺が黄鵬から降りると続いて馬超も降りてくる。

「怪我はありませんか、翠様」

「ああ、大丈夫だ。あたし達が着いた頃には黒霆院が一人残らず殺して戦闘が終わっていたからな。お陰で捕虜はいないが、まあどうせ口を割らないし問題ないだろう」

「そうですか……。翠様に怪我が無くて何よりです。君は？」

鳳徳が此方に顔を向け聞いてくる。

「俺も大丈夫だ」

怪我なんてしていな「右腕」

「右腕？」

鳳徳に言われて右腕を見てみると、服が裂け腕から血が出ていた。

「気付かなかったな……。まあこれぐらいなら放っておいても……」

「化膿したりしたら大変だろう。手当てをするから腕を出してくれ」

鳳徳は近くの兵に指示を出して救急箱の様な物を持ってこさせる。

「……分かった。すまないが頼む」

腕を差し出すと袖を捲り手際良く薬を塗り包帯を巻いてくれる。

「……黒霆院」

「何だ？」

鳳徳が包帯を巻いている手を止めて顔を覗き込んでくる。

「何があつた？」

「……何も無いさ。ただ五胡の奴らを殺してきただけだ」

「……自分では気付いていないかもしれないが酷い顔をしている」

「……本当に何も無かつたよ。ただ……嫌な気分っていうだけだ……」

「……そうか」

そう言うつと包帯を巻く作業を再び始める。

「……これで良し。服の方は武威に戻ったら直そう」

そついや裁縫も得意だつて馬鉄が言つてたな。

「ありがとう、鳳徳」

「気にするな。翠様」

「何だ？」

大人しく治療が終わるのを待つていた馬超に鳳徳が話し掛ける。

「これからどうしますか？巡邏を続けるか、それとも一旦武威に戻

るか」

「そうだな……」

馬超が保護した女性の方を向く。

「えーと、あんた名前は？」

馬超が保護した女性に名前を尋ねる。

そついや、まだ名前聞いてなかったな……。

「わ、私は馬遼、馬遼仲先です」

馬遼か……。

「馬遼を連れ回すわけにもいかないし一旦戻りたい所だけど、さっきの事もあるしな……」

「なら翠様は兵十数人と共に黒霆院と馬遼を連れて武威へお戻り下さい。巡邏は私が続けます」

「武威へ戻るだけなら俺だけでも……」

「悪いが今の君を一人には出来ない」

「……心配しなくても傷心状態の女性を傷付けたりなんかしな」そんな心配をしているんじゃない。翠様は私が何を心配しているか、お分かりになりますか？」……」

「……まあ何となくだけだな。今の黒霆院は危なつかしくて見てられない。何つーか、十万の五胡の兵に襲われたとしても逃げずに迷わず突っ込んで行きそうな雰囲気がある」

「……そーいや、以前“似たような事”が起きた時に秋絃にも同じ様な感じの事を言われたな。」

「私が言いたい事も大体そんな所です。確かに君は五胡の兵士五百人を一人で倒せるほど強い。だけど、今の君は感情に流されて冷静な判断が出来ていない。もし武威に戻る途中で五胡に出くわしたら、その場に馬遼を残して戦闘を仕掛ける可能性もある。戦っている最中に部隊を分割するなり他の部隊が潜んでいたりなりして馬遼が襲われたらどうする？今の君はそういう危険性ははらんでいる」

「……………」

「……反論出来ない。」

「……仕方無い。あたしも一緒に戻るよ。いいか？黒霆院」

「……確かに今の俺は冷静じゃないな。分かった、鳳徳達の言う通りにするよ」

「よし、決まりだな。今からだと途中で何処かの街で宿を取るとして明日の夕方までには武威に着くだろ。十六夜、母様への報告はどうする？早馬を出しておくか？」

「明日には翠様達が着くのですから必要無いでしょう。早馬を出したとしても翠様達が着く時間と大差ないでしょうから」

「それもそつだな。じゃあ、半刻後ぐらいに出発するか。準備は此

方でやっておくから黒霆院は休んでろ。分かったな？」

「ああ、分かった」

「それでよし。皆！　あたしは武威に戻るけど巡邏は引き続き頼む！　指揮は鳳徳に任せる！」

『はっ！』

「翠様、私は一個小隊連れて、もう一度生存者が居ないかどうか村の中を探してみます」

「ん、それなら出発時刻を遅らせるか？」

「いえ、それほど大きな村では無いですし半刻もあれば隅々まで探せるでしょう。念の為に何人分か余計に準備をしておいて下さい」

「分かった」

「亡くなられた方はどうしますか？」

「ん、そんなに人数は多くないし土葬するか」

「分かりました。その様に致します」

「頼んだ。じゃあ、あたしは輜重隊の方に行ってくる。黒霆院は此所で大人しくしてろよ」

「一個小隊、私に着いてきて下さい！　残りは村の人達を土葬する

為の穴を掘る作業、及び移動の準備を頼みます！ 君は此所で大人しくしていてくれ」

そう言うと、二人共この場所から離れていく。

二人して大人しくしてると念を押さなくてもいいと思うんだが……。

「……………」

「……………」

兵達もそれぞれ忙しそうに動いていて、何もせずボーッとしているのは俺と馬遼だけ。

居心地が悪い……。

……………。

「……………あ、あの」

「ん？」

少しの間を置いて馬超が話し掛けてきた。

「その……………村の皆の仇を取ってくれてありがとうございます」

「……………別に礼を言う必要は無い」

「そ、そうですね……………」

「……………」

「……………」

気分的に面白く可笑しく話せる状態じゃないから、ついぶっきらぼうな言い方をしてしまつて更に居心地が悪くなつた……。

……………。

《ミヤー》

「ん？」

猫の音がする。

《ミヤッ》

足下を見るとキジトラ白の猫が俺の足をペシペシと叩いていた。

抱き抱えてみる。

《ミヤ〜》

人懐っこいな……誰かに飼われていたのか？

《フミヤ〜》

頭を撫でてやると目を細めて気持ち良さそうな表情をする。

「……………お前の飼い主も居なくなつたのか？」

《ミヤ?》

分かってるんだか分かってないんだか……。

「……………」

「……………」

……はあ、馬超早く戻ってきてくれ。

・ ・ ・

「おい、出発準備が終わったぞ」

四半刻程経つと予定通り馬超が戻ってくる。

鳳徳も一緒だ。

結局、馬超達が戻ってくるまでの間、馬遼とは一切会話を交わす事は無かった。

「鳳徳、他に生存者はいたか？」

「いや、残念ながら馬遼以外の生存者はいなかった」

「そうか……………」

「なあ黒霆院、その猫は何だ？」

「さあ？馬超達が行った後、気付いたら足元にいた」

「ふん」

「そついや村の中には馬とかはいなかったのか？」

「馬はいなかったな。たぶん五胡の連中が連れていったんだろ。犬や猫は結構いたな。放っておくわけにもいかないし輜重隊に預けた。十六夜達が巡邏を続けている途中でどこかの村に立ち寄るだろうし、その時に里親を探してもらうことになってる。まあ野良もいるだろうけど、飼われている奴と見分けつかないから適当にやってもらうさ。里親が見つからなかったら武威まで連れてくるしかないな。その後は……まあ何とかなるだろう」

「適当だな」

「うつさい。そいつはどうするんだ？」

《フニャ》

「……輜重隊に預けてくれ」

「いいのか？」

「ああ……血塗れの俺の手で育てるより心優しい誰かに育ててもらう方がいいだろ……」

「……分かった。おい！ 此所に居る猫を輜重隊の奴の所に連れて

つてくれ！」

馬超が近くに居た兵士を呼びつける。

「……こいつだ」

「分かりました」

馬超の声を聞き此方に来た兵士に猫を渡すと、兵士は輜重隊の方へと駆けていく。

「……それじゃあ、そろそろ出発するか。馬が足りないから馬遼にはあたしか黒霆院、どちらの馬に乗ってもらうことになるけど、どつちに乗るんだ？」

「えーと……」

馬遼が馬超と俺の顔を交互に見比べる。

「……馬超の方が馬の扱いが上手だから、馬超の方に乗せてもらった方がいいと思うぞ」

「え？……あ、はい。よろしくお願いします、馬超さん」

「分かった。黄鵬と紫燕を連れてきてくれ！あと、一緒に武威へ戻る者も此方へ来てくれ！」

少しすると黄鵬と紫燕を連れた兵士、それと十数人の騎兵が此方へきた。

「よつと。馬遼、乗れるか？」

「はい、大丈夫です」

馬超が乗った後、続いて馬遼も黄鵬に乗る。

二人が黄鵬に乗る所を見つつ、俺も紫燕に乗る。

「よし！それじゃあしゅっぱ《ミヤン！》」

「ん？」

馬超の声を遮って聞き覚えのある猫の鳴き声がしたと思ったら、頭に何やら柔らかい物が勢い良く乗ってきた。

まあ見なくても何となく分かるが……。

「そいつ、さつき兵に預けた猫か」

「……凄い跳躍力ですね」

やっぱりな。

「ば、馬超様〜！」

さつき猫を預けた兵士が息を切らせて駆け寄ってくる。

「も、申し訳ありません。籠の中に入れようとした所、逃げてしま
いまして……」

《フシャー！》

人の頭の上で兵士を威嚇するな。

「……また逃げられても面倒だし黒霊院に懐いてるみたいだから、そのまま連れていったらどうだ？猫一匹増えるぐらいなら大した影響も無いし」

「……………」

《ミヤ？》

頭の上から猫を下ろし、目の前へ持つてくる。

「……………はあ、あんまり気は進まないけど、猫は好きだし馬超の言う通りにするか。」

「分かった。俺が連れていくよ」

「よし、問題解決つと。そういうわけだから、お前は戻っていいぞ」

「はっ！ 失礼します！」

そう言うつと猫を追い掛けてきた兵士は輜重隊がいる方へ走っていった。

「それじゃあ今度こそ出発するぞ！ 十六夜、後の事は任せる！ 五胡に出くわしても無理はするなよ！」

「わかりました。翠様もお気をつけ下さい。君も感情に流されない

ように」

「ああ」

……大丈夫、少し時間が経てばいつも通りに戻れるはずだ。

「よし！ 出発だ！」

馬超の号令を合図に武威へと馬を進める。

……巡邏、来なきや良かったな……。

第22話〱黒い感情・弐〱（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

この時代は土葬……で合ってるよね？

火葬は儒教的に駄目やらなんやと聞いたような覚えが…。

地理が分からん……涼州西北端？辺りから武威まで一日ちよいで戻れるのかな？

シミュレーションゲーム好きだしPSPの三國志？辺りでも買おうかな…。

しかし話が進まない…。

今年中に反董卓連合篇は終わるのだろうか？

西涼での話が残り5話ぐらい？

洛陽での話が10話ぐらい？

反董卓連合篇での話が最短で3話？

（まあ、たぶん増えるけど）

一週間に一話でも年内に反董卓連合篇まで終わらなそう…。

三国入り乱れてのラブコメもやりたいけど、一体いつになることやら…。

えゝ、遅筆で展開が遅い作者ですが今後も読んで頂ければ幸いです。

- - - - -

現在の執筆状況：

第X A 話ゝ反董卓連合・シ水関戦ゝ↓三割？

第X B 話ゝ反董卓連合・虎牢関戦ゝ↓二割強？

第X C 話↓三割弱？

（空白・改行・タグを除いて1000文字を一割として）

残念ながら次話は出来てないっす。

来週までに完成しなさそうなので次回の投稿は2011年8月20日が目標です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

第23話　黒い感情・参（前書き）

《全話の粗筋》

村を襲った黄巾党を皆殺し

←

馬超と兵十数名と共に、村で唯一生き残った女性を連れて武威へ戻る事に

第23話　黒い感情・参る

「やつ！」

「たあつ！」

……芙蓉も蒲公英も良く飽きないな。

水仙を入れた三人で交代しつつ一刻ぐらいは模擬戦してるだろ。

芙蓉も蒲公英も、努力するのは嫌いなんだよねーと言いつつも訓練はしっかりするんだな。

まあ、二人とも戦場に出ているんだし実力が足りなければ死ぬ事になるんだから当たり前と言えば当たり前だけど。

紫苑達が国境に向かってから四日半、帰ってくるまで四日半、丁度中間辺りか。

紫苑と長いこと（まあまだ四日ちよいだけど）離れるのは始めてだけど、やっぱり紫苑が居ないと暇だな……。

「つまらそうな表情してますね」

隣に居る瑠里が話し掛けてくる。

「紫苑が居ないとどうもな……」

「水仙や芙蓉、蒲公英達の模擬戦に加わってみればどうですか？」

「昨日結構な回数あいつらと模擬戦したけど手加減しなきゃいけない
くて疲れた。あいつら相手に本気出すわけにもいかないからな」

「強い人が弱い人に指導するのも大事な事だと思いますけど？」

「俺には向いてない」

基本的に獲物をぶん回してるだけだからな。

頭とか使わないで勘で戦ってるし。

「まあ大雑把で面倒臭がりな秋絃らしいと言えはらしいですが。馬
騰さんには声を掛けてみましたか？ 馬超さんよりも強いとの事で
すが」

「政務があるから無理だとさ。まあ涼州連合の盟主だし仕方無いけ
どな」

此処に居る間に一度は手合わせしたいな。

「此処何日か馬騰さんの手伝いをしていますが、文官には優秀な人
材が居ないみたいですね。普段は鳳徳さんが手伝っているそうです。
体を壊さなければ良いですけど……」

馬騰も大変だな。

「秋絃ん、そんな所で黄昏てないで秋絃んも模擬戦やろうよ」

芙蓉の方を見ると蒲公英と一緒に地面に座り込んでいる。

芙蓉達がいる場所は中庭の中心辺り、俺達は中庭に面した廊下に座っている。

「芙蓉相手だと手加減しなきゃいけなくて疲れるから却下」

「秋絃んの面倒臭がりー。じゃあ瑠里瑠里ー」

「私は武官じゃありませんし、武器は弓ですし、面倒なので断らせて頂きます」

「瑠里瑠里の貧乳ー」

たしかに瑠里は貧乳だな。

けど……。

「うるさいです絶壁。少しは蒲公英を見習ったらどうですか？」

お前が言っなって感じたよな。

「ぬがつ！？ ひ、人が気にしている事を」

気にしてんのか。

「貴方が先に言ったんでしょに」

だな。

「ふーんだ、胸は私の方が小さいけど背は私の方が高いもんね」。

瑠里瑠里のチビ―」

「そうですね、絶壁」

「また言った！？ うえゝん、瑠里瑠里が苛めるよ水仙―」

「芙蓉が先に言ったんだから自業自得でしょ。そんな事よりもこれからどうするの？ 少し休憩してから組み合わせ変えてまだ模擬戦する？ それとも今日は終わり？」

「どうしようか？ 蒲公英はどうしたい？」

「うゝん、日も暮れてきたし蒲公英は終わりにしたいかなゝ……つて、あれ？ 向こうから此方に歩いてきてるの御姉様と御兄様じゃない？ 知らない女の人もあるけど」

蒲公英が指差す方向を見ると、蒲公英が言った通り紫苑と馬超、それに知らない女が此方へ歩いてくる。

鳳徳がいないな……。

「予定より早いですね。何かあったんでしょうか……。鳳徳さんがいないみたいです」

「さあな」

此方へ歩いてくる三人を観察する。

……………？

何か紫苑の様子が変わな……。

「紫苑様、頭に猫を乗せていませんか？」

「乗せてるね。紫苑が拾ったのかな？　つか、あれ重くないの？
ていうか十六夜は？」

水仙が言う通り頭に猫を乗せてるが、俺が変わと感じたのはそこじゃない。

「紫苑の奴、雰囲気がおかしいな……」

「……確かに、何て言うか暗いですね。俯き気味ですし。本当に何かあったみたいです」

瑠里と二人と話していると、此方へ近付いてくる紫苑に向かって走っていき抱き着く蒲公英と芙蓉が見えた。

「おつかえりー紫苑。早かったね。ついでに翠姉もおかえり。ていうか十六夜は？」

「おかえり御兄様。ついでに御姉様もおかえり。頭の上の猫どうしたの？」

「あたしはついでかよ！？」

芙蓉も蒲公英もヒドイな。

「……ただいま、馬鉄に馬岱」

……やっぱり変だな。

あの雰囲気は前に一度見た様な気が……。まさか……。

「ねえねえ御兄様、頭の上の猫はどうしたの……。って……。？
お兄様、何かあったの？ 何か怖い顔してるけど……。」

「……いや、何でもないよ」

「嘘だー。紫苑、物凄く怖い顔してるよ？ 絶対に何かあったでしょ？ 帰ってくるの予定より早いよね？ それに十六夜っちがいないし」

「……悪い、気分が良くないから部屋に戻って休む」

「あつ、お兄様？」

「紫苑？」

「……」

「紫苑様？」

「ただいま馬休。馬鉄と馬岱の二人にも言ったけど気分が良くないから部屋に戻って休むよ。秋絃と瑠里の二人にも言っておいてくれ」

「……分かりました。後で部屋に何か持っていきましようか？」

「いや、大丈夫だ。ありがとう、馬休」

蒲公英と芙蓉を優しく引き剥がすと、そのまま水仙の方へと歩いて

いき、一言二言言葉を交わすと自分の部屋がある方へ去っていった。

取り敢えず事情を聞くために瑠里と一緒に馬超の所へ行く。

まあ何があつたかは大体察しがついてるが。

芙蓉も蒲公英も水仙も馬超の所に集まってきた。

「お姉さま、お兄様の様子がおかしいけど何かあつたの？ 予定より早く帰ってきたよね？ 十六夜は？ それとその人は誰？」

蒲公英が馬超を質問攻めにする。

「順番に答えるから落ち着けて。黒霆院の様子がおかしいのは「皆殺し」え？」

「国境付近の村が何者かに襲われ村人が虐殺、皆殺しにあつた。そして近くにその村を襲った何者かがいて黒霆院がそいつらを皆殺しにした。場所が場所だけに村を襲ったのは五胡だろう。そして、その女性は村で唯一の生き残り。こんな感じだろ？」

九割九分九厘合っているはずだ。

「な、何で太史慈が知ってんだ！？」

やっぱりか……。

「俺が言った通りなんだな」

「ああ、太史慈が言ったのと全く同じだ。昨日の昼ぐらいだな。陣

地を築いて休憩していたんだが偵察に向かった兵から火の手が上がつている村があるとの報告があつて、行ってみたら村の人達が皆殺しにされてたんだ。この人は村を搜索して見つけた唯一の生存者だ。名前は馬遼仲先だ」

馬遼がペコリと頭を下げる。

「で、馬遼に話を聞いている途中で見張りに立たせていた兵から五胡が村に向かつてきているとの報告があつたんだ。……実は偵察からの報告があつた後、黒霆院が先行して村に入つたんだ。あたしが見つけた時、黒霆院は小さな女の子を抱いていた。あたしが黒霆院を見つける直前に亡くなつたみたいでさ。それからずっと黒霆院は黙りこくつていて、無抵抗の村の人達が五胡に虐殺されたと馬遼から聞かされた時には壁を叩き声を荒げて怒りを露にしていた」

「あの御兄様が？ 想像出来ないな」

「あたしも」

「私もです」

「ああ。あたしも正直驚いた。で、五胡が村に向かつてきてるって報告聞いた黒霆院が先に一人で行つちまつたんだ。で、馬遼は十六夜に任せて、あたし達も向かつたんだけど、あたし達が着いた時には五胡の兵は全員死んでた。後は黒霆院が暗いまま今に至るってわけだ」

「翠姉ト口過ぎ……」

「うっさい、あたしだって馬遼を見つけた村の端から馬を留めたあ

った逆側の村の端まで全速力で走ったよ。黒霆院は民家の屋根から屋根に飛び移って行っただ。あんなの追い付けるか」

まあ紫苑の身体能力は人外だからな。

「それにしても、何で秋絃お姉さまが国境で起きた出来事を知ってるの？ まさか妖術とか？ 何だっけ……遠くの物を見る事が出来るやつ………千里眼？」

「そんなもん使えねーよ」

便利そうだから使えるなら使いたい様な気もしなくもないが。

「……秋絃お姉さま？」

「あ、あたしと水仙と蒲公英は翠姉が居ない間に二人と仲良くなつて真名を交換したから。で、秋絃んは何で知ってるの？」

「それは「過去にも同じ様な事があったから、ですよ？ 知ってたんじゃなくて過去の経験から分かったんです」……ああ、瑠里の言う通りだ」

「妖術使いは秋絃んじゃなくて瑠里瑠里！？ 過去見つけてやつ！？」

何でもかんでも妖術に結びつけるなよ……。

「違います。此処三ヶ月近くの間世の中は黄巾党の出現により乱れに乱れています。皆殺しにされた村なども少なくないでしょう。秋絃さんは紫苑さんとの付き合いが長いですし、私と出会う前から彼方此方で黄巾党を討伐していたと聞きました。恐らく、その時に今回と同じ様な事態に遭遇し、先程の様な状態になった紫苑さんを

秋絃さんは見た事があるんでしょう。妖術ではなくただの推測です」

「あー、成る程ねん」

「瑠里、頭良いー」

「二人も少しは頭を使って下さい」

「はい」

相変わらず適当な返事だな。

「お馬鹿な妹達の事は放っておいて続きをお願いします、秋絃さん」

「ひどっ!?!」

ホントに息が合っている二人だな。

「分かった。孫策の所を出て一週間ぐらいかな。その村は正確に言えば皆殺しにはされてなかった。若い女だけ生かされて慰み物にされていたんだ。で、それを見た紫苑は激怒。結界を貼って逃げられないようにして黄巾党の連中を一人残らず殺したんだ。土下座をして泣いて謝る奴も背中を見せて逃げ出した奴も子供でもな。鬼気迫る様な感じで声を掛けても反応無し。聞こえたのに反応しなかったっていうよりは、俺の声自体が聞こえていなかったって感じたな。近い距離で大声で声を掛けたから普通なら聞こえるはずだったんだが。まあ黄巾党の連中の自業自得だから止めはしなかったけど。止まる様な感じでも無かったし」

「秋絃さん、話の腰を折ってすみませんが結界って何ですか？」

「ん？ああ、仙水達は見た事ないから分からないか。簡単に言えば氣で作った囲いだ」

「あー、そーいや五胡と戦っている黒靈院の所へ向かっている時に見たような気がするな。白いやつだろ？途中で消えちまったから目の錯覚かなんかだと思ってたけど、黒靈院の仕業だったのか」

「たぶん紫苑が張った結界だろうな。話を戻すけど、黄巾党の連中を皆殺しにした後は女の子達を近くの街まで連れていったんだけど、街に着くまで殆ど無表情か苦虫を噛み潰した様な顔をしてた。結構大きな街だったから女の子達とはそこで別れる事になったんだけど、別れ際に御礼を言われても上の空、心配した女の子達が声を掛けても殆ど反応無し。まあ最後は無理矢理笑顔を作って別れの挨拶をしてたけどな。俺が話し掛けても同じ様な反応で、元の調子に戻ったのは一週間ぐらい経ってからだったな」

「一週間後に急に元に戻ったんですか？」

「いや、水仙の推測は外れ」

「一週間掛けて徐々に元に戻ったの？」

「蒲公英の推測も外れ。正確は俺がぶん殴った」

『ぶん殴った！？』

……そんなに驚かなくてもいいじゃねーか。

「黄巾党を退治するのには問題無かつたし、最初は暫く様子を見守ろうと思つてただけだな。けど一週間過ぎてても暗いし反応無いしで段々イライラしてきてな。だから一週間ぐらい経つたある日の夜に宿でぶん殴つたんだ。お前にとつて俺は何なんだ、悩みすらも言えない様な存在だったのか、腹に溜め込んでいる物があるなら全部ぶちまける、そんなに俺は頼りないのか、つて叫んで、紫苑の胸ぐらを掴んで左頬に右拳を思いつきりぶちこんでやった」

「そ、それでどうなったの？ 秋絃お姉さまが思いつきりぶん殴つたら御兄様の頭が吹っ飛びそうなんだけ「お前は人の事を何だと思つてんだ？」イタタタタ！？ ごめんなさい、ごめんなさい秋絃お姉さま、謝るから頭グリグリしないで〜！？」

「つたく……」

蒲公英で遊んでいられる様な雰囲気でもないし話を進めるか。

「殴られた直後はポカーンとしてたよ。けど、暫くしたら自然な笑顔で謝つてきた。結局、紫苑が俺に心の内を話す事は無かつたけど次の日からは元に戻つてた。俺から話せる事は以上だ。何か聞いた事は？」

「あの……」

「何だ、水仙？」

「紫苑様があの状態になつたのは一度きりですか？」

「ああ。住人が皆殺し且つ皆殺しにした奴等が近くに居たつて状況はあれつきりだったからな」

「そうですか……でも長い間旅をしていて全滅した村や街に一度しか遭遇していないのは運が良か「ちよつと待って下さい」瑠里さん？」

水仙が喋っていたのを瑠里が遮る。

「秋絃さんの言い方だと、犯人達は居なかったけど皆殺しにされていた村や街は幾つかあったと言う事ですか？」

「あつ……確かに瑠里さんが言う様にも解釈出来ますね」

流石、瑠里。

詳しく説明しなくても勝手に推測してくれるから楽だ。

「ああ、そういう村も幾つかあったな」

「その時は紫苑の様子はどうだったのん？ さっきみたいな感じになったん？」

「いや、さっきみたいにはならなかった。だから、あの村の事に関しては紫苑なりに気持ちの折り合いをつけたんだと思ってたんだが、あの様子を見る限りじゃそうじゃないみたいだな。しかし、どうすつか……。あのまま放っておくわけにはいかないしな」

「当たり前じゃん。紫苑があんな顔してるの見たくないし」

「私も芙蓉と同じ気持ちです」

「私もです。紫苑様には笑っていてほしいです」

「お姉さまは？」

「そりゃあ、まあ、あたしだって嫌だけど……」

「なら、明日辺り全員で紫苑の部屋に乗り込んで話を聞いてみるか。今度こそ何を悩んでいるのか吐かせてやる。そうじゃないと解決しないみたいだからな」

「はい」

「うん！」

「おー！」

「はい！」

「ああ」

「……でも話してくれますかね？」

瑠里がボソツと呟く。

「それは……まああれだ。ぶん殴ってでも聞き出す」

「その時はあたしも手伝うよ。まあ何だかんだで悪い奴じゃないし、ブスツとしてられるよりはヘラヘラしてる方がマシだからな」

「翠姉も素直じゃないね。心配だからって言えばいいのに」

「ばつ、違つ、べ、別に心配なんかしてないから！」

「ホントに？」

「ほ、ホントだよ!」

「お姉さま、目が泳いでるよ?」

蒲公英が背伸びをして馬超の目を覗き込む。

「き、気のせいだろ?」

目が泳ぎまくってる。

動揺しすぎ。

「ふーん……まあいいけどね。お兄様の事は明日何とかするとして、十六夜はどうしたの?」

「十六夜は国境付近の巡邏を続けてる。まあ十六夜なら大丈夫だろ」

「そだねん。十六夜たちは頭良から敵の罠に嵌められたりする可能性も低いしね」

「芙蓉、それはあたしに対する嫌みか?」

「いやいや、そんな事ないですよん?」

芙蓉の奴、口では否定しながらもニヤニヤしてるやがる。

ホント、いい性格してるな。

「ねえねえ、お姉さまー」

「何だ？」

「お姉さまに質問した蒲公英が言うのも何だけどさー、叔母様に報告しなくていいの？」

「……あつ。すっかり忘れてた。やべ、早く報告に行かないと。じやあ、あたしは母様の所へ「あの……」ん？」

今まで黙っていた馬遼が遠慮しがちに口を開く。

「私はどうしたら……」

そっぴや、すっかり存在を忘れてたな。

「あー、そうだなー、母様の所に連れて………いかなくてもいいか。馬遼から聞いた話を、あたしが母様に話せばいいだけだし。取り敢えず部屋を用意するから適当に休んでいてくれ。身の振り方は明日以降相談しよう。水仙、馬遼を客室に案内してくれるか？」

「分かりました。では私に着いて来て下さい、馬遼さん」

「は、はい。お世話になります！」

「緊急しなくてもいいですよ。私は馬休と申します。……この度の事は何と言ったらいいのか……本来なら私達を守らなければならなかったのに村の方々を死なせてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

水仙が頭を下げる。

「あ、頭を上げて下さい。悪いのは五胡の人達であって、馬休さん達が悪いわけじゃありません」

「ですが、今回の事は私達の落ち度です。此処数カ月、黄巾党の乱に呼応するように五胡の活動が活発になっていたのも分かっていたのに、精々巡邏をする程度で有効な対策が打てていなかったのですから」

「国境付近にも砦は幾つか作ってあるけど、砦同士の間隔があつて監視の目が行き届いていないのが現状だからね」。巡邏の回数も増やしてはいたけど限界ってもんがあるし。まあ言い訳にしにかならないけどね」

国境線に沿って関を建てるのも現実的じゃないしな。

「いえ、私達の村にも軍の方達が何度か来て下さって、大変だろうけど危険だから砦の近くや国境から離れた場所に村を移した方が良いたと言われていたんです。けど、今まで大丈夫だったんだからこれからも大丈夫だろうと考えて油断していたのも事実です。私達の自業自得……とは違いますが、軍の方は最大限努力して下さいたのですから責める事なんて出来ません。ですから、頭を上げて下さい馬休さん」

「馬遼さん……」

「さつ、行きましょう馬休さん。部屋までの案内をお願いします」

「……分かりました。此方です」

「はい。皆さん、それでは失礼します」

「じゃあねー。水仙ー、明日の事で少し話し合いたいから馬遼を案内し終わったら戻ってきてねん」

「分かったわ」

馬遼は此方へ軽く会釈をすると水仙と一緒に中庭から去っていった。

……今、会釈をして顔を上げた時に俺の方を見てニヤツと笑った様に見えたのは気のせいかな？

何か嫌な感じがしたんだが……。

「秋絃さん？　どうかしましたか？」

「……いや、何でもない」

……たぶん気のせいだな。

「うーん……」

「馬超さんまでどうかしたんですか？」

「いや、村で見つけた時にはかなり怯えてて、此処に来るまで殆ど喋らなかつたんだ。けど、さっきは普通に喋ってたなーと思って」

「恐らく、私達に気を遣わせないように無理して明るく振る舞っていたんでしょう」

「そんなもんかな？」

「此処に来るまでに殆ど喋らなかったのは翠姉が怖かったからじゃない？」

「何だと！？ あたしの何処が恐いつてんだ！？」

「言葉遣い？」

「ぬぐつ……！？」

「男勝りな性格？」

「ぐぬつ……！？」

芙蓉も蒲公英も容赦ねーな。

「お前ら……」

「馬超さん、芙蓉達とじゃれ合うのもいいですが、馬騰さんへの報告はしないでいいのですか？ いい加減、結構な時間が経っていますか」

「~~~~~！ あーもう分かったよ！ 母様の所に行ってくる！

芙蓉と蒲公英は覚えておけよ！」

『はいはい』

「ぬがー！ その返事の仕方ムカつくー！」

「翠姉も母様への報告が終わったら戻ってきてね」

「分かってるよ！」

馬超はドスドスと足音を立てて馬騰の部屋へ向かった。

俺が言うのもなんだけど、もう少し女の子らしくした方が良いと思うんだが。

「さてとん、それじゃ水仙と翠姉が戻ってくるまで何してよつか？
ていうか、どこで話し合うの？」

「何処つて……私や秋絃さんの部屋では紫苑さんの部屋に近すぎますし、芙蓉や蒲公英の部屋辺りでいいんじゃないですか？」

「うーん……あ！　ねえねえ、どうせなら何処かの店で晩ごはん食べながら話さない？　蒲公英、お腹空いちゃった。どうかな？」

「俺は別に構わないぜ」

「私も構いません」

「あたしも賛成！。運動するとお腹減るよね」

「決まりだね。蒲公英、汗掻いてるし着替えてくるね」

「あつ、あたしも行く。ついでに翠姉や水仙にも食事に行くって伝えてくるねん。馬遼も誘おっか？」

「そうですね……精神状態を考えると、なるべく一人にはしない方が良いと思います」

「……まあ、いいんじゃない？」

さっきの事が俺の勘違いかどうか確認するのも丁度良いしな。

「じゃあ馬遼さんも誘うって事で。二人共、此处で待っててね。行こう、蓉ちゃん」

「ほいさ」

芙蓉と蒲公英の二人がキヤイキヤイと騒ぎながら走っていく。

「……あの二人は毎日楽しそうですね。あんな風に脳味噌空っぽに生きてみたいものです」

「お前酷いな……。まあ言いたい事は分かるけど」

「秋絃さんも同じ様な感じですけどね」

「放つとけ」

「まったく、瑠里も口悪いよな。」

「……………紫苑、大丈夫かな？」

第23話〱黒い感情・参〱（後書き）

誤字・脱字・アドバイス等がありましたら御指摘願います。

感想も気軽に書いて下さい。

- - - - -

今話で終わらせるはずでしたが、上手く纏まらなかったので切りが
良い所を取り敢えず投稿。

今までは内容的に同じ話の場合は前編・後編など〱編と各話タイト
ルを付けてきましたが、これからは壹・貳・参・肆と漢数字（大字
？とかいうやつ）を付けていきます。

それに伴い、既に投稿してある〱編と付いていた話についても修正
しました。

- - - - -

現在の執筆状況：

第XA話〱反董卓連合・シ水関戦〱↓三割？

第XB話〱反董卓連合・虎牢関戦〱↓二割強？

第XC話↓三割弱？（空白・改行・タグを除いて1000文字を一
割として）

残念ながら次話は出来てないっす。

出来れば来週（2011年9月3日）には投稿したいです。

無理なら2011年9月10日に投稿（の予定）です。

投稿予定日以外の投稿は『ネタ帳』の投稿だと思って下さい。

ネタ帳力（前書き）

内容は本編などに出てくるパロディネタの元ネタ + α といった感じ
です。

元ネタを間違ったり勘違いしている可能性もありますが悪しからず。

第21話までにあつたネタを掲載。

幾つか抜けている可能性大。

一応、5話までは抜けがないか確認済み。

それでも抜けが有り得るのが作者クオリティ。

最新話を読む前に此方を読むとネタバレになる可能性がありますの
で御注意下さい。

最終更新日：2011年8月13日

ネタ帳力

《徐庶の真名と髪の色について》

朱里や雛里と三竦み？の関係にしました。

他の恋姫の二次創作小説と被ってしまっていますが、ご勘弁を。

朱里↓名前が赤系で髪の色が黄色系

雛里↓名前が黄色系（ ）で髪の色が青系

瑠里↓名前が青系で髪の色が赤系

雛っていうとヒヨコを思い描くから

《作者の中での原作キャラ及びオリキャラ強さランク》

R a n k : X

桜

R a n k : S

R a n k : A

雪蓮（通常）

春蘭

星

翠

秋絃

紫苑（主人公 手加減有り）

R a n k : B

祭
秋蘭

R a n k : C

凧

季衣

水仙

真桜

芙蓉

蒲公英

R a n k : D

冥琳

穩

瑠里

沙和

R a n k : E

稟

風

桂花

作中に登場したキャラのみ

あくまで作者の俺ランキングです。気分を害されたらすみません

このランキングによってキャラ同士が対決した場合の勝敗が決まるわけではありません。

沙和の評価が低い？だって原作遊んでも強そうに感じないんだ

もん…。実際の所、沙和の強さはどれぐらいなんだろう？

楓と十六夜は未記載

《挨拶文ネタ》

【ネタ1】

某週刊少年誌で某作品の絵を担当した事で神と呼ばれるようになった、可愛い女の子を描く事に定評のある先生の初作品？

【ネタ1のネタ元】

週刊少年ジャンプで連載されていた「TO LOVEる -とらぶる-」という漫画の作画を担当していた矢吹先生の初連載作品である「邪馬台幻想記」という漫画の事。

「TO LOVEる -とらぶる-」はエロ多めのラブコメなんだけど、矢吹先生の描く女の子達がエロく可愛いので、一部の人達から矢吹神と言われている。

「TO LOVEる -とらぶる-」の続編？に当たる「TO LOVEる -とらぶる- ダークネス」の作画は更にエロに磨きが掛かっている。

《オリキャラ設定ネタ》

【ネタ1】

何処ぞの死神さんが着ている黒い着物

【ネタ1のネタ元】

「BLEACH」という漫画の死神という職業？のキャラが着ている着物（＝死覇装と言つ）の事。

《第1話ネタ》

【ネタ1】

オンラインネットワークに自分の意識を飛ばしリアルと変わらない感覚を得て行動出来る世界

【ネタ1のネタ元】

「BALDR SKY」という18禁PCゲームの世界。

正確には飛ばしているわけじゃく繋いで潜っているわけだけど。

簡単に言えば一人称視点の戦争ゲームをする場合、実際に戦場にいるのと同じ感覚で遊べるという事。

フィードバックの設定次第では、仮想世界の死⇐現実世界の死となる。

【ネタ2】

肉体を再構成って……何処ぞの錬金術師じゃあるまいし……つか簡単なのかよ？リスクとか無いのか？

【ネタ2のネタ元】

「鋼の錬金術師」という漫画の主人公のエドワード・エルリックの事。

弟と一緒に母親を錬成しよう（生き返らせよう）として失敗し、自分の左足と弟を失った。

更に弟の魂を鎧に定着させる錬成をしたため、対価として右腕も失う。

【ネタ3】

荒ぶる神と言う名のモンスターを狩る世界

【ネタ3のネタ元】

「GOD EATER」及び「GOD EATER BURST」というPSPのゲームの世界。

【ネタ4】

死人が歩き回る世界

【ネタ4のネタ元】

「バイオハザード」というゲームの世界。

歩き回る死人^{ゾンビ}が出るのは1〜3までだったかな？

【ネタ5】

「何なら刀の方もチートっぽくしてやろうか？名前通り、黒霆は漆黒の雷が出る様に、緋炎は緋色の炎が出る様に、蒼氷は蒼い氷が出る様に、翠樹は地面に突き立てたら翠の樹が生える様に、という感じ」

「勘弁して下さい」

何処の死神だよ…。

【ネタ5のネタ元】

「BLEACH」という漫画の死神という職業？のキャラが持っている斬魄刀と言う刀は、炎を生み出したり氷を生み出したり出来る巨人なんかも召喚出来る。

蛇腹剣や大鎌や三節根や槍や金棒や鞭なんかにも変化する。

《第2話ネタ》

【ネタ1】

凶化合宿

【ネタ元1】

「めだかボックス」という漫画に登場する言葉。

強化と凶化を掛けているのだと思われる。

原作作は言葉遊びが好きみたい。

ちなみに、実際には合宿部分は描かれていないので、凶化合宿の内容は不明。

【ネタ2】

何処ぞのW狩人漫画

【ネタ2のネタ元】

「HUNTER×HUNTER」という漫画。

作者の都合で休載しまくってるが、根強い人気があるため打ち切り

ゲームなど

にならない。

……まだ人気はあったはず……人気ないなら打ち切りになってるはずだし。

《第3話ネタ》

【ネタ1】

ストロベリってた

【ネタ1のネタ元】

「武装錬金」という漫画のキャプテンブラボーというキャラの台詞。

本名は別にあるけど明かさない。

何故なら「そのほうがカッコイイから!!」

まあ本当の理由は、ある事件をきっかけにして名を捨てたからだけど。

作者は和月（武装錬金の作者）作品大好きです。

《第4話ネタ》

【ネタ1】

紫苑「お前は一体何人の命を自分の欲望の為に奪い取った？」

野盗頭「テメーは今までに食った餃子の数を覚えてんのか？」

【ネタ1のネタ元】

ツエペリ「きさまーいったい何人の生命をその傷のために吸い取った!？」

DIO「おまえは今まで食ったパンの枚数を覚えているのか？」

「ジョジョの奇妙な冒険」という漫画に出てくる、ツェペリというキャラとDIOというキャラの会話。

《第5話ネタ》

【ネタ1】

某電気ネズミ

【ネタ1のネタ元】

ポ○モンのピ○チュウ。
なんとなく伏せ字で。

【ネタ2】

某夢の国のネズミ

【ネタ2のネタ元】

デイ○ニーランドの○ツキーマウス。

なんとなく伏せ字で。

【ネタ3】

俺に足りないものは、それは妄想力語彙力表現力構成力集中力時間恋人！そして何よりもー！速さが足りない！

【ネタ3のネタ元】

お前に足りないものは、それは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そして何よりもー！速さが足りない！

「スクライド」という漫画、及びアニメに登場する兄貴ことストレ

イト・クーガーの台詞。

めっちゃ早口で言います。

ちなみに自分はアニメ版しか知りません。

《第6話》

【ネタ1】

最終幻想の勝利のファンファーレ

【ネタ1のネタ元】

「FINAL FANTASY」シリーズ（ゲーム）で戦闘に勝利した時に鳴る音

《第6話後書きネタ》

【ネタ1】

某探偵漫画に出てくる多彩な芸術家

【ネタ1のネタ元】

「探偵学園Q」というに登場する、絵画・作曲・建築・工芸・陶芸など多方面に渡って活躍した芸術家、九頭龍匠。

【ネタ2】

主人公の名前を「紫苑」とした理由で挙げた漫画家さんの別の作品の綺麗な金髪ロングウェーブ御姉様の剣術の技名

【ネタ2のネタ元】

「BLACK CAT」という漫画に登場する、セフィリアという女性キャラが扱うアークス流という剣術の第十三手・雷霆。

【ネタ3】

某二人組の主人公が活躍する絵が非常に綺麗な（自分的には今まで見た中では一番）漫画の最終章に登場する系使いの敵キャラ

【ネタ3のネタ元】

Get Backers - 奪還屋 - （漫画）に登場する黒鳥院夜半というキャラ。

【ネタ4】

モロキューでアボカドなピーマン野郎

【ネタ4のネタ元】

テイルズオブハーツ（Tales Of Hearts）というDSのゲームに登場する、イネスという銀髪ナイスバディ御姉様の台詞。

意味は自分で考えて下さい。

下ネタです……。

【ネタ5】

シルヴァラント

【ネタ5のネタ元】

テイルズオブシンフォニア（Tales Of Symphonia）というゲームキューブとPS2のゲームにおける、二つある世界の内の一つ。

シンフォニアにはシルヴァラントとテセアラの二つの世界がある。

《第8話》

【ネタ1】

江賊王に俺はなる！

何処の麦わら帽子ですか？

【ネタ1のネタ元】

ONE PIECEという漫画の主人公モンキー・D・ルフィ（麦わらのルフィ）の台詞のパロディ。

元の台詞は「海賊王に俺はなる！」

ルフィのトレードマークが麦わら帽子。

台詞のパロディの方は萌将伝に同じのがあります。

【ネタ2】

海虎

内容は、何処ぞの船衝突映像を流出させた人の職業を題材にした映画と似たような感じだった。

【ネタ2のネタ元】

海猿という映画

【ネタ3】

熊猫号

熊猫号という船に乗っていた若者二人のラブロマンスを描いたものようだ。

船は沈没し、二人の若者も死ぬみたいだ。

【ネタ3のネタ元】

タイタニックという映画

《第9話ネタ》

【ネタ1】

ちなみに「武装錬金」って言うのは、結氣ってイマイチなネーミングだと思ったので、新しく考えてみた名称だ。

まあ、ある漫画からのパクリだけどな。

【ネタ元1】

言わずもがな、武装錬金という漫画です。

《第10話ネタ》

【ネタ1】

脱兎の如く駆け出した。

あれ？以前にも似たような事があつた気が…。

俺は一体何処の兎園長だとセルフツツコミを入れなくなる。

【ネタ元1】

逢魔ヶ刻動物園という漫画の、漫画のタイトルと同じ名前の動物園の園長である椎名という主人公の事。

「脱兎のごとく」が口癖。

《第11話ネタ》

【ネタ1】

秋絃を除いて、みんな赤っぽい色の服を着ているから通常の三倍は酒に強いのかな？

呉の武将の胃袋は化物か！？

【ネタ元1】

ガンダムという巨大人型機動兵器が活躍するアニメがあります。

で、主人公であるアムロというキャラのライバルにシャアというキヤラがいます。

シャアは赤く塗られた機体ザクを駆り、通常の三倍近いスピードで戦場を駆け巡る姿から『赤い彗星』という異名があります。

（赤く塗れるのはエースパイロットだから）

で、シャアの有名な台詞に「ええい！連邦軍のMSは化物か！」という台詞があります。

というわけで、呉のキャラが赤い服を着ている事と上記辺りを掛けてみました。

《第12話ネタ》

【ネタ1】

「紫苑様華麗に参上！」

女性が苦手な金髪さやわかイケメン剣士の台詞を真似して地面に着地。

【ネタ元1】

ティルズオブジアビスというゲームに登場するガイというキャラクターの台詞。

「ガイ華麗に参上！」

こんな台詞言ってますが、仲間キャラで一番の常識人です。

女性が苦手な理由は「重い」です…。

【ネタ2】

グリーブ、日本語に直せば脚甲。

イメージは、何処ぞの教団に所属する、過保護な兄がいる黒髪ツインテールの女の子の武器。

色は正反対だけど。

【ネタ元2】

D・Gray-manという漫画に登場するリナリーというキャラクターが装備する「黒い靴」^{ダークブーツ}という対AKUMA武器（特殊な武器）が元ネタ。

ジャンプスクエアに移ってから読んでない…。

【ネタ3】

「正義なんて言葉チャラチャラ口にしてんじゃねえよ！

【ネタ元3】

ティルズオブシンフォニアというゲームの主人公、ロイドの台詞。

【ネタ4】

帽子はアレだ、シルクハットのクラウンを短くして鐔を長くした様な感じの帽子なんだけど、何て言うんだっけ……………何処ぞの仕事の過程が楽しめればそれでいい最強最悪の運び屋さんが被っている帽子に非常に似ているんだが……………駄目だ、分かん。

【ネタ元4】

Get Backers - 奪還屋 - という漫画に登場する赤屍蔵人というキャラ、が被っている帽子の事です。

ちなみに赤屍さんは作中最強クラスの御方です。

不死身です。

《第13話ネタ》

【ネタ1】

『流派！』

「黒霆院流は！」

「覇者の風よ！」

「疾風！」

「迅雷！」

『天魔深淵！見よ！ 東方は赤く燃えている！』

【ネタ元1】

機動武闘伝Gガンダムというアニメに登場するマスター・アジアというキャラが完成させた流派東方不敗という拳法、を学んだ者同士が出会った時にする挨拶。

元台詞

『流派！』

「東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新！」

「系列！」

『天破侠乱！見よ！東方は赤く燃えている！』

【ネタ2】

伐折羅な赤い師弟

【ネタ元2】

戦国BASARAに登場する武田信玄（師匠）と真田幸村（弟子）との事。

二人とも赤い甲冑を身に付けています。

正確に言えば師弟関係じゃなくて主従関係かも。

【ネタ3】

巨大機動兵器を生身で壊す師弟

【ネタ元3】

機動武闘伝Gガンダムというアニメに登場するドモン・カッシュ（主人公、弟子）とマスター・アジア（師匠）の事。

この二人にはガンダム要らないんじゃない？って感じです。

師匠はスパロボというゲームで異星人認定されました。

【ネタ4】

「よし、始めよう！慎ましくな」

【ネタ元4】

機動戦士ガンダムSEED DESTINYというアニメに登場するネオ・ロアノークというキャラの台詞。

元台詞

「よし、行こう！慎ましくな」

《第17話ネタ》

【ネタ1】

「キュピーン！西涼の舞姫・馬鉄ちゃん登場！悪い子は月に代わって御仕置きしちゃうぞ！キラッ」

【ネタ元1】

分けるの面倒なんで一括で説明しちゃいます。

キュピーン

↓ティルズオブグレイセスというゲームに登場するパスカルというキャラが技を放つ時に言う台詞。

正確にはグレイセスよりも前に発売されたティルズオブイノセンスに登場するハスタという敵キャラが言う台詞が先。だけどイノセンスはよく知らん。

悪い子は月に代わって御仕置きしちゃうぞ

↓美少女戦士セーラームーンというアニメ（原作で漫画があるみたいですが自分は読んだ事ありません）の主人公（で合ってる？）月野うさぎが変身した時の決め台詞（で合ってる？）「月に代わってお仕置きよ！」のパロ。

記憶が超臆気なので間違ってるかも…。

あれ？翠とセーラージュピターこと木野まことが被っている様に見えるのは気のせい？

キラッ

↓マクロスFというアニメにランカ・リーというキャラ（扱いは微妙だけどヒロインの一人）がいます。

で、ランカは歌を唄うアイドルで持ち歌に「星間飛行」という曲があり、その曲の歌詞に「キラッ」というフレーズがあります。

【ネタ2】

何かポーjingを決めてるんだが、この子は一体……

【ネタ元2】

ネタ1と関連しますが、「キラッ」という歌詞を言う際に、親指&人差し指&小指を立てた右手を顔の右斜め前ぐらいに持ってくる動作があり、これが決めポーズとなります。

（手の甲が顔側）

で、ネタ2のポーシングが上記の決めポーズになるわけです。

ちなみに、この決めポーズである独特の右手は「愛してる」という意味になるそうです。

（手話だと、小指と人差し指を立てるとY、親指と小指立てるとL、親指を立てるとI、それぞれアルファベット「I」「L」「Y」となり「I Love You」の頭文字をとるため）

《第19話ネタ》

【ネタ1】

「まだまだだね」

某左利きの王子様の決め台詞を言ってみる。

【ネタ元1】

「テニスの王子様」という漫画の主人公・越前リョーマの決め台詞。

《第20話ネタ》

【ネタ1】

「…………貴方、最低です」

【ネタ元1】

「鉄のラインバレル」という漫画、及び漫画を原作としたアニメに登場する城崎絵美というヒロインがアニメ版でよく使う台詞。

漫画版の方は見てないので分からないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432p/>

真・恋姫†無双～黒き霆～

2011年8月28日01時50分発行